
比企郡嵐山町・小川町

大木前 / 小栗北
小栗 / 日向

主要地方道熊谷小川秩父線関係埋蔵文化財発掘調査報告

2 0 0 1

埼 玉 県

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



大木前遺跡第1次調査区全景



大木前遺跡第2次調査区全景



小栗北遺跡全景



小栗遺跡全景



大木前遺跡出土鏡



日向遺跡全景

発刊に寄せて

私は、知事就任以来、「道路の善し悪しは、地域発展のバロメーターである」との考えから、「県内1時間道路網構想」を目標に掲げ、高速道路から生活道路に至るまでの体系的な道路網の整備に努めております。

このうち嵐山町と小川町とを結ぶ「主要地方道熊谷小川秩父線バイパス」につきましては、現在、嵐山町に整備を進めております（仮称）小川嵐山インターチェンジのアクセス道路として県が整備を進めています。

このバイパスを整備することによりまして、産業、文化、物流の拠点として、比企地域の活性化に大きく貢献するものと期待しております。

さて、この主要地方道熊谷小川秩父線バイパスの整備予定地周辺には、先人たちの歴史を伝える遺跡があり、そのいくつかは発掘調査され、貴重な成果があがっております。

今回報告いたします大木前、小栗北、小栗、日向遺跡につきましても、平安時代の住居跡から古墳時代の鏡が発見されるなど、新たな成果を得ることができました。この報告書は、その成果をまとめたものでございます。

文化財という県民共有の遺産の記録を後世に伝えますことは、郷土に対する理解を深めるとともに、地域文化を向上させるうえでも極めて大切なことでもあります。こうしたことから、本書の刊行は誠に意義深く、私は、多くの方々に活用されますことを願ってやみません。

終わりに、事業の実施にあたり深い御理解と御協力をいただきました地元の皆様、並びに献身的な御努力をいただきました関係の皆様方に対し、心から感謝を申し上げます。

平成13年3月

埼玉県知事

土屋幹彦

序

埼玉県の西北部に位置する比企丘陵の小高い山々には、かつて繰り広げられた歴史の足跡が多く残されています。古くは旧石器・縄文時代の生活の場となり、弥生、古墳、奈良、平安時代を経て、武士を生み、初めての武家政権である鎌倉幕府の成立や、その後の政権維持に郷土武士たちが大きく貢献し、群雄割拠の中世にはこの地が歴史の舞台として登場することは、有名な史実として語り継がれております。

今日、武士たちが闊歩した山野に高速道路が開通し、馬から車へ乗り換えても、この地が産業・文化・流通の発展に再び大きく貢献していることは、時代を超えて繰り返される歴史の面白さとも言えましょう。

この度、小川・嵐山地区を走る関越自動車道に、インターチェンジの新設が計画されました。県の施策であります「県内1時間道路網構想」の下で、県道熊谷小川秩父線がインターチェンジに接続されることになりましたが、丘陵地を貫くそのアクセス道路の予定地内に数箇所の遺跡の存在が確認されました。

これらの遺跡の取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が各関係機関と慎重に協議を重ねた結果、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、当事業団が道路整備課の委託を受け、発掘調査を実施することとなりました。

その結果、縄文時代と奈良・平安時代の集落跡が発見されましたが、大木前遺跡では平安時代の住居跡から、古墳時代初頭期の大変珍しい斜縁二神二獣鏡が発見されました。

その成果をまとめたものが、本書であります。本書が埋蔵文化財の保護、教育普及、学術研究の資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整にご尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部道路整備課、さらに、嵐山町教育委員会、小川町教育委員会、ならびに地元関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成13年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 中野健一

例言

1. 本書は、埼玉県比企郡嵐山町大字越畑地内に所在する大木前遺跡、小栗北遺跡、小栗遺跡、及び小川町中爪地内に所在する日向遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略称と代表地番、および発掘調査届に対する指示通知は、以下の通りである。
 - ・大木前遺跡 (OOGME)
埼玉県比企郡嵐山町大字越畑字大木前453他
平成11年1月4日付け教文第2-163号
平成12年11月28日付け教文第2-88号
 - ・小栗北 (OGRKT)
埼玉県比企郡嵐山町大字越畑字小栗399他
平成12年11月28日付け教文第2-89号
 - ・小栗遺跡 (OGR)
埼玉県比企郡嵐山町大字越畑字小栗338-1
平成10年12月28日付け教文第2-164号
 - ・日向遺跡 (HNT)
埼玉県比企郡小川町大字中爪字馬戸場1015他
平成11年6月4日付け教文第2-36号
3. 発掘調査は、主要地方道熊谷小川秩父線の建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整のもと、埼玉県土木部道路整備課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章の組織により実施した。
5. 発掘調査は、次の者が次の期間で実施した。
 - ・大木前遺跡
金子直行 若松良一 宮井英一 君島勝秀
平成10年12月1日～平成11年3月31日
平成12年10月23日～平成12年12月28日
 - ・小栗北遺跡
宮井英一 君島勝秀
平成12年10月23日～平成12年12月28日
 - ・小栗遺跡
磯崎 一 石坂俊郎
平成11年1月4日～平成11年3月31日
 - ・日向遺跡
宮井英一 伴瀬宗一
平成11年4月8日～平成11年12月28日
6. 整理・報告書作成作業は、平成12年5月1日～6月30日、平成13年1月4日～3月23日の期間で実施した。
7. 遺跡の基準点測量は、株式会社パスコ、株式会社日成プランに委託した。口絵写真は、小川忠博氏に委託した。
8. 発掘調査における写真撮影は、各担当者が³行い、遺物写真の撮影は大屋道則、金子直行が³行った。
9. 出土品の整理および実測、図版の作成は、土器を昼間孝志、桜井元子、中村絵美、兵ゆり子、真野目洋子、鉄器を瀧瀬芳之、石帯を田中弘明、鏡を大谷徹、縄文時代の石器を上野真由美、石質の鑑定を町田瑞男の各氏にお願いした、その他を中嶋淳子の協力を得て金子直行が³行った。
10. 本書の執筆はI-1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が³、V・VIを昼間孝志、VIIを大谷徹、それ以外を金子が³行った。
11. 本書の編集は、金子が担当した。
12. 本書に掲載した資料は平成13年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
13. 本書の作成にあたり以下の機関・諸氏からご教示・ご指導を賜った。記して、感謝の意を表します。
(敬称略)
嵐山町教育委員会 植木 弘 村上伸二
小川町教育委員会 高橋好信
浅野晴樹 池上 悟 車崎正彦

凡例

1. 本書挿図中におけるX・Yの座標数値は、国土標準平面直角座標第IX系(原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒)に基づく各座標値を示す。また、各挿図における方位は、すべて座標北を表す。

2. 遺跡におけるグリッドの設置は、国家標準直角座標に基づいて設置しており、10m×10mの方眼である。

3. グリッドの名称は、大木前遺跡、小栗遺跡は北西杭を基準として、東西方向西から東へA～、南北方向北から南へ1～、と番号を付けている。小栗北遺跡、日向遺跡は北西杭を基準として、東西方向西から東へ1～、南北方向北から南へA～、と番号を付けている。

4. 挿図の縮尺は、各図版中に指示した。全体図等は縮尺率の異なるものも使用している。

全体図 …………… 1/4000

1/300

遺構図 …………… 1/60

1/30

1/150

遺物

須恵器・土師器実測図 …………… 1/4

鉄器実測図 …………… 1/3

縄文土器拓本・石器 …………… 1/3

須恵器拓本 …………… 1/4

5. 遺構の表記記号は、以下のとおりである。

S J…住居跡 S B…掘立柱建物跡

S D…溝跡 S K…土壙

S E…井戸 P…ピット

6. 遺構図断面に表記した水準の数値は、海拔標高である。

7. 遺物観察表は次のとおりである。

・口径、器高、底径はcmを単位とする。

・()内の数値は推定値である。

・胎土は肉眼で観察できるものを次の様に示した。

A—白色粒子 B—角閃石 C—石英

D—雲母 E—長石 F—赤色粒子

針—白色針状物質 片—片岩 他—その他

・焼成は良好、普通、不良の三段階に分けた。

・残存率は図示した器形に対し、5%単位で示した。

8. 本書に使用した地図は、建設省国土地理院発行の1/25000を、また、嵐山町、小川町発行の1/2500、1/10000を使用した。

目次

口絵

発刊に寄せて

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1	(5) 溝跡	87
1 調査に至る経過	1	(6) グリッド出土遺物	89
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	V 小栗遺跡の調査	
3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	3	1 遺跡の概要	93
II 遺跡の立地と環境	4	2 発見された遺構と遺物	
III 大木前遺跡の調査		(1) 住居跡	96
1 遺跡の概要	14	(2) 掘立柱建物跡	99
2 発見された遺構と遺物		(3) 溝跡	104
(1) 住居跡	15	(4) 土壌	105
(2) 炉穴	49	(5) ピット状遺構	105
(3) 土壌	49	(6) グリッド出土遺物	112
(4) 井戸跡	65	VI 日向遺跡の調査	
(5) ピット状遺構	65	1 遺跡の概要	114
(6) 溝跡	65	2 発見された遺構と遺物	
(7) グリッド出土遺物	72	(1) 住居跡	117
IV 小栗北遺跡の調査		(2) 溝跡	139
1 遺跡の概要	75	(3) 土壌	142
2 発見された遺構と遺物		(4) ピット状遺構	154
(1) 住居跡	78	(5) 炭焼窯跡	158
(2) 炉穴	80	(6) グリッド出土遺物	160
(3) 土壌	83	VII 発掘の成果	170
(4) ピット状遺構	86		

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形図	4	第36図	土壙(3)	56
第2図	周辺の遺跡(1) (縄文・弥生時代)	5	第37図	土壙(4)	57
第3図	周辺の遺跡(2) (古墳時代以降)	6	第38図	土壙(5)	61
第4図	遺跡周辺の地形図(1)	11	第39図	土壙出土遺物(2)	62
第5図	遺跡周辺の地形図(2)	12	第40図	土壙(6)・井戸跡	64
第6図	遺跡周辺の地形図(3)	13	第41図	ピット(1)	66
第7図	大木前遺跡グリッド網図	15	第42図	ピット(2)	67
第8図	第1号住居跡・出土遺物	16	第43図	ピット(3)	68
第9図	第2号住居跡	17	第44図	溝跡(1)	70
第10図	第3・4号住居跡	18	第45図	溝跡(2)	71
第11図	第4号住居跡出土遺物	19	第46図	大木前遺跡グリッド出土遺物(1)	73
第12図	第5・6号住居跡全体図・鏡実測図	21	第47図	大木前遺跡グリッド出土遺物(2)	74
第13図	第5号住居跡	23	第48図	小栗北遺跡全測図	76
第14図	第5号住居跡出土遺物	24	第49図	第1号・第2号住居跡・出土遺物	77
第15図	第6号住居跡・出土遺物	26	第50図	第3号住居跡	78
第16図	第7・8号住居跡・出土遺物	28	第51図	第3号住居跡出土遺物	79
第17図	第9・10・11号住居跡	29	第52図	土壙(1)	81
第18図	第12・13・14・16号住居跡	30	第53図	土壙(2)	82
第19図	第12・13・14・16号住居跡出土遺物	31	第54図	第5号土壙(炉穴)出土遺物	83
第20図	第15号住居跡	33	第55図	土壙出土遺物	84
第21図	第15号住居跡遺物接合図	34	第56図	ピット	87
第22図	第15号住居跡出土遺物(1)	35	第57図	溝跡	88
第23図	第15号住居跡出土遺物(2)	36	第58図	小栗北遺跡グリッド出土遺物(1)	90
第24図	第17号住居跡・出土遺物	38	第59図	小栗北遺跡グリッド出土遺物(2)	91
第25図	第18・19・20号住居跡・出土遺物	39	第60図	小栗北遺跡グリッド出土遺物(3)	92
第26図	第21号住居跡・出土遺物	41	第61図	小栗遺跡全測図	94
第27図	第22号住居跡	42	第62図	第1号住居跡・出土遺物	96
第28図	第22号住居跡出土遺物	43	第63図	第2・3号住居跡	97
第29図	第23号住居跡・出土遺物	44	第64図	第4号住居跡	98
第30図	第24号住居跡・出土遺物	45	第65図	第4号住居跡出土遺物	99
第31図	第25・26号住居跡・出土遺物	46	第66図	第5号住居跡	99
第32図	第69号土壙(炉穴)出土遺物	49	第67図	第1号掘立柱建物跡	100
第33図	土壙(1)	50	第68図	第2(上)・3号(下)掘立柱建物跡	101
第34図	土壙(2)	51	第69図	第4(上)・5号(下)掘立柱建物跡	102
第35図	土壙出土遺物(1)	52	第70図	第6号掘立柱建物跡	103

第71図	第1号溝跡	104	第102図	第19号住居跡出土遺物	135
第72図	第1～17号土壙	106	第103図	第20号住居跡出土遺物	135
第73図	ピット(1)	107	第104図	第20号住居跡	136
第74図	ピット(2)	108	第105図	第21号住居跡	136
第75図	ピット(3)	109	第106図	第22号住居跡・出土遺物	137
第76図	グリッド出土遺物	112	第107図	第1～3・7～9号溝跡	138
第77図	日向遺跡全測図	115	第108図	第4～6号溝跡	140
第78図	日向遺跡グリッド網図	116	第109図	第10～13号溝跡	141
第79図	第1号住居跡・出土遺物	117	第110図	溝跡出土遺物	142
第80図	第2号住居跡・出土遺物	118	第111図	土壙(1)	143
第81図	第3・4・5号住居跡	119	第112図	土壙(2)	144
第82図	第3号住居跡出土遺物	120	第113図	土壙(3)	145
第83図	第4号住居跡出土遺物	121	第114図	土壙(4)	146
第84図	第5号住居跡出土遺物	122	第115図	土壙(5)	147
第85図	第6号住居跡出土遺物	122	第116図	土壙(6)	148
第86図	第6・7・8号住居跡	123	第117図	土壙(7)	149
第87図	第7号住居跡出土遺物	124	第118図	土壙出土遺物	150
第88図	第9号住居跡・出土遺物	125	第119図	第63号土壙出土古銭	151
第89図	第10号住居跡出土遺物	126	第120図	第79(1～5)・80(6～10) ・83(11～16)号土壙出土古銭	152
第90図	第10号住居跡	126	第121図	ピット(1)	155
第91図	第11号住居跡	127	第122図	ピット(2)	156
第92図	第11号住居跡出土遺物	128	第123図	第1・2号炭焼窯	158
第93図	第12号住居跡出土遺物	129	第124図	第3・4号炭焼窯	159
第94図	第12号住居跡	129	第125図	第5号炭焼窯	160
第95図	第13号住居跡・出土遺物	130	第126図	グリッド出土遺物(1)	161
第96図	第14・15号住居跡	131	第127図	グリッド出土遺物(2)	162
第97図	第15号住居跡出土遺物	132	第128図	グリッド出土遺物(3)	163
第98図	第16号住居跡・出土遺物	132	第129図	グリッド出土遺物(4)	164
第99図	第17・18・19号住居跡	134	第130図	グリッド出土遺物(5)	166
第100図	第17号住居跡出土遺物	134	第131図	グリッド出土遺物(6)	167
第101図	第18号住居跡出土遺物	134			

図版目次

- 図版1 大木前遺跡全景（南から）
調査区全景（中央部東から）
- 図版2 調査区全景（東から）
調査区全景（中央部西から）
- 図版3 第1号住居跡
第1号住居跡鍛冶炉
- 図版4 第2号住居跡
第3・4号住居跡
- 図版5 第5号住居跡
第6号住居跡
- 図版6 第5号住居跡鏡出土状態
第5号住居跡貯蔵穴
- 図版7 第9号住居跡
第11・18・19号住居跡
- 図版8 第12・13・14・16号住居跡
- 図版9 第15号住居跡
- 図版10 第17号住居跡
第17号住居跡貯蔵穴
- 図版11 第21号住居跡
第21号住居跡貯蔵穴
- 図版12 第22号住居跡
第22号住居跡貯蔵穴
- 図版13 第23号住居跡
第24号住居跡
- 図版14 第25・26号住居跡
第25号住居跡遺物出土状態
- 図版15 土壙・井戸・溝
- 図版16 住居跡出土遺物(1)
- 図版17 住居跡出土遺物(2)
- 図版18 住居跡出土遺物(3)
- 図版19 住居跡・土壙出土遺物(4)
- 図版20 土壙出土遺物(2)
- 図版21 刀子・石帯・紡錘車
第69号土壙（炉穴）出土遺物
- 図版22 グリッド出土縄文土器
- 図版23 大木前遺跡出土鏡
- 図版24 小栗北遺跡全景
第1号住居跡
- 図版25 第2号住居跡
第2号住居跡ピット
- 図版26 第3号住居跡・第8号土壙
第5号土壙（炉穴）遺物出土状態
- 図版27 住居跡・土壙出土遺物(1)
- 図版28 土壙出土遺物(2)
小栗北遺跡グリッド出土土器(1)
- 図版29 小栗北遺跡グリッド出土土器(2)
小栗北遺跡グリッド出土土器
- 図版30 小栗遺跡全景（南から）
小栗遺跡全景（西から）
- 図版31 第2・3号住居跡
第4号住居跡
- 図版32 第1・2・4号掘立柱建物跡
第3号掘立柱建物跡
- 図版33 第5号掘立柱建物跡
第6号掘立柱建物跡
- 図版34 日向遺跡A区東側（西から）
日向遺跡A区東側（南から）
- 図版35 日向遺跡A区中央部（南から）
日向遺跡A区中央部（北から）
- 図版36 日向遺跡A区中央部（西から）
日向遺跡B区全景
- 図版37 第1号住居跡
第2号住居跡
- 図版38 第3・4号住居跡
第5号住居跡
- 図版39 第6・7号住居跡
第9号住居跡
- 図版40 第10号住居跡
第11号住居跡

図版41	第12号住居跡 第13号住居跡
図版42	第14・15号住居跡 第17号住居跡
図版43	第18・19号住居跡 第20号住居跡

図版44	第22号住居跡 第1号溝跡
図版45	土壙・炭焼窯跡
図版46	住居跡出土土器(1)
図版47	住居跡・土壙・溝出土土器(2)
図版48	土壙・グリッド出土土器

表 目 次

第1表	周辺の遺跡地名表	7	第8表	小栗遺跡ピット一覧表	111
第2表	大木前遺跡住居跡一覧表	48	第9表	小栗遺跡ピット新旧対照表	113
第3表	大木前遺跡住居跡内ピット深度表	48	第10表	日向遺跡土壙一覧表	153
第4表	大木前遺跡土壙一覧表	69	第11表	日向遺跡ピット一覧表	157
第5表	大木前遺跡グリッドピット一覧表	69	第12表	日向遺跡新旧対照表	168
第6表	小栗遺跡土壙一覧表	105	第13表	日向遺跡土壙新旧対照表	169
第7表	小栗遺跡土壙新旧対照表	105			

遺物観察表目次

大木前遺跡

第1号住居跡出土遺物観察表	16	第23号住居跡出土遺物観察表	44
第4号住居跡出土遺物観察表	20	第24号住居跡出土遺物観察表	45
第5号住居跡出土遺物観察表	25	第25号住居跡出土遺物観察表	47
第6号住居跡出土遺物観察表	27	第26号住居跡出土遺物観察表	47
第8号住居跡出土遺物観察表	28	第14号土壙出土遺物観察表	53
第12号住居跡出土遺物観察表	32	第18号土壙出土遺物観察表	53
第13号住居跡出土遺物観察表	32	第19号土壙出土遺物観察表	53
第14号住居跡出土遺物観察表	32	第20号土壙出土遺物観察表	53
第15号住居跡出土遺物観察表	37	第21号土壙出土遺物観察表	53
第16号住居跡出土遺物観察表	32	第22号土壙出土遺物観察表	53
第17号住居跡出土遺物観察表	37	第34号土壙出土遺物観察表	53
第18号住居跡出土遺物観察表	40	第39号土壙出土遺物観察表	63
第21号住居跡出土遺物観察表	41	第41号土壙出土遺物観察表	63
第22号住居跡出土遺物観察表	43	第45号土壙出土遺物観察表	63
		第46号土壙出土遺物観察表	63

第48号土壙出土遺物観察表	63	第9号住居跡出土遺物観察表	126
第57号土壙出土遺物観察表	63	第10号住居跡出土遺物観察表	127
第60号土壙出土遺物観察表	63	第11号住居跡出土遺物観察表	128
第61号土壙出土遺物観察表	63	第12号住居跡出土遺物観察表	129
第64号土壙出土遺物観察表	63	第13号住居跡出土遺物観察表	130
第66号土壙出土遺物観察表	63	第15号住居跡出土遺物観察表	132
小栗遺跡		第16号住居跡出土遺物観察表	133
第4号住居跡出土遺物観察表	99	第17号住居跡出土遺物観察表	134
日向遺跡		第18号住居跡出土遺物観察表	135
第1号住居跡出土遺物観察表	117	第19号住居跡出土遺物観察表	135
第2号住居跡出土遺物観察表	118	第20号住居跡出土遺物観察表	135
第3号住居跡出土遺物観察表	121	第22号住居跡出土遺物観察表	137
第4号住居跡出土遺物観察表	121	溝跡出土遺物観察表土壙	142
第5号住居跡出土遺物観察表	122	土壙出土遺物観察表	150
第6号住居跡出土遺物観察表	124	グリッド出土遺物観察表	165
第7号住居跡出土遺物観察表	124		

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県では「地域いきいき彩の国構想の実現に向けて」、多様化する県民の生活圏の拡大への対応や、高度化する産業活動の円滑化などを図るため、生活環境の保全と道路交通の安全性を重視した、体系的な道路交通網の整備を積極的に進めているところである。とくに、「県内1時間道路構想網」を掲げ、高速道路のインターチェンジへ短時間でアクセスするための道路の整備を推進している。

県道熊谷小川秩父線は、関越自動車道に新たに建設される（仮称）小川・嵐山インターチェンジに接続するもので、高速道路の整備効果を最大限に活用し、新たな産業や研究・教育機関あるいは広域物流施設等の集積により地域の活性化を図るものとして、その共用が期待されているものである。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施設の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

平成10年5月26日付け道建第95号で「道路事業地内における埋蔵文化財の所在及びその扱いについて」道路建設課長から照会があったが、文化財保護課長からは、試掘調査等の実施時期によって5回に分けて以下のとおり回答している。

なお、平成10年7月24日付け教文第547号では小栗遺跡及び大木前遺跡について、平成10年12月9日付け教文第1108号では大木前遺跡について、平成11年3月23日付け教文第1564号では日向遺跡について、平成12年6月20日付け教文第324号では小栗北遺跡について、発掘調査が必要な範囲を示した。

1 埋蔵文化財の所在

名称 (No.)	種別	時代	所在地
小栗遺跡 (No.36-090)	寺院跡	平安鎌倉	嵐山町大字越畑字小栗383-1

大木前遺跡 (No.36-188)	集落跡	奈良 平安 中世	嵐山町大字越畑字大木前地内
日向遺跡 (No.35-021)	集落跡	縄文 奈良 平安	小川町大字中爪地内
小栗北遺跡 (No.36-190)	集落跡	縄文	嵐山町大字越畑字小栗399他

2 法手続き

周知の埋蔵文化財包蔵地内で工事をする際には、事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく発掘通知を提出してください。

3 取り扱いについて

別添図に示した範囲に付いては、工事計画上やむを得ず埋蔵文化財の現状を変更する場合、事前に記録保存のための発掘調査を実施してください。

その後、道路建設課(平成12年度からは道路整備課)と文化財保護課との間で取り扱いについて協議を行ったが、計画変更による現状保存が困難であることから、記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査の実施については、実施機関である財埼玉県埋蔵文化財調査事業団と道路建設課(道路整備課)、文化財保護課の三者で工事日程や調査計画などについて協議を行い、大木前遺跡は平成10年12月1日から平成11年3月31日まで、小栗遺跡は平成11年1月4日から3月31日まで、日向遺跡は平成11年4月8日から12月28日まで、大木前遺跡、小栗北遺跡については平成12年10月23日から年12月28日までの期間で発掘調査を実施することとなった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、同法第57条1項の規定による発掘調査届が、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。発掘調査にかかる通知は以下のとおりである。

平成10年12月28日付け教文第2-164号

(小栗遺跡)

平成11年1月4日付け教文第2-163号

(大木前遺跡)

平成11年6月4日付け教文第2-36号

(日向遺跡)

平成12年11月28日付け教文第2-88号

(大木前遺跡)

平成12年11月28日付け教文第2-89号

(小栗北遺跡)

(文化財保護課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

大木前遺跡の発掘調査は平成10年12月1日から平成11年3月31日までと、平成12年10月23日から12月28日までの2回に分けて実施した。初回の調査は12月初旬に事務所の設置を行った後、表土を除去して遺構確認を行った。1月中旬より住居跡等の遺構を発掘し始め、1月14日には第5号住居跡より、古墳時代初頭の鏡が出土して、話題を提供した。2月から3月の中旬にかけて住居跡、土壙等の多くの遺構を掘り進み、同時に実測図作成も行い、3月の下旬に航空撮影と測量を行って調査を終了した。

2回目の調査は小栗北遺跡と同時に調査を始めたが、12月に調査が集中した。

小栗遺跡の発掘調査は平成11年1月4日から3月31日まで行った。表土剥ぎは大木前遺跡と同時進行で行い、1月中には遺構確認を終え、2月から遺構の発掘を行い、3月中旬には遺構の調査を終え、図面を作成して、3月末に調査を終了した。

日向遺跡は平成11年4月8日から12月28日まで行った。調査は路線に沿って東側からA～G区に分けて行った。4月初旬に事務所を設置して、A区から順次表土剥ぎを始めてE区までを行い、F・G区は10月中旬に表土剥ぎを行った。12月中旬までには遺構の調査をほぼ終え、図面作成、写真撮影等を終了させて、12月末に調査を完了した。

小栗北遺跡は大木前遺跡の第2回目の調査と同時進行で、平成12年11月6日から12月28日まで行ったが、主体的には11月に調査を行った。11月初旬には表土剥

ぎを終え、遺構確認を行い、11月末には遺構の調査を終了した。12月に入って、図面作成、写真撮影を行い、12月末に空中撮影を行って、大木前遺跡と同時に調査を終了させた。

(2) 整理・報告書作成

大木前遺跡、小栗北遺跡、小栗遺跡、日向遺跡は全て合わせて平成12年5月1日から6月30日までと、平成13年1月4日から3月23日までの5ヶ月間で整理作業を実施した。

5月上旬から各遺跡出土遺物の水洗・注記を行い、同時に現場の平面図・写真の整理を行った。

遺物の復元は、5月中旬から6月にかけて接合などの作業と同時進行したが、遺構数が多く、復元できる個体も多く、予想以上の時間を割いた。

復元された遺物は、順次図化を行い、トレースなどの墨入れを行った。

遺構の図面整理は、5月初旬から行ったが、合計4遺跡の遺構全体を処理するのに時間を割いた。

本年度の12月まで調査が行われていたため、遺構図の完成は平成13年の1月中旬となり、その後トレースを行い、版組みも同時進行で行った。

1月の下旬に遺物の写真撮影を行い、2月初旬には報告書の割付けを終了させる。原稿は、1月の中旬より執筆を開始し、2月の中旬に終了させた。

報告書は、2月下旬より校正を開始し、3月中旬までに校正を終え、3月末日に印刷を終了して、刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査（平成10～11年度）

理事長 荒井 桂
 副理事長 飯塚誠一郎
 常務理事兼管理部長 (平成10) 鈴木 進
 (平成11) 広木 卓

管理部

副部長兼 経理課長 関野 栄一
 主任 (平成10) 江田 和美
 主任 福田 昭美
 主任 (平成11) 腰塚 雄二
 主任 菊池 久
 庶務課長 金子 隆
 主任 田中 裕二
 主任 (平成11) 江田 和美
 主任 長滝美智子
 主任 (平成10) 腰塚 雄二

調査部

調査部長 (平成10) 谷井 彪
 (平成11) 増田 逸朗
 調査部副部長 水村 孝行
 調査第四課長 (平成10) 浅野 晴樹
 (平成11) 杉崎 茂樹
 主任調査員 (平成10) 磯崎 一
 (平成10) 金子 直行
 (平成10) 若松 良一
 (平成11) 宮井 英一
 主任調査員 (平成10) 石坂 俊郎
 (平成11) 伴瀬 宗一

(2) 発掘・整理作業（平成12年度）

理事長 中野 健一
 副理事長 飯塚誠一郎
 常務理事兼管理部長 広木 卓

管理部

副部長 関野 栄一
 主席 (庶務担当) 阿部 正浩
 主席 (施設担当) 野中 廣幸
 主任 菊池 久
 主席 (経理担当) 江田 和美
 主任 長滝美智子
 主任 福田 昭美
 主任 腰塚 雄二

調査部

調査部長 高橋 一夫
 調査副部長 石岡 憲雄
 資料副部長 鈴木 敏昭
 専門調査員(調査第一担当) 坂野 和信
 主席調査員(資料整理担当) 磯崎 一
 統括調査員 (整理) 金子 直行
 統括調査員 (発掘) 宮井 英一
 主任調査員 (発掘) 君島 勝秀

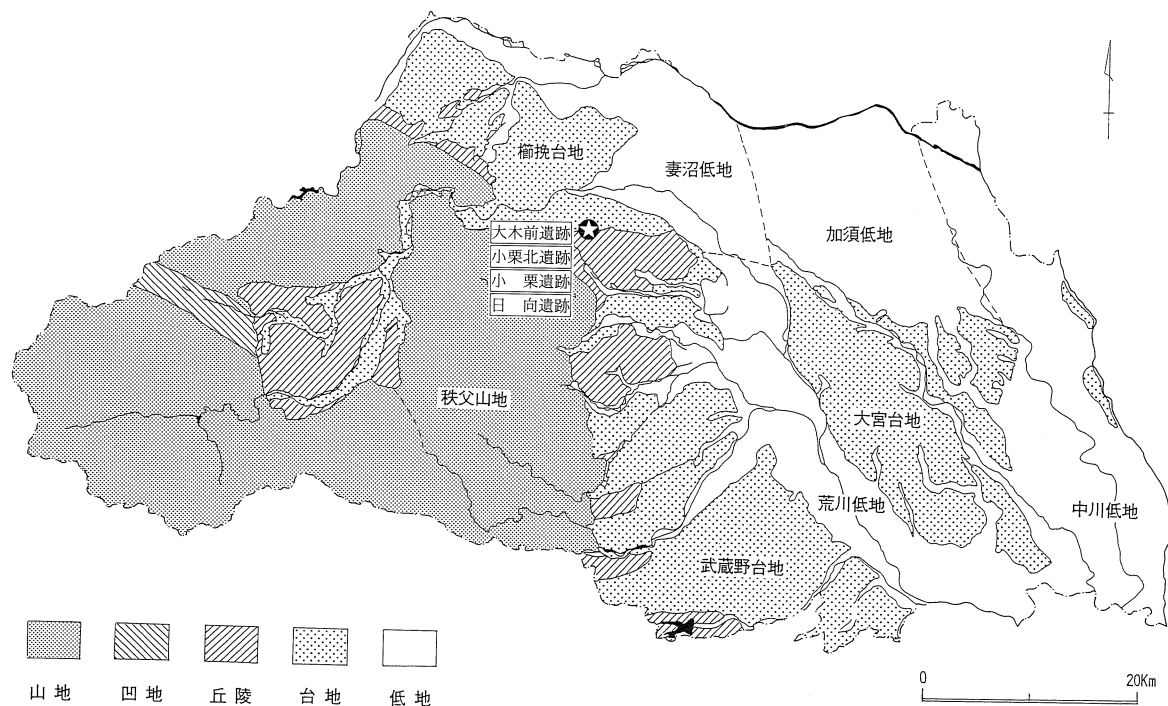
II 遺跡の立地と環境

大木前遺跡、小栗北遺跡、小栗遺跡は埼玉県比企郡嵐山町大字越畑地区内に、日向遺跡は埼玉県比企郡小川町大字中爪地区に位置する遺跡で、両町を分ける市野川を挟んで、ほぼ対峙する位置関係に存在する。

両遺跡群は、嵐山町の市街地を基準にすると北西方向に、小川町の市街地を基準にすると東北東方向にいずれも約4km程の地点に位置しており、いずれも南東方向に細長い丘陵上の斜面地もしくは尾根上に形成されている。

遺跡の存在する比企丘陵は埼玉県のほぼ中央部にあり、外秩父山地の外縁部に形成された西高東低の丘陵部で、中央に菅谷・松山台地を挟んで、南北に大きく二分されている。北側の比企丘陵は東側から南東方向へ流れる滑川、粕川、市野川、兜川、槻川によって開析され、いく筋もの低く細長い尾根筋が南東方向に連なる景観を呈している。これらの小河川は、さらに南下と合流を繰り返して、やがて川島町市内で荒川へと合流していく。

第1図 埼玉県の地形図



大木前遺跡、小栗北遺跡、小栗遺跡は粕川と市野川に挟まれた南東方向に細長い丘陵上に存在する。遺跡周辺の丘陵内は小支谷が発達して、樹枝状もしくは小さな独立丘状の小山が連なる地形を呈し、調査区内が遺跡の全体像を示してはいないとしても、大木前遺跡では尾根部分と南側の裾部分、小栗北遺跡と小栗遺跡では尾根及び頂上部分が生活の場として使用されていた様である。

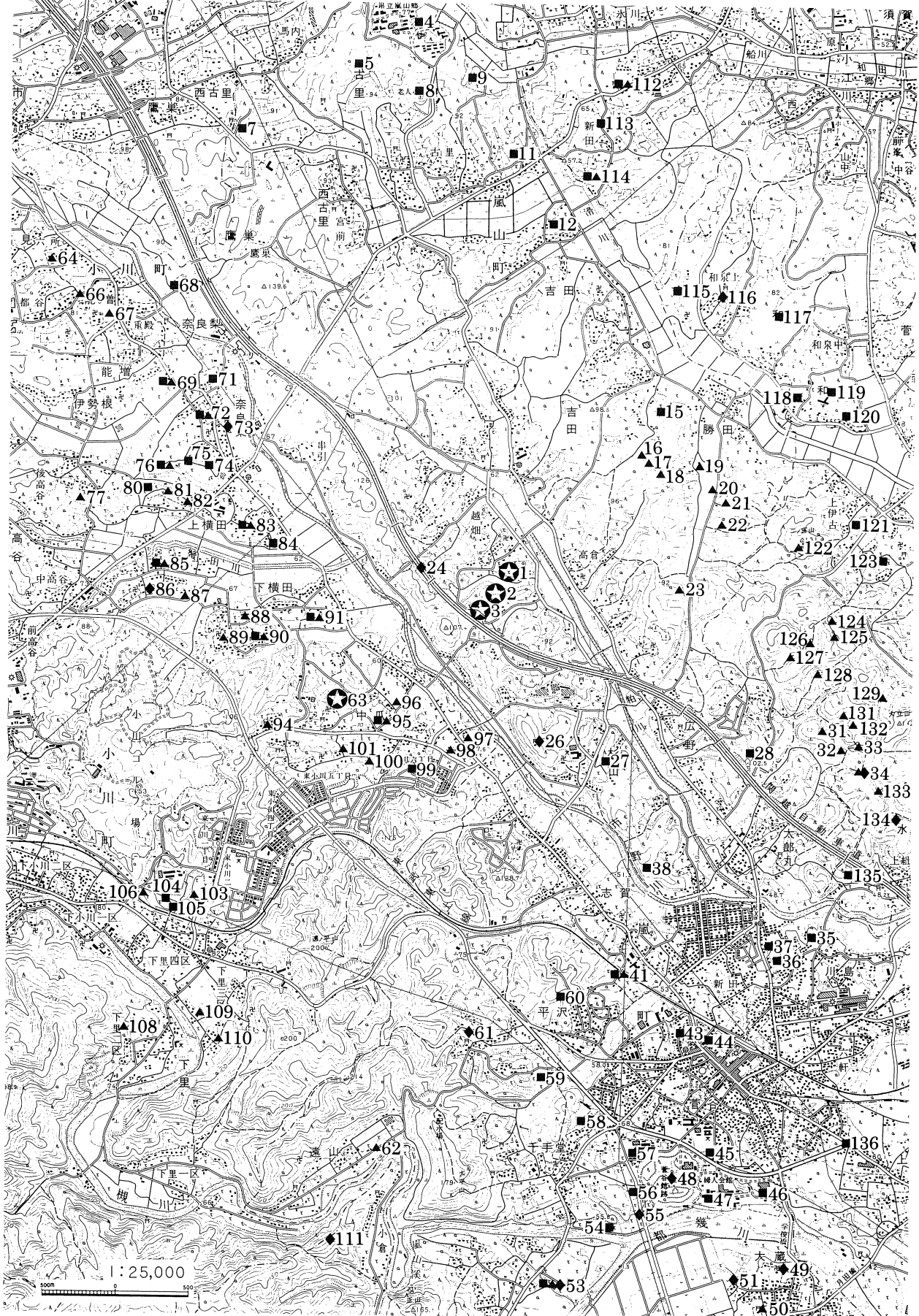
日向遺跡は、市野川とそれに流れ込む小河川で開析された小支谷を挟む、台地から沖積面への移行部分に形成された遺跡である。同様に、市野川沿いの沖積地への移行面には、各時代を通して多くの遺跡が形成されている。

この地域を含む比企丘陵内には、ゴルフ場、工業団地等の造成をはじめとする大型開発が進み、それに伴う大規模な発掘調査が行われ、埋蔵されている遺跡群の様相も、従前の分布調査での把握とは、様変わりしているのが現状である。

第2図 周辺の遺跡(1) (縄文・弥生時代)



第3図 周辺の遺跡(2) (古墳時代以降)



第1表 周辺の遺跡地名表

市町村	番号	遺跡名	時代
嵐山町	1	大木前	縄・奈・平
	2	小栗北	縄・平
	3	小栗	奈・平
	4	古里古墳群茨原支群	古墳
	5	藤塚古墳	古墳
	6	五嶺台	縄文
	7	神山古墳群	縄・古墳
	8	二塚古墳群	古墳
	9	北田	縄・古墳
	10	上耕地	縄文
	11	古里古墳群	古墳
	12	陣屋古墳群	古墳
	13	幡後谷津	縄文
	14	山王下	縄文
	15	天神山古墳群	古墳
	16	蟹沢	弥・奈
	17	芳沼入	縄・弥・奈・中～近世
	18	芳沼入下	奈良
	19	大野田西	弥・平
	20	大野田	縄・弥・奈・中～近世
	21	尺尻北	縄・平
	22	尺尻	旧石器・縄・平
	23	新田坊	縄・平
	24	越畑城跡	縄(草創～前)・中世
	25	打越	縄文
	26	杉山城跡	中世
	27	葉の峰古墳	古墳
	28	下郷古墳群	古墳
	29	中郷	縄文(中)
	30	酉亥	縄文
	31	亥	縄・奈・平
	32	申西	縄・奈・平
	33	細沼北	奈・平
	34	年中坂B	縄・奈・平・中世
	35	岩花古墳群	縄(中・後)・古墳
	36	花見堂	縄(前・後・晩)・古墳(前)
	37	花見堂古墳群	古墳
	38	堂ヶ谷戸古墳群	古墳
	49	深沢	縄文
	40	西町裏	縄文
	41	金平	縄(早・前・後)・古墳・平
	42	向原	縄文
	43	東昌寺古墳群	古墳
	44	東側古墳群	古墳
	45	稲荷塚古墳	古墳
	46	東原古墳群	古墳
	47	寺山古墳群	縄(早・中)・古墳
	48	菅谷館跡	縄(前)・中世
	49	向徳寺	中世
	50	大蔵館跡	平安
	51	行司免	縄・中世
	52	野銭場	縄文
	53	東落合	縄・古墳・奈・平・中世
	54	石堂古墳群	古墳
	55	上石堂	中世
	56	山王古墳群	古墳
	57	向原古墳群	古墳
	58	原古墳群	古墳
	59	表古墳群	縄・古墳
	60	物見塚古墳	縄・古墳
	61	旧平沢寺僧坊跡群	縄・中世
	62	山根	縄(前)・平・中世
小川町	63	日向	縄(中)・奈・平
	64	六所	奈・平・中世
	65	山ノ神	縄文
	66	都谷	奈・平
	67	大杉	奈・平
	68	一ノ入裏	古墳

市町村	番号	遺跡名	時代
	69	岡原	古墳・奈・平
	70	貝塚	縄文
	71	草加古墳群	古墳(後)
	72	台ノ前	縄(中)・古墳・平
	73	諏訪神社奉祀	中世
	74	方墳行人塚	古墳(後)
	75	行人塚古墳群	古墳(後)
	76	寿源寺	古墳・平
	77	道下	平安
	78	蟹山	縄文
	79	片瀬	縄文
	80	石塚古墳	古墳
	81	経塚	平安
	82	峯久保	平安
	83	峯原	縄(中)・古墳・奈・平
	84	新田古墳群	古墳(後)
	85	中井	縄(後)・古墳(後)・奈・平
	86	武田信俊公館	近世
	87	宮脇	弥(後)・奈・平
	88	悪戸	縄・平
	89	経塚	平安
	90	稲岡	古墳・平
	91	越弥	縄(中)・弥・古墳・奈・平
	92	西稲岡	縄(前)
	93	久保ヶ谷戸	縄(中)
	94	カサ	平安
	95	宮前	古墳・奈・平
	96	本宿前	縄(中)・奈・平
	97	下原道北	縄・平
	98	下原道南	縄(中)・奈・平
	99	西ヶ谷戸古墳群	古墳(後)
	100	内郷(2)	平安
	101	内郷(1)	縄・平
	102	松の木	縄文
	103	中の台	縄(中)・平
	104	平松1号墳	古墳
	105	平松2号墳	古墳
	106	平松台	縄(前～中)・弥(後)・奈・平
	107	川向井	縄(早・前)
	108	笠郷	縄(前)・奈・平
	109	和具(2)	奈・平
	110	和具(1)	奈・平
玉川村	111	小倉城跡	中世
江南町	112	塩西	縄・古墳・奈・平
	113	塩古墳群	古墳
	114	塩前	縄・古墳・奈・平
滑川町	115	西浦古墳群	古墳
	116	三門館跡	中世
	117	松原古墳群	古墳
	118	島中古墳群	古墳
	119	船川	古墳
	120	山崎古墳群	古墳
	121	巖山古墳群	古墳
	122	旧伊古神社	奈・平
	123	郷社後古墳群	古墳
	124	台田嶺A	縄・奈・平
	125	台田嶺B	縄・奈・平
	126	柳沢A	奈・平
	127	柳沢B	縄・奈・平
	128	山田谷	奈・平
	129	二ツ沼北	奈・平
	130	二ツ沼南	縄文
	131	中尾	縄・奈・平・現代
	132	二ツ沼西	奈・平
	133	年中坂A	縄・奈・平
	134	水房館跡	中世
	135	寺の台古墳	古墳
東松山市	136	上唐子西原古墳群	古墳(末)

両遺跡の存在する市野川、粕川流域周辺地域の遺跡を概観すると、旧石器時代では石器が表採される程度で、非常に希薄である。現在、遺構を伴う遺跡の報告例はない。

縄文時代の草創期、早期前半は旧石器時代と同様に、土器片が散布する程度である。草創期は北比企丘陵内の滑川町打越遺跡で、多縄文系土器群が纏まって出土している。早期前半では滑川町屋田遺跡で良好な撚糸文土器、押型文土器が出土しており、嵐山町年中坂遺跡(34・133)、用土庵B遺跡、越畑遺跡(24)等でも、撚糸文、沈線文土器が出土している。

早期後半の条痕文期に入って、丘陵、台地肩部に炉穴が構築され、遺構の存在が明らかになってくる。嵐山町金平遺跡(41)では野島式期の住居跡6件が検出され、亥遺跡(31)では条痕文期と思われる炉穴10基が発見されている。また、滑川町蟹沢遺跡では鶴が島台式の良好な土器群が出土している。条痕文系土器群は、出土量が少ないものの丘陵台地部の多くの遺跡で、また、小川町の市野川沿いの遺跡群でも検出されており、一般的な傾向ではあるが該期において遺跡密度の濃くなること特徴的となる。

前期では比較的山間部において、集落の発達が見られる。小川町では兜川と槻川の合流点付近の河岸段丘上に立地する平松台遺跡(106)で、繊維土器の関山式期から黒浜式期にかけての住居跡19軒が検出され、さらに、越場遺跡、神名沢B遺跡では諸磯a式期の住居跡が発見されている。嵐山町では遠山盆地内の槻川の低位河岸段丘上に前期中葉の集落である山根遺跡(62)が営まれている。山根遺跡では、黒浜式期、諸磯a～b式期の住居跡12軒が調査された。また、嵐山工業団地関係で調査された勝田地区では、尺尻遺跡(22)で諸磯b式期の住居跡1軒、尺尻北遺跡(21)で諸磯c式期の住居跡1軒、新田坊遺跡(23)諸磯c式期の土壇2基、芳沼入遺跡(17)では大変貴重な十三菩提式土器を出土する前期終末の土壇1基が検出されている。その他、ゴルフコース内遺跡群でも、諸磯b～c式を中心として前期終末までの土器群が検出されており、

山間・丘陵部独特の遺跡占地構成を示している。

中期になると台地中央部における小集落も形成されるが、低位の広い河岸段丘上に大きな集落が営まれるようになる。中期初頭から前半期は遺構がほとんど検出されておらず、前期の土器群と共に破片で散布している程度である。小川町平松台遺跡では、阿玉台II式の良い土器群を出土した土壇が検出されている。

中葉から後葉にかけては山間部における小遺跡と共に、都幾川の河岸段丘上に大集落が形成される。行司免遺跡(51)は住居跡が円形に廻る所謂環状集落で、中葉の勝坂式から加曾利E式にかけて、また、若干の後期初頭のものも含めて住居跡261軒、集石土壇131基、土壇9基、土器捨て場2ヶ所が検出された。住居跡の並びはおよそ大きな円を描いて配列されているが、この大きな円を2つ重ねたような状況を示し、時期によって微妙に住居の並びを変えていて、結果的に大きな2つの円を描くような構成を採ったものと推測される。周辺の山間地にある小集落と比較すると規模の異なる集落であり、あるいは周辺の中核的な集落となっていた事も推定される。また、中郷遺跡(29)は独立丘陵状の尾根部に形成された中期後半の小集落で、住居跡7軒、土壇6期が検出された。勝坂式終末の中峠式段階の貴重な住居跡も存在しており、加曾利E式段階への橋渡的な様相を伝えている。

小川町の市野川沿いにも中期中葉以降遺跡が増加しており、日向遺跡(63)を含め、北側に隣接する久保ヶ谷戸遺跡(93)や台ノ前遺跡(72)、町場遺跡で中葉から後葉にかけての土器片が検出されている。

後期以降は遺跡が激減し、土器片の散布が知られる程度となるが、大野田西遺跡(19)では土器片は検出されなかったものの、堀之内式期のほぼ完形の筒型土偶が出土している。

晩期ではさらに遺跡が減少し、嵐山町の行司免遺跡で安行式土器、花見堂遺跡(36)、屋田遺跡で干網式の浮線網状文系の土器群が出土している程度である。小川町でも同様の傾向を示し、市野川沿いでは中井遺跡(85)で後期の破片が知られる位となる。

弥生時代も、縄文時代の晩期の傾向を受け継ぎ前期、中期の遺跡はほとんど存在しない。大野田西遺跡で、中期と思われる胴部破片が若干出土している程度である。後期では所謂吉ヶ谷式の集落が丘陵上に進出しており、嵐山町蟹沢遺跡(16)では住居跡11軒、大野田遺跡(20)で住居跡25軒が検出されている。

古墳時代でも前期は、弥生時代と同様に遺跡数が少なく、嵐山町屋田遺跡で住居跡14軒、行司免遺跡では方形周溝墓が10基、前期から中期の住居跡68軒が検出されている。小川町でも同様に遺跡数が少なく、市野川沿いでは五領式期の住居跡が1軒検出された越祢遺跡(91)、峯原遺跡(83)が存在する程度である。

古墳は嵐山町の市野川沿いでは、物見塚古墳(60)で1基、東昌寺古墳群(43)で2基、東側古墳群(44)で1基、屋田古墳群で17基、花見堂古墳群(37)で2基、岩花古墳群(35)で2基の、いずれも円墳が確認されている。都幾川流域では稲荷塚古墳(45)や寺山遺跡(47)で8基、向原古墳群(57)で3基の円墳が調査され、山王古墳群(56)で15基、石堂古墳群(54)で4基の古墳が確認されている。また、行司免遺跡では後期の円墳5基、さらに、東落合遺跡(53)では、後期の住居跡18軒が検出されている。

小川町の市野川沿いでは、草加古墳群(71)、鷹巣山古墳、新田古墳群(84)、西ヶ谷戸古墳群(99)等で24基の古墳が確認されているが、小古墳群であり、埴輪は確認されておらず、石室も不明であり、詳細は不明瞭であると言わざるを得ない。該期の遺跡は6遺跡が確認されており、台ノ前遺跡で住居跡1軒、越祢遺跡で住居跡3軒が調査されている。

奈良・平安時代は再び遺跡数が増えるが、山間部の斜面地に形成された遺跡が多く、比較的小さな集落であることが特徴的である。調査の度に遺跡数が増えることから、小さいながらもかなりの遺跡数が存在していたものと推定される。嵐山町等のゴルフコース内遺跡では13遺跡が確認され、大半は住居跡10軒程度の遺跡であるが、天裏遺跡では住居跡36軒、柳沢A遺跡(126)では15軒、柳沢B遺跡(127)では11軒が検出

されている。また、年中坂A遺跡(133)では、8世紀前半代の須恵器窯1基が検出されている。工業団地関係では新田坊遺跡で住居跡11軒、蟹沢遺跡で12軒が確認されたが、他は1～3軒程度の遺跡が多い。また、六丁遺跡では34軒の住居跡が、金平遺跡では合計20軒の住居跡が検出されている。年中坂A遺跡の窯跡の存在を考えると、これ等北比企丘陵内や菅谷台地に存在する奈良・平安時代遺跡出土の須恵器は、必ずしも南比企産で構成されるものとは言い切れず、近在に8～9世紀代の窯跡が存在する可能性があり、その供給源も考慮に入れる必要がある。南比企窯跡群を構成する將軍沢窯跡群が存在する都幾川沿いでは、東落合遺跡で住居跡21軒、山根遺跡で住居跡3軒が調査されており、出土する須恵器は將軍沢窯跡群との関連が強いものと推測される。

小川町の市野川沿いでも遺跡数が急増し、該期の遺跡は日丸遺跡、六所遺跡(64)、大杉遺跡(67)、越祢遺跡等22遺跡が確認されている。これ等の遺跡は市野川で形成された沖積地の水田面に近い部分にまで進出しており、嵐山町の遺跡立地と異なってくる。これは、その主たる生業形態の差異が、立地条件の差異として現れているのであろうか。

中世になると、鎌倉街道上道がこの地を抜けて行くことによって、嵐山町内には重要な遺跡が多く存在するようになる。周知の通り、鎌倉街道上道は笛吹峠を越え、將軍沢、大蔵、都幾川を渡って菅谷、志賀を経て、市野川右岸沿いに北上し、小川町奈良梨へと続き、鉢形城方面へと北上を続ける。

鎌倉街道上道が都幾川右岸の川を渡る部分に大蔵館跡(50)が築かれ、右岸やや上流の低位河岸段丘上行司免遺跡(51)が存在する。行司免遺跡からは住居跡状の竪穴状遺構3軒、井戸3基、土壇5基、溝11条と、掘立柱建物跡と思われる柱穴群が東西70m×南北50m及び東西30m×南北50mの2ヶ所の範囲から集中して検出された。各遺構は溝による区画線とほぼ平行して存在しており、企画性の高い中世の遺跡であることが判明した。

一方、都幾川の対岸に当たる左岸の断崖上には、畠山重忠の居館である国指定史跡菅谷館跡(48)が存在する。また、槻川と都幾川の合流地点の左岸には、12世紀代の遺物が出土した堀跡、寺院と推定される山王・上石堂遺跡(55)が存在する。さらに、鎌倉街道上道を北上すると西側に県指定重要遺跡旧平沢寺僧坊跡群(61)が存在する。『吾妻鏡』にも関連記事の記載がある旧平沢寺は確認調査により、12世紀から13世紀初頭にかけて構築されたと推定される一辺10mを測る東日本でも最大級の四面堂跡や池跡が検出され、旧平沢寺が浄土庭園を構成する大寺院で、秩父氏や畠山氏と関連の強い寺院であることが推定された。また、鎌倉街道沿いと推定される金平遺跡(41)は、鎌倉時代の掘立柱建物跡や鑄造遺構が発見され、鑄造工房跡と推定された。

この様に中世関連の遺跡が多いことから、この地が要所であったことが窺われるが、当時、都幾川では舟運が行われていたことが想定されており、鎌倉街道の陸運と都幾川の水運が交わる地点として、嵐山町南部地域は重要な位置を占めていたものと推定されている。また、木曾義仲の父である源義賢の居館とされる大蔵館跡(50)、義賢の墓、「銅造阿弥陀如来及び両脇侍立像」を持つ時宗の向徳寺(49)が存在し、行司免遺跡が陸運と水運の交差する地点での「市」としての性格を帯びていることなど、県内においても中世の遺跡が多く存在する重要な地域である事が理解される。

その後、鎌倉街道上道沿いは、戦国時代においても後北条氏の支城制により、この街道を見張るように山城である菅谷城、杉山城、越畑城、小川町の高見城が配置整備され、甲斐の武田氏、越後の上杉氏等に対する防御ラインとして機能していた。

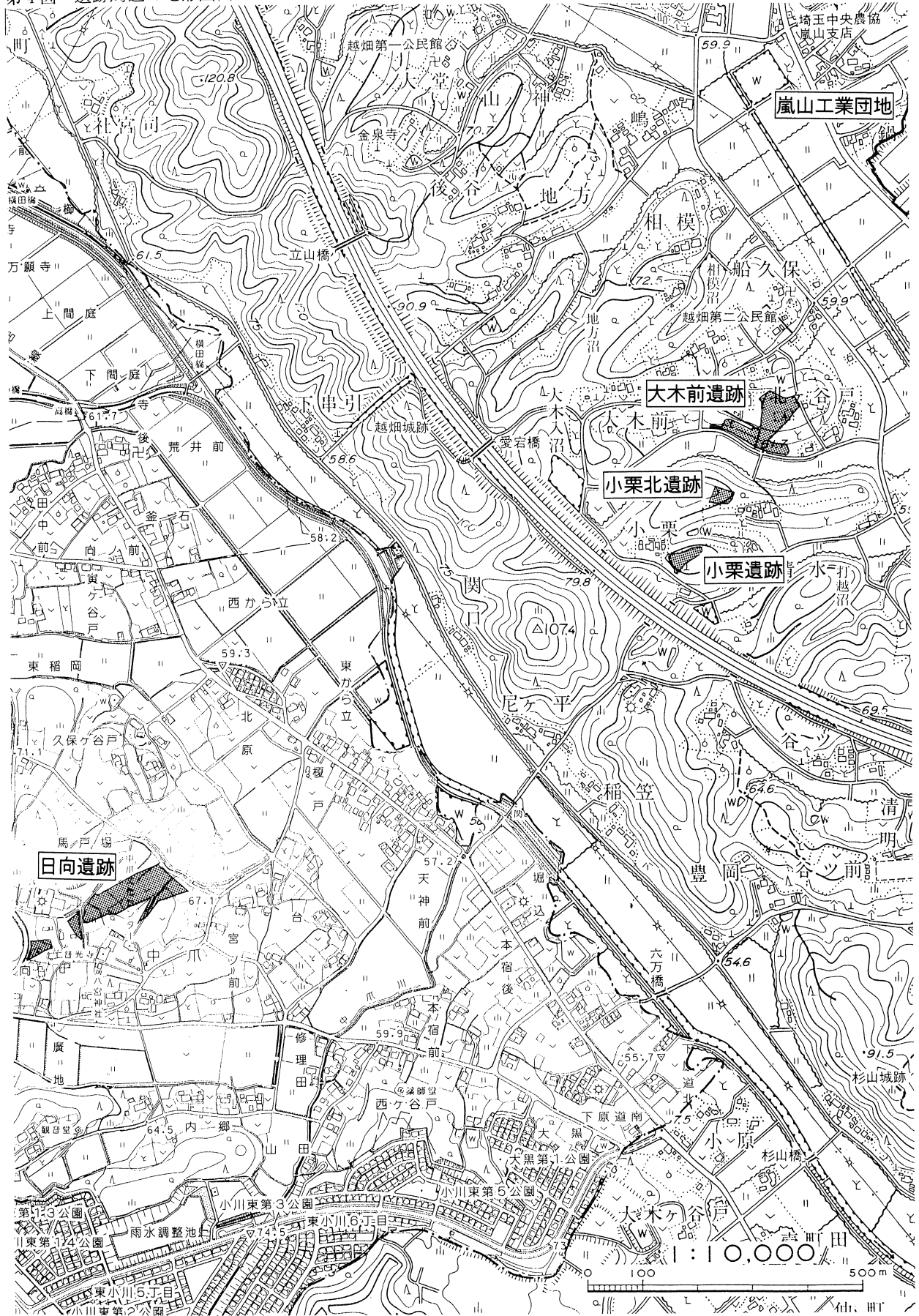
この様な歴史的な背景の中で、大木前遺跡(1)、小栗北遺跡(2)、小栗遺跡(3)は時代を異にするとはいえ、杉山城(26)と越畑城の間に挟まれた位置関係に存在し、日向遺跡(63)はまさに鎌倉街道上道の通り道に相当しており、市野川が開析したなだらかな沖積地を挟んで対峙する位置関係にある事が理解される

のである。そして、縄文時代以降、この地域が活発化するのには奈良・平安時代以降であり、その背景にある南比企窯跡群の創業と、東山道を結ぶ裏街道としての役割が、この地を要所と化し、関東武士の発生以降幾度となくこの地を歴史の舞台へと登場させて行くことになるのである。

参考文献

- 小川町1999『小川町の歴史 資料編1 考古』
嵐山町1983『嵐山町史』
稲生美代子1982「中郷」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第13集
今井 宏1984「屋田・寺ノ台」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集
植木智子1997「滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群」滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群発掘調査会
植木 弘1984「嵐山町山根遺跡の調査」第16回遺跡発掘調査報告会発表要旨
植木 弘1989「行司免遺跡 本文編」嵐山町遺跡調査会報告5
小野義信1979「越畑城跡」埼玉県遺跡発掘調査報告書第20集
金井塚良一1980「金平遺跡」嵐山町教育委員会
川口 潤1992「蟹沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第119集
佐藤康二1994「大野田西遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第138集
高橋好信1995「六所(3次)・日丸・町場遺跡発掘調査報告書」小川町埋蔵文化財調査報告書第4集
高橋好信1996「日向遺跡」小川町埋蔵文化財調査報告書第7集
村上伸二1989「嵐山町旧平沢寺の調査」第30回遺跡発掘調査報告会発表要旨
村上伸二1999「町内遺跡Ⅲ—金平遺跡発掘調査報告書第3・第4・第5地点—」嵐山町埋蔵文化財調査報告7

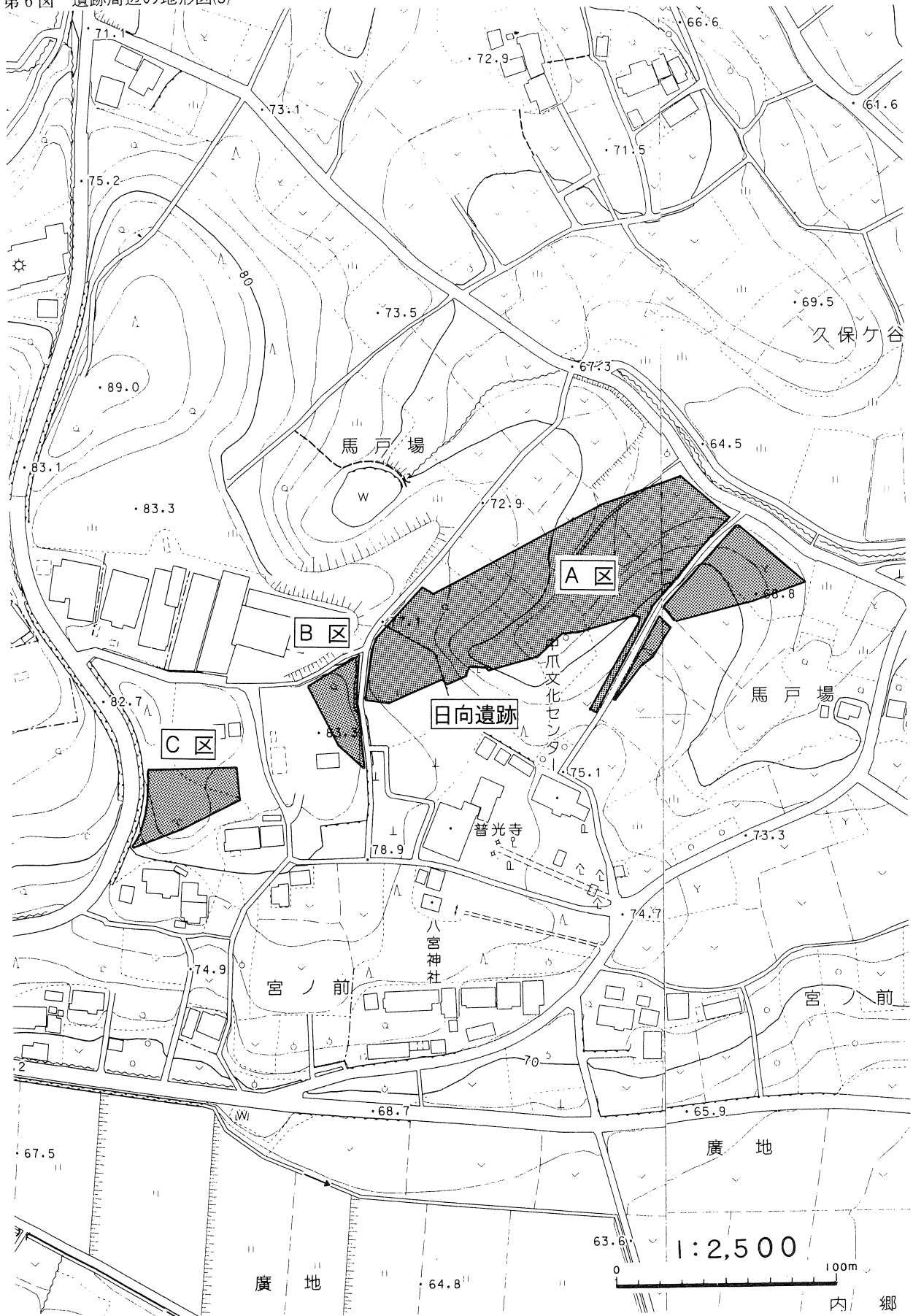
第4図 遺跡周辺の地形図(I)



第5図 遺跡周辺の地形図(2)



第6図 遺跡周辺の地形図(3)



Ⅲ 大木前遺跡の調査

1. 遺跡の概要

大木前遺跡は埼玉県比企郡嵐山町大字越畑453番地他に所在し、平成10年12月1日から平成11年3月31日までと、平成12年10月23日から平成12年12月28日までの2回に分けて調査が行われた。第1次調査では5,800㎡、第2次調査では540㎡の、合計6,340㎡が調査の対象となった。

遺跡周辺は市野川とやがて市野川と合流する粕川によって開析され、その間に挟まれた南東方向に細長い丘陵が形成されている。この丘陵は北西側が高く南東側にかけて緩く傾斜するが、東側の粕川方面、西側の市野川方面に向かって、東西方向の樹枝状の小支谷が発達しており、それ等に開析された独立丘状の尾根が連なっている。

遺跡は東西方向に開析された独立丘上の、尾根から南側の斜面にかけて形成されており、標高はおよそ75mから62m前後を測る。

調査は10座標北に合わせて10mのグリッドを設定し、北西杭を基準に東へA～P、南へ0～13の番号を付けて行った。第2次調査の際に、Aから西側へZ、Yへと逆に番号を付け足した(第7図)。

発見された遺構は、縄文時代の炉穴1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡26軒、土壇69基、井戸1基、溝7条、性格不明のピットであった。

縄文時代は、第69号土壇とした早期条痕文期の炉穴1基のみ検出された。斜面の裾部分では、前期の諸磯b・c式土器を中心として、早期の山形押型文土器や条痕文土器が出土、石器が出土しているが、早期の押型文土器に伴うと思われる表面の磨かれた槍先状尖頭器、所謂「とろとろ石器」の出土が特筆される。

奈良・平安時代は住居跡が26軒検出されたが、何れも斜面部に構築されていたため、竈と壁溝のみ確認された住居跡が多く、全容を知る住居跡はなかった。出土遺物で時期を判別すると、奈良時代は第1・17・22・

23・24・25号住居跡が相当する。第1・23号住居跡は覆土出土の小破片から判断されるもので、確実ではない。竈は北竈と東竈があり、竈の発見されない住居跡は東竈の可能性が高い。また、第1号住居跡は、床面に小鍛冶炉と思われる炉跡を持つ。奈良時代の遺構は斜面の中腹から裾にかけて存在しているが、間隔はまばらである。第64号土壇出土の甕の破片が奈良時代の所産であるとする、頂上の尾根付近にも奈良時代の遺構が存在する可能性がある。遺物は第17号住居跡の貯蔵穴から、仏具を模倣したと考えられる須恵器塚が出土していることが特筆される。

平安時代の住居跡は重複しているものが非常に多く、この時期の確実な住居跡は第4・5・6・8・12・13・14・15・16・18・21・26号住居跡である。第4号住居跡は、奈良時代終末から平安時代の初頭にかけての所産と思われ、東竈を持つ。他の住居跡は殆どが糸切り離し後底部未調整の坏が出土しているため、9世紀後半以降の所産と判断され、浅い皿等も出土していることから10世紀代にかけての住居跡が存在するものと判断される。第5・13・15号住居跡は床面及び覆土中に、小鍛冶炉を持っており、これ等の住居跡に焼土塊、炭化物を大量に伴う土壇と重複するという共通点が見られることから、工房跡的な性格を持つものと推測される。遺物は4軒重複の第13号住居跡覆土からほぼ完形の刀子が出土し、第5号住居跡と重複する第19号土壇からは石帯の巡方と、紡錘車が出土している。また、特筆されるのは、第5号住居跡の竈付近の壁際から、その性格は不明であるが、古墳時代初頭期の斜縁二神二獣鏡の内区破片が出土したことである。

この様に、大木前遺跡は奈良時代の後半から平安時代の後半にかけての集落遺跡で、小鍛冶関係の遺構を持つことから、工房跡的な性格が強く、もしくはそれに携わる集団の居住地としての性格が考えられる。

2. 発見された遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第8図)

C-7~8区にかけて位置する。第1次調査で、住居跡西側の壁は調査区域外となったが、第2次調査で西壁は検出できなかった。プランは東西方向に細長い住居跡と思われ、長径3.82m×短径1.76m×深さ0.41mを測る。北壁と東壁の一部が残存し、竈、壁溝、柱穴は検出されなかった。住居跡西よりの斜面部にあたる床面下に、中央部に被熱のやや弱い円形の小ピット状の痕跡を持つ部分があり、小鍛冶炉と思われる炉跡が存在する。

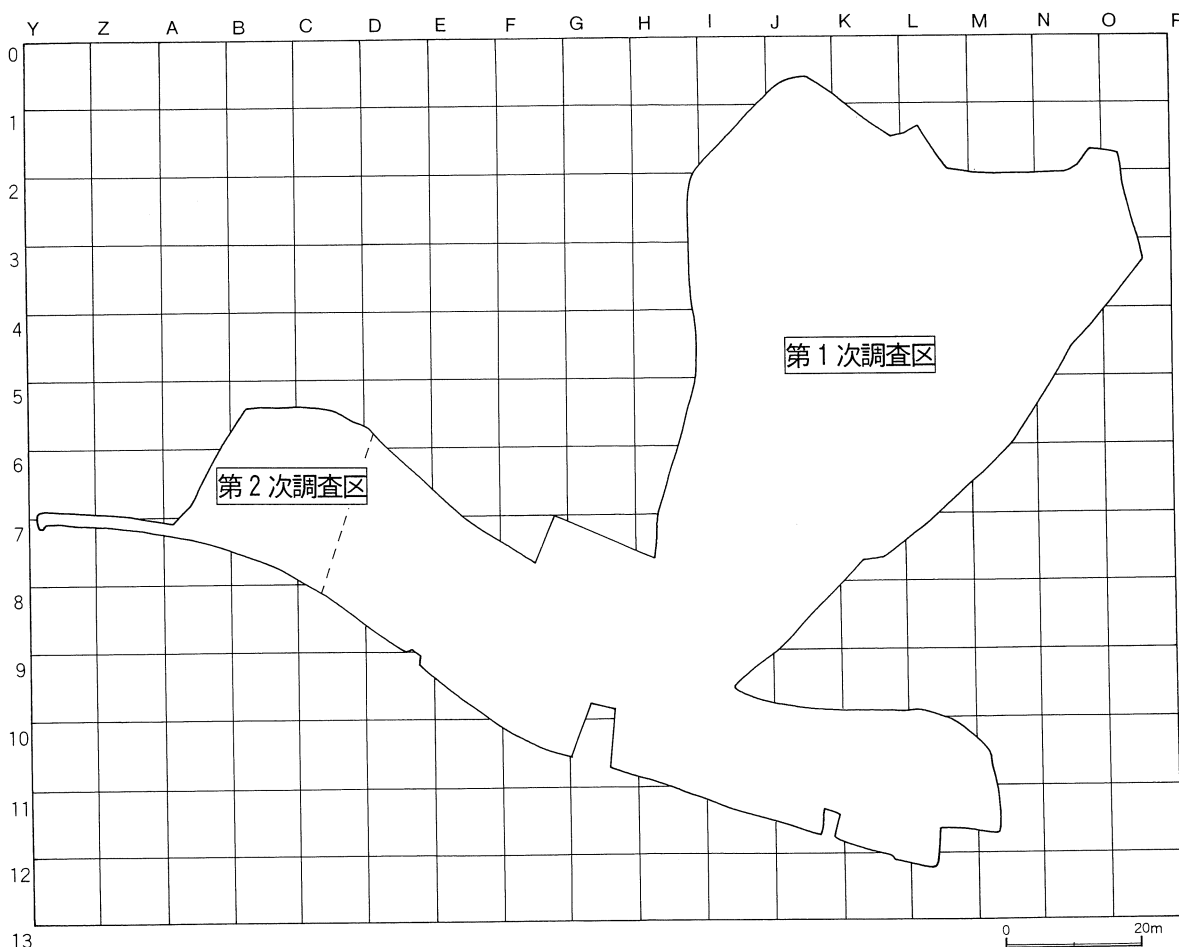
遺物は流れ込みと思われる須恵器の小破片が出土しており、大きな摘みを持つと思われる蓋や、返しを持つ蓋、甕の口縁部、胴部破片が出土している。

住居跡の所属時期は、出土遺物から8世紀の後半代と思われる。

第2号住居跡 (第9図)

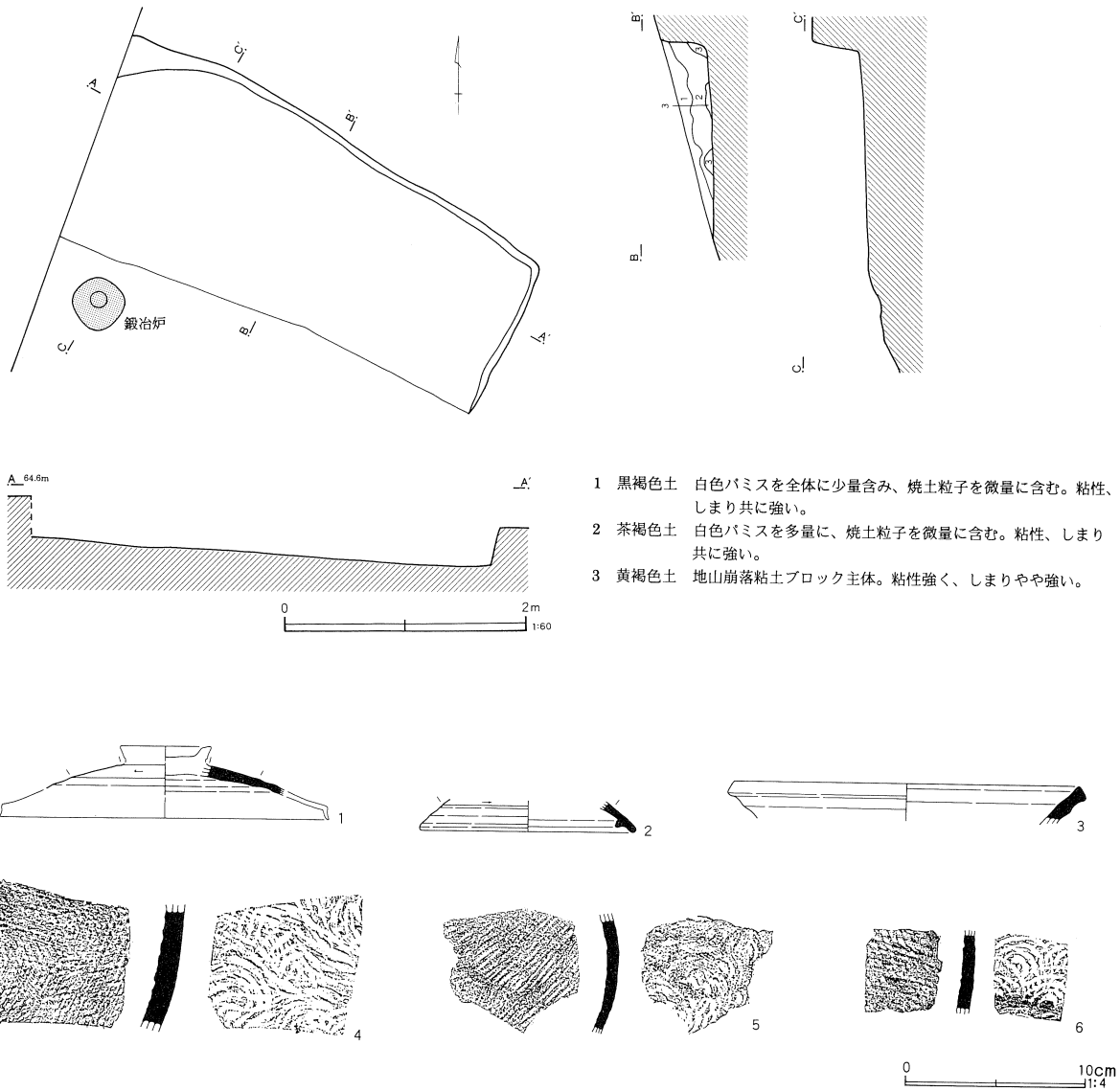
D-7区に位置する。住居跡の北側半分が現存するものと思われる。北壁際で第7号土壙、第13号土壙と重複する。これらの土壙と、住居跡の新旧関係は判然としないが、土壙が住居跡を切っている様である。プランは東西方向に細長い住居跡と思われ、長径3.76m×短径1.41m×深さ0.29mを測る。北壁と東壁の一部が残存し、北壁から東壁にかけて壁溝が存在する。竈、柱穴は検出されなかった。北壁際に2個のピットを持つ。P1は長径0.53m×短径0.35m×深さ0.29

第7図 大木前遺跡グリッド網図



第8図 第1号住居跡・出土遺物

S J 1



第1号住居跡出土遺物観察表 (第1図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋				AC 針	良好	灰	10	
2	蓋	(12.0)			A B C	良好	灰	10	
3	甕	(19.0)			A	良好	灰	10	
4	甕				A B C D	良好	黄灰	破片	
5	甕				A C	良好	暗灰	破片	
6	甕				A C	良好	黄灰	破片	

mを測る。P 2は長径0.35m×短径0.32m×深さ0.31mを測る。壁溝が比較的深い溝状を呈しており、東の壁沿いに存在することから、竈はこの延長上に存在していた可能性が高い。

遺物は流れ込みと思われる土師器、須恵器の小破片のみで、遺構の時期を決定できないが、須恵器坏の口

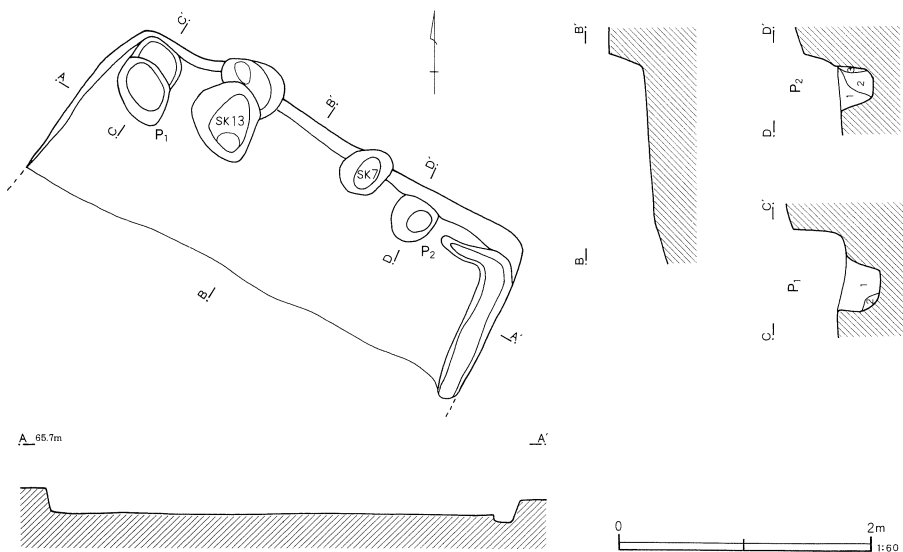
縁部破片等が流れ込んでいるため、平安時代の所産と推測される。

第3号住居跡 (第10図)

F-9~10区に位置する。第4号住居跡と重複し、第4号住居跡の方が新しい。プランは東西方向に細長

第9図 第2号住居跡

S J 2



Pit1

- 1 暗褐色土 白色粘土小ブロックを多量に含む。粘性強く、しまり中位。
- 2 暗黄褐色土 地山崩落粘土を主体とする。粘性極めて強く、しまり強い。

Pit2

- 1 暗褐色土 白色バミスを多量に含む。
- 2 茶褐色土 白色バミスを少量含む。
- 3 暗黄褐色土 地山崩落粘土を主体とする。

い住居跡と思われるが、住居跡の大半が斜面部分と重複によって失われている。長径3.53m×短径1.82m×深さ0.29mを測る。

時期を決定できる遺物は出土していないが、新しい方の第4号住居跡が平安時代の初頭期であることから、本住居跡は奈良時代の所産になる可能性がある。

第4号住居跡 (第10図、第11図)

F-9~10区にまたがって位置する。第3号住居跡と重複関係にあるが、本住居跡の方が新しい。斜面地の流出により、住居跡南側の壁を損失するが、プランは東西方向に細長い長方形を呈するものと思われ、東壁に竈を持つ。長径3.06m×短径2.24m×深さ0.53mを測る。

壁溝は北と西の壁際に認められ、東壁には存在しない。掘り込みは比較的しっかりしており、深いところで10cm弱を測る。柱穴は確認されない。

竈は東壁の中央部よりやや南壁に寄って構築されているものと思われ、やはり南側が流出している。煙道から焚き口までの長さが1.94m程で、比較的長い煙道を持つが、煙道は緩く立ち上がる。袖は作り付けて、

殆ど残存していない。煙道北側部分の天井が、一部残存していた。

遺物は住居跡床面付近の覆土から多く出土しており、大半が須恵器の破片であった。須恵器坏は底部糸切り離した後、低部周辺にヘラ調整を行うものが出土している。他に、長頸壺、甕の口縁部胴部破片が出土している。土師器の台付甕の脚部が1点出土しているが、径が大きく、この時期のものかどうか断定できない。

住居跡の所属時期は、出土須恵器から9世紀の第1四半期頃と推定される。

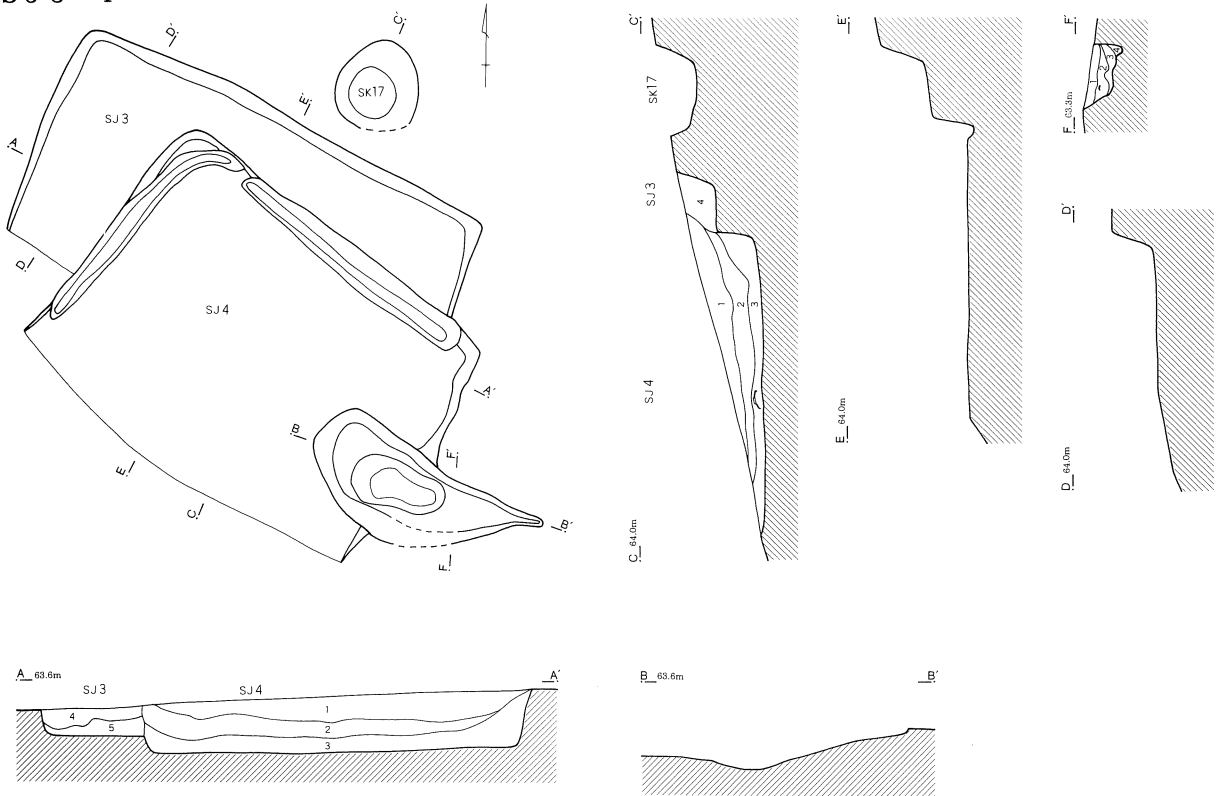
第5号住居跡 (第12図~第14図)

H-10区に位置する。第6号住居跡と重複関係にあるが、第6号住居跡の方が新しい。また、住居跡内で第18・19・20・21・33・48号土壌が重複するが、いずれも本住居跡の方が古い。斜面地の流出と第6号住居跡、各土壌との重複により、住居跡南側の約半分を欠損するが、プランは東西方向に細長い長方形を呈するものと思われ、北壁に竈を持つ。長径6.47m、短径2.53mが現存し、壁からの深さが0.41mを測る。

壁溝は竈より西側の北壁と西壁際に認められ、竈よ

第10図 第3・4号住居跡

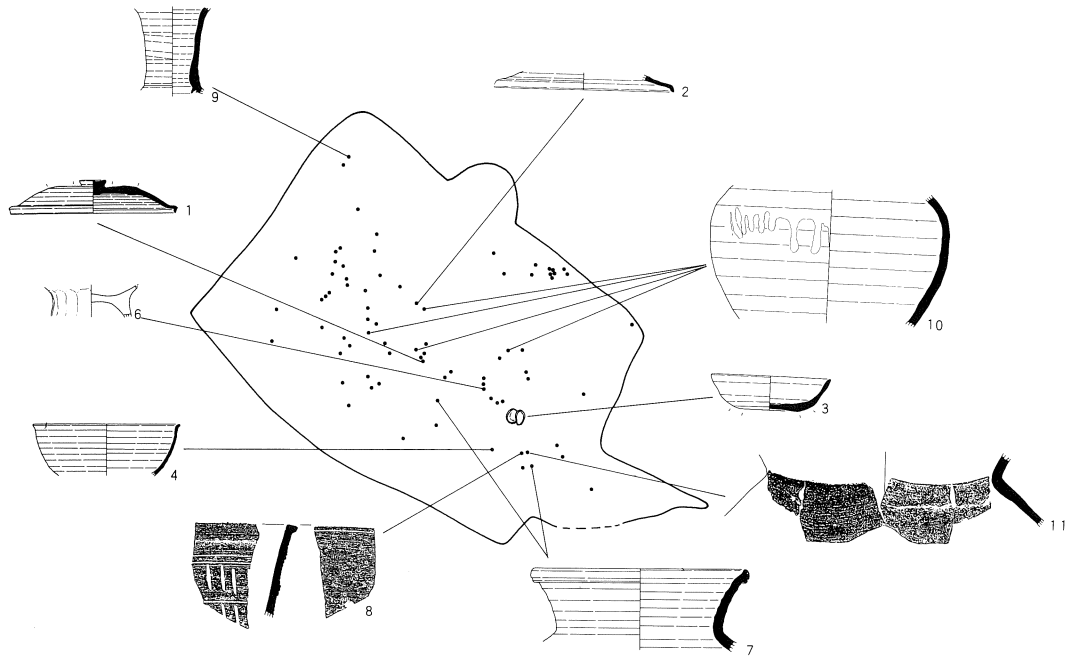
SJ3・4



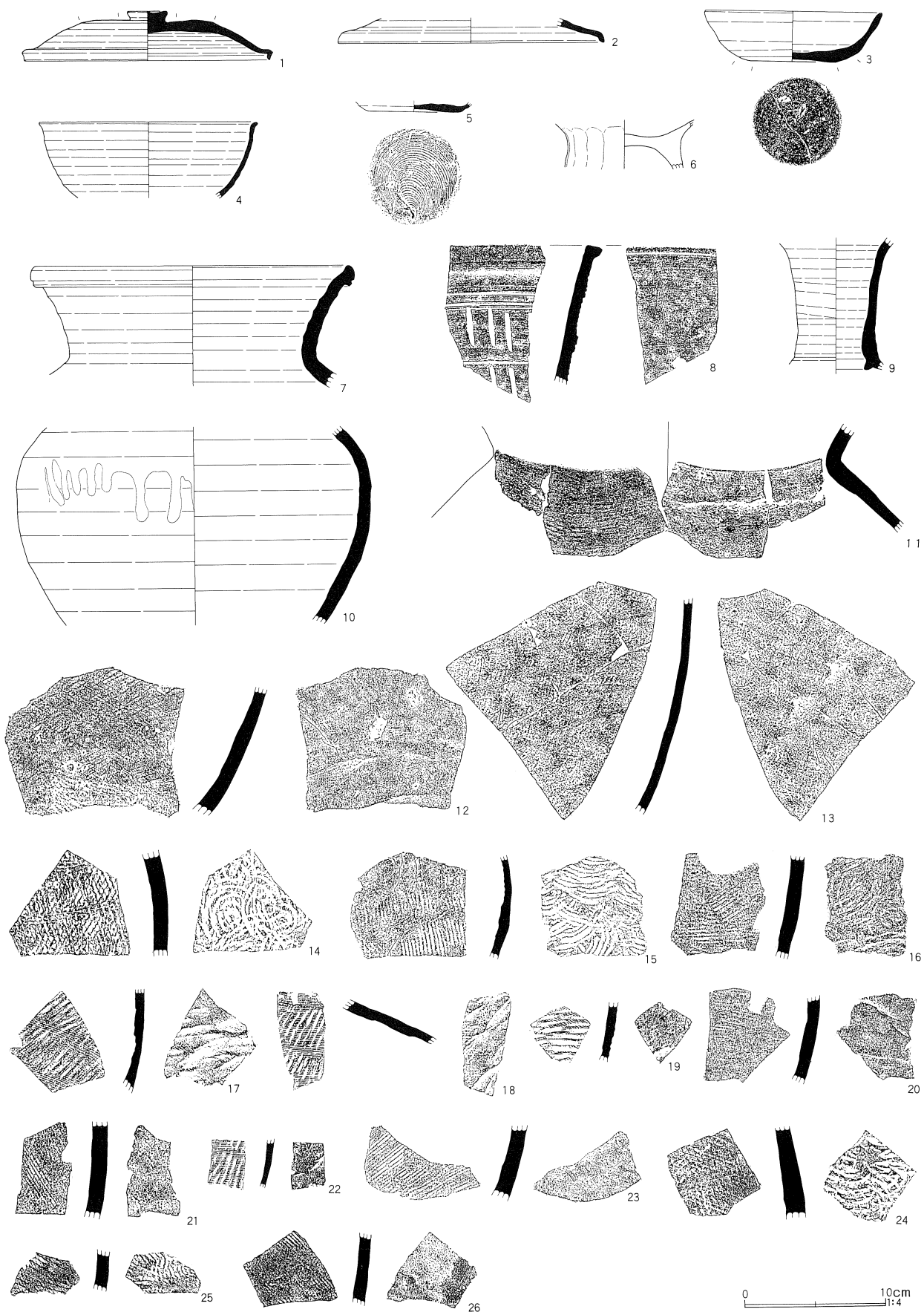
- 1 暗褐色土 白色バミス、焼土粒子、炭化物を少量含む。
- 2 黒褐色土 白色バミスをやや多く含み、焼土粒子、炭化物を多量に含む。
- 3 暗茶褐色土 白色バミス、焼土粒子、炭化物を多量に含む。
- 4 暗褐色土 白色バミスを多量に含む。
- 5 灰褐色土 地山のブロック、白色バミスを多量に含む。

カマド

- 1 暗褐色土 焼土粒子と白色バミスを少量含む。
- 2 暗茶褐色土 焼土ブロックと地山粘土ブロック及び白色バミスが多量に、炭化物を少量含む。
- 3 茶褐色土 地山粘土ブロックを多量に、焼土粒子を微量に含む。
- 4 暗褐色土 地山粘土粒子を少量含む。



第11図 第4号住居跡出土遺物



第4号住居跡出土遺物観察表(第11図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋	(17.6)	3.5		A片	良好	オリーブ黒	40	つまみ径2.8cm
2	蓋	(19.1)			A針	良好	灰	10	
3	坏	12.6	3.6	6.0	A F針	普通	にぶい褐	85	外面施釉
4	碗	(15.5)			A C F針	良好	オリーブ黒	25	
5	坏			6.4	A針	良好	灰	100	
6	台付甕				A B C	普通	橙	10	
7	甕	(22.2)			A	良好	暗赤褐	10	
8	甕		A	良好	黒褐	破片			
9	長頸瓶		A	良好	灰白	10			
10	甕		A	良好	灰白	15			
11	甕		A C針	良好	灰	10			
12	甕		A	良好	灰黄	破片			
13	甕		A針	良好	灰	破片			
14	甕		A	良好	灰	破片			
15	甕		A B C	良好	赤褐	破片			
16	甕		A	良好	灰褐	破片			
17	甕		A針	良好	灰白	破片			
18	甕		A C針	普通	灰白	破片			
19	甕		A B	普通	灰白	破片			
20	甕		A針	良好	灰	破片			
21	甕		A針	良好	灰	破片			
22	甕		A	普通	灰白	破片			
23	甕		A針	良好	灰	破片			
24	甕		A	良好	灰	破片			
25	甕		C	普通	灰白	破片			
26	甕		A	良好	灰	破片			

り東側には存在しない。掘り込みは比較的しっかりしており、深いところで10cm前後を測る。柱穴は第6号住居跡と重複しているため明確にし得ないが、合計14本確認され、P2、P3、P5、P6が第5号住居跡の柱穴になる可能性が高い。ピットの深さはP1=0.13m、P2=0.56m、P3=0.49m、P4=0.48m、P5=0.57m、P6=0.58m、P7=0.61m、P8=0.28m、P9=0.1m、P10=0.07m、P11=0.27m、P12=0.13m、P13=0.27m、P14=0.12mである。

竈は北壁の中央部よりやや東壁に寄って構築されており、両袖部が一部現存する。煙道から焚き口までの長さが1.51m程で、やや長い煙道を持つが、煙道は良く被熱されており、緩く立ち上がる。焚き口の西側袖部分に板状の石が使用されていた。また、焚き口の中から甕の破片が出土したが、被熱が強く取り上げ時に細片になってしまった。

竈の東側で、住居跡のコーナー付近に長方形の貯蔵

穴が存在する。長径0.71m短径0.49m深さ0.18mを測り、中から須恵器坏の破片が出土している。

遺物は本住居跡とは年代が合わないが、古墳時代初頭期の鏡が、竈近くの北壁付近から出土した。詳しく遺物について観察する(第12図1)。

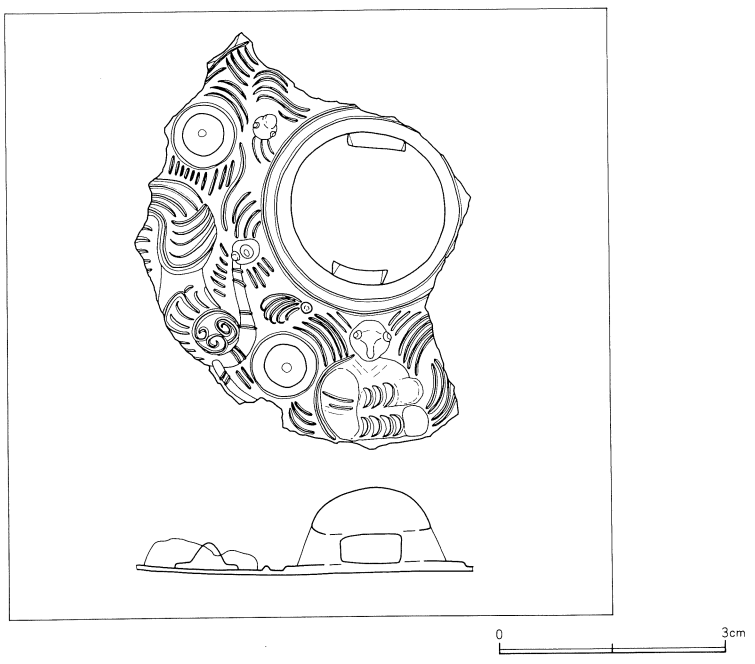
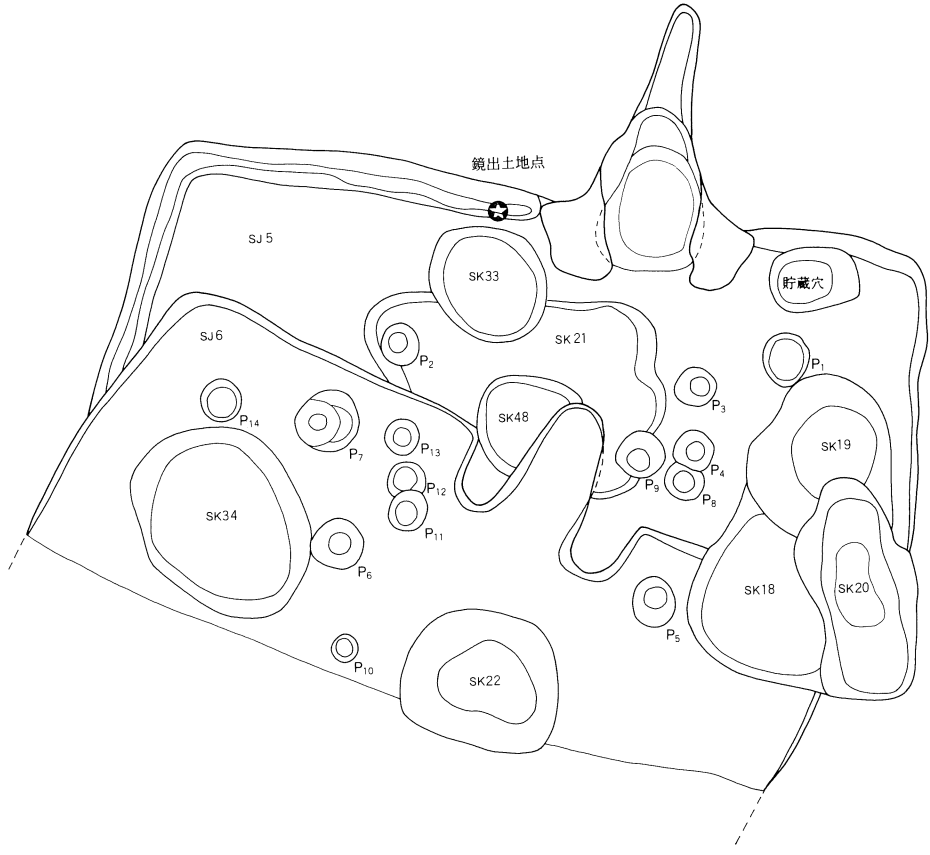
出土状況 第5号住居跡は竪穴の北側(斜面上方側)に竈を設置しており、竈に向かって左手約1mの壁面付近の床面からやや浮いた状態で鏡片が出土した。

遺存状況 鏡片は鈕とその周囲部分の破片で、神像と侍仙、獣像がそれぞれ一つずつ認められる。銅質は精良で鑄上がりも良く、文様の表出は比較的鮮明である。鏡面は青銅色、鏡背面は赤銅色を呈する。周縁部は細かく打ち割られており、破断面の一部には研磨痕が観察される。鏡面は錆が付着しているが、器面は鈍い光沢をとどめ、擦痕がみられる。

法量・重量 内区の厚さは図像のない部分で約0.5mmと全体に薄いつくりである。重量は現状で28.45gを測る。

第12図 第5・6号住居跡全体図・鏡実測図

SJ5・SJ6



文様構成 円座鈕の周りに円圏を1条めぐらす。内区は円座の4乳で区画され、その間に主文様を置くものと推定される。内区主文部は神像と侍仙、獣像の一部が認められることから、二神二獣が鋳出されていたものと想定される。銘帯及び外区文様については不明である。

鈕 鈕は径2.0cmで、鏡面からの高さ1.1cmの断面半球形で、やや腰高である。鈕孔は幅約8mm、高さ4mmほどの不整長方形で、鈕孔底部は鈕の基部とほぼ同じ位置である。鈕は底径2.4cmの低く広い円座の上のり、その外側に幅1mmほどの無文部をおいて円圏が1条めぐらされている。

乳 2つの乳を遺存しているが、本来は4乳により4区画されていたものと思われる。底径5.5mm、鏡面からの高さ4mmを測り、断面三角錐形を呈する。乳座は底径8.5mmの低い円座である。

内区主文部 神像は両側に雲気の張り出した神座に座した坐像表現で、三日月形の隆帯により衣の襷や膝の上に拱手する手を表わしている。衣は横線を数本表現しているほか、やや不明瞭であるが短線によってV字形の衿を表現する。両肩からは6～7本の外向きの弧線により翼が表現されている。また右肩の翼の先端に接して房状の雲気が表現される。顔は丸い頭部に点状の眼球と鼻梁線を表現するだけで、冠などの表現はみられない。

図示した左上の侍仙は立像か、あるいは横向きの膝をついた人物を表現したものと考えられる。首を横に傾げ、短線によって衣の袂や襷を表し、腕を上に掲げる姿勢を表現している。顔は丸い頭部に点状の眼球と丸く大きな鼻を表現する簡略化された表現で、頭上には3条の弧線が線彫されている。

獣像は右向きの走獣を半肉彫する。頸は細長く鳥首状に表し、頭部は鳥頭表現に近い横顔を表している。楕円形の頭部に点状の眼球を表現し、4条の短線で嘴と髯を表現する。また頭部後方に4条の弧線と太く長くのびた角を表していることから龍を表現したものと考えられる。頸部は大きく後方に反り返り、2節1単

位の有節表現をもち、6条の短線で鬣を表現する。肩部には半球に三巴が浮彫式に表現され、羽翼が線彫される。前足は頸部と同じく有節表現をもつようであるが、詳細は不明である。胸部は無文で細長く、尻部に縦線と弧線によって獣毛が線彫表現されている。これは後足を簡略的に表現したものであろう。

このほかに内区の充填文として獣像の尻部と乳の間に獣毛を表現したと考えられる10条の平行直線文が線彫されている。また獣像の腹部下側には5条の弧線がみられる。

他の出土遺物は殆どが平安時代所産のもので、若干8世紀代の遺物が破片で出土しているが、「コ」字状口縁の土師器甕、台付甕の脚部、底部糸切り離し後未調整の須恵器坏、碗、皿、蓋、高台付椀等が出土している。これ等の大半の遺物が9世紀の後半、およそ第3四半期に位置付けられることから、住居跡の年代も9世紀の後半を遡らないものと思われる。

なお、住居跡内に重複する土壌は、木炭、焼土等を多く含むので、住居跡廃絶直後、もしくは覆土が埋まりきらない段階で構築されており、①住居跡が個人鍛冶関係の作業を行っていたか、②廃屋直後に鍛冶関係の作業小屋になったか、③廃絶後にごみ捨て場となった場合が想定され、住居跡のそれぞれの状態を観察すると、いずれのケースも有り得たものと思われ、本住居跡は②と③の性格が強いものと思われる。

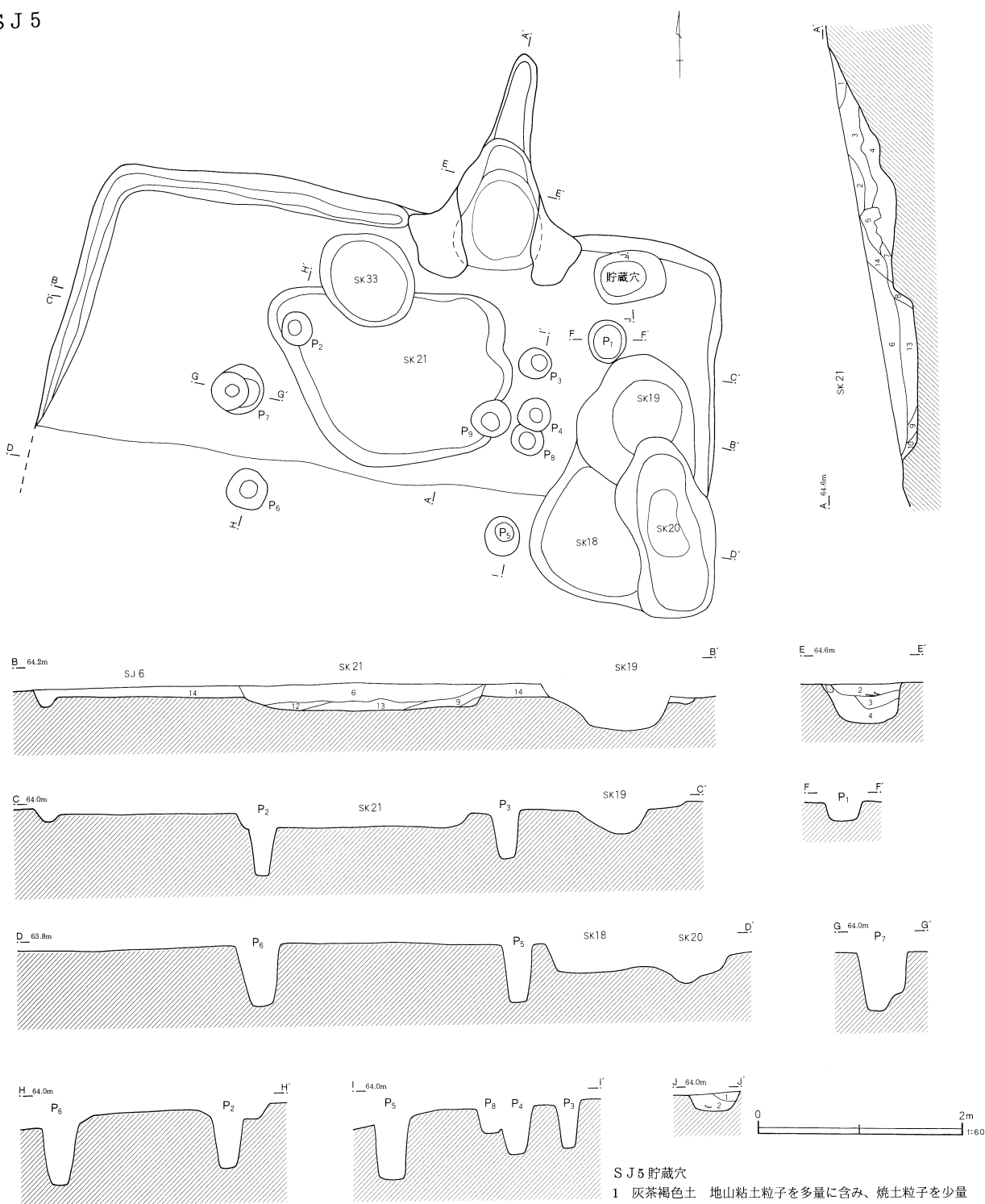
第6号住居跡 (第15図)

H-10区に位置する。第5号住居跡と重複関係にあるが、第5号住居跡の方が古い。また、住居跡内で第22・34号土壌と重複するが、いずれも本住居跡の方が古い。斜面地の流出と各土壌との重複により、住居跡南側の約半分を欠損するが、プランは東西方向に細長い長方形を呈するものと思われ、北壁に竈を持つ。主軸方向を、第5号住居跡から少し東にずらし、住居跡半分位を重複させている。長径6.12m、短径2.41mが現存し、壁からの深さが0.26mを測る。

竈は焼土による輪郭が認められた程度で、袖等は残

第13図 第5号住居跡

S J 5

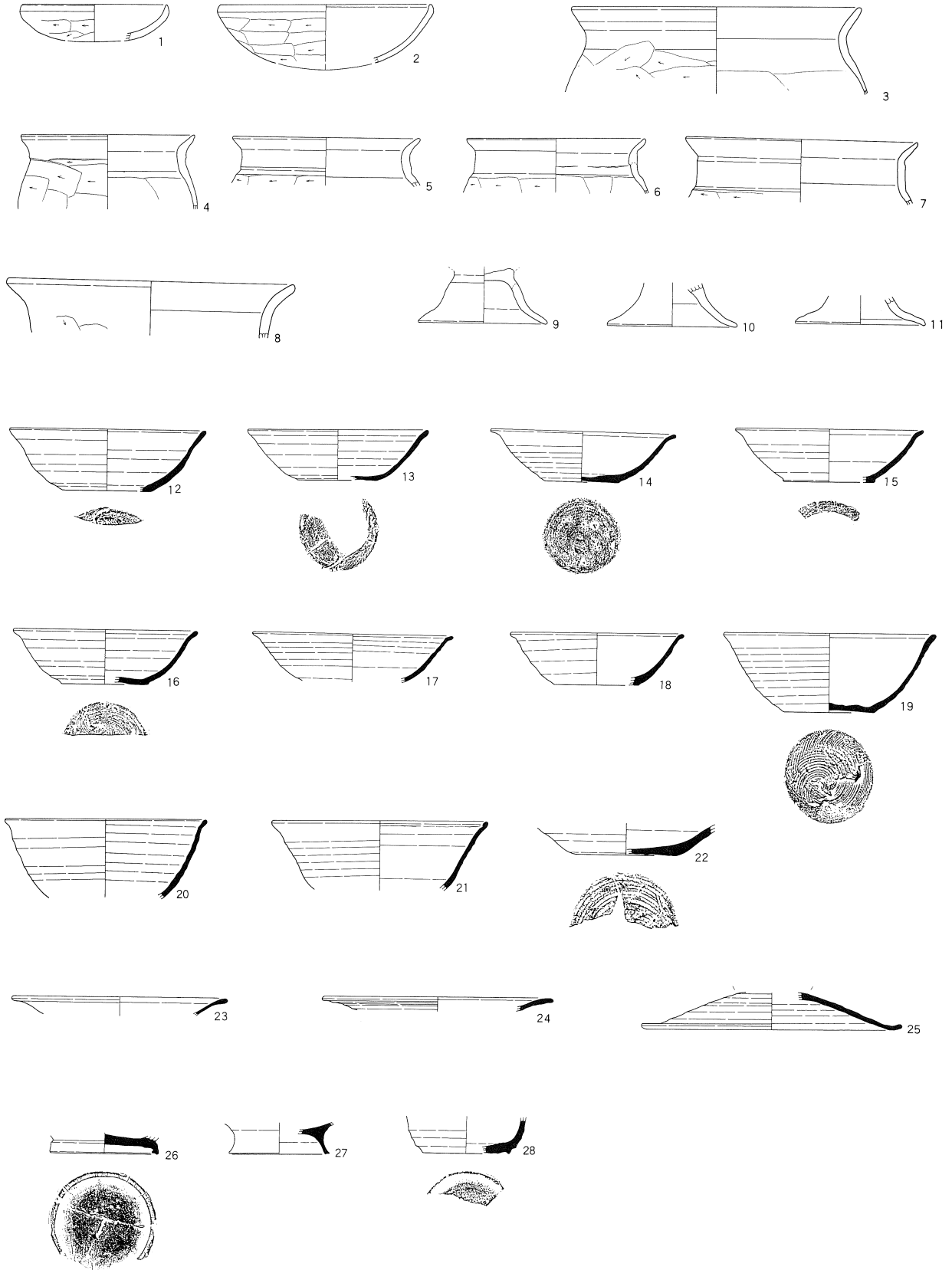


S J 5 貯蔵穴

- 1 灰茶褐色土 地山粘土粒子を多量に含み、焼土粒子を少量含む。
- 2 暗茶褐色土 焼土小ブロックと地山粘土ブロックを少量含む。
- 8 暗茶褐色土 9層に類似する。焼土と粘土ブロックを少量含む。
- 9 暗茶褐色土 焼土ブロックと炭化物を多量に、地山粘土ブロックを少量含む。
- 10 褐色土 地山粘土小ブロックを多量に含み、焼土粒子を少量含む。
- 11 黒褐色土 地山粘土粒子を少量含む。
- 12 暗灰褐色土 地山粘土粒子を多量に含み、焼土粒子を少量含む。
- 13 茶褐色土 焼土小ブロックを多量に含み、炭化物と地山粘土小ブロックを少量含む。
- 14 茶褐色土 焼土小ブロックと炭化物をやや多く含み、地山粘土粒子を少量含む。

- 1 暗褐色土 地山粘土ブロックと白色パミスを多量に、焼土粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 地山粘土粒子と白色パミスを少量含み、焼土粒子を微量に含む。
- 3 灰茶褐色土 地山粘土ブロックを大量に、焼土小ブロックを少量含む。
- 4 暗茶褐色土 焼土ブロックを大量に、地山粘土ブロックを少量含む。局部的に焼けた落盤天井を含む。
- 5 暗灰褐色土 焼けた落盤天井と、焼土ブロックを主体とし、地山粘土ブロックを少量含む。
- 6 茶褐色土 焼土ブロックと炭化物を多量に含み、局部的に大きな炭を含む。
- 7 暗茶褐色土 地山粘土ブロックを斑点状に大量に、焼土小ブロックと炭化物を多量に含む。

第14図 第5号住居跡出土遺物



0 10cm
1:4

第5号住居跡出土遺物観察表(第14図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
1	坏	(10.0)			AC	不良	にぶい黄橙	15	P2	
2	坏	(14.4)			AC	良好	橙	10		
3	甕	(20.0)			ABC F	普通	にぶい褐	40		
4	甕	(12.0)			ABC	不良	にぶい橙	15		
5	甕	(13.0)			ABC F	普通	にぶい橙	10		
6	甕	(12.4)			ABCE F	不良	橙	40		カマド 西袖
7	甕	(16.0)			ABC	普通	にぶい褐	10		
8	甕	(20.0)			AC F	普通	にぶい黄橙	10		カマド 東袖穴
9	台付甕			(9.0)	ABC F	普通	にぶい橙	40		
10	台付甕			(9.0)	ABC F	不良	橙	15		
11	台付甕			(9.0)	ABC F	不良	橙	15	カマド 西袖 貯蔵穴 貯蔵穴 貯蔵穴 壁溝 壁溝	
12	坏	(13.6)	4.2	(6.2)	C	良好	灰白	30		
13	坏	12.6	3.5	5.6	A	普通	灰	90		
14	坏	12.8	3.5	5.1	BC片	不良	黄灰	95		
15	坏	(13.0)	3.6	6.2	A	良好	灰	10		
16	坏	(12.8)	3.8	6.0	A	良好	灰	25		
17	碗	(14.0)			F	良好	灰白	15		
18	坏	(12.0)	3.6	(5.8)	A片	良好	灰	50		
19	碗	(14.8)	5.4	6.2	針	良好	灰白	30		
20	碗	(14.0)			A F	良好	灰白	10		
21	碗	(15.0)			A	良好	灰	15		
22	碗			(7.0)	AB F 針	良好	灰	45		
23	皿	(15.0)			AB	不良	黄灰	20		
24	皿	(16.0)			A	良好	暗青灰	20		
25	蓋	(18.0)			ABC 針	良好	灰	10		
26	高台付碗			7.5	A	良好	灰	80		
27	高台付碗			(7.0)	F	良好	灰白	40		
28	高台付碗			(6.0)	ABC	良好	灰	35		

存していない。壁溝、貯蔵穴等も確認されなかった。本住居跡調査中に発見されたピットはP10～P14で、本住居跡の柱穴となるものは見当たらない。

出土遺物は少ないが、底部糸切り離し後未調整の須恵器坏、台付碗等が出土しており、何れも9世紀後半代に位置付けられる。重複する第5号住居跡とは遺物における時間差は殆ど認識されないが、竈と重複する第48号土壇が、第5号住居跡廃絶後に構築され、それを第6号住居跡が切ることから、第5号住居跡と第6号住居跡の新旧関係は明らかである。非常に近接した時間内の重複関係であることが認識される。

第7号住居跡(第16図)

I-10区に位置する。第9号住居跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。また、住居跡内で第24・25・26号土壇と重複するが、いずれも本住居跡の方が古いものと思われる。北壁及び、東壁の一部が残存す

るだけで、住居跡の付属施設等は一切不明である。北壁に竈が存在しないことから、プランは東西方向に細長い長方形を呈するものと思われ、長径3.06m、短径1.29mが現存し、壁からの深さが0.12mを測る。遺物は出土しておらず、所属時期等は不明である。

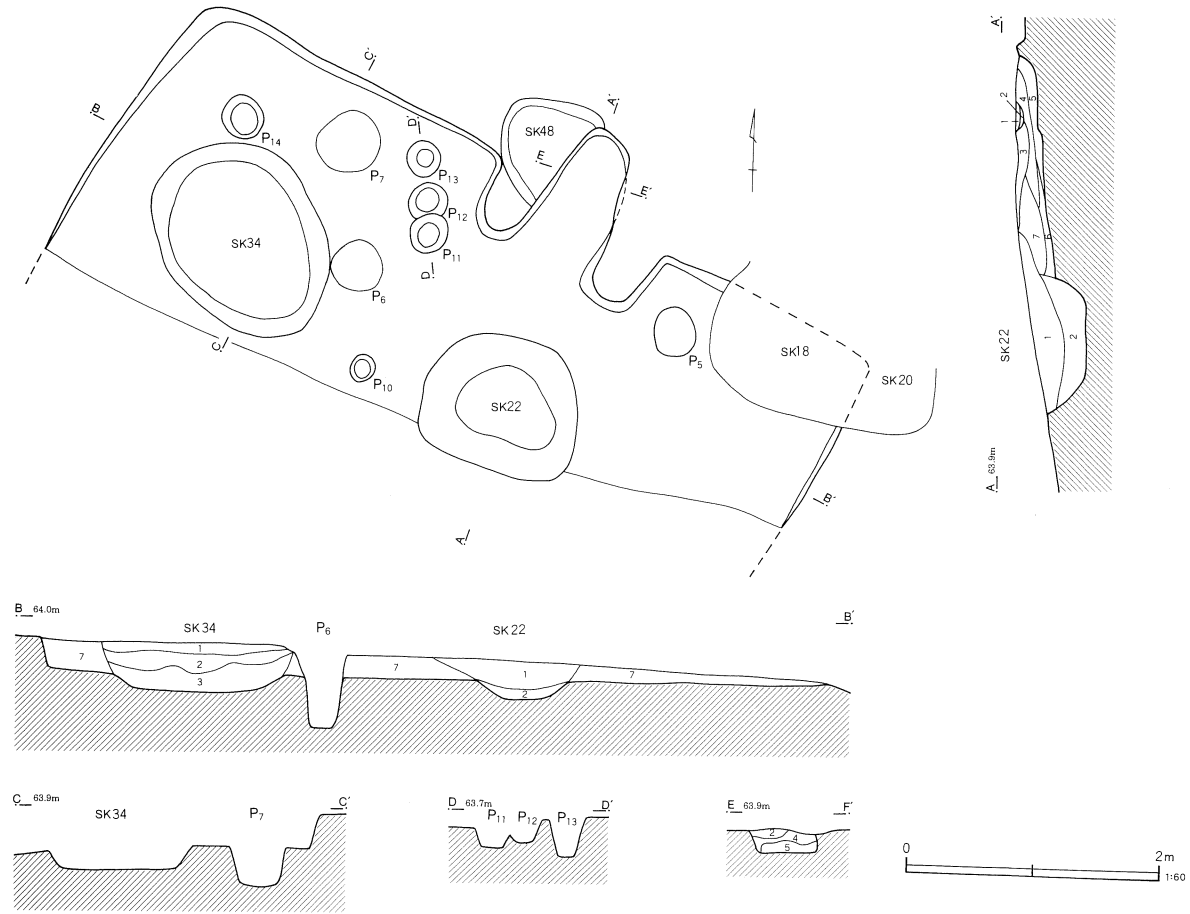
第8号住居跡(第16図)

I～J-11区の調査区際にまたがって位置する。第10号住居跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。また、第1号溝と重複するが、本住居跡の方が古い。北壁及び、東西壁の一部が残存するだけで、北壁に竈が存在しないことから、プランは東西方向に細長い長方形を呈するものと思われ、長径4.12m、短径1.82mが現存し、壁からの深さが0.24mを測る。

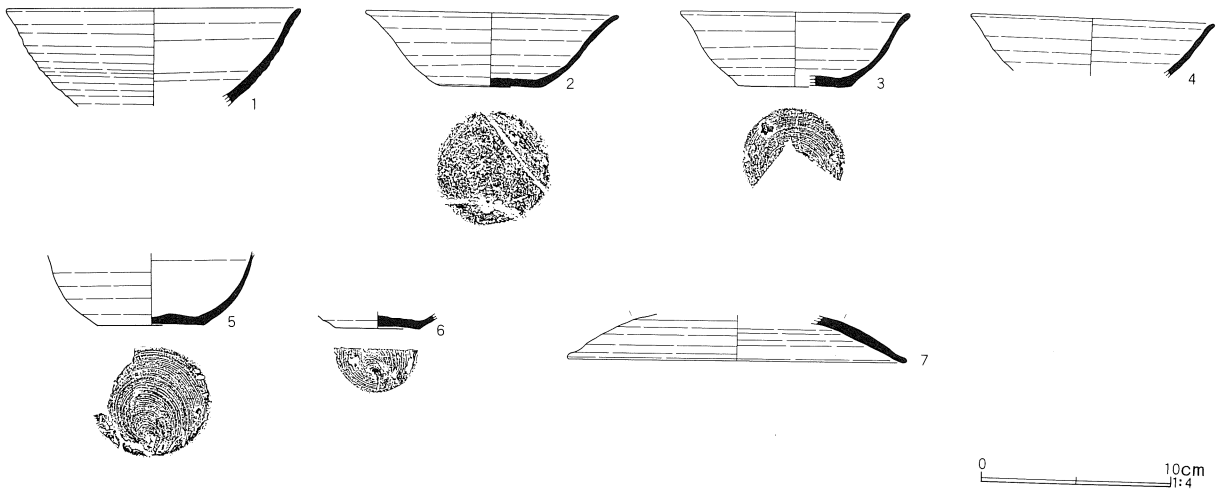
住居跡内に5個のピットが存在し、P2、P4が柱穴になる可能性がある。ピットの深さはP1=0.28m、P2=0.23m、P3=0.49m、P4=0.13m、P

第15図 第6号住居跡・出土遺物

S J 6



- | | |
|--|--|
| <p>1 焼土層 堅く焼け、しまっている。</p> <p>2 焼土層 橙色の焼土ブロックを主体とし、隙間に暗褐色が入り込む。</p> <p>3 灰褐色土 焼土ブロックを大量に含む。粘性、しまりに強い。</p> <p>4 灰茶褐色土 地山粘土ブロックを大量に含み、焼土小ブロックと白色パミスを多量に含む。粘性中位、しまり強い。</p> | <p>5 暗灰褐色土 地山粘土粒子、炭化物、焼土粒子を少量含む。粘性やや強くしまり強い。</p> <p>6 灰茶褐色土 地山粘土粒子と焼土粒子を少量含む。粘性中位、しまりやや強い。</p> <p>7 暗灰褐色土 地山粘土ブロックを大量に含む。粘性やや強く、しまり強い。</p> |
|--|--|



第6号住居跡出土遺物観察表（第15図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	碗	(15.6)			A	良好	灰	10	カマド
2	坏	(13.4)	3.9	5.8	F	不良	灰白	50	
3	坏	(12.2)	4.0	(6.0)	A針	良好	褐灰	30	
4	坏	(13.0)			A針	良好	灰	10	
5	坏			5.6	A針	良好	灰褐	40	
6	坏			4.4	A	良好	灰	50	
7	蓋	(18.0)			A針	良好	灰	10	

5 = 0.43mを測る。

遺物は流れ込みの遺物で、「コ」字状口縁の土師器甕の口縁部破片と、糸切り離し後未調整の須恵器坏底部が出土している。住居跡の所属時期は、出土遺物と同時期かそれ以前であるとすると、9世紀後半代を想定できるが、明瞭な柱穴を持つとすれば、8世紀代の可能性もある。

第9号住居跡（第17図）

I-10区に位置する。第7号住居跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。北壁及び、東西壁の一部が残存するだけで、北壁の中央部やや西寄りに竈が存在する。プランは東西方向に細長い長方形を呈するものと思われ、長径4.65m、短径1.71mが現存し、壁からの深さが0.1m前後を測る。殆ど、竈のみ現存する住居跡で、他の付属施設は不明である。また、遺物は出土していない。

第10号住居跡（第17図）

I-11区の調査区際に位置する。第8号住居跡と一部重複関係にあるが、新旧関係は不明である。また、第1号溝と重複するが、本住居跡の方が古い。北壁及び、東西壁の一部が残存するだけで、北壁に竈が存在しないことから、東竈を持ち、プランは東西方向に細長い長方形を呈するものと思われ、長径2.41m、短径0.59mが現存し、壁からの深さが0.18mを測る。遺物は流れ込みの碎片のみで、実測図の採れるものは出土していない。

第11号住居跡（第17図）

I-J-10区のまたがって位置する。第19号住居跡

と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。また、第37号土壙と重複するが、本住居跡の方が古い。竈と北壁及び、東西壁の一部が残存するだけの住居跡で、北壁ほぼ中央部に竈を持つ。プランは東西方向に細長い長方形を呈するものと思われ、長径4.41m、短径1.71mが現存し、壁からの深さは数センチ前後を測る。北東コーナー付近にピット2個が存在するが、本住居跡の柱穴ではない。ピットの深さはP1 = 0.13m、P2 = 0.1mである。時期を判別できる遺物は、殆ど出土していない。

第12・13・14・16号住居跡（第18図、第19図）

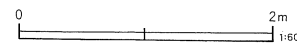
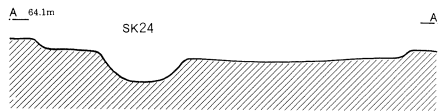
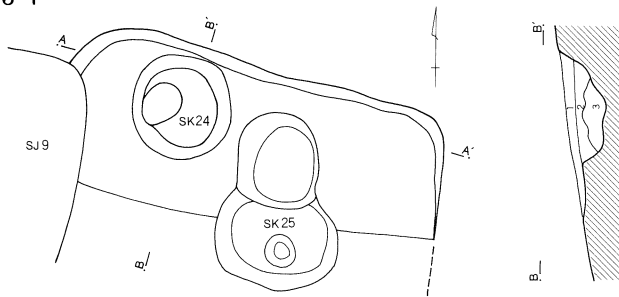
L-M-11区にまたがって位置する。4軒の重複関係にあり、第12号住居跡が最も新しく、続いて第13号住居跡、第14号住居跡の順に古くなり、一部しか残存していないが第16号住居跡が最も古い住居跡となる。また、住居跡内は多くの土壙と重複関係にあり、第23・39・41・42・43・44・45・46号土壙と、住居跡外では第47号土壙と重複する。第46号土壙は第14号住居跡より新しく、第13号住居跡より古い。また、第43号土壙は第13号住居跡より古い。他の土壙は、およそ第12号住居跡より新しいものと判断される。

第12号住居跡は北竈を持つ住居跡で、貼り床上に構築されているため、規模等は不明瞭であった。竈は北壁に構築され、煙出部付近の煙道部は天井が残っていた。

第13号住居跡と第14号住居跡は殆ど重複する関係にあり、第14号住居跡の上に貼り床をして、第13号住居跡が構築されていた。第12号住居跡の床面下に第13号住居跡の竈が存在し、東竈となる。第14号住居跡のプラン、及び竈は不明瞭である。第13号住居跡は北壁

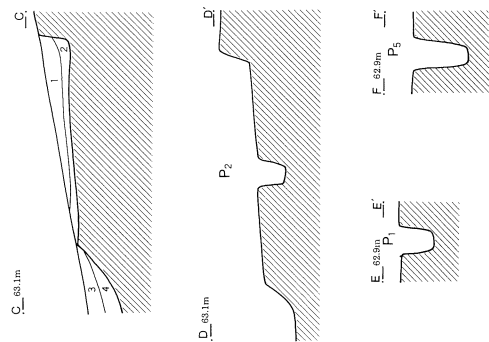
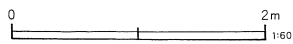
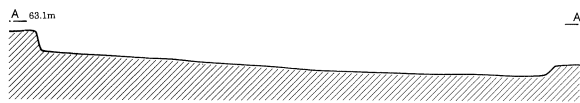
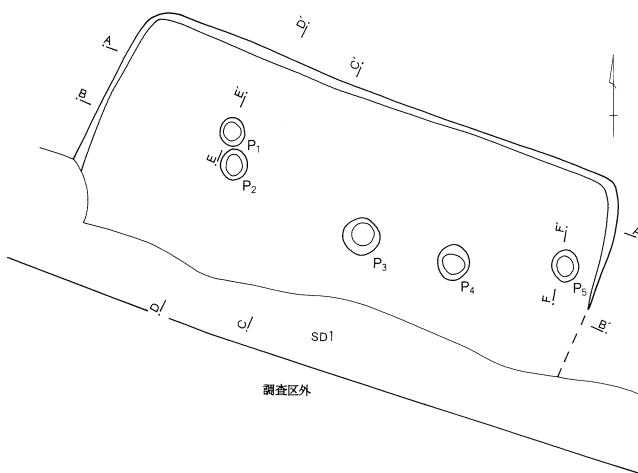
第16図 第7・8号住居跡・出土遺物

SJ7

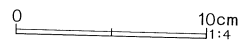
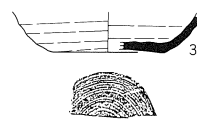
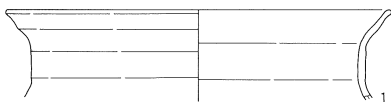
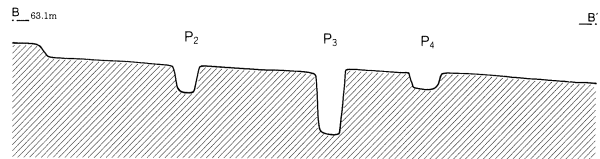


- 1 黒褐色土 白色バミスを少量含み、焼土粒子、炭化物を若干含む。
- 2 暗茶褐色土 焼土粒子を若干含む。1層より色調が明るい。
- 3 茶褐色土 地山ブロックを多量に含む。

SJ8



- 1 暗茶褐色土 白色バミスを全体的に大量に含み、焼土粒子を少量含む。粘性中位、しまり強い。
- 2 暗褐色土 白色バミスを多量に、焼土粒子を少量含む。粘性中位、しまり強い。
- 3 黒色土 焼土粒子と白色バミスを少量含む。粘性中位、しまりやや強い。
- 4 黒褐色土 焼土粒子と白色バミスを少量含む。粘性やや強く、しまり中位。

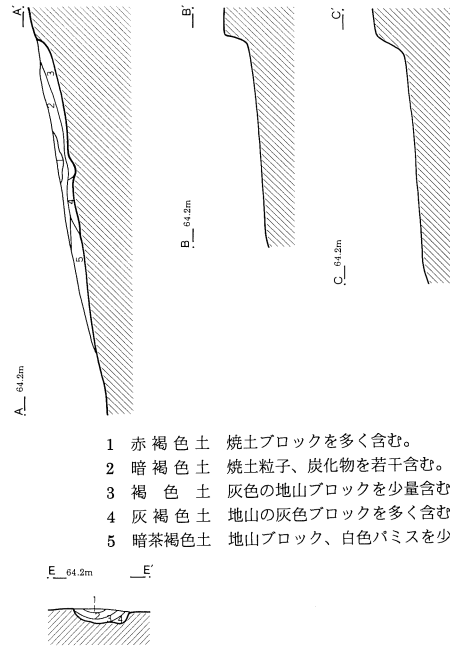
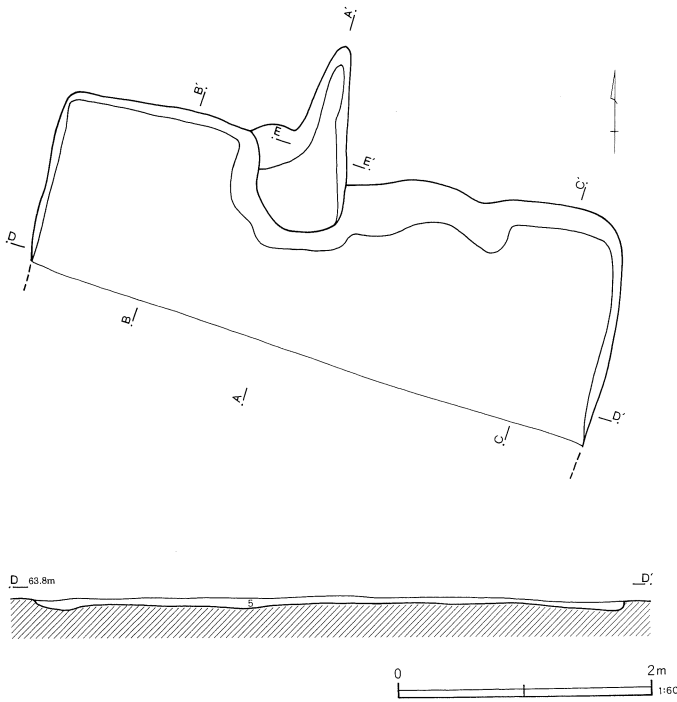


第8号住居跡出土遺物観察表 (第16図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(20.4)			A B C	普通	橙	10	
2	坏			(6.2)	A 針	良好	灰	15	
3	坏			(5.8)	A 針	良好	灰	10	

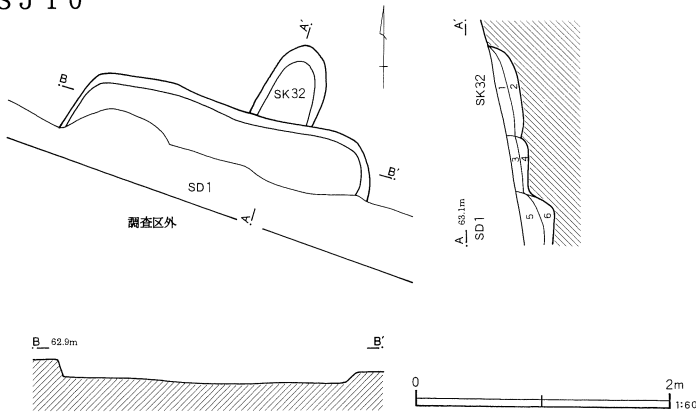
第17図 第9・10・11号住居跡

SJ 9



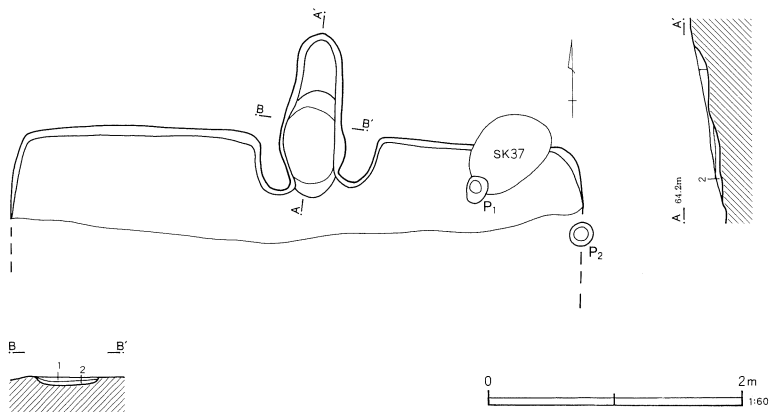
- 1 赤褐色土 焼土ブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を若干含む。
- 3 褐色土 灰色の地山ブロックを少量含む。
- 4 灰褐色土 地山の灰色ブロックを多く含む。
- 5 暗茶褐色土 地山ブロック、白色パミスを少量含む。

SJ 10



- 1 暗褐色土 白色パミスを全体的に多量に含み、焼土粒子を少量含む。
- 2 暗茶褐色土 地山粘土粒子と焼土粒子を少量含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒子をやや多く、白色パミスを少量含む。
- 4 褐色土 地山粘土粒子を少量含む。
- 5 黒色土 焼土粒子と白色パミスを少量含む。
- 6 黒褐色土 ローム質土ブロックを主体とし、焼土粒子と白色パミスを少量含む。

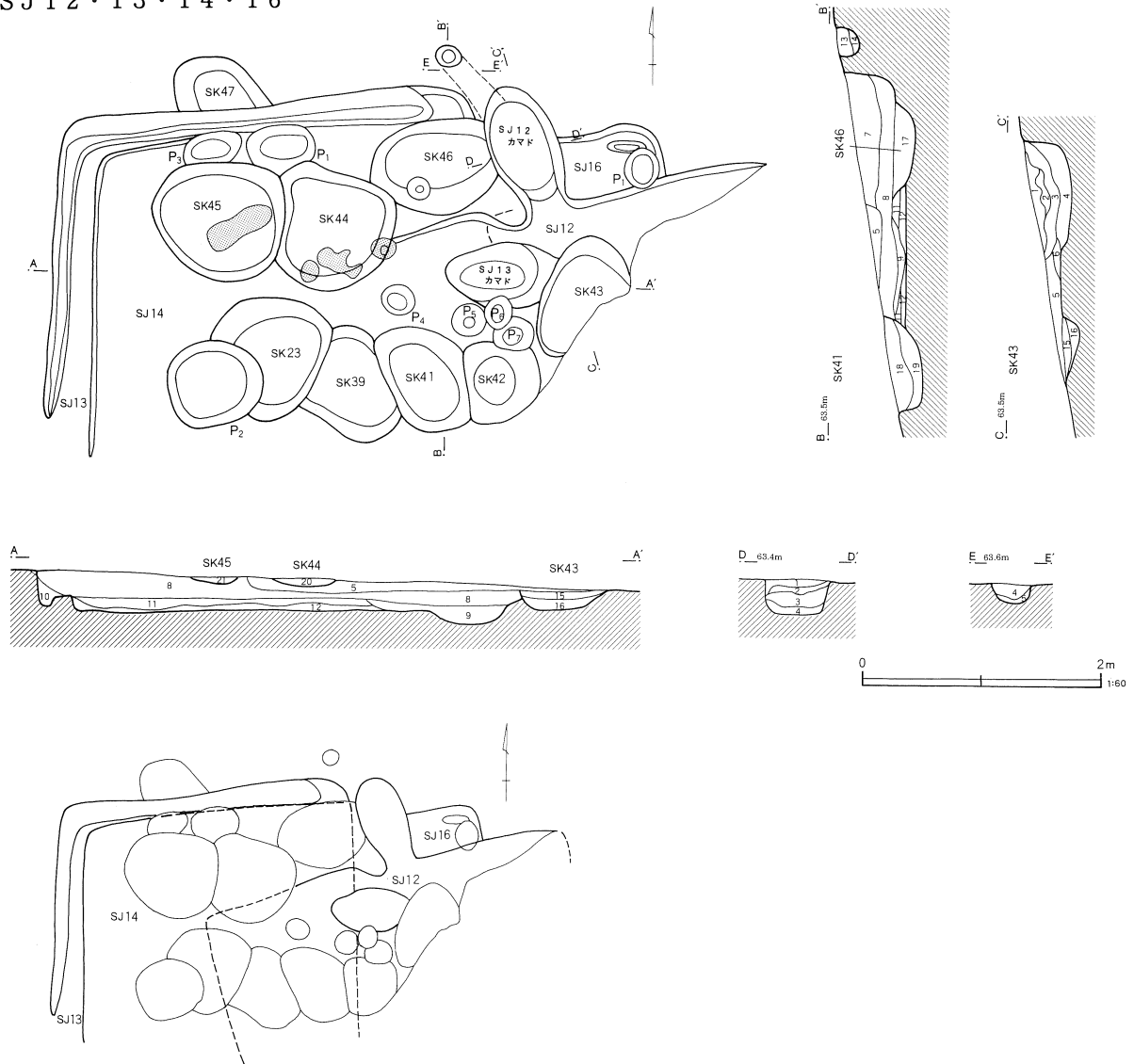
SJ 11



- 1 暗灰褐色土 焼土小ブロックと炭化物を少量含む。粘性中位、しまりやや強い。
- 2 灰黄褐色土 地山粘土ブロックを多量に含む。粘性、しまり共に中位。

第18図 第12・13・14・16号住居跡

SJ12・13・14・16



SJ12・13・14・16

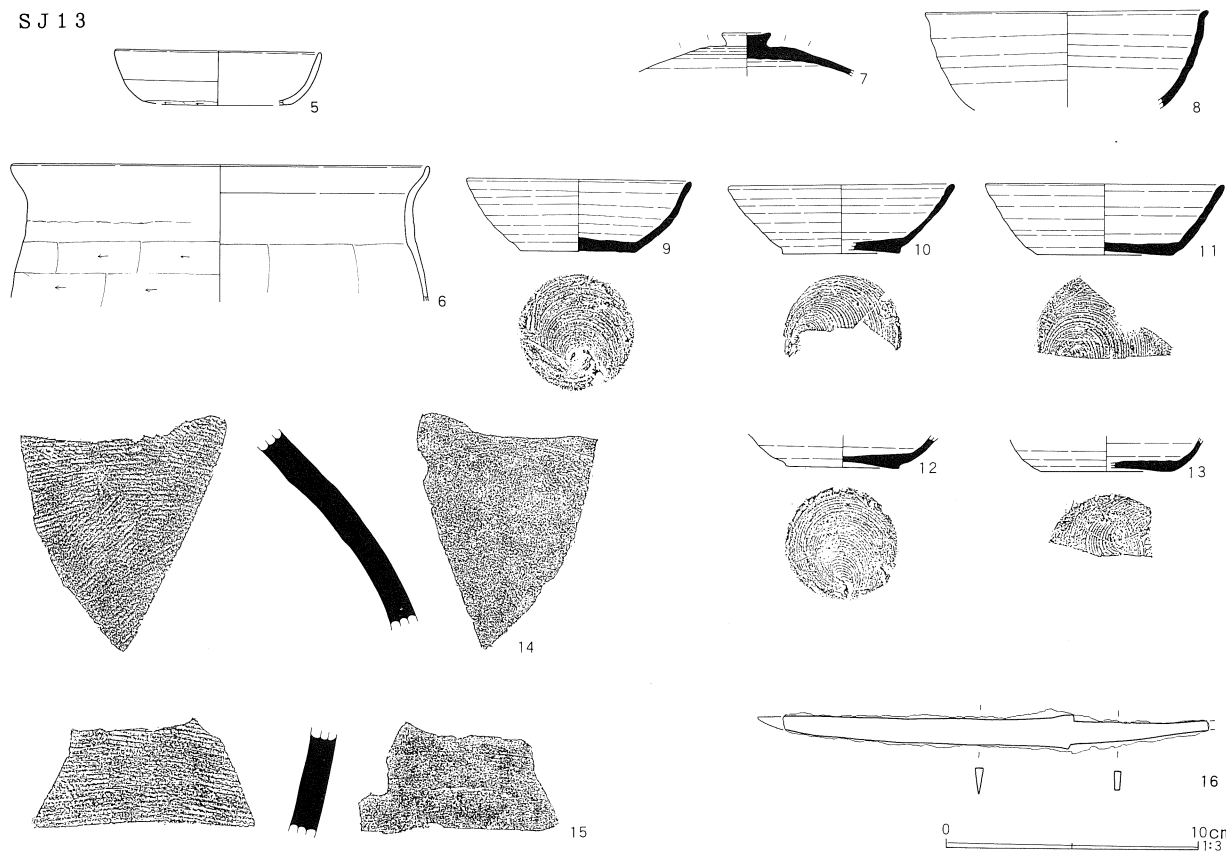
- | | |
|--|---|
| <p>1 暗灰褐色土 焼土小ブロックを多量に含み、白色パミス少量含む。粘性中位、しまり強い。</p> <p>2 焼土 橙色を呈し、良く焼けしまっている。落盤天井部。</p> <p>3 暗褐色土 焼土粒子と地山粘土粒子を少量含む。粘性やや強く、しまり中位。</p> <p>4 黒褐色土 地山粘土小ブロックを少量、焼土粒子を微量含む。粘性やや強く、しまり中位。</p> <p>5 暗褐色土 地山粘土粒子と白色パミスを少量含み、カマド付近では、焼土小ブロックを少量含む。粘性中位、しまりやや強い。</p> <p>6 黒色土 焼土小ブロックを多量に含む。粘性強く、しまり中位。</p> <p>7 暗褐色土 白色パミス、地山粘土粒子、焼土小ブロックを少量含む。粘性強く、しまり中位。</p> <p>8 暗茶褐色土 地山粘土ブロックを部分的に多量に含み、焼土粒子を少量含む。粘性強く、しまり中位。</p> <p>9 暗灰褐色土 焼土ブロックを少量含む。粘性強く、しまりやや強い。</p> <p>10 暗茶褐色土 地山ブロックを少量含む。</p> | <p>11 暗茶褐色土 焼土小ブロック、地山粘土小ブロックをやや多く含む。粘性中位、しまり強い。</p> <p>12 暗黄褐色土 地山粘土ブロックを多量に含む。粘性やや強く、しまり強い。</p> <p>13 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む。粘性中位、しまり強い。</p> <p>14 黒褐色土 灰を多量に含む。粘性強く、しまり中位。</p> <p>15 暗褐色土 白色パミスを多く含み、焼土粒子を少量含む。</p> <p>16 暗褐色土 地山のブロックを多く含み、白色パミスを多く含む。</p> <p>17 黒褐色土 地山粘土ブロックを斑点状に多量に含み、焼土ブロック、遺物を少量含む。粘性強く、しまりやや強い。</p> <p>18 暗灰褐色土 焼土ブロックと白色パミスを多量に含む。粘性中位、しまり強い。</p> <p>19 暗褐色土 焼土小ブロックを多量に含む。粘性、しまり共にやや強い。</p> <p>20 暗赤褐色土 焼土ブロックを多く含み、炭化物を少量含む。しまり強い。</p> <p>21 暗茶褐色土 焼土粒子と炭化物粒子を多く含み、白色粒子を少量含む。しまり強い。</p> |
|--|---|

第19図 第12・13・14・16号住居跡出土遺物

SJ 12



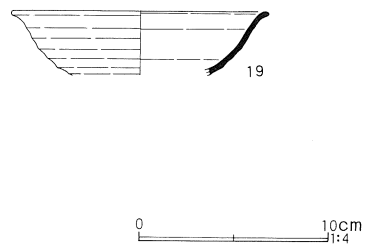
SJ 13



SJ 14



SJ 16



第12号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋	(17.0)			A針	良好	灰	10	カマド
2	坏	(13.0)			A C針	良好	灰白	10	
3	甕				A	良好	暗灰	破片	
4	甕				A D	良好	灰	破片	

第13号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
5	坏	(10.5)	2.8		B D	普通	褐	20	つまみ径2.6cm	
6	甕	(22.0)			A B C	普通	橙	20		
7	蓋				針	良好	暗灰	80		
8	碗	(15.0)			A C針	良好	黄灰	15		
9	坏	11.9	3.8	6.1	A針	良好	橙	80		
10	坏	(12.0)	3.6	(6.2)	A針	良好	褐灰	30		
11	坏	(12.6)	3.7	(7.2)	A針	良好	灰	20		
12	坏			6.0	針	普通	灰黄	20		
13	坏			(7.0)	A針	良好	灰	10		
14	甕				A針	良好	灰	破片		
15	甕				A針	良好	灰	破片		
16	刀子	現存長16.8cm 刃幅最大1.2cm 背幅0.3cm 重さ19.6g						95		切先・茎先欠失、関は両関、背関の手前で刃幅広がる

第14号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
17	坏	(13.0)			A針	良好	灰	15	孔径0.40cm cm 重(15.18)g
18	土錘	長(5.25)cm 直径1.75cm			A B C E F	普通	にぶい黄橙	90	

第16号住居跡出土遺物観察表（第19図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
19	坏	(13.6)			A針	良好	にぶい褐	10	

と西壁が存在し、壁溝が巡る。北東のコーナーには壁溝が見られず、第12号住居跡の竈にまで壁は伸びていない。東竈を持ち、東西方向に細長い長方形のプランを呈するものと思われ、長径3.47m、短径2.47mが残存し、壁からの深さは0.41mを測る。

第14号住居跡は第13号住居跡とほぼ重複し、同様のプランを呈するものと思われ、壁からの深さは0.71mを測る。

第16号住居跡は、第12号住居跡の竈の東側に床面とコーナーが残存するのみで、詳細は不明である。第14号住居跡の北西コーナーとも思えるが、床面の高さが異なる。

ピットは合計7個検出された。P1～P3は当初ピットとして調査し始めたが、範囲が広がり結果として土壇状になってしまった。ピットの深さはP1=0.21m、P2=0.44m、P3=0.16m、P4=0.18m、P5=0.28m、P6=0.28m、P7=0.21mを測る。

出土遺物は第12号住居跡から、9世紀中頃と思われ

る須恵器蓋、坏、甕の胴部破片が出土している。

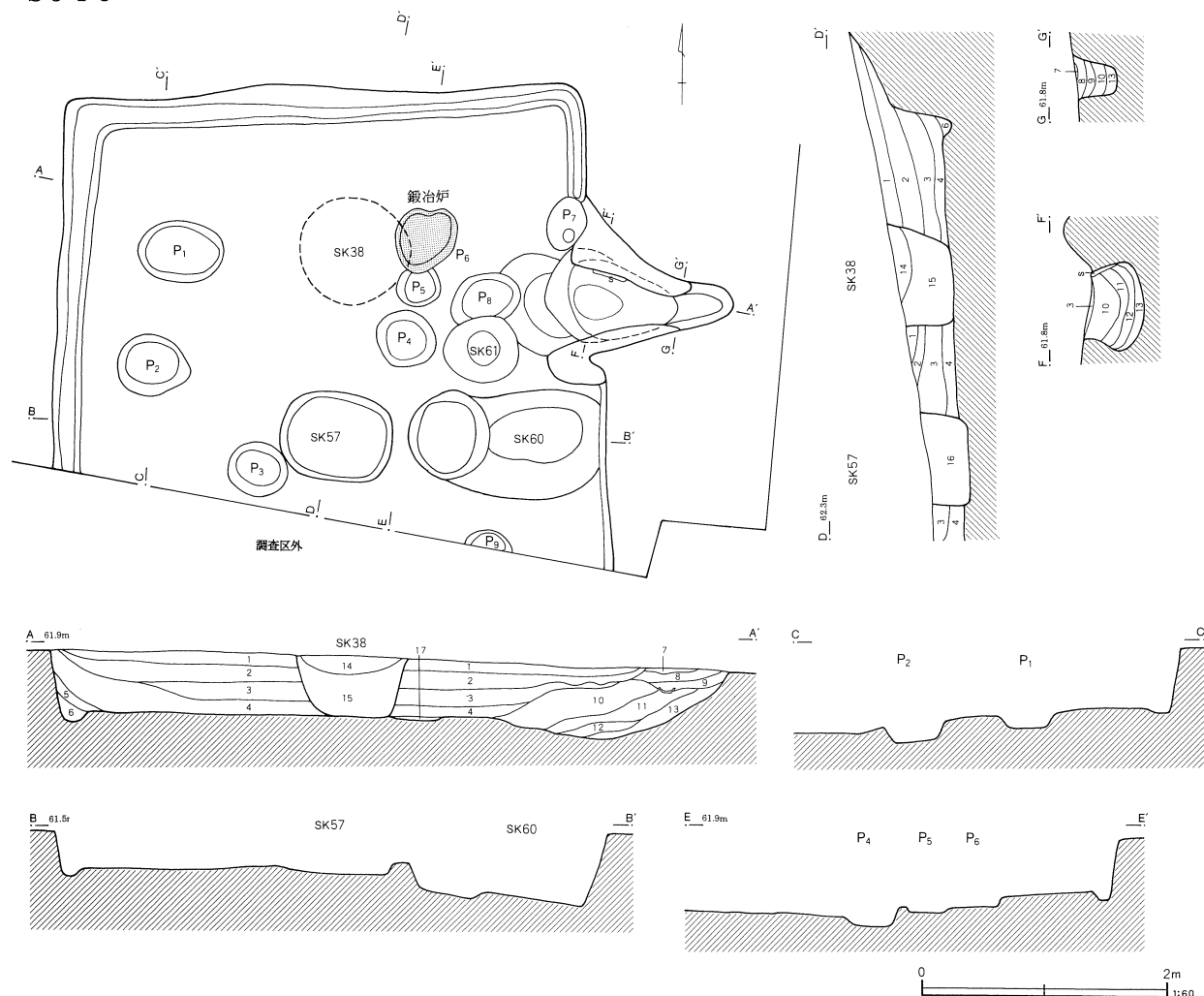
第13号住居跡は北壁寄りの覆土から、刀子がほぼ完全な形で出土した。また、土師器坏、甕の口縁部破片と、糸切り離し後未調整の須恵器坏、碗、甕の破片が出土している。須恵器坏は底径がやや大きく、9世紀前半代のものが多く、土師器坏と時間的に符号するものと思われる。

第14号住居跡からは、土玉が出土した。住居跡は重複関係から第13号住居跡より古いことが明確であるが、出土須恵器坏は時間差が看取されない。底部が存在しないため詳細は不明であるが、9世紀の後半段階になる可能性もある。小破片のため時期を決定し得ない。

第16号住居跡出土須恵器坏も、第14号住居跡と同様に流れ込みの可能性が高く、器形から9世紀第3四半期以降の所産と思われる。何れの住居跡も9世紀前半と後半の遺物を含むことから、若干の時間差を持ちつつも、短い時間内に重複したものと思われる。

第20図 第15号住居跡

SJ15



- | | |
|--|--|
| <p>1 暗褐色土 白色バミスをやや多く含み、炭化物粒子、焼土粒子を若干含む。</p> <p>2 黒褐色土 地山小ブロックを少量含み、炭化物、焼土粒子をやや多めに含む。</p> <p>3 暗茶褐色土 地山小ブロックを少量含み、炭化物、焼土粒子を少量含む。</p> <p>4 暗茶褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む。粘性の強い土。</p> <p>5 褐色土 白色バミスを多く含み、炭化物を若干含む。粘性強い。</p> <p>6 黒褐色土 壁溝内の土で、焼土粒子、炭化物を少量含む。</p> <p>7 暗赤褐色土 被熱で赤色化した土。炭化物を殆ど含まない。</p> <p>8 暗褐色土 焼土粒子を多く含み、炭化物を若干含む。</p> | <p>9 赤褐色土 良く焼けた土。炭化物を少量含む。</p> <p>10 暗褐色土 焼土粒子を多く含む。</p> <p>11 暗赤褐色土 焼土ブロック、炭化物を多く含む。</p> <p>12 暗茶褐色土 焼土粒子を多量に含む。粘性強い。</p> <p>13 茶褐色土 地山に焼土粒子をまばらに含む。</p> <p>14 黒褐色土 焼土粒子、炭化物を多めに含む。</p> <p>15 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を少量、白色バミスを多量に含む。</p> <p>16 暗茶褐色土 焼土ブロック、炭化物を多量に含み、遺物を集中的に含む。</p> <p>17 焼土層</p> |
|--|--|

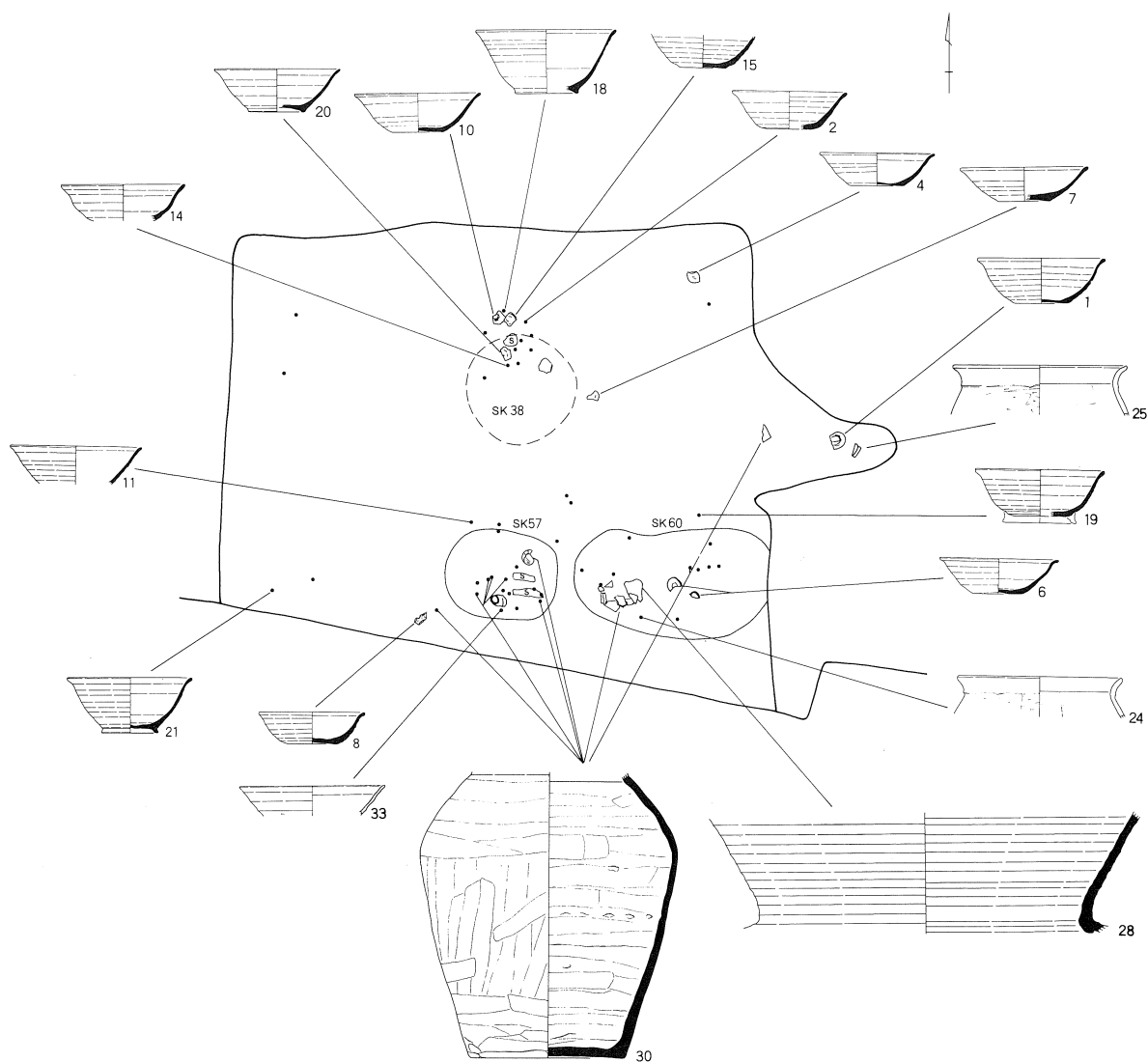
また、第23・39・41・42・44・45号土壌は、覆土に炭化物と焼土を多く含み、第44・45号土壌上面に良く焼けた焼土面をもつ。第44号土壌と第12号住居跡の北壁との重複部分には、鍛冶炉と思われる丸く焼けた焼土面が残存していた。これ等の土壌は第12号住居跡廃絶後もしくは覆土で埋まりきる前に構築されており、何度となく掘り返すことから、第5号住居跡と同様に、この住居跡も鍛冶関係の作業場所もしくは

その残滓捨て場になっていた可能性が高いものと思われる。

第15号住居跡 (第20図～第23図)

K～L-11～12区の調査区際にまたがって位置する。第38・57・60・61号土壌跡と重複関係にあるが、何れも本住居跡の方が古い。東壁の中央部より北寄りに竈を持ち、住居跡南壁が調査区外に当たる。住居跡

第21図 第15号住居跡遺物接合図



のプランはほぼ方形に近い長方形か、南北方向に細長い長方形と思われるが、南壁が存在しないため不明である。住居跡と重複する第60号土壌の一部が貯蔵穴であるとすると、東壁は掘り過ぎている可能性があり、東竈を持つ東西方向に細長い長方形を呈していたことになる。調査区際に第1号溝が存在することから、第15号住居跡南壁部分にも存在していた可能性があるが、調査時点では明瞭にし得なかった。住居跡は長径4.18m、短径3.82mが残存し、深さは壁から0.47mを測る。北壁の上部は崩落しているものと思われ、住居跡覆土内に斜面堆積層が形成されていた。

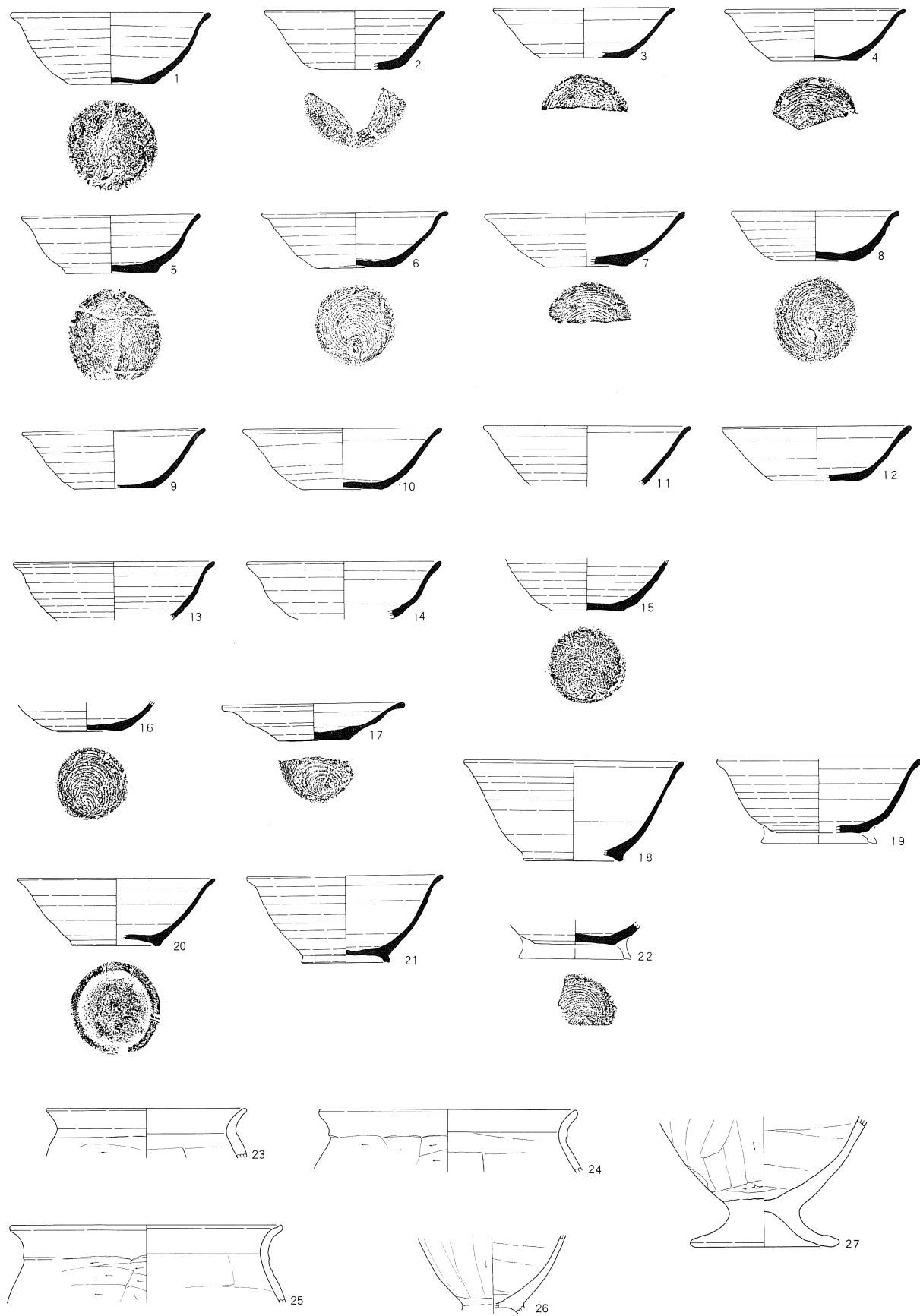
壁溝は、東壁の竈より南側を除いて全周しており、掘り込みも0.1m前後と深く、明瞭である。

竈は煙道部を比較的長く設定しており、焚き口から煙道先端部まで1.94mを測り、両袖の一部が残存していた。北側の袖内側には側壁として緑泥片岩の板石が使用されていた。また、竈先端部の煙道部分から、完形の須恵器坏が据え置かれていた様な状態で出土した。

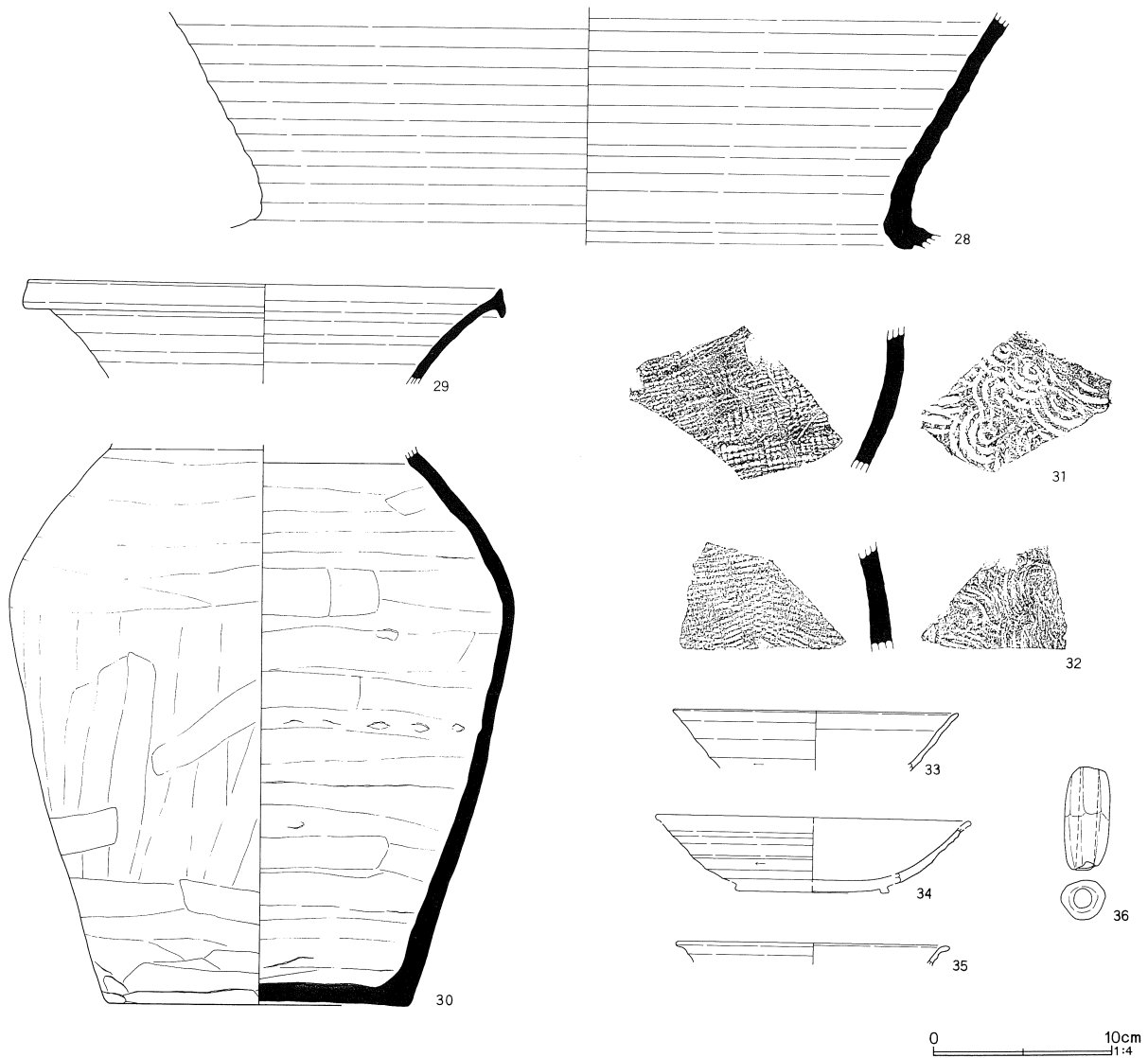
住居跡の中央部北東寄りに鍛冶炉と思われる地床炉が存在し、良く被熱していた。

柱穴は検出できなかったが、土壙状のピット9基が検出された。ピットは浅いもので、炭化物等の鍛冶関係の覆土の状態ではなかった。ピットの深さはP 1 = 0.11m、P 2 = 0.23m、P 3 = 0.24m、P 4 = 0.18m、P 5 = 0.07m、P 6 = 0.06m、P 7 = 0.18m、P 8 = 0.12m、P 9 = 0.04mを測る。

第22図 第15号住居跡出土遺物(1)



第23図 第15号住居跡出土遺物(2)



住居跡の覆土からは多量の遺物が出土しており、器形の復元される遺物の大半は、住居跡内に重複する土壇周辺から出土しており、あるいは土壇内出土遺物が、調査時点で住居跡出土遺物として処理されている可能性も高い。遺物の分布状況は第21図に示したが、第38号土壇は住居跡の覆土中に検出した土壇で、住居跡床面を底部としている。厳密に遺物を区分できないが、2、7、10、14、15、18、20は第38号土壇出土の可能性が高い。また、第57号土壇は住居跡床面に僅かに切り込んで構築されているため、床面以下の遺物については区分できたが、それより上で出土した遺物については住居跡覆土遺物と混在している可能性がある。11、30、33は第57号土壇出土の可能性が高い。須恵器

甕30は第57号土壇と第60号土壇で接合関係にあり、第60号土壇が重複状を呈することから、第60号住居跡の貯蔵穴と、土壇が重複している可能性が高くなる。であるとすれば、住居跡の説明部分で指摘したように、南壁貯蔵穴付近に存在することになる。調査では明確にし得ず、遺物にも大きな時間差を看取し得ない状況にあった。

出土遺物は、住居跡一括として扱うが、若干時間的に前後する遺物が含まれている。須恵器は焼成の良いものと、悪いものがあり、皿、高台付椀、甕が出土しており、灰釉陶器も出土している。土師器は甕と、台付甕の脚部が出土しており、口縁部形態は、「コ」字状が崩れた後の特徴を示している。

第15号住居跡出土遺物観察表（第22～23図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	14.0	4.9	5.8	F	普通	浅黄	90	竈内出土
2	坏	(12.6)	4.3	(6.0)	A	普通	灰オリーブ	30	SK38?
3	坏	(12.6)	3.4	(6.0)	A	普通	灰オリーブ	25	
4	坏	(12.6)	3.6	(6.0)	C	良好	灰白	35	
5	坏	12.5	4.0	6.5	A B C	普通	明黄褐	50	
6	坏	13.0	3.9	5.3	A片	普通	黒	100	貯蔵穴?
7	坏	(14.0)	3.7	(5.8)	C片	普通	浅黄	30	SK38?
8	坏	11.8	3.5	5.5	F片	良好	明黄褐	95	
9	坏	(12.8)	4.0	5.6	A C E	不良	にぶい橙	20	
10	坏	(13.8)	4.2	(5.4)	A	不良	明褐	40	SK38?
11	坏	(14.4)			A針	普通	灰	15	SK57?
12	坏	13.2	3.8	6.4	A	普通	灰	50	
13	坏	(14.0)			A	良好	灰	10	カマド南袖内 器形の歪み大きい
14	坏	(13.6)			A片	良好	橙	25	SK38?
15	坏			5.0	A C	不良	黄褐	35	SK38?
16	坏			4.8	A片	良好	オリーブ黒	40	
17	皿	(12.8)	2.5	5.0	A	普通	褐灰	10	
18	高台付埴	(15.4)	6.9	(7.0)	A	不良	灰黄	20	SK38?
19	高台付埴	(14.2)			A C	不良	にぶい黄橙	20	
20	高台付埴	(13.8)	4.7	6.2	A	不良	にぶい黄	50	SK38?
21	高台付埴	(13.6)	6.0	6.2	A B C E F	普通	にぶい褐	60	
22	高台付埴				A C F	普通	橙	15	内黒
23	甕	(14.0)			A B C F	普通	にぶい赤褐	10	
24	甕	(18.0)			A B C F	普通	にぶい褐	20	
25	甕	(19.0)			A B C F	普通	にぶい褐	20	竈内出土
26	台付甕				A B C F	不良	にぶい橙	30	
27	台付甕			(10.4)	A B C F	不良	にぶい赤褐	40	
28	甕				A針	良好	灰	10	
29	甕	(26.6)			A	良好	灰	10	
30	甕			(16.8)	A	良好	灰	60	SK57?
31	甕				B	良好	灰オリーブ	破片	
32	甕				A	良好	灰黄	破片	
33	埴	(16.0)			A	良好	灰白	10	灰釉陶器、SK57?
34	高台付埴				A	良好	灰白	10	灰釉陶器
35	埴	(15.4)			A	良好	灰白	10	灰釉陶器
36	土錘	長5.30cm 直径2.50cm			B C F	普通	橙	70	孔径1.00cm 重(30.47)g

第17号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付埴	14.0	7.4	9.8	A B C D F	普通	にぶい黄橙	95	貯蔵穴 銅椀模倣
2	坏	(12.0)			A B C F	不良	橙	45	貯蔵穴
3	坏	11.6	3.7		A B C E F	不良	にぶい橙	95	貯蔵穴
4	坏	(12.0)			A B C F	不良	にぶい橙	20	貯蔵穴
5	支脚		13.8	11.4	A	不良	橙	70	貯蔵穴

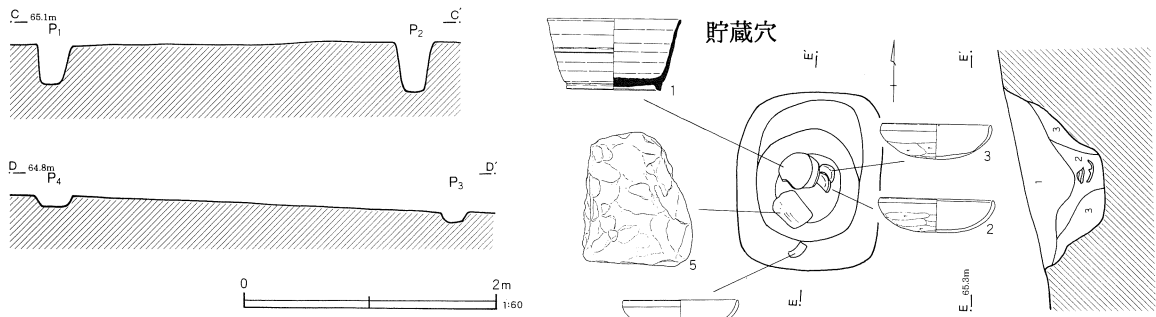
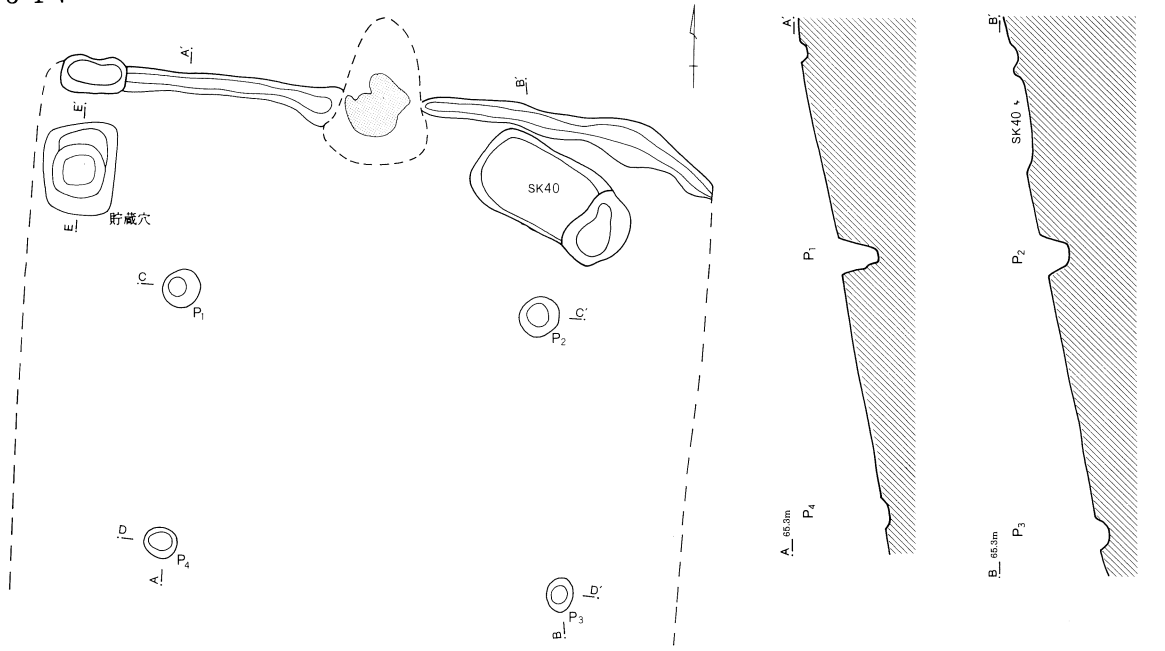
須恵器坏でも2の様に口径が小さく、やや立ち気味の器形は10世紀の初頭にまで下る可能性があり、17の皿、及び「コ」字状口縁の退化した土師器甕等を参考にすると、9世紀第4四半期から10世紀第1四半期頃にかけての遺物が混在しているものと思われる。この時間差は、住居跡の所属年代と、その後に構築された土壙との時間差を表している可能性が高いものと判断

される。

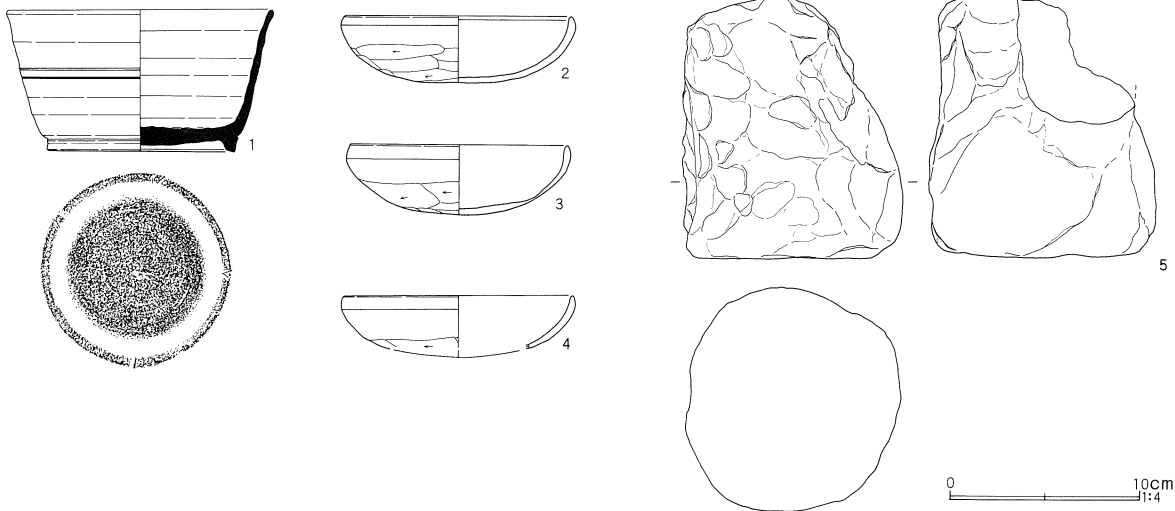
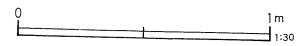
第17号住居跡（第24図）

I～J-10区にかけて位置する。住居跡北壁の壁溝と竈、貯蔵穴、柱穴が残存するだけで、住居跡の壁は現存しない。第40号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。北竈を持ち、ほぼ方形と推定されるプラン

SJ17

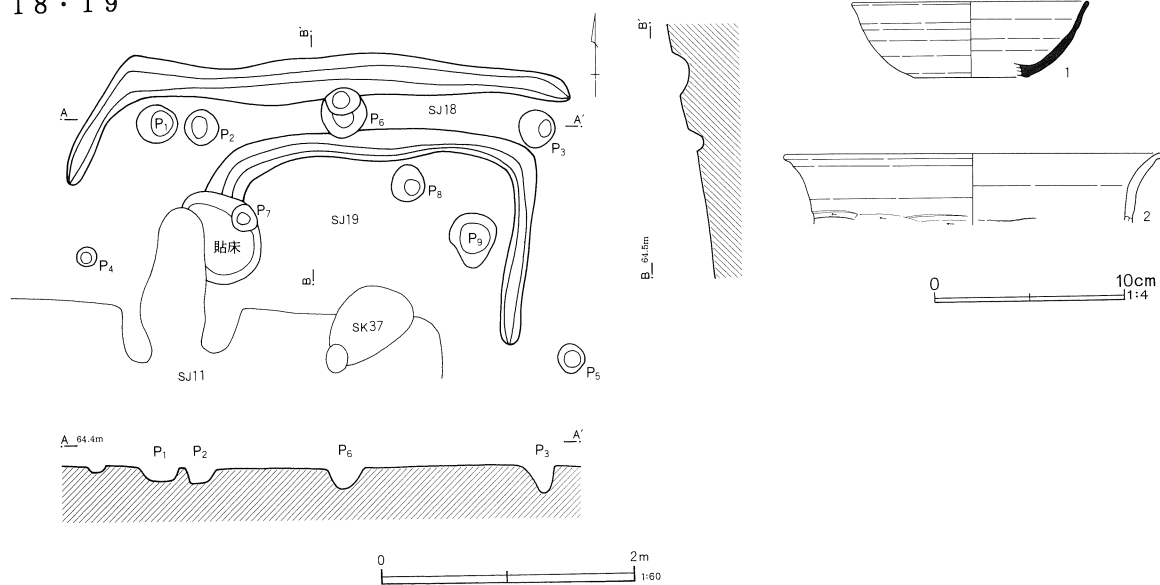


- 1 茶褐色土 地山粘土ブロックと焼土小ブロックを多量に含む。粘性中位、しまり強い。
- 2 暗茶褐色土 炭化物、焼土小ブロックを少量含む。粘性、しまり共にやや強い。
- 3 暗黄褐色土 焼土ブロックと炭化物、地山粘土ブロックを多量に含む。粘性、しまり共にやや強い。

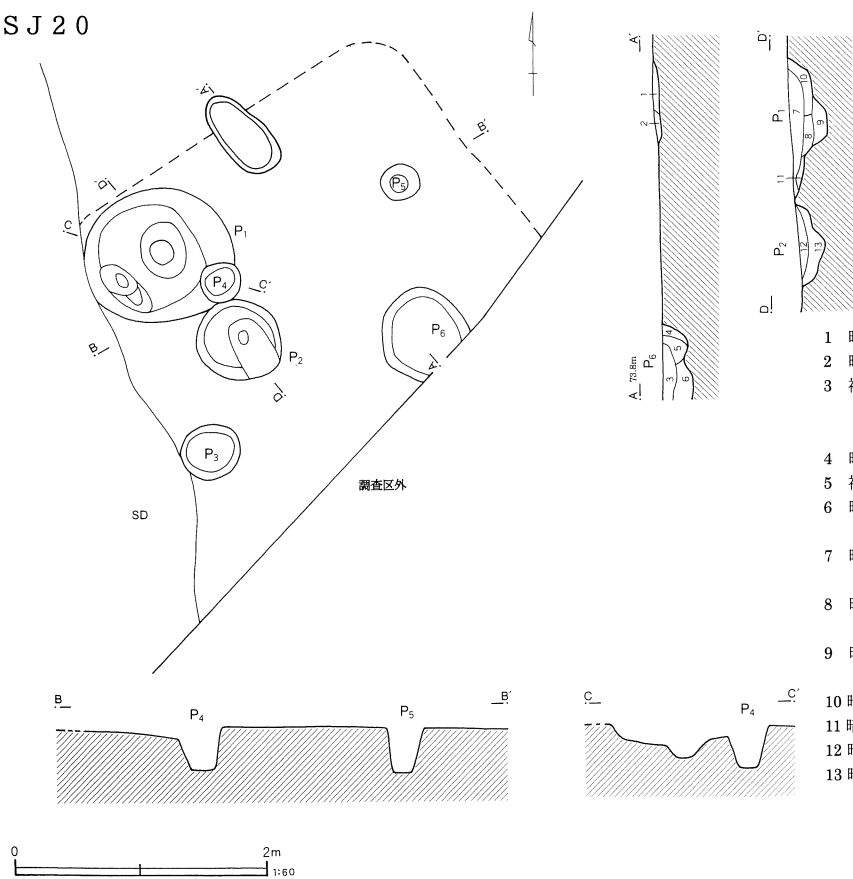


第25図 第18・19・20号住居跡・出土遺物

SJ18・19



SJ20



- 1 暗赤褐色土 焼土小ブロックを多く含む。
- 2 暗黄褐色土 3~5mm大のローム粒子を多量に含む。
- 3 褐色土 1mm大のローム粒子を多量に含む。1cm大のロームブロックを少量含む。焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。
- 4 暗黄橙色土 地山ブロックを多量に含む。
- 5 褐色土 2~3mm大の炭化物粒子を多量に含む。
- 6 暗黄褐色土 1cm大のロームブロックを多量に含む。炭化物を少量含む。
- 7 暗褐色土 1cm大の焼土ブロック、焼土粒子を多量に含む。
- 8 暗褐色土 黄白色地山粒子、焼土粒子をまばらに含む。
- 9 暗黄橙色土 焼土ブロックを少量含み、黄白色地山ブロックを多量に含む。
- 10 暗褐色土 黄白色地山ブロックを多量に含む。
- 11 暗褐色土 地山ブロックを多量に含む。
- 12 暗褐色土 焼土粒子を多量に含む。
- 13 暗黄橙色土 黄白色地山ブロック主体。

第18号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.6)	4.0	(6.0)	A針	良好	灰	15	
2	甕	(20.0)			A B C	普通	橙	10	

を持ち、規模は壁溝の長さから一辺が5.3m前後になるものと推定される。

竈は北壁ほぼ中央部に設置されており、燃烧部のみ存在する。壁溝は北壁全体に巡り、北西コーナーで一部深い部分が存在する。

柱穴は4本確認され、やや東西に細長い長方形を囲む。柱穴の底部はほぼ一定した深度を持つ。

貯蔵穴は長方形を呈し、長径0.71m×短径0.56m×深さ0.77mを測る。底部付近から土師器坏3点と、仏具を模倣した須恵器坏が1点出土した。また、土製の支脚も出土した。出土遺物は8世紀第1四半期に位置付けられることから、住居跡も同じ時期の所産と思われる。

第18・19号住居跡（第25図）

J-10区に位置する。第11号住居跡、第37号土壙と重複するが新旧関係は不明である。第18号住居跡の中に、第19号住居跡が納まる形で重複し、新旧関係は不明である。両住居跡とも一部の壁溝の存在で、住居跡と認定された。

第18号住居跡は北壁の壁溝と、西壁壁溝の一部が残存し、北壁に竈が存在しないことから、プランは東竈を持つ東西に細長い長方形で、今長径3.47m、短径1.12mのみを測る。

第19号住居跡は一回り小さく壁溝が回ることから、ほぼ方形の住居跡と思われ、竈は確認されなかった。長径2.59m、短径1.59mを測る。

ピットは両住居跡合わせて9個検出し、住居跡の柱穴となるものはない様である。ピットの深さはP1=0.12m、P2=0.15m、P3=0.08m、P4=0.1m、P5=0.19m、P6=0.21m、P7=0.09m、P8=0.17m、P9=0.26mを測る。P7は土壙上の掘り込みを持ち、貼り床されていた。第11号住居跡は、P7を切っており、第19号住居跡、P7、第11号住居跡の順で

新しくなる。

出土遺物は、第18号住居跡の壁溝より須恵器坏と、土師器甕の口縁部が出土しており、坏の底径が大きいことから、9世紀の前半代に位置付けられよう。第19号住居跡からは出土していない。

第20号住居跡（第25図）

N~O-3~4区にかけての調査区際に位置する。第6号溝と重複するが、溝の方が新しい。竈とピットのみが残存する住居跡で、北竈でピットの配置から南北方向に細長い住居跡と思われる。

竈は北壁の中央部やや東よりに存在し、燃烧部のみ残存する。柱穴はP4とP5が相当するものと思われ、深さはP4=0.34m、P5=0.33mを測る。

他のピットは土壙状を呈し、P1=長径1.14m×短径1.03m×深さ0.33m、P2=長径0.67m×短径0.64m×深さ0.23m、P3=長径0.47m×短径0.42m×深さ0.29m、P6=長径0.67m×短径0.60m×深さ0.15mを測る。

図示し得る様な遺物は出土しなかった。

第21号住居跡（第26図）

L~M-2~3区にかけて位置する。プランは東竈を持ち、南北に細長い長方形を呈する住居跡で、僅かに壁が残存する。長径4.05m、短径3.29mで、深さ0.06mを測る。壁溝は存在しない。

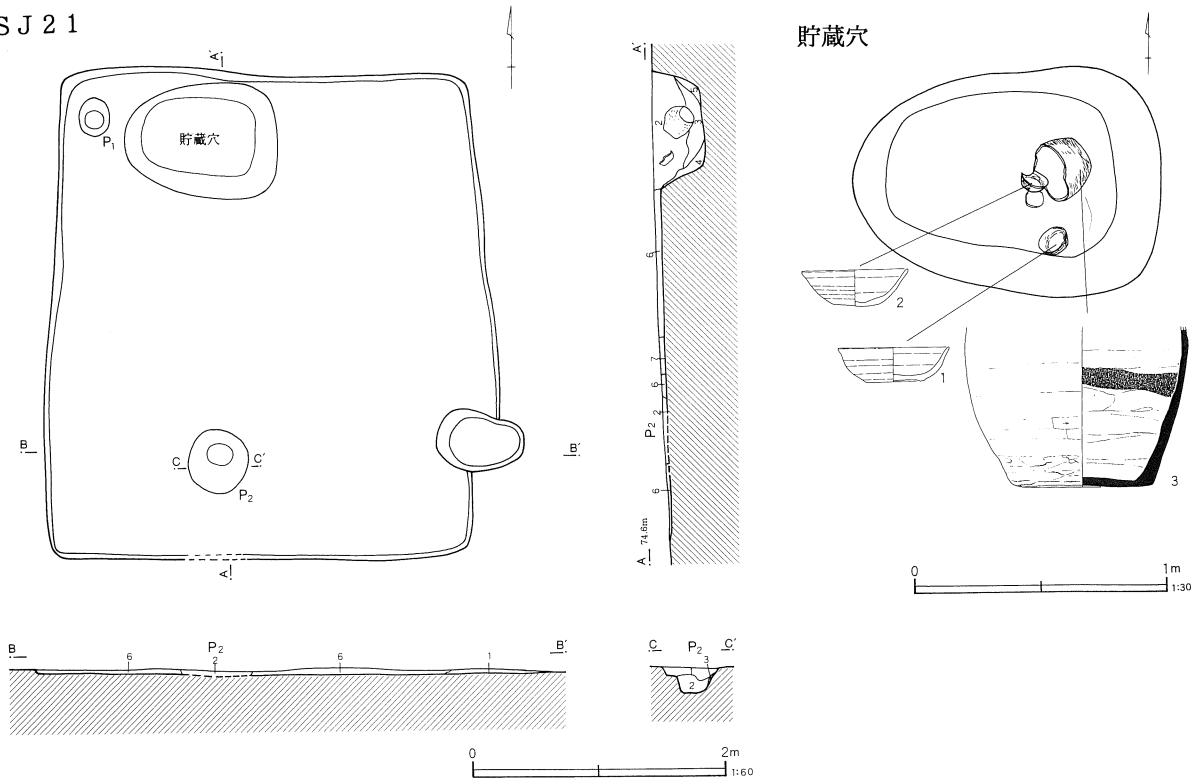
竈は東壁の南コーナー寄りに存在し、燃烧部の焼土面のみ残存する。

ピットは2個検出され、P1=長径0.28m×短径0.22m×深さ0.17m、P2=長径0.49m×短径0.46m×深さ0.26mを測る。

住居跡の北西コーナー寄りに、長方形の貯蔵穴を持つ。貯蔵穴は長径1.18m×短径0.88m×深さ0.42mを測る。底部付近から、須恵器坏、酸化焰焼成の須恵

第26図 第21号住居跡・出土遺物

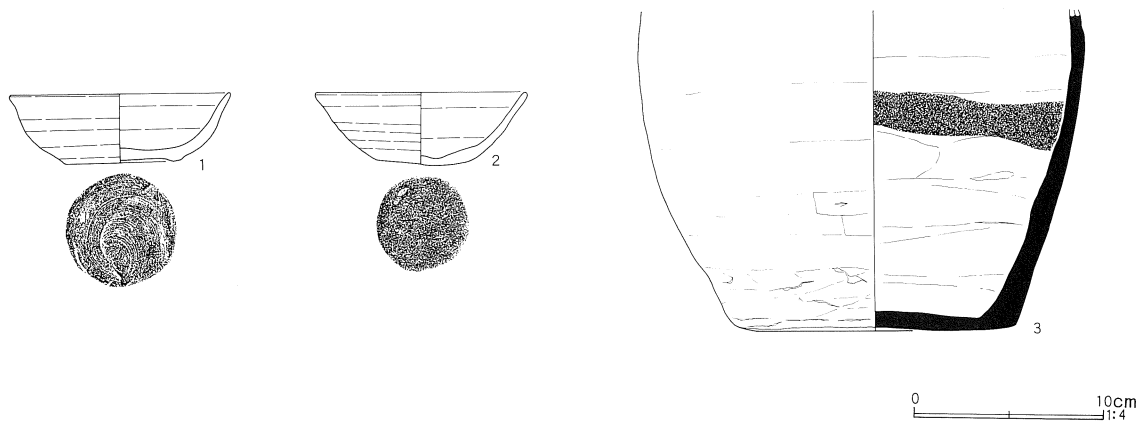
SJ21



- 1 橙褐色土 焼底部底面。
- 2 暗黄褐色土 1cm大の焼土ブロック、焼土粒子を少量含む。炭化物ブロックをまばらに含む。
- 3 暗黄褐色土 焼土粒子を多量に含み、1cm大の焼土粒子をまばらに含む。
- 4 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 5 暗黄褐色土 焼土粒子を多量に含み、1cm大の焼土粒子をまばらに含む。
- 6 灰黄褐色土 白色地山粒子を多量に含む。
- 7 暗黄褐色土 白色粒子を多量に含み、焼土粒子、炭化物を少量含む。

SJ21Pit2

- 1 暗黄褐色土 炭化物、焼土粒子を少量含む。
- 2 暗黄褐色土 焼土粒子を少量含み、1mm大のローム粒子を多量に含む。
- 3 明黄褐色土 地山ブロックを多量に含む。

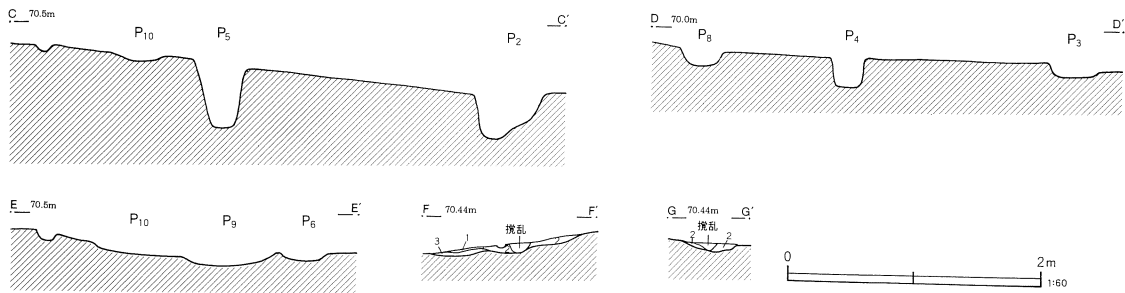
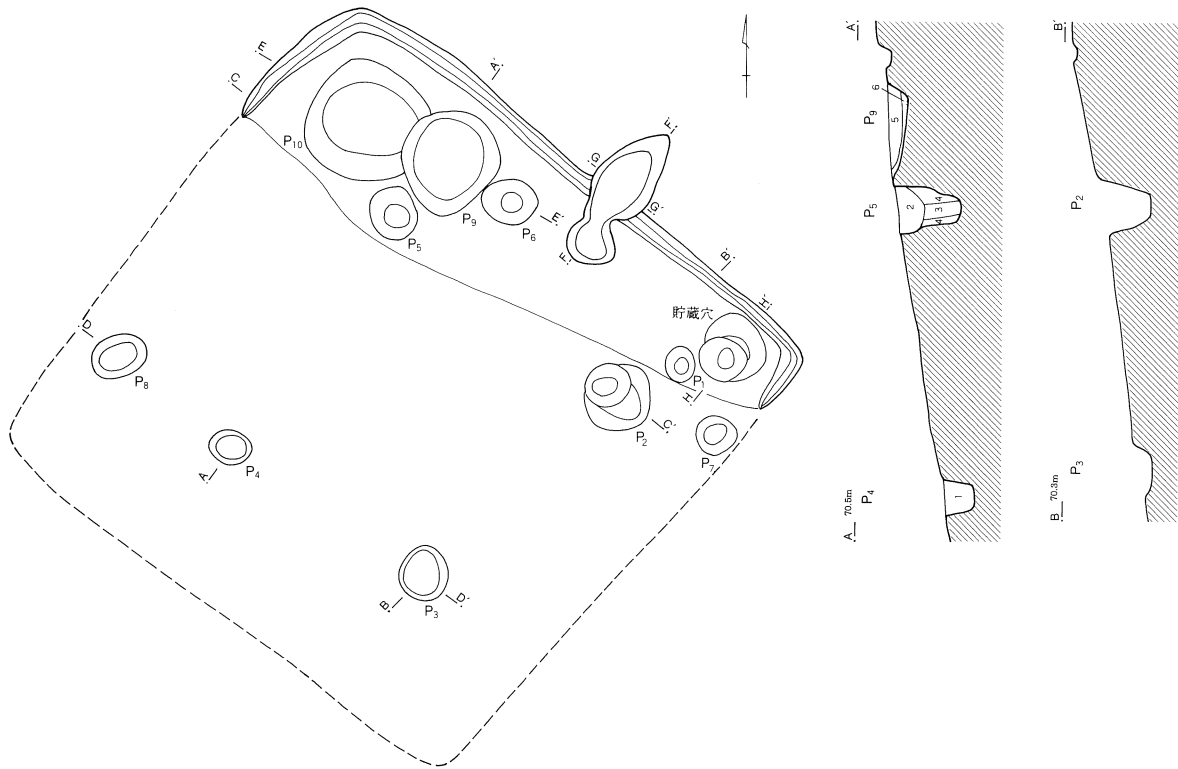


第21号住居跡出土遺物観察表 (第26図)

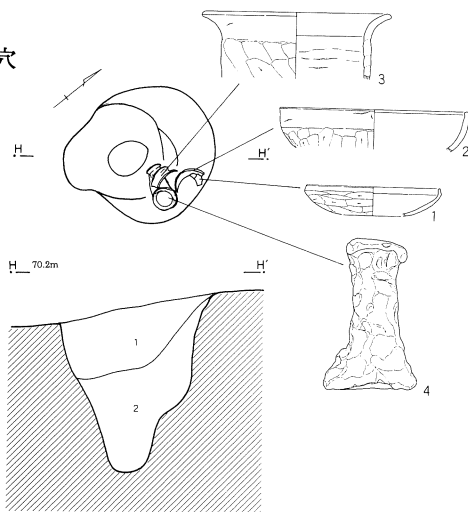
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	11.7	3.7	6.1	ABCEF片	普通	にぶい橙	95	貯蔵穴
2	坏	11.2	3.9	4.8	ACEF	不良	にぶい黄橙	90	貯蔵穴
3	甕			14.8	ACE	普通	灰	100	胴部内面中位に煤附着、貯蔵穴

第27図 第22号住居跡

S J 2 2



貯蔵穴



S J 22 Pit4 Pit5 Pit9

- 1 灰茶褐色土 地山凝灰岩崩落粘土ブロックを、斑点状に全体にわたって、多量に含む。粘性中位、しまり強い。
- 2 暗灰褐色土 地山粘土小ブロックを斑点状に少量含む。焼土粒子、炭化物を微量に含む。粘性中位、しまり強い。
- 3 暗褐色土 粘性、しまり共にやや強い。
- 4 暗黄褐色土 ローム質土ブロックを多量に含み、粘性やや強く、しまり強い。
- 5 暗灰褐色土 地山粘土粒子と焼土粒子、炭化物をやや多く含む。粘性強く、しまりやや強い。
- 6 灰褐色土 地山粘土粒子を多量に含む。粘性やや強く、しまり強い。

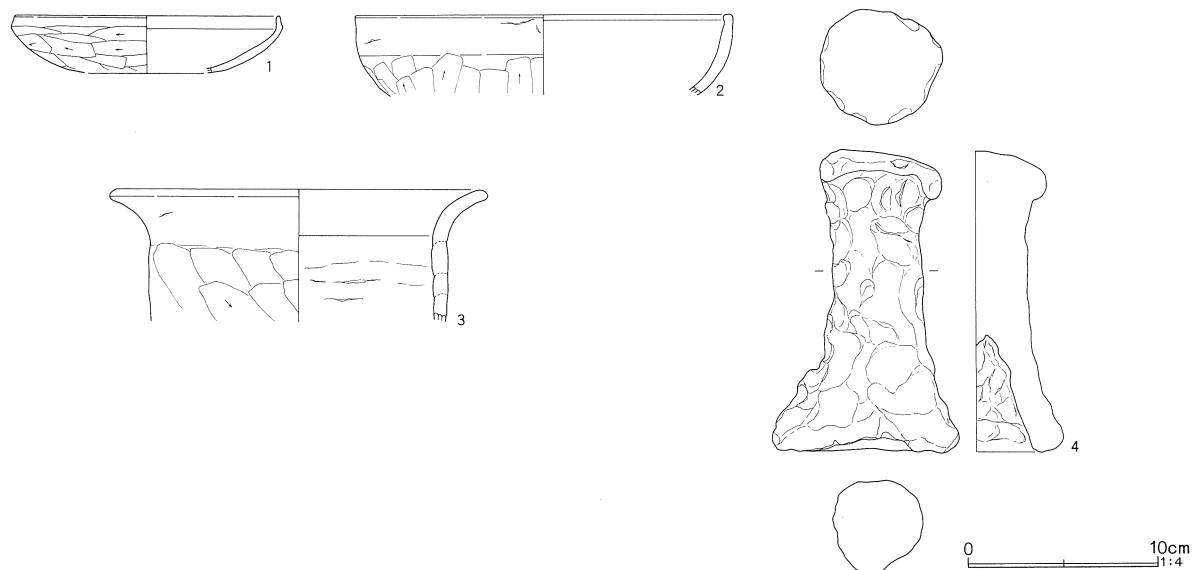
S J 22 カマド

- 1 暗灰褐色土 焼土を縞状に含む。粘性やや強く、しまり中位。
- 2 暗黄褐色土 粘性強く、しまり中位。
- 3 灰黄色土 粘性強く、しまりやや強い。

S J 22 貯蔵穴

- 1 暗茶褐色土 地山粘土粒子と焼土小ブロックを全体に少量含む。粘性中位、しまり強い。
- 2 暗灰褐色土 ローム質土ブロックを多量に、焼土小ブロックを少量含む。粘性、しまり共にやや強い。

第28図 第22号住居跡出土遺物



第22号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.0)	3.1		A C E F	普通	橙	15	貯蔵穴
2	鉢	(20.0)			A C E F	普通	橙	30	貯蔵穴
3	甕	(20.0)			A B C F	普通	橙	20	貯蔵穴
4	支脚	6.4	15.9	9.9	A C E F	不良	にぶい橙	95	貯蔵穴

質土師器坏、須恵器甕が出土している。2の酸化焰焼成の須恵質土師器坏は、底部糸切り離し後、全面にヘラケズリを施している。これらの遺物は、10世紀第2四半期以降に位置付けられるもので、本遺跡の平安時代の中で最も新しい遺物である。

第22号住居跡（第27図、第28図）

H-7区に位置する。壁溝と竈のみ現存する住居跡で、斜面削平部に柱穴が確認された。住居跡のプランは北竈を持ち、柱穴と北壁の壁溝との関係から方形に近い長方形を呈するものと思われる。長径4.47m、短径1.47mのみを測り、壁は殆ど現存しない。

竈は北壁の中央部やや東寄りに存在し、燃焼部のみ存在する。壁溝は全周するものと思われ、北壁と、東西壁の一部のみ現存する。

ピットは土壌状のものまで含めて10個確認され、柱穴はP2、P3、P4、P5の4本と思われる。この4本の柱穴の底部は標高がほぼ一致している。ピットの規模はP1=長径0.27m×短径0.21m×深さ0.68

m、P2=長径0.55m×短径0.52m×深さ0.4m、P3=長径0.45m×短径0.37m×深さ0.12m、P4=長径0.34m×短径0.25m×深さ0.27m、P5=長径0.42m×短径0.35m×深さ0.51m、P6=長径0.43m×短径0.34m×深さ0.1m、P7=長径0.32m×短径0.27m×深さ0.18m、P8=長径0.44m×短径0.33m×深さ0.19m、P9=長径0.82m×短径0.73m×深さ0.18m、P10=長径0.93m×短径0.82m×深さ0.13mを測る。

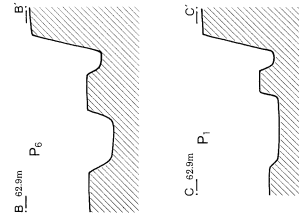
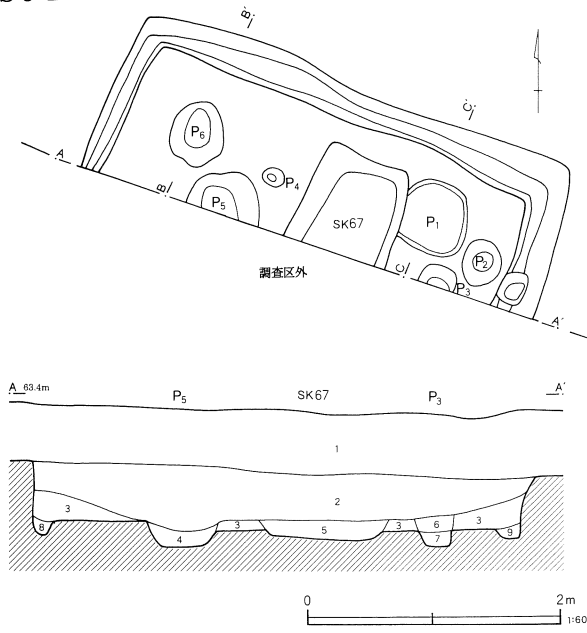
貯蔵穴は北東コーナーにあり、プランは円形で、土師器坏、鉢、甕の破片が出土している。また、土製の支脚も出土している。これ等の遺物は、およそ7世紀終末の年代が与えられ、住居跡の中では一番古い遺物である。

第23号住居跡（第29図）

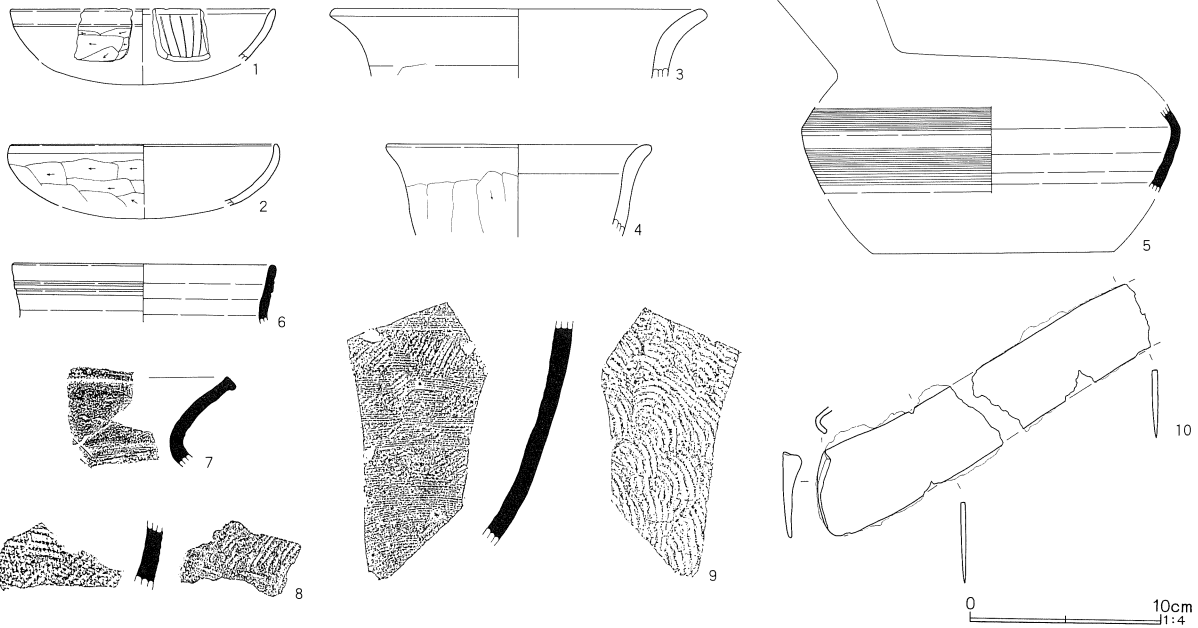
H-10～11区にかけての調査区際に位置する。第67号土壌、第1号溝と重複するが、本住居跡の方が古い。住居跡の南半分が調査区外に当たり、全体像は不

第29図 第23号住居跡・出土遺物

S J 2 3



- 1 暗茶褐色土 焼土粒子、地山粘土粒子、白色バミスをやや多く含み、遺物もやや多く含む。粘性中位、しまりやや強い。
- 2 暗茶褐色土 焼土粒子、地山粘土粒子、白色バミスを少量含む。粘性やや強くしまり中位。
- 3 暗褐色土 地山粘土小ブロックを多量に含む。粘性、しまり共にやや強い。
- 4 暗褐色土 地山粘土ブロックを横縞状に大量に含み、焼土小ブロックを少量含む。粘性、しまり共に中位。
- 5 暗褐色土 地山粘土小ブロック、炭化物、焼土小ブロックを斑点状に少量含む。粘性、しまり共にやや強い。
- 6 暗褐色土 地山粘土ブロックと炭化物粒子を斑点状に多量に含む。粘性やや強く、しまり中位。
- 7 暗灰褐色土 地山粘土ブロック、焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。粘性、しまり共に中位。
- 8 黒褐色土 地山粘土ブロックを少量含む。粘性強く、しまりやや強い。
- 9 茶褐色土 地山粘土ブロックを多量に含む。粘性、しまり共にやや強い。

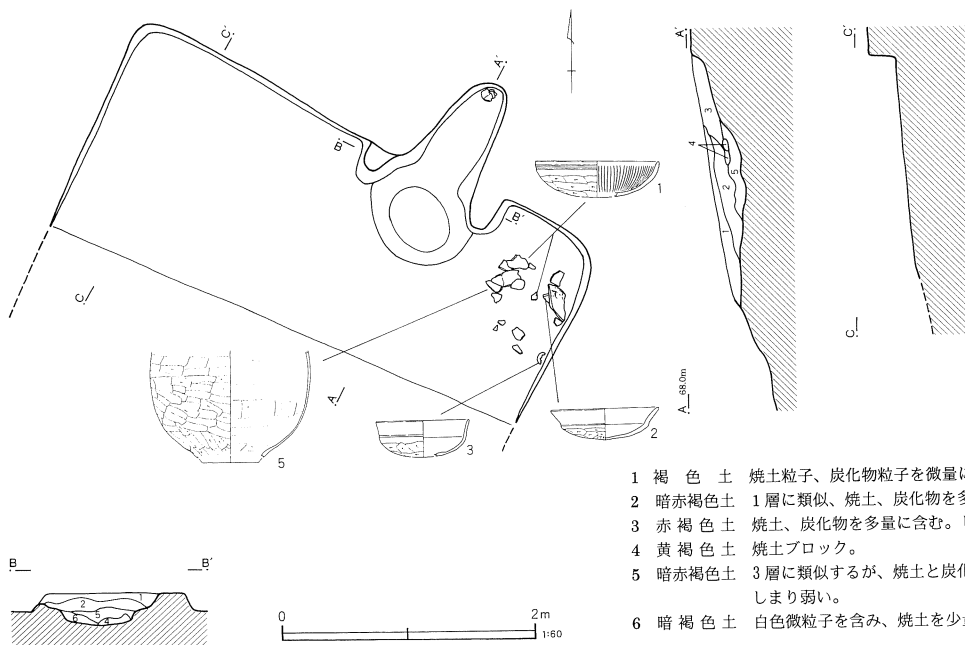


第23号住居跡出土遺物観察表（第29図）

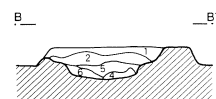
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(14.0)			A B C F	普通	橙	10	内面放射状暗文
2	坏	(14.0)			A B C	普通	橙	15	
3	甕	(20.0)			A C F	普通	にぶい橙	10	
4	鉢?	(14.0)			A C F	普通	褐灰	10	
5	平瓶				A	良好	灰	10	
6	短頸壺				A	良好	灰	10	
7	甕				A C	良好	灰	破片	
8	甕				A	良好	灰	破片	
9	甕				A	良好	灰褐	破片	
10	鎌	刃幅最大3.1cm 背幅0.2cm 重さ51.4g (左鎌)						70	

第30図 第24号住居跡・出土遺物

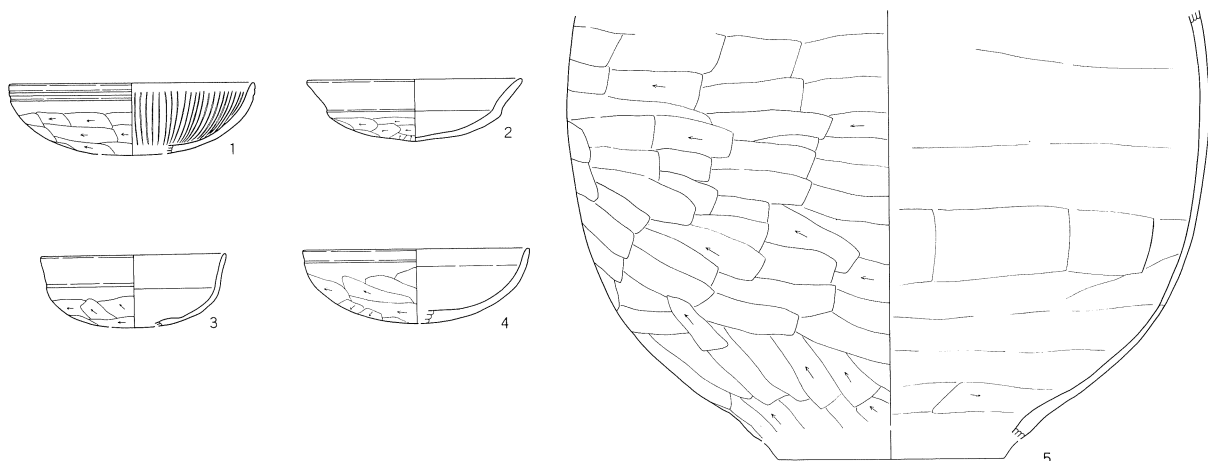
S J 2 4



- 1 褐色土 焼土粒子、炭化物粒子を微量に含む。粘性弱く、しまり強い。
- 2 暗赤褐色土 1層に類似、焼土、炭化物を多量に含む。
- 3 赤褐色土 焼土、炭化物を多量に含む。しまりやや弱い。
- 4 黄褐色土 焼土ブロック。
- 5 暗赤褐色土 3層に類似するが、焼土と炭化物を多量に含む。粘性強く、しまり弱い。
- 6 暗褐色土 白色微粒子を含み、焼土を少量含む。粘性強い。



0 2m 1:60

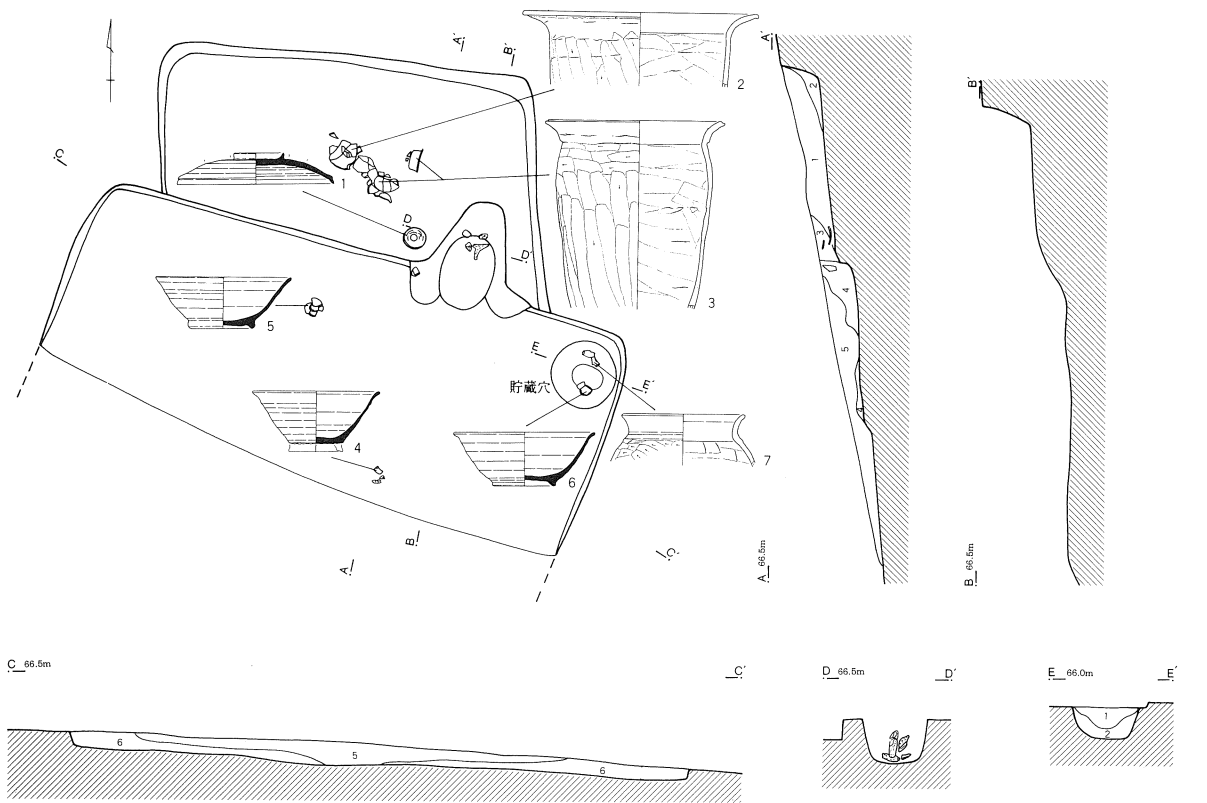


0 10cm 1:4

第24号住居跡出土遺物観察表 (第30図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(13.0)			ACF	普通	灰黄褐	50	内面放射状暗文
2	坏	(11.4)	3.3		ABCEF	普通	にぶい褐	50	
3	坏	(9.8)			ACE	不良	にぶい黄橙	40	
4	坏	(12.0)	3.9		ABCF	普通	にぶい橙	40	
5	甕				ABCF	不良	にぶい橙	20	

SJ25・26

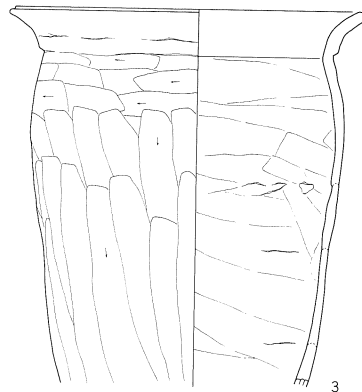
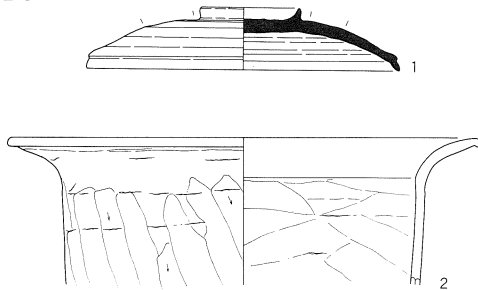


- 1 暗褐色土 1~5mm大の焼土粒子、白色微粒子、炭化物を少量含む。粘性弱くしまり強い。
- 2 褐色土 白色微粒子を多量に含み、焼土、炭化物を少量含む。
- 3 暗赤褐色土 2~3mm大の焼土を多量に含み、炭化物を少量含む。粘性強くしまりやや弱い。
- 4 黒褐色土 焼土、炭化物を多量に含み、白色微粒子を少量含む。粘性、しまり共に強い。
- 5 黒褐色土 焼土、炭化物を少量含む。
- 6 黒褐色土 1~3mm大の焼土、炭化物を含む。白色微粒子を多量に含む。粘性弱い。

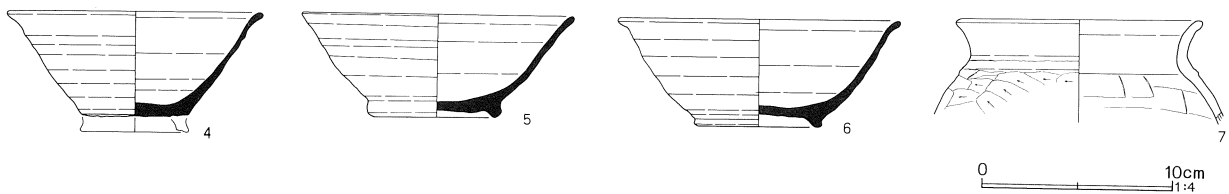
SJ26 貯蔵穴

- 1 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を多量に含み、ロームブロックを少量含む。
- 2 褐色土 焼土粒子、炭化物、ローム粒子を多量に含む。

SJ25



SJ26



第25号住居跡出土遺物観察表（第31図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	蓋	16.5	3.3		A針	良好	灰	95	つまみ径5.3cm
2	甕	(25.0)			A B C F	普通	にぶい橙	25	
3	甕	(18.2)			A B C E	普通	にぶい褐	40	

第26号住居跡出土遺物観察表（第31図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
4	高台付壺	(13.6)			A B C F	不良	にぶい黄橙	60	貯蔵穴
5	高台付壺	14.4	5.4	7.0	A B C E F	不良	にぶい褐	85	
6	高台付壺	(15.0)	5.6	6.7	A C F片	普通	灰褐	60	
7	甕	(13.0)			A C E	普通	黒褐	20	

明であるが、北壁に竈がないことから、東竈で東西方向に細長い長方形を呈するものと思われる。長径3.71m、短径1.35mのみを測り、深さは壁から0.47m、地方面から0.94mを測る。地方面から床面までが深いのは、住居跡埋没後、斜面部の侵食土が厚く堆積したことを示している。壁溝は全周しており、0.12m前後の深さを持ち、しっかり構築されている。

床面に第67号土壇、ピット6個を検出したが、土層断面図で明らかな様に、大半が住居跡の埋没過程に構築されたもので、P1＝長径0.58m短径0.57m深さ0.7m、P2＝長径0.37m短径0.3m深さ0.11m、P3＝長径0.28m短径0.18m深さ0.11m、P4＝長径0.17m短径0.13m深さ0.12m、P5＝長径0.57m短径0.32m深さ0.18m、P6＝長径0.52m短径0.41m深さ0.21mを測る。

住居跡覆土からは土師器坏、暗文を持つ坏、甕、須恵器甕、短頸壺等の口縁部、胴部破片が出土した。また、床面からは鉄製の左鎌が出土した。これ等の遺物は、およそ8世紀第1四半期に位置つけられよう。

第24号住居跡（第30図）

B-5～6区にかけて位置する。竈と住居跡のおよそ北半分が残存する。壁溝、ピットは確認されず、竈のみ残存し、住居跡北東コーナーにやや纏まって遺物が出土した。プランは北壁中央部やや東寄りに存在し、東西方向に細長い長方形を呈するものと思われ、長径4.01m、短径1.76mのみを測り、深さは壁から0.18mを測る。

竈は北壁の中央部やや東寄りに構築され、燃焼部の

み存在し、両袖、天井部は欠損する。

遺物は土師器坏、暗文を持つ坏、有段坏、甕の底部破片が出土している。遺物は7世紀末から8世紀初頭の年代が与えられる。

第25号住居跡（第31図）

B-6区に位置する。第26号住居跡と重複し、本住居跡の方が古い。住居跡北半分が現存し、竈、壁溝、ピット等の付属施設は確認されなかった。住居跡のプランは東竈で、南北に細長い長方形と思われ、長径2.94m、短径1.82mのみを測り、壁からの深さは0.41mを測る。

遺物は住居跡中央部の床面から、リング状摘を持つ須恵器蓋、土師器甕の大型破片が出土しており、8世紀初頭に位置付けられる。

第26号住居跡（第31図）

B-6～7区にかけて位置する。第25号住居跡と重複し、本住居跡の方が新しい。住居跡北半分が現存し、プランは北壁に竈を持ち、東西壁の一部が現存する東西に細長い長方形を呈するものと思われる。長径4.41m、短径1.83mのみを測り、壁からの深さは0.24mを測る。

竈は北壁中央部東寄りに位置し、壁溝、柱穴は確認されなかった。住居跡北東コーナーに円形の貯蔵穴が存在し、規模は径0.53mを測り、床からの深さは0.35mを測る。

遺物は床面と、貯蔵穴内から須恵器高台付壺、土師器甕が出土しており、9世紀前半代の可能性が高い。

第2表 大木前遺跡住居跡一覧表

番号	位置	長径(m)	短径(m)	深さ(cm)	カマド	主軸方向	備考
1	C-7~8	3.82	(1.76)	41	-	-	-
2	D-7	3.76	(1.41)	29	-	-	SK7・13
3	F-9~10	3.53	(1.82)	29	-	-	SJ4
4	F-9~11	3.06	(2.24)	53	東壁中央部やや南	S-70°-E	SJ3
5	H-10	6.47	(2.53)	41	北壁中央部やや東	N-12°-E	SJ6 SK18・19・20・21・33・48
6	H-10	6.12	(2.41)	26	北壁	N-26°-E	SJ5 SK22・34
7	I-10	3.06	(1.29)	12	-	-	SJ9 SK24・25・26
8	I~J-11	4.12	(1.82)	24	-	-	SJ10 SD 1
9	I-10	4.65	(1.71)	10	北壁中央部やや西	N-16°-E	SJ7
10	I-11	2.41	(0.59)	18	-	-	SJ8 SD1
11	I~J-10	4.41	(1.71)	-	北壁中央部	N-7°-E	SJ19 SK37
12	L~M-11	(3.18)	(1.71)	-	北壁	N-17°-W	SJ13・14・16 SK23・39・41・42・43
13	L~M-11	3.41	(1.82)	-	東壁	N-90°-E	SJ12・14・16 SK44・45・47
14	L~M-11	(2.29)	(1.72)	71	-	-	SJ12・13・16 SK46
15	K~L-11~12	4.18	(3.82)	47	東壁	N-90°-E	SK38・57・60・61
16	L~M-11	-	-	-	-	-	SJ12・13・14
17	I~J-10	5.3	(5.3)	-	北壁	N-6°-E	SK40
18	J-10	3.47	(1.12)	-	-	-	SJ11・19 SK37
19	J-10	2.59	(1.59)	-	-	-	SJ11・18 SK37
20	N~O-3~4	-	-	-	北壁	N-38°-W	SK 6
21	L~M-2~3	4.05	(3.29)	6	東壁	N-90°-E	-
22	H-7	4.47	(1.47)	-	北壁	N-48°-E	-
23	H-10~11	3.71	(1.35)	47	-	-	SK67 SD 1
24	B-5~6	4.01	(1.76)	18	北壁	N-63°-W	-
25	B-6	2.94	(1.82)	41	-	-	SJ26
26	B-6~7	4.41	(1.83)	24	北壁	N-79°-W	SJ25

第3表 大木前遺跡住居内ピット深度表

位置	Pit 番号	深さ(cm)	位置	Pit 番号	深さ(cm)	位置	Pit 番号	深さ(cm)
SJ 2	1	33.0	SJ12・13・14	4	18.5	SJ18・19	9	25.5
	2	31.5		5	27.7		SJ20	1
SJ 5・6	1	12.5	6	27.3	2	22.5		
	2	55.5	7	20.5	3	29.0		
	3	48.5	SJ15	1	10.5	4	34.0	
	4	48.0		2	22.5	5	33.0	
	5	57.0	3	24.0	6	15.0		
	6	58.0	4	18.0	SJ21	1	17.0	
	7	60.5	5	7.0		2	26.0	
	8	28.0	6	6.0	SJ22	1	68.0	
	9	10.0	7	17.8		2	40.0	
	10	7.0	8	11.7	3	11.5		
	11	27.0	9	4.4	4	27.5		
	12	13.0	SJ16	1	10.5	5	51.5	
	13	27.4		SJ17	1	31.5	6	9.5
	14	11.5	2		27.0	7	18.0	
SJ8	1	28.0	3	6.0	8	19.5		
	2	22.5	4	7.5	9	18.0		
	3	49.0	SJ18・19	1	12.0	10	13.0	
	4	13.0		2	13.5	SJ23	1	6.5
5	43.0	3	8.0	2	11.0			
SJ11	1	12.8	4	10.0	3		11.0	
	2	10.0	5	19.0	4		12.0	
SJ12・13・14	1	20.3	6	21.0	5		18.0	
	2	43.8	7	8.8	6		21.0	
	3	15.5	8	16.5				

(2) 炉穴

第69号土壙 (第32図、第40図)

縄文時代早期の炉穴は、調査区内で1基検出された。第69号土壙としたもので、炉床部のみ残存するもので、底部は良く被熱している。プランはやや南北に細長い楕円形を呈し、長径0.83m×短径0.71m×深さ0.22mを測る。

遺物は、条痕文系土器の尖底深鉢形土器の口縁部破片と、石器4点が出土した。1は条痕文土器の口縁部破片で、口唇部はやや外削状を呈し、口縁部が開く器形となる。内外面に擦痕状の整形を施し、内面は風化が進んでいる。口唇部形状や、整形痕から条痕文系土器群でも初頭段階のもので、野島式古段階に位置付けられる。

石器は3点出土しており、他に剥片数点が出土した。2は石斧で、頭部の尖る形状を呈するが、頭部を欠損する。背面に礫表を全面的に残し、片側面からの調整剥離で成形する。泥岩製で長さ7.7cm×幅5.1cm×厚さ2.1cm×重さ77.2gを測る。3も刃部のみ現存する石斧で、刃部背面に礫表を残す。刃部の成形は2同様に、片面からのみの剥離で行われる。泥岩製で長さ5.3cm×幅7.0cm×厚さ2.0cm×重さ94.25gを測る。4は礫器で、ラウンド状に調整剥離を施すが、刃角は鈍い。砂岩製で長さ6.0cm×幅7.2cm×厚さ3.1cm×重さ151.4gを測る。5は磨石で、半分程を欠損するが、石英閃緑岩製で長さ9.5cm×幅5.8cm×厚さ4.7cm×重さ276.1gを測る。

(3) 土壙

奈良・平安時代及びそれ以降の土壙は合計68基を検出した。住居跡と重複する土壙は、住居跡の構築時期に近い年代が、また、単独で存在する土壙は構築時期が多様であるが、新しい時期の土壙が多い。

第1号土壙 (第33図)

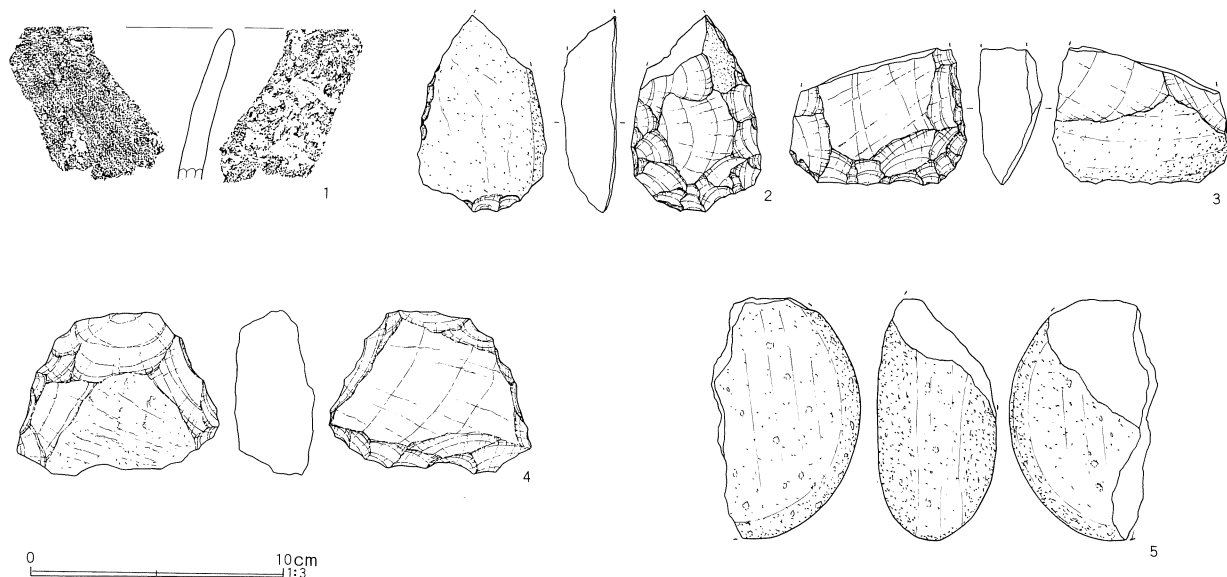
D-6区に位置する。ほぼ円形を呈し、底面は平坦である。長径0.85m×短径0.83m×深さ0.47mを測る。

遺物は出土していない。

第2号土壙 (第33図)

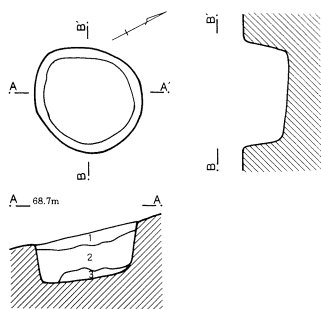
D-6区に位置する。楕円形を呈し、底面は平坦で、一部調査区外に当たる。長径0.93m×短径0.78m×深さ0.40mを測る。遺物は出土していない。

第32図 第69号土壙 (炉穴) 出土遺物



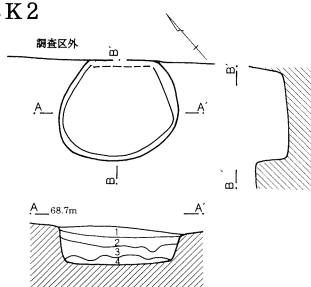
第33図 土壌(1)

SK 1



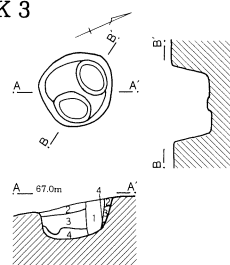
- 1 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を若干含む。
- 2 暗茶褐色土 5mm大のバミスをまばらに含む。
- 3 茶褐色土 黄褐色土ブロックを部分的に含む。

SK 2



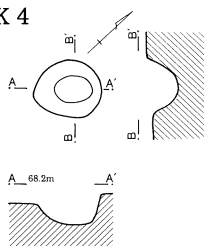
- 1 暗褐色土 炭化物、焼土粒子を少量含む。
- 2 灰褐色土 白色バミスを多く含む。
- 3 暗褐色土 白色バミスに2層より少なく含む。
- 4 茶褐色土 黄褐色土ブロックを部分的に含む。

SK 3

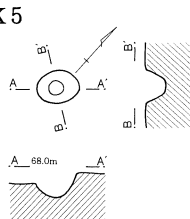


- 1 黒褐色土 黄褐色土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 若干の炭化物を含む。
- 3 灰褐色土 白色バミスを部分的に含む。
- 4 茶褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。

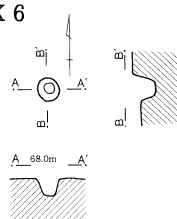
SK 4



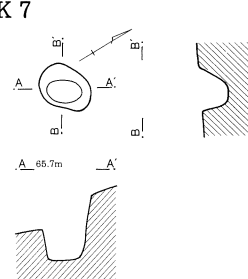
SK 5



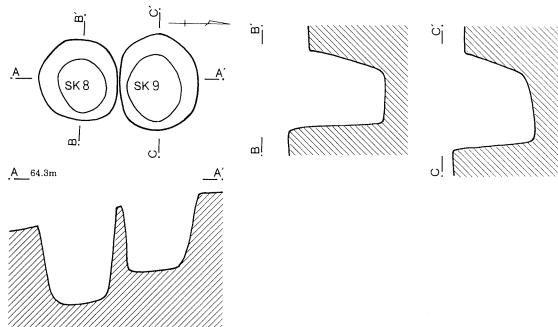
SK 6



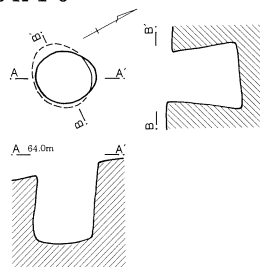
SK 7



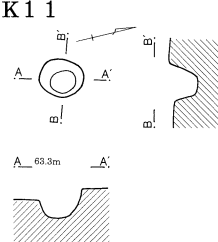
SK 8・9



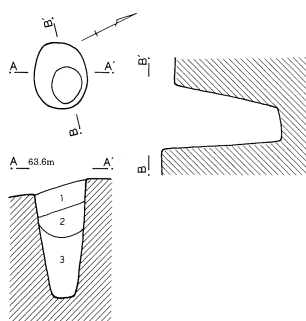
SK 10



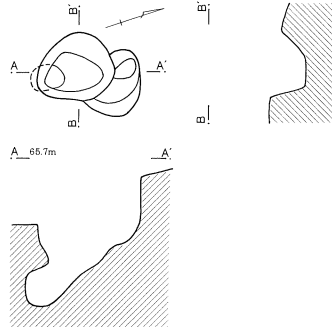
SK 11



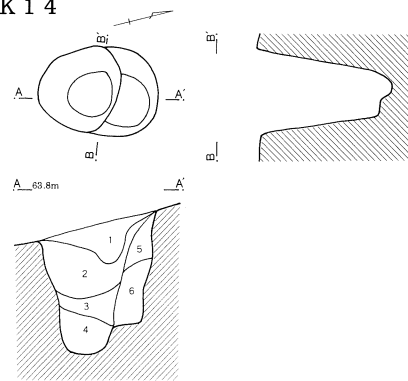
SK 12



SK 13

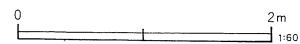


SK 14



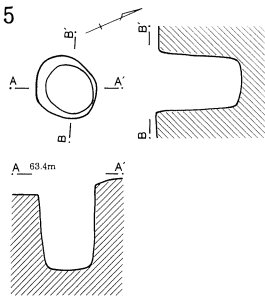
- 1 暗褐色土 白色バミスを多量に、焼土を上部に含む。
- 2 暗茶褐色土 白色バミスを少量、焼土粒子を微量含む。
- 3 暗茶褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む。

- 1 黒褐色土 焼土ブロックをやや多く含む。
- 2 茶褐色土 白色バミスと焼土粒子を極少量含む。
- 3 暗茶褐色土 黄白色粘土ブロックを少量含む。
- 4 黒色土 黄白色粘土ブロックを多量に含む。
- 5 暗茶褐色土 白色バミスと焼土ブロックをやや多く含む。
- 6 暗茶褐色土 白色バミスと黄白色粘土ブロックを少量含む。

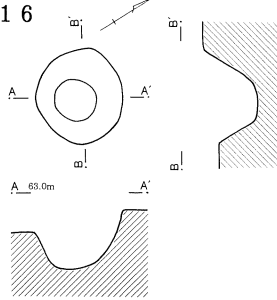


第34図 土壌(2)

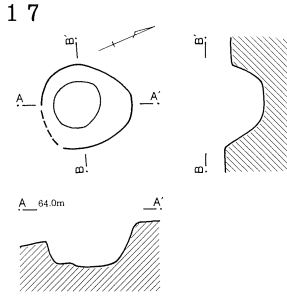
SK 15



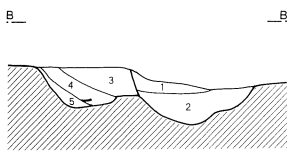
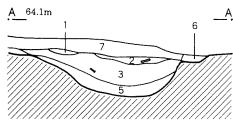
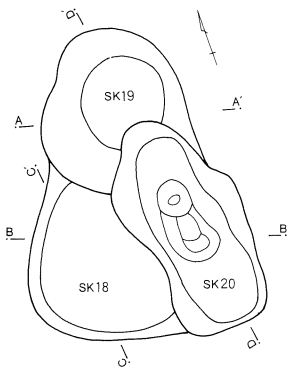
SK 16



SK 17



SK 18・19・20



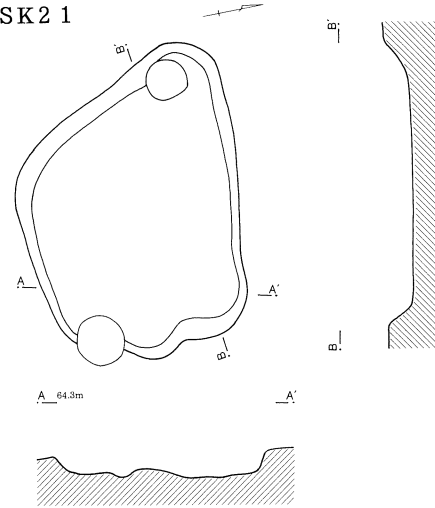
SK 18・20

- 1 黒褐色土 炭化物、焼土粒子を少量含む。
- 2 暗褐色土 1層に類し、白色パミスを多く含む。
- 3 暗褐色土 炭化物、焼土粒子を若干含む。
- 4 茶褐色土 白色パミスを多量に含む。
- 5 暗褐色土 焼土粒子を若干含む。

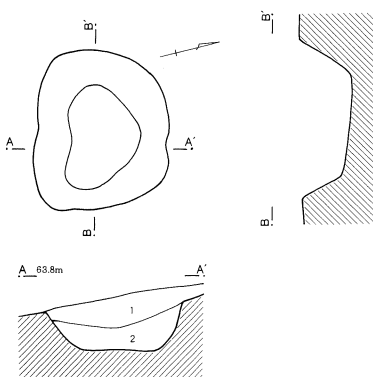
SK 19

- 1 暗赤褐色土 焼土。
- 2 灰茶褐色土 粘土粒子と焼土粒子を少量含む。
- 3 灰茶褐色土 焼土ブロックと炭化物を少量含む。
- 4 灰茶褐色土 粘土ブロックを大量に含む。
- 5 暗褐色土 粘土ブロックと焼土ブロックを少量含む。
- 6 暗黄褐色土 焼土ブロックを大量に含む。
- 7 茶褐色土 焼土ブロックと炭化物をやや多く含む。

SK 21

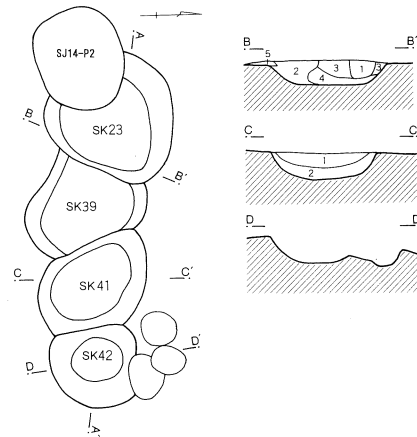


SK 22



- 1 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含み、白色パミスを少量含む。
- 2 暗茶褐色土 焼土ブロックを少量含む。

SK 23・39・41・42

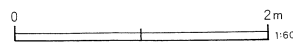


SK 23

- 1 暗褐色土 焼土ブロックをやや多く含む。
- 2 暗褐色土 白色パミスと焼土ブロックを少量含む。
- 3 暗灰褐色土 白色パミスを少量含む。
- 4 暗茶褐色土 焼土ブロックを少量含む。
- 5 暗茶褐色土 粘土ブロックを少量含む。

SK 41

- 1 暗灰褐色土 焼土ブロックと白色パミスを多量に含む。
- 2 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む。

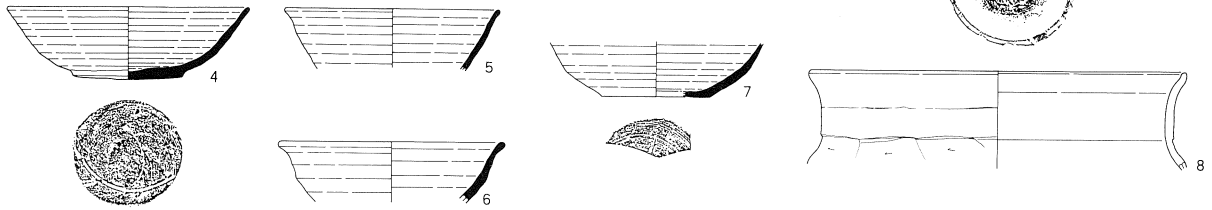


第35図 土壙出土遺物(I)

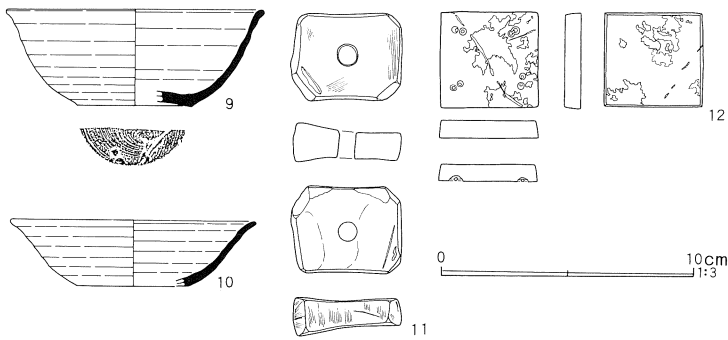
SK 14



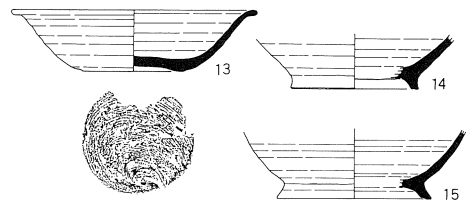
SK 18



SK 19

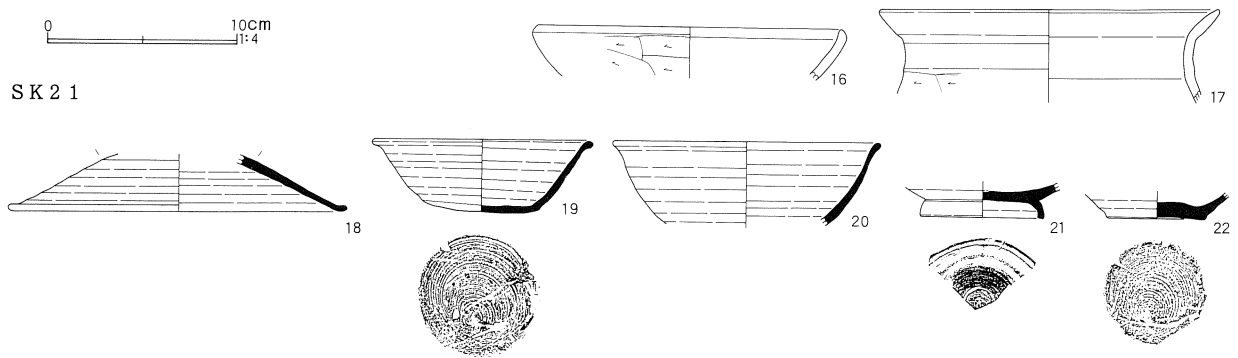


SK 20

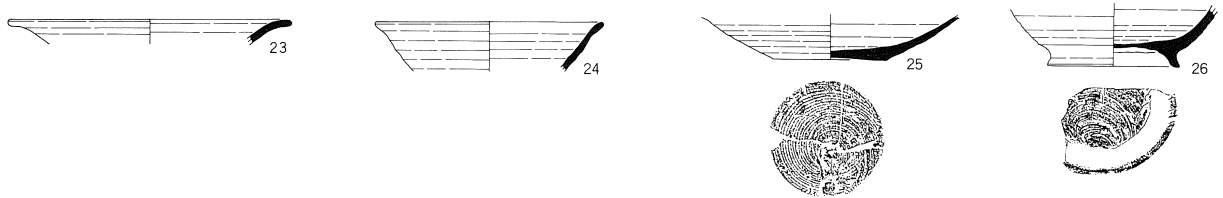


0 10cm
1:4

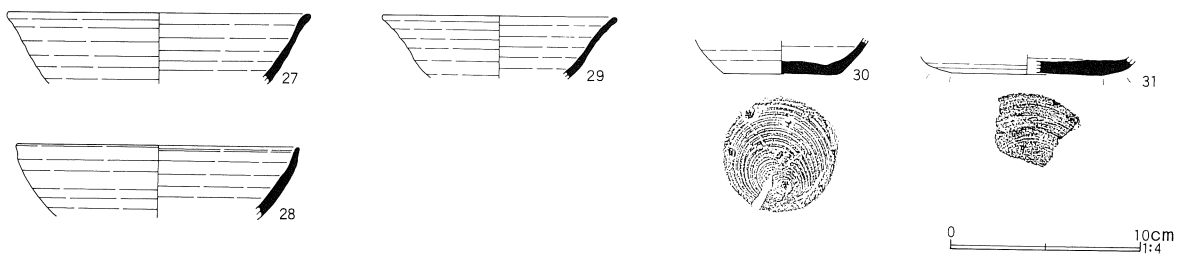
SK 21



SK 22



SK 34



第14号土壌出土遺物観察表 (第35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.0)	3.8	(6.0)	A針	良好	灰	10	
2	甕	(22.0)			A B C F	不良	にぶい橙	15	

第18号土壌出土遺物観察表 (第35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
3	高台付碗	(13.3)	5.6	(6.7)	A	普通	灰白	30	
4	坏	12.7	3.7	5.7	A D	普通	灰白	45	
5	坏	(11.5)	3.1		A	普通	灰白	10	
6	坏	(12.0)			A D	普通	暗青灰	10	
7	坏			(5.8)	B C D	普通	灰白	30	
8	甕	(20.0)			A B C E	普通	灰褐	15	

第19号土壌出土遺物観察表 (第35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	
9	坏	(13.6)	5.1	(6.0)	A D F針	普通	灰白	45		
10	坏	(13.0)	3.5	(6.0)	A B D	普通	灰白	10		
11	紡錘車	縦3.40cm 横4.40cm 厚さ1.55cm 重さ30.52g							100	
12	石帯(巡方)	縦3.80cm 横3.90cm 厚さ0.70cm 重さ23.29g							100	大理石、表裏に黒色付着物

第20号土壌出土遺物観察表 (第35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
13	坏	(12.4)	3.3	(5.3)	A B	良好	灰	50	
14	高台付碗			(6.8)	A E片	良好	灰	10	
15	高台付碗			(8.2)	A D	普通	灰白	10	

第21号土壌出土遺物観察表 (第35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
16	坏	(16.0)			A B C	不良	橙	10	
17	甕	(18.0)			A B C F	不良	にぶい褐	15	
18	蓋	(18.0)			A針	普通	灰黄	10	
19	坏	11.2	3.7	6.1	A	良好	灰	100	
20	坏	(14.2)			A B F針	普通	にぶい褐	10	
21	高台付碗			(6.6)	A	良好	灰黄	10	
22	坏			5.3	A C針	良好	灰白	20	

第22号土壌出土遺物観察表 (第35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
23	皿	(15.0)			A D F	普通	灰	10	
24	坏	(12.0)			A	良好	灰	10	
25	皿			(6.0)	A B D	普通	灰白	40	
26	高台付碗			(7.0)	A D F	普通	灰	15	

第34号土壌出土遺物観察表 (第35図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
27	碗	(16.0)			A C針	普通	灰黄	10	
28	碗	(15.0)			A C針	普通	灰黄褐	10	
29	坏	(12.4)			A D F	普通	浅黄橙	10	
30	坏			6.1	A C針	普通	にぶい橙	100	ヘラ記号
31	碗			(8.0)	A C針	普通	褐灰	10	

第3号土壌 (第33図)

D-6区に位置する。ほぼ円形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径0.63m×短径0.58m×深さ0.34mを測る。遺物は出土していない。

E-6区に位置する。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.54m×短径0.42m×深さ0.25mを測る。遺物は出土していない。

第5号土壌 (第33図)

第4号土壌 (第33図)

E-7区に位置する。楕円形を呈し、底面は皿状を

呈する。長径0.34m×短径0.25m×深さ0.19mを測る。遺物は出土していない。

第6号土壙 (第33図)

E-7区に位置する。ピット状を呈し、底面は平坦である。長径0.19m×短径0.17m×深さ0.18mを測る。遺物は出土していない。

第7号土壙 (第33図)

D-7区に位置する。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.45m×短径0.33m×深さ0.52mを測る。遺物は出土していない。

第8号土壙 (第33図)

D-8区に位置する。ほぼ円形を呈し、底面は平坦である。径0.62m×深さ0.75mを測る。遺物は出土していない。

第9号土壙 (第33図)

D-8区に位置する。楕円形を呈し、底面は平坦である。長径0.76m×短径0.62m×深さ0.63mを測る。遺物は出土していない。

第10号土壙 (第33図)

D-8区に位置する。ほぼ円形で、若干袋状を呈し、底面は平坦である。長径0.48m×短径0.41m×深さ0.60mを測る。遺物は出土していない。

第11号土壙 (第33図)

D-8区に位置する。ピット状を呈し、底面は平坦である。長径0.85m×短径0.83m×深さ0.47mを測る。遺物は出土していない。

第12号土壙 (第33図)

D-8区に位置する。楕円形のピット状を呈し、底面は平坦である。長径0.55m×短径0.42m×深さ0.95mを測る。遺物は出土していない。

第13号土壙 (第33図)

D-7区に位置する。不整形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径0.81m×短径0.53m×深さ1.07mを測る。遺物は出土していない。

第14号土壙 (第33図、第35図1、2)

D-8区に位置する。ピットの重複状を呈し、底面は凹凸がある。長径0.94m×短径0.70m×深さ1.14mを測る。遺物は流れ込みの須恵器環と土師器甕の破片が出土している。第35図1は須恵器環で、底径がやや大きいものと思われ、9世紀第3四半期に位置付けられよう。2は「コ」字状口縁の退化した甕で、9世紀末から10世紀初頭期に位置付けられる。

第15号土壙 (第34図)

D-8区に位置する。ほぼ円形を呈し、底面は平坦である。長径0.51m×短径0.45m×深さ0.68mを測る。遺物は出土していない。

第16号土壙 (第34図)

E-9区に位置する。ほぼ円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.75m×短径0.69m×深さ0.47mを測る。遺物は出土していない。

第17号土壙 (第34図)

F-9区に位置する。楕円形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径0.72m×短径0.65m×深さ0.36mを測る。遺物は出土していない。

第18号土壙 (第34図、第35図3～8)

H-10区に位置する。第5号住居跡内にあり、第19・20号土壙と重複する。不整形で、底面は凹凸がある。長径1.47m×短径0.90m×深さ0.33mを測る。

遺物は9世紀第3四半期を中心とした、9世紀後半代の須恵器環、高台付壙、土師器甕が出土している。

第19号土壙 (第34図、第35図9～12)

H-10区に位置する。第5号住居跡内にあり、第18・20号土壙と重複する。不整形で、底面は凹凸がある。長径1.20m×短径0.83m×深さ0.30mを測る。

遺物は9世紀第3四半期の須恵器坏、紡錘車、石帯が出土している。第35図11は砥石転用と思われる紡錘車で、縦3.4cm×横4.4cm×厚さ1.5cm、重さ30.5gを測る。12は石帯の巡方で、裏面に2穴がアーチ状に繋がる留め穴が四隅に一つずつ穿たれる。ほぼ方形で、縦3.8cm×横3.9cm×厚さ0.7cm、重さ23.3gを測る。石材は大理石で、表面に黒色の斑紋状の付着物が見られる。この付着物は黒漆の可能性がある。

第20号土壙 (第34図、第35図13～15)

H-10区に位置する。第5号住居跡内にあり、第18・19号土壙と重複する。不整形で、底面は凹凸がある。長径1.78m×短径0.75m×深さ0.37mを測る。

遺物は9世紀第3四半期の須恵器坏、高台付壙が出土している。

第21号土壙 (第34図、第35図16～22)

H-10区に位置する。第5号住居跡内にあり、第6号住居跡、第33・48号土壙と重複する。第33号土壙より新しく、第6号住居跡、第48号土壙より古い。不整形を呈し、底面は凹凸がある。長径2.48m×短径1.74m×深さ0.19mを測る。

遺物は8世紀終末の土師器坏が混入するが、9世紀第3四半期の須恵器蓋、坏、高台付壙、土師器甕が出土している。

第22号土壙 (第34図、第35図23～26)

H-10区に位置する。第6号住居跡と重複し、住居跡より新しい。不整形を呈し、底面は皿状を呈する。長径1.25m×短径1.20m×深さ0.42mを測る。

遺物は9世紀後半代の須恵器坏、皿、高台付壙が出土している。

第23号土壙 (第34図)

L-11区に位置する。第12号住居跡内にあり、第39号土壙と重複する。新旧関係は不明である。楕円形で、底面は皿状を呈する。長径1.03m×短径0.95m×深さ0.17mを測る。遺物は出土していない。

第24号土壙 (第36図)

I-10区に位置する。ほぼ円形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径0.80m×短径0.78m×深さ0.37mを測る。遺物は出土していない。

第25号土壙 (第36図)

I-10区に位置する。第26号土壙と重複し、本土壙の方が新しい。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.98m×短径0.86m×深さ0.44mを測る。遺物は出土していない。

第26号土壙 (第36図)

I-10区に位置する。第25号土壙と重複し、本土壙の方が古い。楕円形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径0.76m×短径0.65m×深さ0.28mを測る。遺物は出土していない。

第27号土壙 (第36図)

J-11区に位置する。第28号土壙と重複し、本土壙の方が古い。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.45m×短径0.40m×深さ0.18mを測る。遺物は出土していない。

第28号土壙 (第36図)

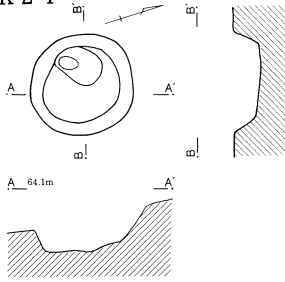
J-11区に位置する。第27号土壙と重複し、本土壙の方が新しい。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.93m×短径0.89m×深さ0.25mを測る。遺物は出土していない。

第29号土壙 (第36図)

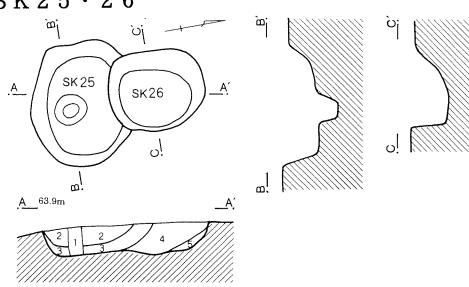
J-11区に位置する。第30号土壙と重複し、本土壙

第36図 土壌(3)

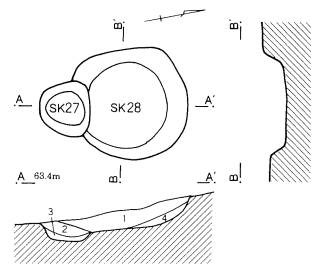
SK 2 4



SK 2 5・2 6



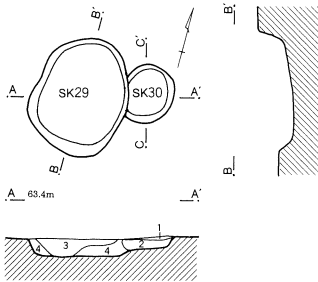
SK 2 7・2 8



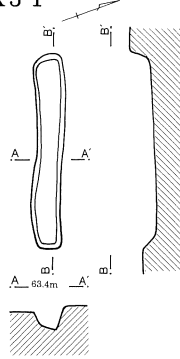
- 1 暗褐色土 粘土ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 白色バミスを多量、焼土粒子を微量含む。
- 3 暗茶褐色土 粘土ブロックを少量含む。
- 4 茶褐色土 ローム塊を主体とし、暗茶褐色土が混じる。
- 5 灰茶褐色土 粘土塊と同粒子を多量に含む。

- 1 暗褐色土 白色バミスを多量に含む。
- 2 黒褐色土 粘土粒子を少量含む。
- 3 暗茶褐色土 粘土粒子を少量含む。
- 4 暗茶褐色土 粘土ブロックを少量含む。

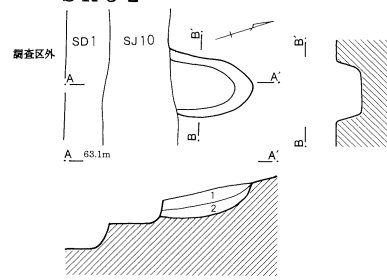
SK 2 9・3 0



SK 3 1



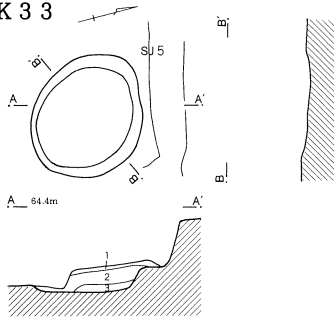
SK 3 2



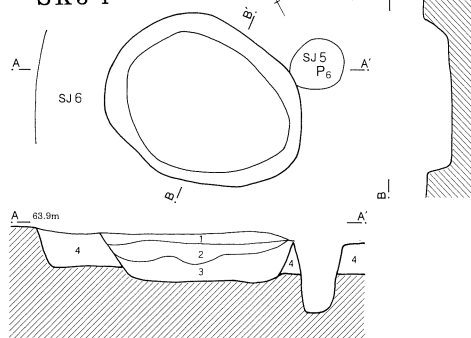
- 1 暗褐色土 焼土粒子を少量含む。
- 2 暗茶褐色土 粘土粒子と白色バミスを多量に含む。
- 3 暗褐色土 白色バミスを多量に、焼土粒子を少量含む。
- 4 暗茶褐色土 白色バミスと粘土粒子を多量に含む。

- 1 暗褐色土 白色バミスを多量、焼土粒子を少量含む。
- 2 暗茶褐色土 粘土粒子と焼土粒子を少量含む。

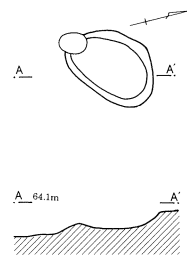
SK 3 3



SK 3 4



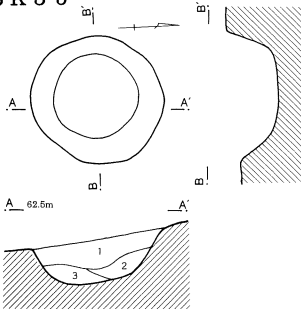
SK 3 7



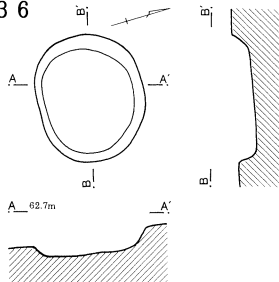
- 1 暗茶褐色土 粘土と焼土ブロックを少量含む。
- 2 暗灰褐色土 粘土と焼土ブロックを多量含む。
- 3 暗茶褐色土 粘土粒子を多量に含む。

- 1 灰褐色土 粘土ブロックと焼土粒子を少量含む。
- 2 暗灰褐色土 焼土ブロックと粘土粒子を少量含む。
- 3 暗茶褐色土 粘土粒子を少量含む。
- 4 暗灰褐色土 粘土ブロックを大量に含む。

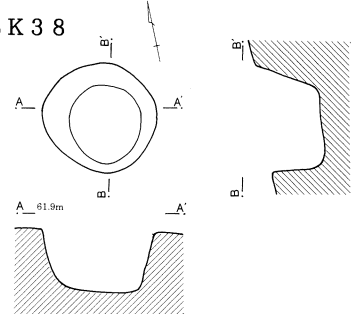
SK 3 5



SK 3 6



SK 3 8

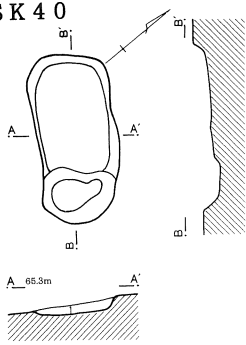


- 1 暗褐色土 炭化物粒子、焼土粒子を少量含む。
- 2 暗茶褐色土 ロームブロックを少量含む。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック主体。



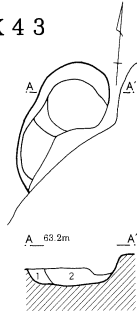
第37図 土壌(4)

SK 40



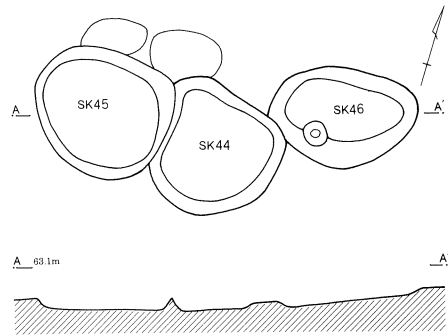
1 暗茶褐色土 粘土ブロックを多量に、焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。

SK 43

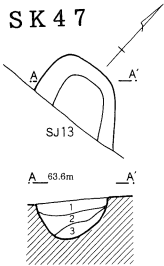


1 暗黄褐色土 貼り床。
2 暗灰褐色土 粘土ブロックを多量、焼土ブロックを少量含む。

SK 44・45・46

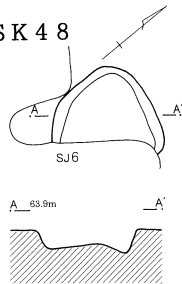


SK 47

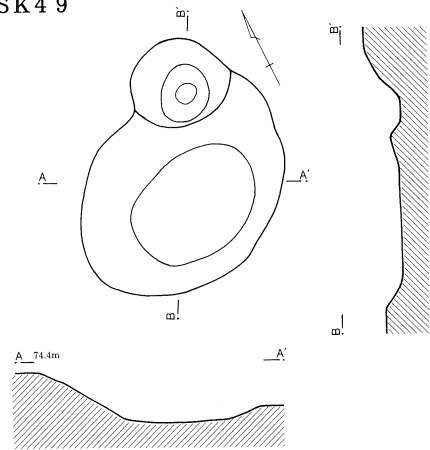


1 灰茶褐色土 粘土ブロックを少量含む。
2 暗灰褐色土 粘土ブロックと白色バミスを多量に含む。
3 灰褐色土 粘土ブロックを大量に含む。

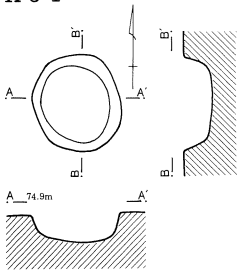
SK 48



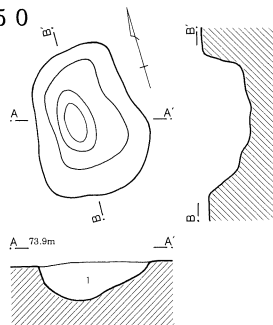
SK 49



SK 51

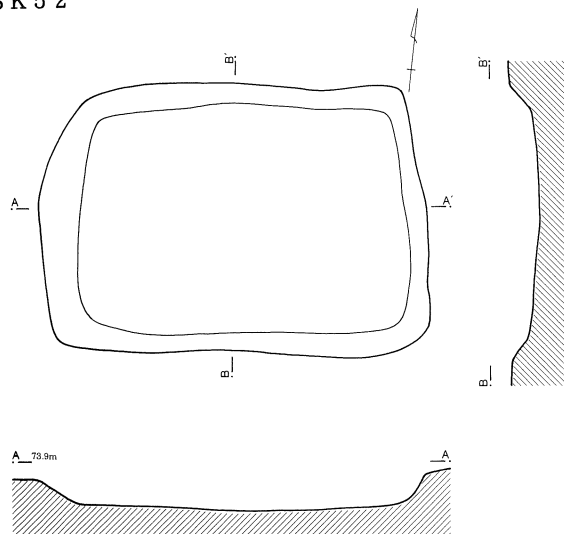


SK 50

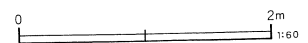
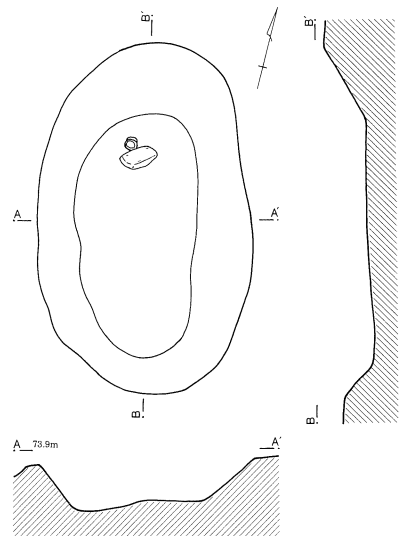


1 褐色土 ローム粒、地山ブロックをまばらに含む。

SK 52



SK 53



の方が古い。楕円形を呈し、底面は平坦である。長径0.92m×短径0.67m×深さ0.28mを測る。遺物は出土していない。

第30号土壙 (第36図)

J-11区に位置する。第29号土壙と重複し、本土壙の方が新しい。楕円形を呈し、底面は平坦である。長径0.47m×短径0.40m×深さ0.17mを測る。遺物は出土していない。

第31号土壙 (第36図)

I~J-11区にまたがって位置する。長方形の溝状を呈し、底面は平坦である。長径1.53m×短径0.22m×深さ0.25mを測る。遺物は出土していない。

第32号土壙 (第36図)

I-11区に位置する。第1号溝と重複し、本土壙の方が古い。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.66m×短径0.45m×深さ0.29mを測る。遺物は出土していない。

第33号土壙 (第36図)

H-10区に位置する。第5号住居跡内にあり、第21号土壙と重複し、本土壙の方が古い。楕円形を呈し、底面は平坦である。長径1.05m×短径0.82m×深さ0.25mを測る。遺物は出土していない。

第34号土壙 (第36図、第35図27~31)

H-10区に位置する。第6号住居跡と重複し、本土壙の方が新しい。楕円形を呈し、底面は平坦である。長径1.63m×短径1.22m×深さ0.38mを測る。

遺物は8世紀終末の底部周辺ヘラケズリのある須恵器杯が混じるが、大半は9世紀後半の須恵器杯が出土している。

第35号土壙 (第36図)

L-11区に位置する。ほぼ円形を呈し、底面は皿状

を呈する。長径1.63m×短径1.22m×深さ0.38mを測る。遺物は出土していない。

第36号土壙 (第36図)

L-11区に位置する。楕円形を呈し、底面は平坦である。長径1.01m×短径0.85m×深さ0.21mを測る。遺物は出土していない。

第37号土壙 (第36図)

J-10区に位置する。第11号土壙と重複し、新旧関係は不明である。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.85m×短径0.49m×深さ0.15mを測る。遺物は出土していない。

第38号土壙 (第36図)

K~L-11区に位置する。第15号住居跡の覆土内に構築される。ほぼ円形を呈し、底面は平坦である。長径0.90m×短径0.85m×深さ0.48mを測る。遺物は出土していない。

第39号土壙 (第34図、第39図1~5)

L-11区に位置する。第12号住居跡内にあり、第23・41号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.98m×短径0.65m×深さ0.18mを測る。

遺物は9世紀前半と思われる土師器甕と、9世紀後半と思われる土師器杯、須恵器杯、高台付壺が出土している。

第40号土壙 (第37図)

J-10区に位置する。第17号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。楕円形を呈し、底面は凹凸がある。長径1.33m×短径0.65m×深さ0.26mを測る。遺物は出土していない。

第41号土壙 (第34図、第39図6)

L-11区に位置する。第12号住居跡内にあり、第39・

42号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径1.04m×短径0.67m×深さ0.21mを測る。

遺物は9世紀後半と思われる土師器甕の口縁部破片が出土している。

第42号土壙 (第34図)

L～M-11区に位置する。第12号住居跡内にあり、第41号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.70m×短径0.63m×深さ0.21mを測る。遺物は出土していない。

第43号土壙 (第37図)

L-11区に位置する。第12号住居跡と重複するが、本土壙の方が新しい。不整形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径1.05m×短径0.53m×深さ0.17mを測る。遺物は出土していない。

第44号土壙 (第37図)

L-11区に位置する。第13号住居跡内にあり、第45・46号土壙と重複し、第45号土壙との新旧関係は不明で、第46号土壙とは本土壙の方が新しい。不整形を呈し、底面は皿状を呈する。長径1.10m×短径1.07×深さ0.16mを測る。遺物は出土していない。

第45号土壙 (第37図、第39図7、8)

L-11区に位置する。第13号住居跡内にあり、第44号土壙と重複するが新旧関係は不明である。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径1.12m×短径1.05m×深さ0.11mを測る。

遺物は鉄製刀子の先端部と鏃が出土している。

第46号土壙 (第37図、第39図9)

L-11区に位置する。第13号住居跡内にあり、第44号土壙と重複し、本土壙の方が古い。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径1.17m×短径0.77m×深さ0.19mを測る。

遺物は8世紀後半の、径の小さい須恵器蓋が出土している。

第47号土壙 (第37図)

L-11区に位置する。第13号住居跡と重複し、本土壙の方が古い。長方形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.75m×短径0.47m×深さ0.38mを測る。遺物は出土していない。

第48号土壙 (第37図、第39図10～12)

H-10区に位置する。第5号住居跡内にあり、第6号住居跡、第21号土壙と重複し、第21号土壙より新しく、第6号住居跡より古い。楕円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.89m×短径0.58m×深さ0.23mを測る。

遺物は9世紀末の須恵器杯、高台付皿が出土している。

第49号土壙 (第37図)

M-3区に位置する。第2号溝と重複するが、新旧関係は不明である。楕円形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径2.02m×短径1.47m×深さ0.38mを測る。遺物は出土していない。

第50号土壙 (第37図)

J-2区に位置する。長方形を呈し、底面は凹凸がある。長径1.18m×短径0.75m×深さ0.33mを測る。遺物は出土していない。

第51号土壙 (第37図)

K-2区に位置する。ほぼ円形を呈し、底面は平坦である。長径0.75m×短径0.67m×深さ0.23mを測る。遺物は出土していない。

第52号土壙 (第37図)

K-2区に位置する。第7号溝と重複するが、新旧関係は不明である。長方形を呈し、底面は皿状を呈す

る。長径3.08m×短径2.08m×深さ0.36mを測る。遺物は出土していない。

第53号土壙 (第37図)

I-2~3区にかけて位置する。第2号溝と重複するが、新旧関係は不明である。楕円形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径2.74m×短径1.69m×深さ0.46mを測る。

遺物は、近世陶磁器が出土している。

第54号土壙 (第38図)

I-4区に位置する。第3号溝と重複するが、新旧関係は不明である。長方形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径0.96m×短径0.69m×深さ0.67mを測る。遺物は出土していない。

第55号土壙 (第38図)

J-4区に位置する。第3号溝と重複するが、新旧関係は不明である。長方形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.90m×短径0.67m×深さ0.22mを測る。遺物は出土していない。

第56号土壙 (第38図)

I-4区に位置する。第3号溝と重複するが、新旧関係は不明である。長方形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径0.96m×短径0.69m×深さ0.67mを測る。遺物は出土していない。

第57号土壙 (第38図、第39図13~16)

K~L-12区にかけて位置する。第15号住居跡と重複し、本土壙の方が新しい。楕円形を呈し、底面は平坦である。長径0.90m×短径0.72m×深さ0.20mを測る。

遺物は、9世紀後半の須恵器坏が出土している。

第58号土壙 (第38図)

J-6~7区にかけて位置する。長方形を呈し、底面

は皿状を呈する。長径0.90m×短径0.61m×深さ0.22mを測る。遺物は出土していない。

第59号土壙 (第38図)

J-6区に位置する。不整形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径0.90m×短径0.65m×深さ0.21mを測る。遺物は出土していない。

第60号土壙 (第38図、第39図)

L-12区に位置する。第15号住居跡内にあり、貯蔵穴と思われる土壙と重複する。楕円形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径1.56m×短径0.73m×深さ0.38mを測る。

遺物は、9世紀末以降の「コ」字状口縁が退化した土師器甕と、須恵器坏、高台付壙が出土している。

第61号土壙 (第38図、第39図23)

L-11~12区に位置する。第15号住居跡内にあり、住居跡より新しい。ほぼ円形を呈し、底面は皿状を呈する。長径0.61m×短径0.55m×深さ0.24mを測る。

遺物は、9世紀末以降の「コ」字状口縁が退化した土師器甕が出土している。

第62号土壙 (第38図)

K-5区に位置する。長方形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径2.60m×短径1.28m×深さ0.49mを測る。遺物は出土していない。

第63号土壙 (第38図)

L-5区に位置する。長方形を呈し、ピットを持ち、底面は凹凸を持つ。長径1.96m×短径1.15m×深さ0.35mを測る。遺物は出土していない。

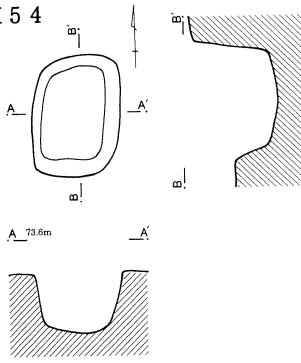
第64号土壙 (第38図、第39図24)

L-5区に位置する。不整形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径1.17m×短径0.85m×深さ0.21mを測る。

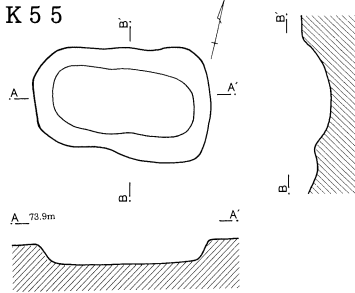
遺物は、7世紀末に位置付けられる土師器長甕の胴

第38図 土壇(5)

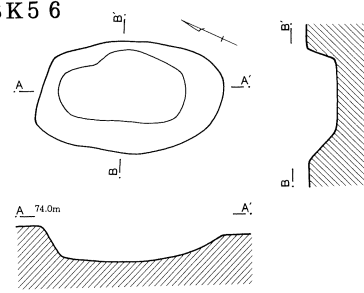
SK 54



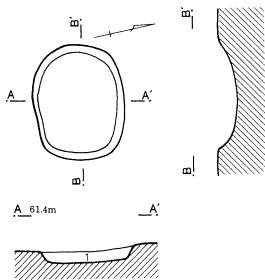
SK 55



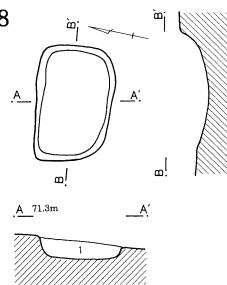
SK 56



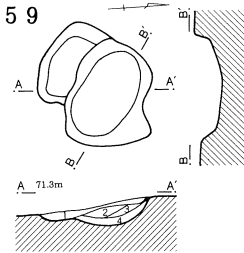
SK 57



SK 58



SK 59

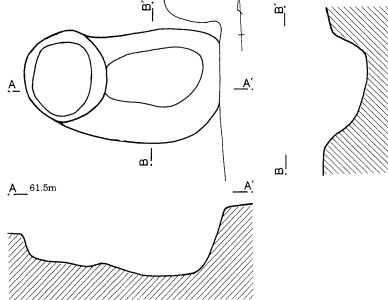


1 暗茶褐色土 焼土ブロックを多く含み、炭化物も多く含まれる。

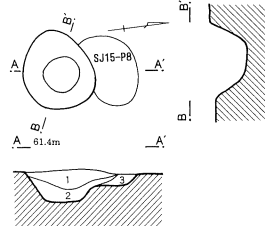
1 暗黄褐色土 炭化物を大量に、焼土ブロックを少量含む。

1 暗褐色土 焼土粒子を含む。
2 暗灰黄色土 焼土と炭化物を多量に含む。
3 暗灰褐色土 焼土粒子を少量含む。
4 暗緑灰色土 粘土ブロックを多量に、焼土ブロックを少量含む。

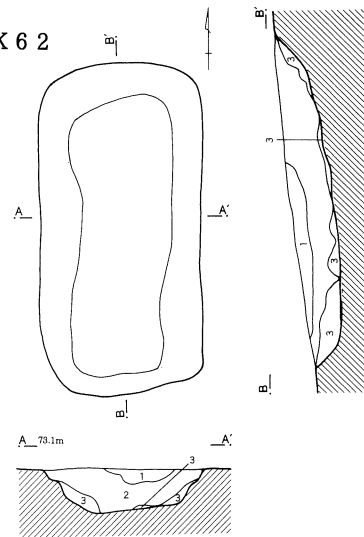
SK 60



SK 61



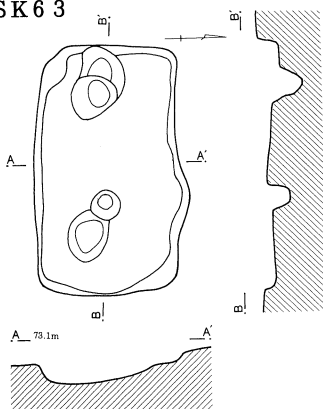
SK 62



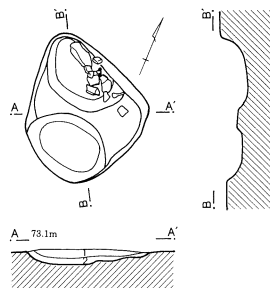
1 暗赤褐色土 焼土と炭化物を多く含む。
2 暗茶褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む。
3 暗茶褐色土 白色バミスを少量含む。

1 暗灰褐色土 炭化物粒子と粘土ブロックを微量含む。
2 暗灰黄色土 粘土ブロックを少量含む。
3 暗黄褐色土 粘土主体の壁面崩落土。

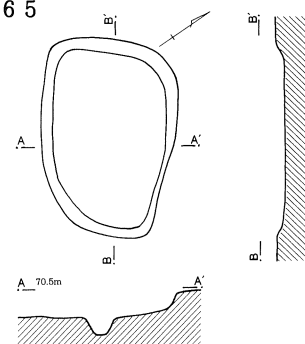
SK 63



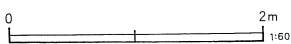
SK 64



SK 65

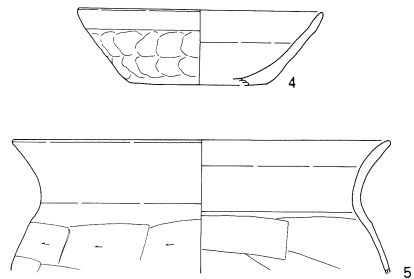
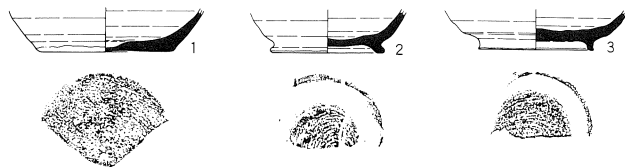


1 暗灰褐色土 焼土ブロックを多量に含む。
2 暗茶褐色土 焼土ブロックを多量に含む。
3 暗灰黄色土 焼土ブロックを少量含む。

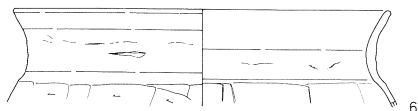


第39図 土壙出土遺物(2)

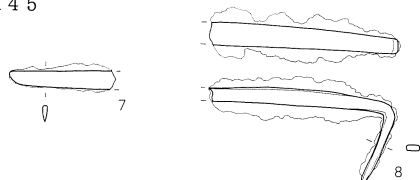
SK 39



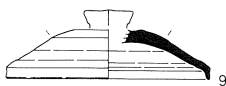
SK 41



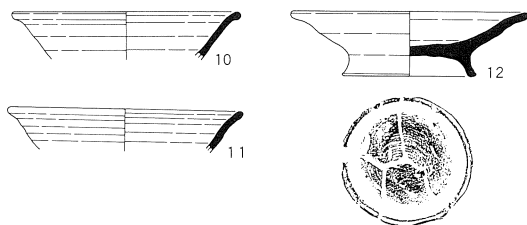
SK 45



SK 46

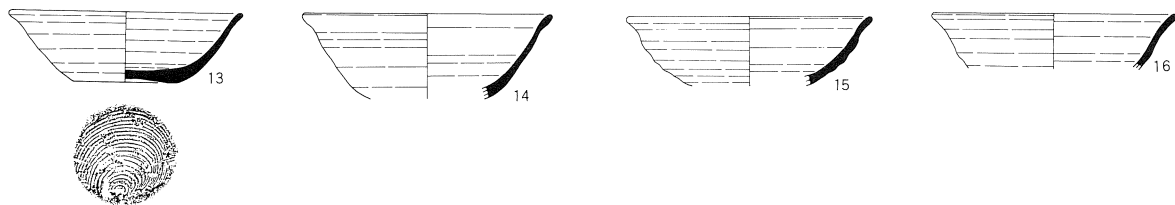


SK 48

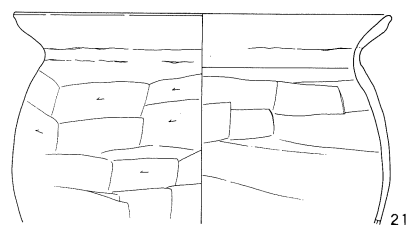
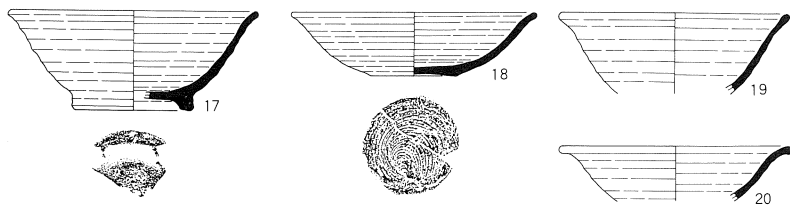


0 10cm 1:3

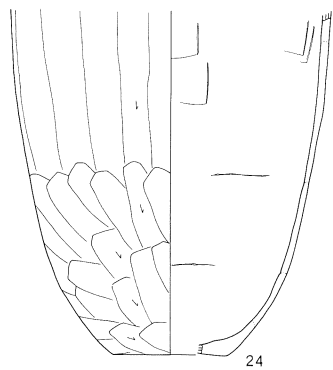
SK 57



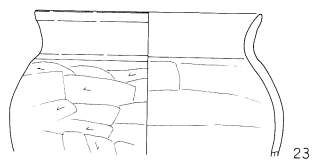
SK 60



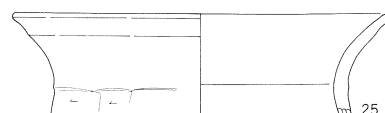
SK 64



SK 61



SK 66



0 10cm 1:4

第39号土壇出土遺物観察表 (第39図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高台付埴			(6.1)	A B D	普通	灰白	25	
2	高台付埴			(6.0)	A D E	不良	明黄褐	15	
3	坏			(7.0)	A D	不良	にぶい黄橙	15	
4	坏	(13.0)	4.0	(7.2)	A B C F	普通	褐	20	
5	甕	(20.0)			A B C F	不良	橙	20	

第41号土壇出土遺物観察表 (第39図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
6	甕	(20.0)			A B C E F片	普通	にぶい褐	15	

第45号土壇出土遺物観察表 (第39図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
7	刀子	現存長4.2cm			刃幅最大0.7cm	背幅0.2cm	重さ3.4g	—	刀子切先と推定される
8	鋸	現存長7.5cm			幅最大0.9cm	厚さ最大0.5cm	重さ22.5g	—	片方の脚部欠失

第46号土壇出土遺物観察表 (第39図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
9	蓋	(10.6)			A針	良好	灰	45	

第48号土壇出土遺物観察表 (第39図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
10	坏	(11.8)			A C	普通	灰白	10	
11	坏	(12.2)			A D	普通	灰	10	
12	高台付皿	(12.6)	3.3	7.0	A	普通	灰白	45	

第57号土壇出土遺物観察表 (第39図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
13	坏	12.4	3.7	5.6	A B E片	普通	にぶい黄橙	95	
14	坏	(13.3)			A	普通	灰	10	
15	坏	(13.0)			A B	普通	オリーブ黒	10	
16	坏	(13.0)			A F	普通	黄灰	10	

第60号土壇出土遺物観察表 (第39図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
17	坏	(12.8)	3.3	(4.6)	A C E F	普通	にぶい黄橙	25	
18	高台付埴	(13.0)	5.2	6.2	A D F片	普通	橙	65	
19	坏	(12.0)			A B C針	普通	灰白	35	
20	坏	(12.0)			A B C	普通	にぶい黄橙	15	
21	甕	(15.0)			A B C F	不良	橙	15	
22	甕	(20.0)			A B C F	普通	褐	15	

第61号土壇出土遺物観察表 (第39図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
23	甕	(12.0)			A B C F	不良	橙	15	

第64号土壇出土遺物観察表 (第39図)

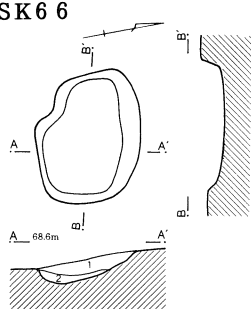
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
24	甕			6.0	A C E F	不良	褐	60	

第66号土壇出土遺物観察表 (第39図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
25	甕	(20.0)			A B C	普通	にぶい橙	10	

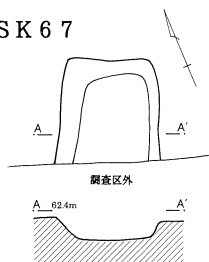
第40図 土壌(6)・井戸跡

SK 6 6

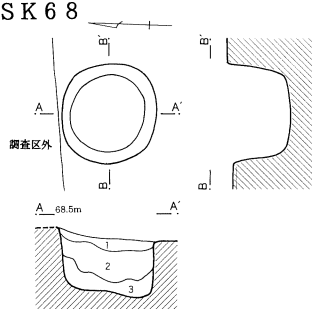


- 1 暗灰褐色土 粘土ブロックを少量含む。
- 2 暗褐色土 粘土ブロックを大量含む。

SK 6 7

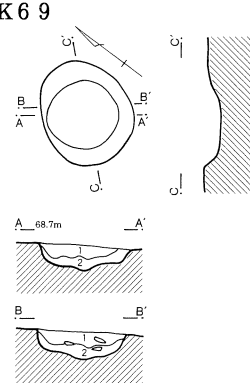


SK 6 8



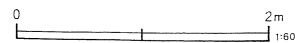
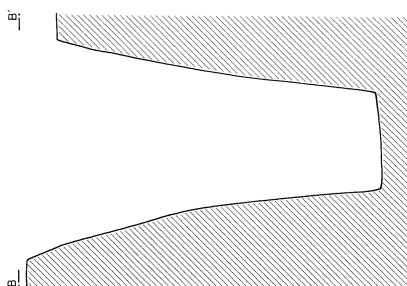
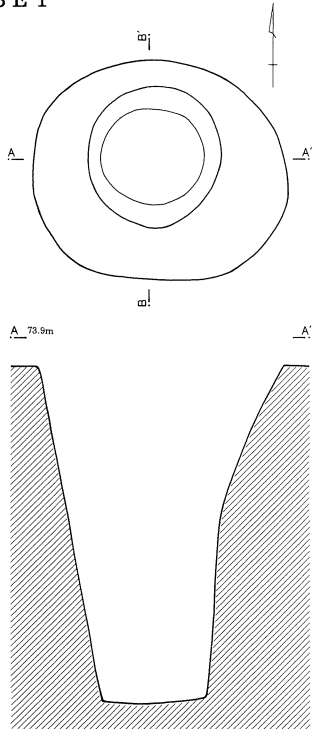
- 1 暗褐色土 炭化物、焼土粒子を微量含む。
- 2 褐色土 炭化物少量含む。
- 3 褐色土 白色微粒子少量含む。

SK 6 9



- 1 暗褐色土 炭化物少量含む。
- 2 暗赤褐色土 焼土と炭粒子を多く含む。

SE 1



下半部が出土している。

第65号土壙 (第38図)

H-7区に位置する。不整形を呈し、底面は凹凸を持つ。長径1.54m×短径1.05m×深さ0.32mを測る。遺物は出土していない。

第66号土壙 (第40図、第39図25)

I-8区に位置する。不整形を呈し、底面は皿状を呈する。長径1.02m×短径0.67m×深さ0.23mを測る。

遺物は、7世紀末から8世紀初頭の甕の口縁部破片が出土した。

第67号土壙 (第40図)

H-10区に位置する。第23号住居跡の中にあり、住

居跡の覆土中より切り込んでいる。南側半分が調査区外に当たる。長方形を呈し、底面は平坦である。長径0.83m×短径0.77m×深さ0.17mを測る。遺物は出土していない。

(4) 井戸跡

第1号井戸（第40図）

L-1～2区にかけて存在する。遺跡の中で、最も標高の高い尾根上部分から、北側の斜面に移行する部分に構築されており、開口部の形状はやや楕円形を呈する。開口部から深さ約1mを過ぎたあたりまで、ロート状に窄まりながら円形の形状となり、それより深くは筒型の形状となって底部に至る。遺物は出土していない。長径2.01m×短径1.71m×深さ2.62mを測る。

遺跡内で、井戸は1基のみしか検出されなかった。また、検出された場所が尾根の頂部であることから、

(5) ピット状遺構

本遺跡は東西方向に伸びる丘陵部の尾根部分から、斜面にかけて形成されている集落遺跡であり、住居跡等の遺構が尾根筋に沿った東西方向に主軸方向を採るのは必然的なことと考えられる。また、斜面ゆえに表土の流出も著しく、住居跡の殆どが「ちりとり」状にしか残存しておらず、当然かなりの住居跡等の遺構が流れ去っていることが考えられる。従って、住居跡等の痕跡も柱穴のみ存在している場合があるが、ここで扱うピットの中にも、住居跡の柱穴が含まれている可能性が高い。しかし、その組列を認識し得なかったも

(6) 溝跡

第1号溝（第44図）

H-10～K-11区にかけての調査区際に存在する。第8・10・23号住居跡と重複するが、いずれの遺構よりも新しく構築されている。第15号住居跡とも重複している可能性があるが、明確にし得なかった。溝はK-11区に向かって傾斜して掘られており、溝幅の全容が

第68号土壙（第38図）

A-5区に位置する。ほぼ円形で、底面は若干凹凸を持つ。長径0.79m×短径0.75m×深さ0.56mを測る。遺物は出土していない。

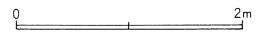
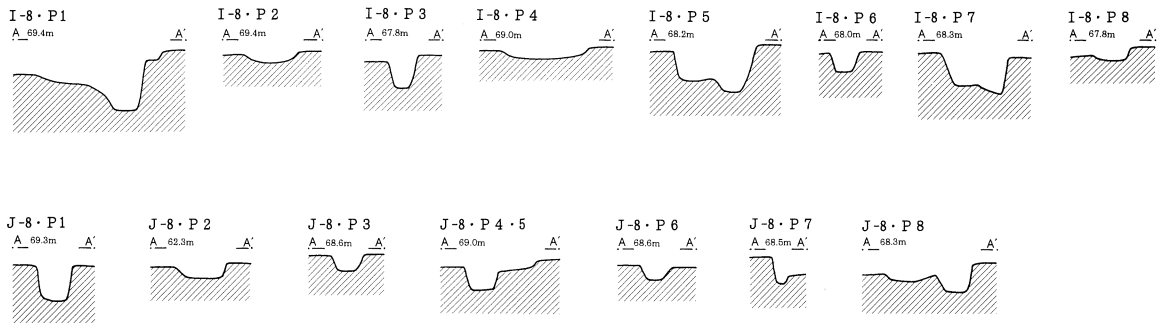
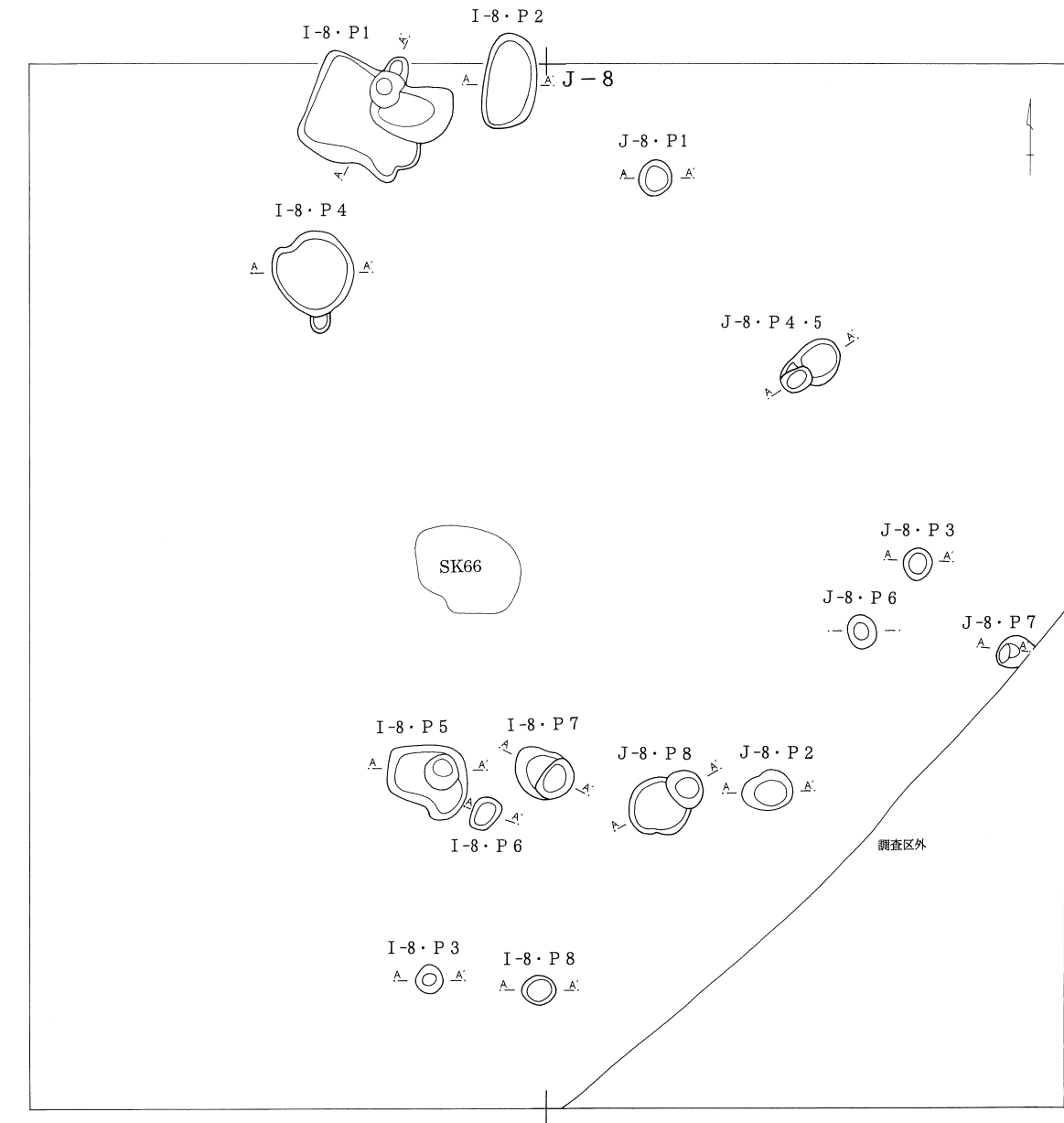
奈良・平安時代の井戸とするには疑問が残る。井戸が検出された頂部付近は掘割状の溝が多数検出され、第7号溝で囲まれた範囲内は、地山を削平した痕跡がある。また、溝内及び溝区画内からは近世の陶磁器破片が出土しており、この場所が近世に民家として使用されていた可能性が非常に高い。この井戸も地下水を吸い上げる井戸ではなく、雨水等の天水を溜めるための井戸としての機能が推定される。従って、近世の民家と組み合せて、天水を溜めるための井戸として機能していたものと推定されるのである。

のをピットして取り上げた。また、掘立柱建物跡の存在も予想されるが、東西方向に並ぶピット列は検出されなかった。

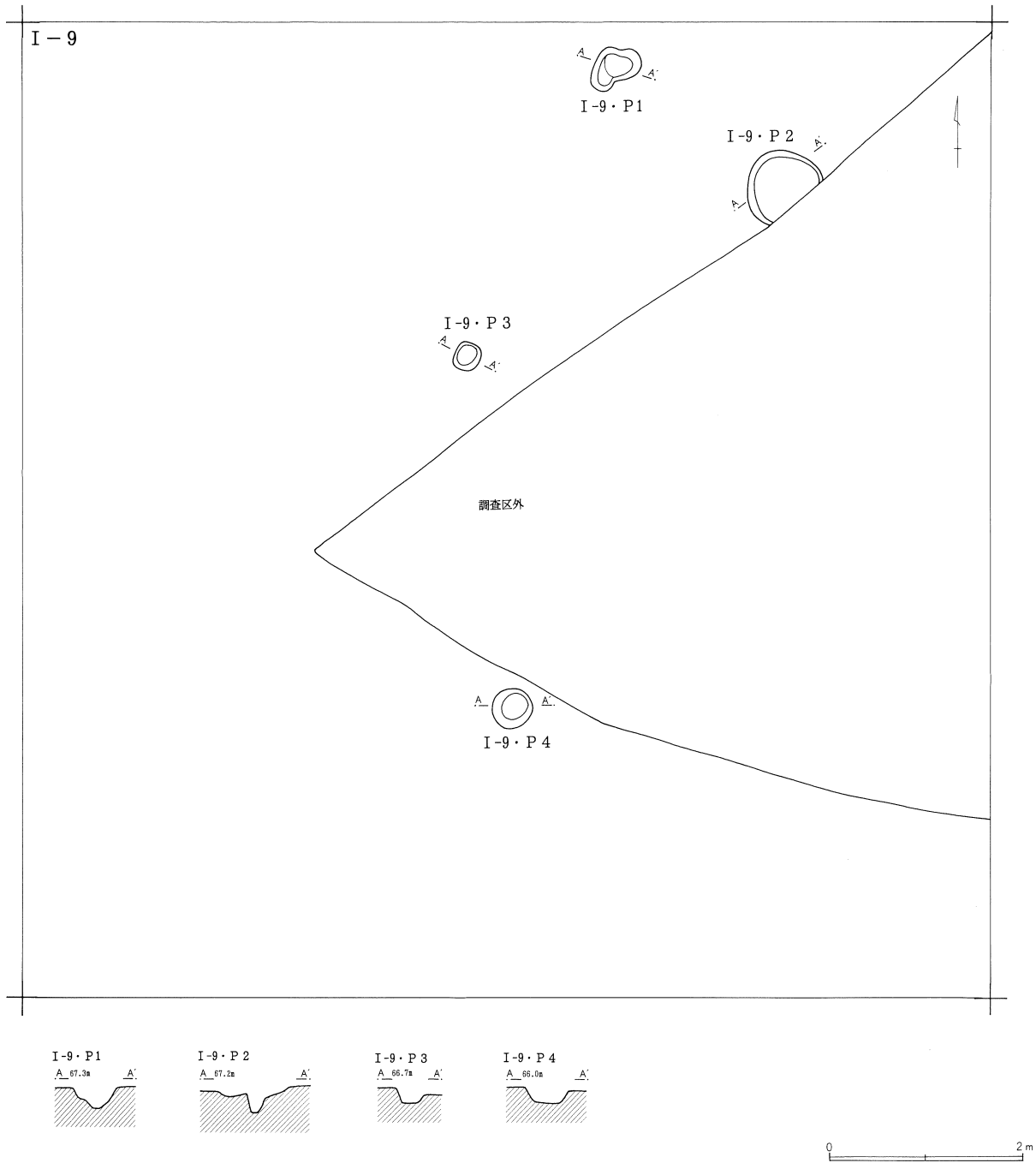
ピットが集中的に存在する地点は、I～J-8区、I-9区、J-11区であった。ピットが組列として認識可能なものは、I～J-8区にまたがって存在するピット群であるが、間尺等が揃いであり、調査区外にまたがるため、全容を認識し得ない。大半は近世以降の所産であるか、耕作または開墾時の抜根跡と思われる。

現れていないので、性格等は不明と言わざるを得ない。溝の覆土は茶褐色土の地山流出土より若干色調が黒味を帯びているだけで、識別が難しかった。溝内からほぼ住居跡群と同時期の遺物が出土しており、近年中に掘られた溝ではないことは明らかであった。しかし、この溝が斜面裾部に存在する町道に沿った形で存在し

第41図 ピット(I)



第42図 ピット(2)

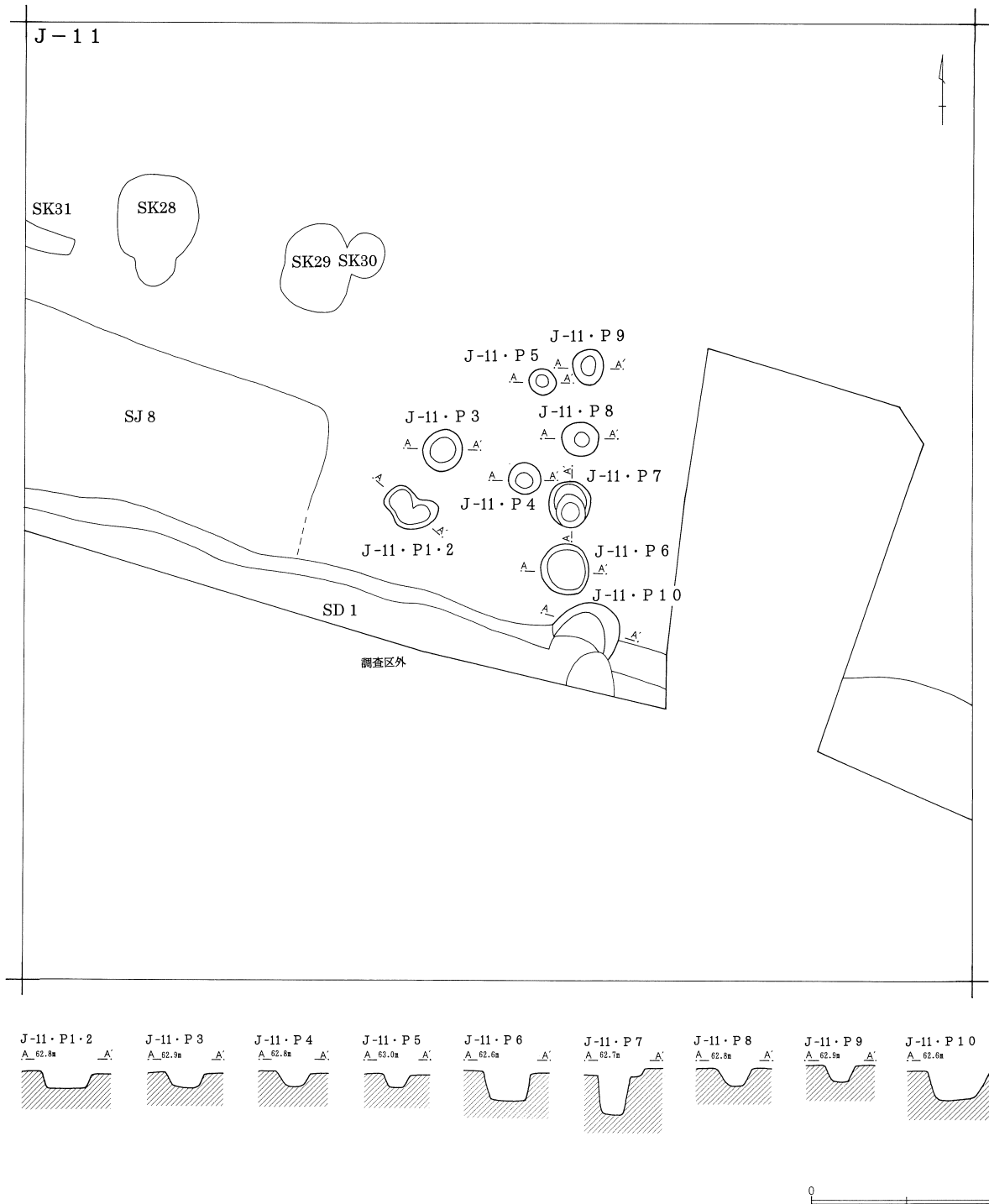


ていることも事実であり、何時の時点で形成された溝であるのかは明らかにし得ない。町道自体も古い可能性があり、斜面崩落土避けの溝として掘られていた可能性もある。J-11区の溝底部には柱穴状のピットが存しており、堀の付属施設として機能していた可能性もある。

第2号溝 (第45図)

J-4～M-3区にかけて位置する。第3号・4号溝と重複、もしくは一体化することも考えられるが、それぞれ、幅、深さが異なる。第2号溝は約3 m弱の幅を均一的に持ち、深さが20～30cmで、底面が平坦になっている。最も高い尾根の上に、尾根に沿って構築さ

第43図 ピット(3)



れているため、溝というよりその形状から道の様な機能が推測される。また、第3号溝や、第4号溝との新旧関係は明瞭にし得なかったが、形状や堀の深さから、第2号溝の方が古いものと推定される。

第3号溝 (第45図)

H-4~J-4区にかけて位置する。第3号溝は全体的に掘割状を呈することから、第2号溝とは別な溝と考えられるが、第2号溝の西側にあり、一部同様な形状を呈する部分が存在するため、第2号溝が第3号

第4表 大木前遺跡土壌一覽表

SK 番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
1	D6	85.0	83.0	47.0
2	D6	93.0	78.0	40.5
3	D6	63.0	58.0	33.5
4	E6	54.0	42.0	25.0
5	E7	34.0	25.0	19.0
6	E7	19.0	17.0	18.0
7	D7	45.0	33.0	52.0
8	D8	62.0	62.0	75.5
9	D8	76.0	62.0	63.0
10	D8	48.0	41.0	60.5
11	D8	35.0	30.0	23.0
12	D8	55.0	42.0	95.0
13	D7	81.0	53.0	107.5
14	D8	94.0	70.0	114.5
15	D8	51.0	45.0	68.5
16	E9	75.0	69.0	47.5
17	F9	72.0	65.0	36.5
18	H10	147.0	(90.0)	33.0
19	H10	120.0	(83.0)	30.0
20	H10	178.0	75.0	37.0
21	H10	248.0	174.0	19.0
22	H10	125.0	102.0	42.5
23	L11	103.0	95.0	16.7
24	I10	80.0	78.0	37.5
25	I10	98.0	(86.0)	44.0
26	I10	76.0	65.0	28.5
27	J11	45.0	40.0	18.0
28	J11	93.0	89.0	25.5
29	J11	92.0	67.0	28.0
30	J11	47.0	40.0	17.5
31	I11・J11	153.0	22.0	25.0
32	I11	(66.0)	45.0	29.5
33	H10	105.0	82.0	25.1
34	H10	163.0	122.0	38.4
35	L11	105.0	101.0	43.5
36	L11	101.0	85.0	21.4
37	J10	85.0	49.0	14.8
38	K11・L11	90.0	85.0	48.0
39	L11	98.0	(65.0)	18.0
40	J10	133.0	65.0	26.0
41	L11	104.0	67.0	21.7
42	L11・M11	70.0	63.0	21.5
43	M11	105.0	(53.0)	17.0
44	L11	110.0	(107.0)	15.7
45	L11	112.0	105.0	10.8
46	L11	117.0	77.0	18.8
47	L11	75.0	(47.0)	37.7
48	H10	89.0	(58.0)	23.0
49	M3	202.0	147.0	38.0
50	J2	118.0	75.0	33.0

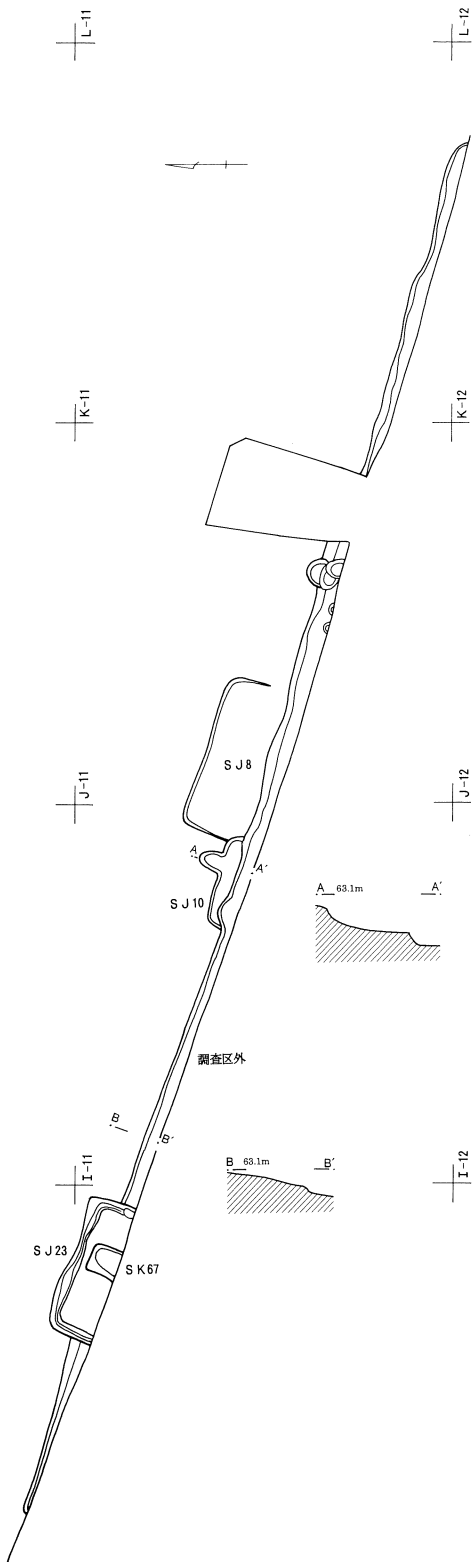
SK 番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
51	K2	75.0	67.0	23.0
52	K2	308.0	208.0	36.0
53	I2	274.0	169.0	46.0
54	I4	96.0	69.0	67.0
55	J4	90.0	67.0	21.5
56	M3	144.0	87.0	29.0
57	K12・L12	90.0	72.0	19.5
58	J6	90.0	61.0	22.0
59	J6	99.0	65.0	21.0
60	L12	156.0	73.0	38.3
61	L11・L12	61.0	55.0	24.5
62	K5	260.0	128.0	49.0
63	L5	196.0	115.0	35.0
64	L5	117.0	85.0	21.5
65	H7	154.0	105.0	32.5
66	I8	102.0	67.0	23.0
67	H10	83.0	77.0	17.0
68	A5	79.0	75.0	56.5
69	A5	83.0	71.0	22.0

第5表 大木前遺跡グリットピット一覽表

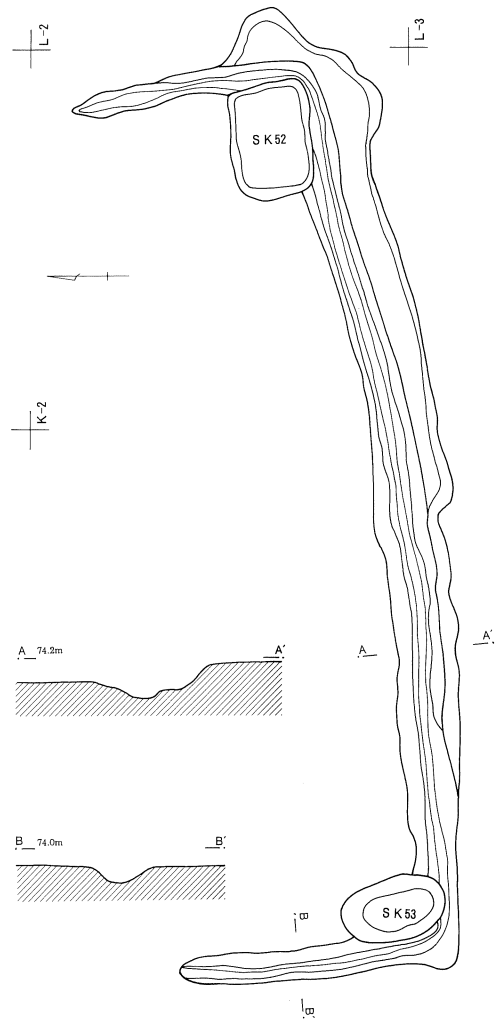
Pit 番号	位置	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	形状
1	I8	11.6	11.0	49.5	不整円
2		90.0	48.0	16.2	楕円
3		27.0	27.0	32.0	円
4		98.0	76.0	13.8	円
5		86.0	75.0	41.5	不整円
6		44.0	24.0	16.2	楕円
7		58.0	42.0	39.0	楕円
8		33.0	27.0	12.6	円
1	I9	46.0	42.0	22.0	不整円
2		74.0	60.0	29.0	半円
3		29.0	26.0	15.3	円
4		42.0	41.0	19.2	円
1	J8	35.0	32.0	33.8	円
2		48.0	37.0	20.7	楕円
3		32.0	28.0	15.8	円
4・5		64.0	30.0	27.6	楕円
6		32.0	28.0	16.8	円
7		33.0	25.0	27.0	円
8		78.0	33.0	26.8	楕円
1・2	J11	53.0	32.0	19.0	不整円
3		45.0	42.0	17.5	円
4		33.0	33.0	18.5	円
5		28.0	27.0	14.5	円
6		53.0	50.0	34.5	円
7		49.0	37.0	51.5	楕円
8		40.0	35.0	22.5	円
9		38.0	31.0	21.7	楕円
10		65.0	41.0	26.5	半円

第44図 溝跡(I)

SD 1

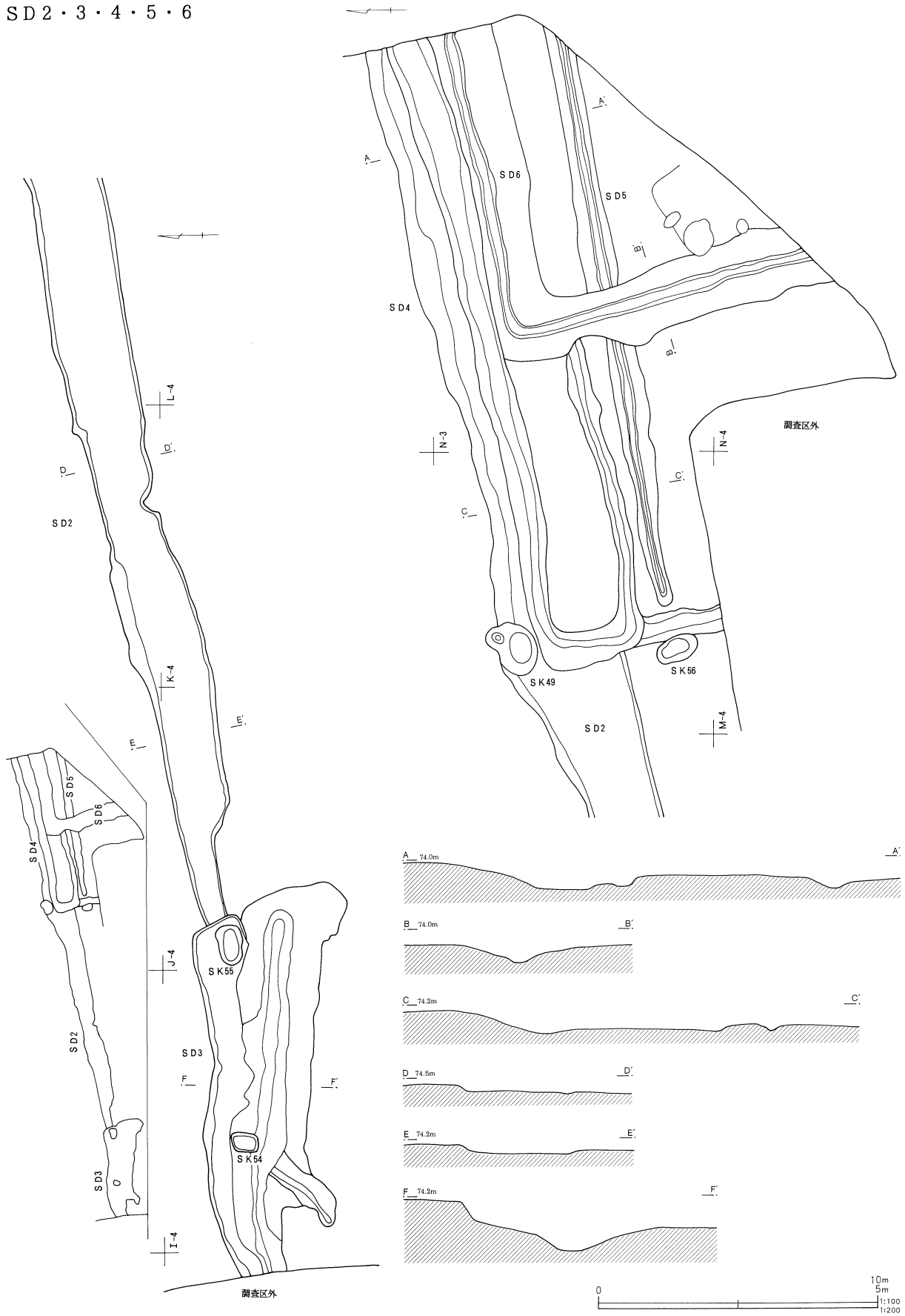


SD 7



第45図 溝跡(2)

SD 2・3・4・5・6



溝部分まで延びていて一部重複している可能性もある。第3号溝は溝の途切れる部分で第55号土壙と、また溝内で第54号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。I-4区で南側から北東方向に走る小さな溝と合流するが、第3号溝として一括した。溝内からは、近世の陶磁器片が少量出土している。

第4号溝 (第45図)

M-3～O-2区にかけて位置する。第2号溝、第6号溝と重複するが、新旧関係は不明である。第2号溝との関係は、第3号溝と同様に、第2号溝の上に第4号溝が構築された様な形状を呈し、第2号溝の一部が存在している様である。第4号溝は幅約1m程の浅い地境的な溝で、M-3区内でU字状に折り返すものと、M-4区方向に折れ曲がるものとで構成される。これ等の溝は第2号溝と平行もしくは直角方向に存在し、規則性がある。

第5号溝 (第45図)

M-3～O-3区にかけて位置する。第4号溝に平行しながら存在する。幅1m～1.5mを保ち、中央部に

箱状のやや深い掘り込みを持つ。第6号溝が直角方向に重複する。新旧関係は不明である。

第6号溝 (第45図)

N-3区を起点に、O-2区とN-4区方向に直角に折れて位置する。第4号溝と第5号溝の間に挟まれて、平行方向に存在するが、N-3区で直角方向に折れ、第5号溝と重複する。新旧関係は不明である。第6号溝は2m前後の幅を持ち、中央部が箱状に深い掘り込みとなっている。

第7号溝 (第44図)

I-2～K-2区にかけて位置する。第2号溝と平行して存在し、両端がI-2区とK-2区で囲む様に直角方向に折れ曲がる。溝は掘割状を呈し、何度となく掘り返されている。両コーナーで第52・第53号土壙と重複するが、新旧関係というよりも、付属施設としての様相が強い。溝の区画内には、焼土跡や、削平面等が確認され、屋敷の構堀と認識される。溝内からは、近世の陶磁器片が出土している。

(7) グリッド出土遺物

a) 縄文土器

大木前遺跡からは、少数ではあるが縄文土器が出土している。殆どが、早期と前期の土器片であり、一括して説明する。

第I群土器 (第46図1～5)

早期の土器群を一括する。1は早期前葉の山形押型文土器である。厚さ約7mm程で、縦位の山形文を施文する。2の「トロトロ石器」が伴うものと思われる。

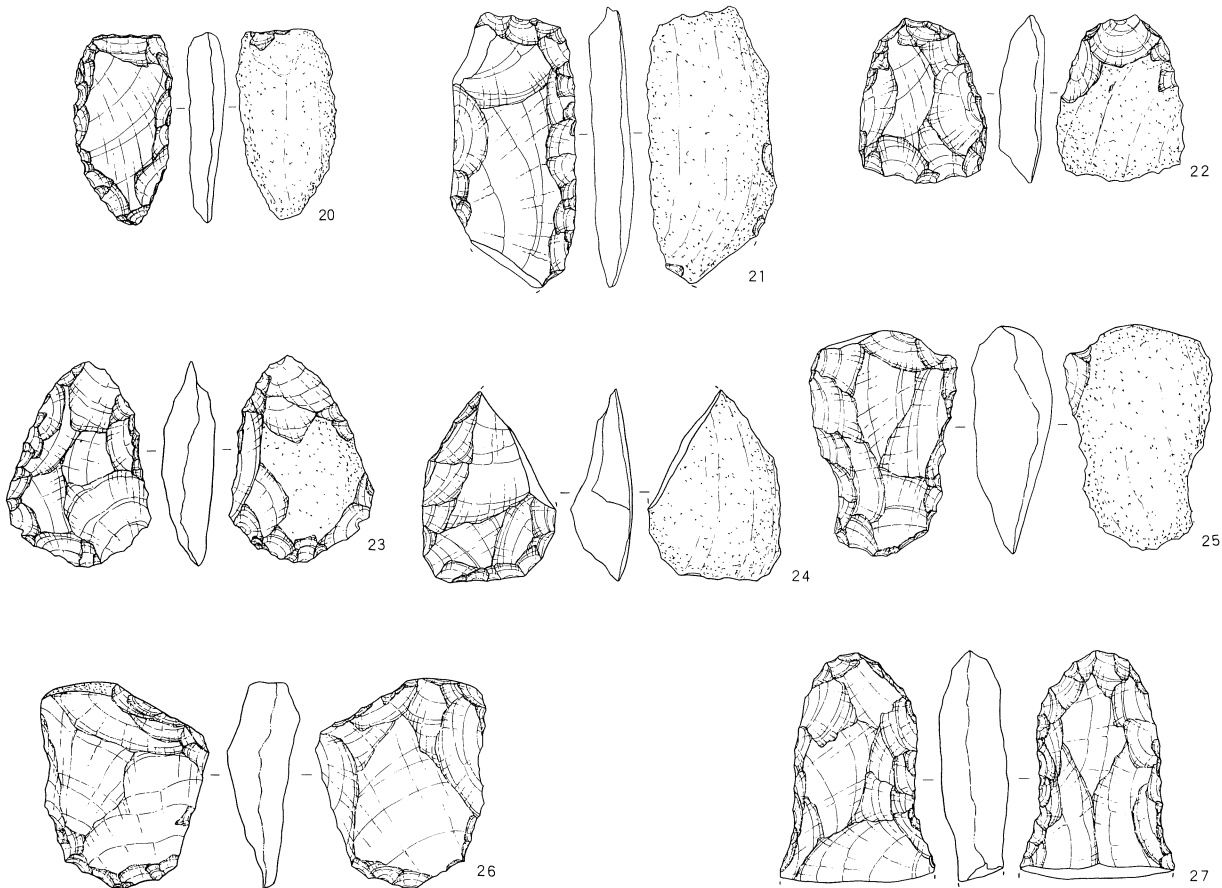
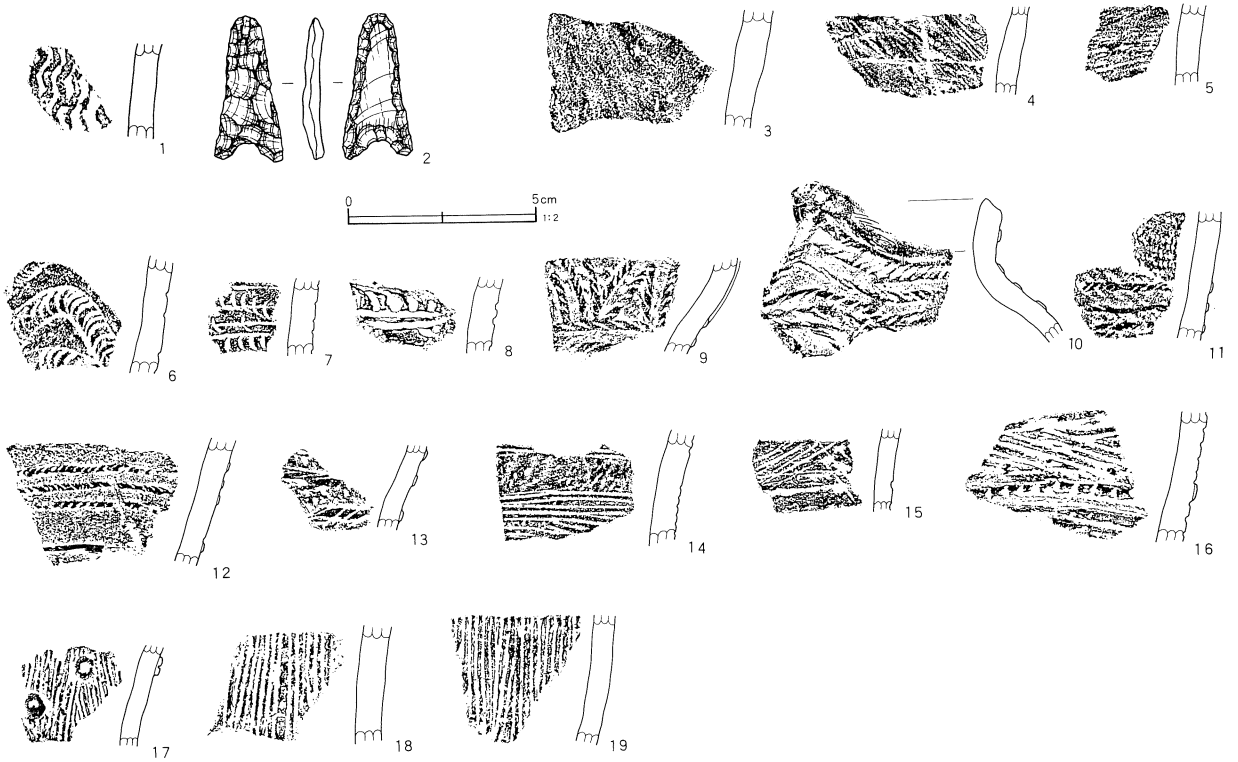
3～5は後葉の条痕文系土器群であり、遺構としては炉穴が存在している。3は器面に指頭成形痕を残し、擦痕状の成形を施す。4、5は器面は平滑に成形されており、内外面に擦痕状の細かい条痕成形を施す。いずれも条痕が目立たず、条痕文系土器群初頭期所産のものと思われる。

第II群土器 (第46図6～19)

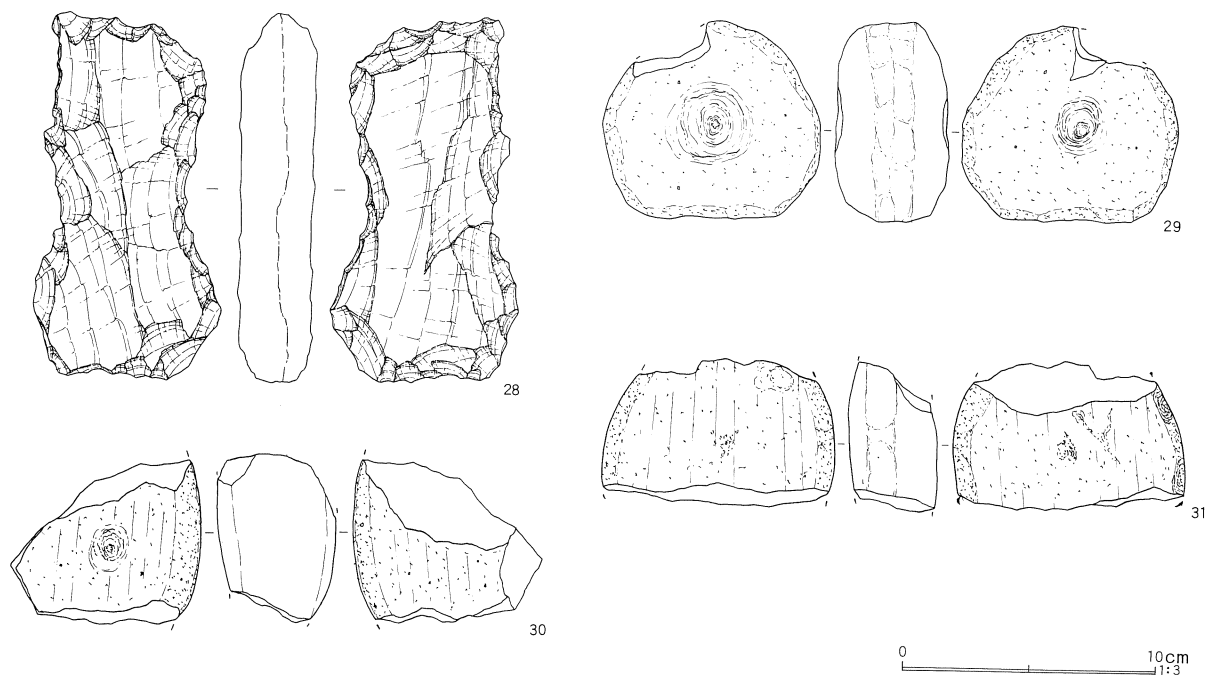
前期後葉の土器群を一括する。全て諸磯系土器群である。6～8は平行沈線文間に爪形文を施文する爪形文系土器群である。6は爪形文による弧線文を描いている。諸磯b式古段階の土器群である。

9～13は浮線文系の土器群である。9は横位に区画し文様帯内に縦位方向の集合する浮線を施文して曲線的なモチーフを描くが、浮線施文後浮線間に角頭状工具による押し引き状の成形を施す。浮線上には細かな爪形状の刻みを施す。10は靴先状口縁部で、地文縄文上に3本浮線を基本にした渦巻き文を施文する。浮線上には刻みを施す。11～13は胴部破片で、地文縄文上に2～3本単位の横位浮線文を巡らす。浮線上には方向の異なる刻みを施す。

第46図 大木前遺跡グリッド出土遺物(1)



第47図 大木前遺跡グリッド出土遺物(2)



14～16は沈線文系の土器群で、14は地文縄文上に半截竹管の多条平行沈線文を横位施文する。15、16は平行沈線文をやや交差状に施文するもので、16は刻みを施す隆起線で区画を行う。以上、諸磯b式中から新段階の土器群である。

17～19は条線文を地文とするもので、17は円形貼付文を施文する。諸磯c式土器である

b) 石器 (第46図2、20～27、第47図28～31)

全て縄文時代の石器である。

2はチャート製の尖頭器で、先端部が丸く整形され、両面ともに研磨を施す。特に、裏面は稜線が見えないほどで、所謂「トロトロ石器」である。長さ3.85cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重さ3.45gである。

20～24、27、28は打製石斧であり、裏面に礫表を残すものが多い。大半は条痕文期の石斧で、27、28は時期不詳である。20はホルンフェルス製で、長さ7.5cm、幅3.8cm、厚さ1.5cm、重さ45.5gである。21は先端部を欠損するがホルンフェルス製で、長さ10.5cm、幅5.0cm、厚さ1.5cm、重さ100.9gである。22はホルンフェ

ルス製で、長さ6.4cm、幅5.0cm、厚さ1.7cm、重さ65.9gである。23は粘板岩製で、長さ8.1cm、幅5.6cm、厚さ2.1cm、重さ74.9gである。24は頭部を欠損するがホルンフェルス製で、長さ7.4cm、幅5.3cm、厚さ2.5cm、重さ79.47gである。27は刃部を欠損するがホルンフェルス製で、長さ9.0cm、幅6.2cm、厚さ2.6cm、重さ157.7gである。28は片岩製で、長さ14.2cm、幅7.4cm、厚さ2.9cm、重さ354.4gである。

25、26は礫器で、25はホルンフェルス製で、長さ8.8cm、幅5.8cm、厚さ3.0cm、重さ162.1gである。26はホルンフェルス製で、長さ8.1cm、幅6.6cm、厚さ2.0cm、重さ143.3gである。

29～31は磨石で、中央部に窪み穴を持つ。29は閃緑岩製で、長さ7.7cm、幅8.6cm、厚さ4.5cm、重さ395.1gである。30は閃緑岩製で、長さ6.3cm、幅7.5cm、厚さ4.6cm、重さ250.9gである。31は閃緑岩製で、長さ5.7cm、幅9.2cm、厚さ3.5cm、重さ261.8gである。

IV 小栗北遺跡の調査

1 遺跡の概要

小栗北遺跡は埼玉県比企郡嵐山町大字越畑字小栗399番地他に所在し、平成12年10月23日から平成12年12月28日にかけて調査が行われた。調査面積は500㎡である。

遺跡周辺は市野川と粕川によって開析された南東方向に細長く延びた丘陵の中であって、両河川に流れ込む小河川に開析された小支谷や樹枝状谷が発達し、東西方向に細長い尾根筋や、独立丘状の尾根が連なっている。小栗北遺跡はこれ等の連なりの中で、独立丘状を呈する尾根の頂部に形成された遺跡である。

やや幅の広い谷筋を挟んで、この独立丘の対岸である北側の丘陵上には大木前遺跡が存在する。また、南側の谷を挟んだ対岸には、小栗遺跡が存在する。小栗北遺跡と小栗遺跡は、小支谷で分けられた同一丘陵上の先端部にそれぞれ位置する遺跡である。

小栗北遺跡の調査地点は、頂部よりやや東へ下がった尾根の斜面部で、標高80m前後を測る。大木前遺跡の最後部が標高75m前後で、小栗遺跡も77m前後であることから、3遺跡の中で一番標高の高い遺跡となり、眺望も開けている。

遺跡は北斜面が急勾配となるため、頂部から南斜面にかけて遺構が構築されていた。また、頂部から斜面への平坦な以降面には、やや古い時代の風倒木痕が多数存在し、縄文時代の遺物を多く含んでいた。遺構を見間違えう程の覆土を持つものもあり、倒木時期の古いものもかなり存在した。

検出された遺構は、縄文時代の住居跡1軒、炉穴5基、土壙18基、平安時代の住居跡2軒、溝1条である。

縄文時代の炉穴は、尾根から南斜面への移行部分に構築されており、4基はやや纏まって存在する。大半は燃焼部の炉床部分が残っているが、1基から復元可能な条痕文系土器が出土した。

縄文時代の住居跡はやはり、南斜面への移行部に構

築され、土壙などと重複して攪乱を受けていた。縄文時代早期から中期にかけての土器群が出土しており、住居跡の時期としては中期を認定した。

土壙は、大半が縄文時代前期の所産で、諸磯b式期を中心とした年代が与えられる。

グリッドからは縄文時代早期の撚糸文系土器群、条痕文系土器群が少量出土している。また、前期では中葉の繊維を含んだ黒浜式土器が少量出土しているが、中心となるのは繊維を含まなくなる諸磯式土器で、a式からb式移行期の土器群、諸磯b式古段階の土器群、中段階の土器群、若干ではあるがb式新段階の土器群が出土している。本遺跡からは諸磯c式土器は出土していない。大木前遺跡と立地が類似するが、出土土器に若干の時期差が現れており、縄文時代における細かい時期差が遺跡間で把握されることは大変興味深い事象である。

中期では加曾利E I式土器が主体を占めている。加曾利E I式の中でも最も新しい段階で、これ等の土器群に連弧文土器が伴えば、加曾利E II式と判定される程の土器群である。口縁部の渦巻文の連結や、区画文と渦巻文の構成を見ると、連弧文土器が伴う可能性があると思われる。全体像を把握できる土器が出土していないため、加曾利E I式の範疇と把握しておきたい。

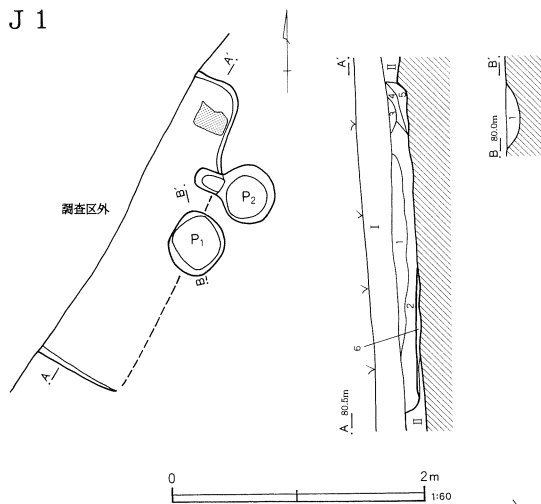
平安時代では住居跡2軒が検出されているが、何れも調査区内の西側で、尾根の頂部に近い部分に構築されている。尾根の頂部がさらに西側に存在することから、平安時代の住居跡は尾根の頂部に主体があるものと思われる。しかし、こうした尾根上の集落は数軒から1、2軒程度の住居跡で占められるのが大半であり、本遺跡でも平安時代の大きな集落が存在していたものとは判断されず、数軒の住居跡が比較的短期間の内に存在していたものと考えておきたい。出土須恵器は、9世紀後半代のもので、甕の口縁部の崩れから、10世紀に近いものと思われる。



第48图 小栗北遺跡全測図

第49図 第1号・第2号住居跡・出土遺物

SJ 1



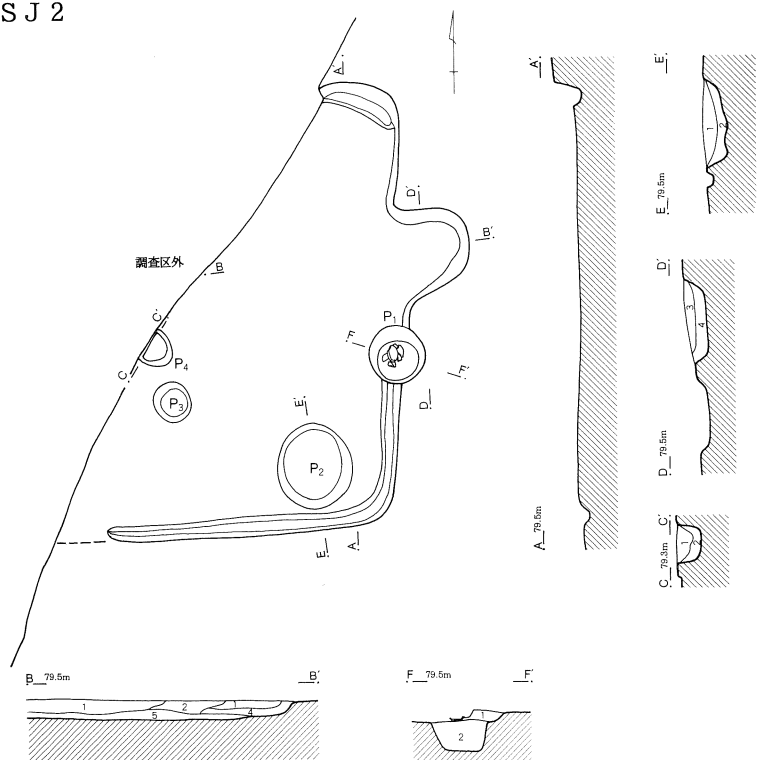
- I 暗褐色土 表土、竹、木の根を多く含む。
- II 暗黄褐色土 ハードローム層。白色粒子を多量、焼土粒子を少量含む。
- 1 茶褐色土 暗褐色ブロック、焼土粒子を多量、炭化物を少量含む。
- 2 黒褐色土 暗褐色粒子、焼土粒子を多量、炭化物、暗褐色ブロックを少量含む。床面上に炭化材検出。
- 3 茶褐色土 焼土粒子をまばら、暗褐色ブロックを多量に含む。
- 4 暗黄褐色土 焼土粒子を微量に含む。
- 5 赤褐色土 焼土ブロックを基調とし、炭化物を多量に含む。
- 6 赤褐色土 床面下の被熱赤化層。

Pit1

- 1 暗褐色土 焼土粒子を多量、炭化物を少量含む。粘性、しまり共に強。



SJ 2



- 1 暗褐色土 炭化物、焼土粒子を少量、ハードロームブロックをやや多量に含む。
- 2 暗褐色土 炭化物をやや多量、焼土粒子、ハードローム粒子を多量に含む。
- 3 暗赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。カマド覆土。
- 4 赤褐色土 焼土ブロックを多量、炭化物を少量含む。カマド覆土。
- 5 暗褐色土 ハードローム粒子を多量に含む。

Pit1

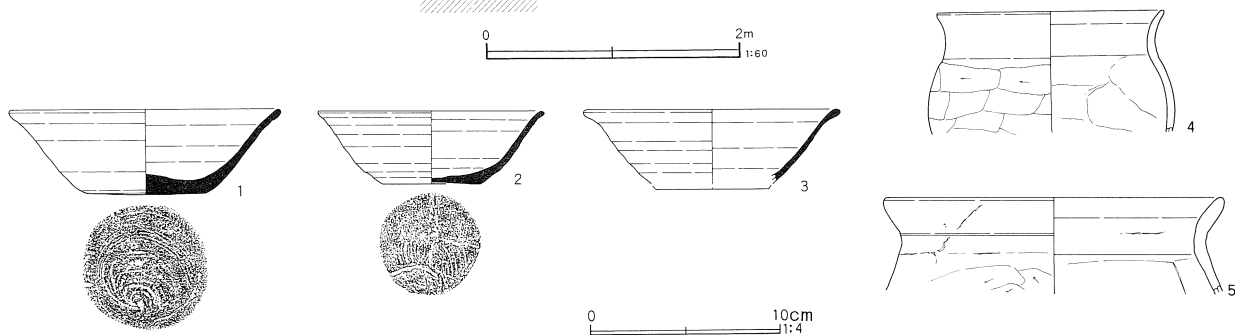
- 1 暗黄褐色土 焼土粒子、炭化物粒子を微量に含む。
- 2 暗褐色土 焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。

Pit2

- 1 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む。
- 2 暗黄褐色土 暗褐色土ブロックを多量に含む。

Pit4

- 1 暗褐色土 炭化物を多量、焼土粒子を微量に含む。
- 2 暗褐色土 炭化物を少量含む。



2 発見された遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第49図)

A-2区に位置する。住居跡西側の大部分が調査区外にある。竈の残骸と思われる焼土痕が北東コーナー寄りに見られることから、北竈を持ち、東西方向に細長い住居跡と思われる。現存部で住居跡の長径は2.53m、短径は0.71mのみを測る。住居跡東側は大きな風倒木痕により攪乱を受けている。住居跡と2個のピットが重複しており、P1=長径0.53m×短径0.74m×深さ0.12m、P2=長径0.65m×短径0.44m×深さ0.15mを測る。

出土遺物は須恵器甕の胴部破片と底部破片で、1の底径は12cmを測る。

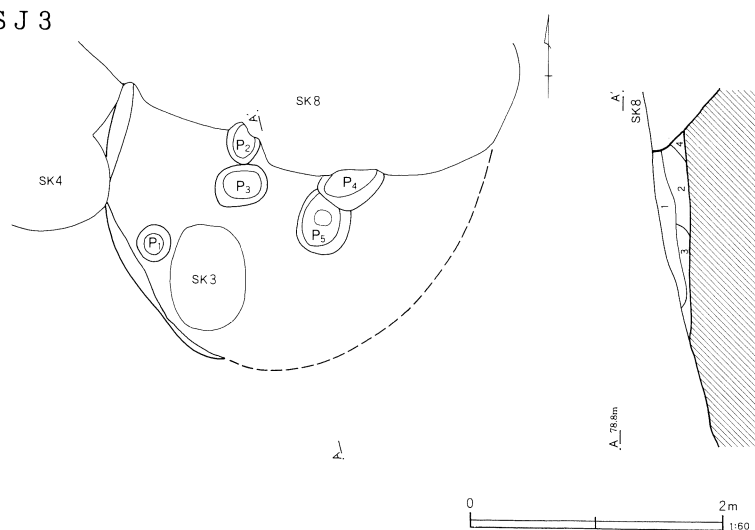
第2号住居跡 (第49図)

B~C-1~2区にまたがって位置する。第1号住居跡と同様に、住居跡西側半分が調査区外にある。縄文時代の第18・19号土壇と重複する。東壁に竈が存在し、東西方向に細長い住居跡と思われる。現存部で住居跡の長径は3.47m、短径は2.59mのみを測る。

竈は東壁の中央部北寄りに構築されており、燃焼部のみ残存していた。壁溝は竈部分以外に全周していたものと思われる。4個のピットと重複し、P1=長径

第50図 第3号住居跡

SJ3



- 1 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を少量、白色砂粒子を多量に含む。土器出土多量。
- 2 黒褐色土 焼土粒子、炭化物やや多量、白色砂粒子を多量に含む。土器出土多量。
- 3 暗黄褐色土 炭化物を少量、焼土粒子を含まず、白色粒子を多量に含む。土器出土多量。
- 4 暗黄褐色土 下層の暗黄褐色ブロックを多量に含む。

0.47m×短径0.44m×深さ0.23m、P2=長径0.65m×短径0.59m×深さ0.16m、P3=長径0.25m×短径0.23m×深さ0.12mを測る。P4=長径0.26m×短径0.23m×深さ0.18mを測る。

出土遺物はP1から1、2が、竈内から3が、住居跡覆土内から4、5が出土した。1~3は須恵器坏で、焼成が悪い。1は口径14.4cm、底径6.4cm、器高4.6cm、残存率60%、2は口径11.8cm、底径5.1cm、器高3.8cm、残存率80%、3は口径13.6cm、現存高3.9cm、残存率40%を測る。4、5は土師器甕で、「コ」字状口縁がやや崩れてきている。4は口径12.1cm、現存高6.4cm、残存率30%、5は口径18.1cm、現存高5.1cm、残存率20%を測る。

第3号住居跡 (第50図、51図)

C-2区に位置する。第3・8号土壇と重複するが、第8号土壇より新しく、第3号土壇より古い。

住居跡のプランは円形を呈するものと思われるが、西壁の一部と、ピット5個が検出されたのみである。炉は確認されず、床面も大半が削平されている。ピットは柱穴になるとは思われず、深さはP1=22cm、P2=7cm、P3=11cm、P4=6cm、P5=13cmを測る。

第51図 第3号住居跡出土遺物



遺物は早期、前期、中期の土器片が出土している。
 1、2は早期の条痕文系の土器群で、1は刻みを施す口縁部破片である。

3は繊維を含む、前期中葉の黒浜式土器である。

4～17は前期後葉の諸磯式時群である。4～6は朝

顔形に開く深鉢で、口縁部に半截竹管の平行沈線や波状沈線を施文する諸磯a式系統の土器群である。

7～11は諸磯b式の浮線文系土器群である。7は内彎して開く口縁部に3本の浮線文を巡らせて口縁部を区画し、文様帯内に3個対の円形竹管文を施文する。

地文には単節RLを施文し、口唇部には梯子状の浮線文を施す。浮線文上には、縄文を施文する。8は内彎して開くキャリパー形深鉢の口縁部で、3本浮線で口縁部を区画する。口縁部に曲線を描く浮線文を施文し、浮線文上には刻みを施す。9～11は胴部破片で、地文縄文上に、刻みを施す浮線2～3本を単位として巡らす。刻みは浮線ごとに方向を変えて施文する。

12～14は諸磯b式の沈線文系土器群である。12は地文縄文上に平行沈線文で菱形状の沈線を施文する。

13、14は胴部破片で、集合沈線を胴部に水平に巡らす。

15～17は諸磯式の縄文のみ施文する土器群である。

15は口縁部破片で、16、17は胴部破片である。

18～27は中期の加曾利E式土器群である。18、19は口縁部文様帯破片で、18は隆帯で口縁部区画を行い、地文の縄文施文は器面風化のため確認されない。19は口縁部文様帯内に撚糸Rを施文する。20は頸部破片で、2本隆帯で区画を行う。21、22は胴部破片で、21は撚糸地文上に蛇行隆帯懸垂文が垂下する。27は単節

RL縄文上に2本対の隆帯懸垂文が垂下する。

23は口縁部を無文とする4単位の波状口縁が開く深鉢で、口唇部が肥厚し、沈線を巡らす。

24は胴部と口縁部が屈曲する浅鉢の、胴部文様帯破片である。刻みを施す隆帯渦巻文の区画内に、集合沈線文を渦巻に沿って施文する。

25～27は、撚糸文のみを施文する胴部破片である。

28～30は石器である。28は緑泥片岩製の石斧で、調整剥離後、敲打を施しており、磨製石斧の未製品の可能性がある。頭部を欠損するが、長さ9.6cm、幅4.9cm、厚さ3.1cm、重さ192.6gを測る。29はホルンフェルス製の打製石斧で、頭部を欠損するが、長さ8.8cm、幅3.5cm、厚さ2.1cm、重さ70.9gを測る。30は砂岩製の搔器で、長さ7.3cm、幅7.3cm、厚さ2.7cm、重さ138.7gを測る。

住居跡は、各時期の土器群が検出されたが、住居跡の形状や出土遺物から中期の所産と推定される。

(2) 炉穴

第5号土壙 (第52図、第54図)

B-2区に位置する。第6号土壙と重複するが、本土壙の方が古い。楕円形を呈し、長径1.18m、短径0.76m、深さ0.26mを測る。土壙の底面はあまり被熱していないが、覆土に焼土及び、炭化物を含むため、炉穴と認識した。

遺物は、条痕文系土器の器形が把握される大型破片が出土した。第54図1は底部を欠損するが、全体の約半分ほどが現存する。推定口径約20cm、現存高31.5cmを測る。条痕文系土器群初頭期の野島式に比定されるものと思われるが、子母口式となる可能性もある。

第20号土壙 (第53図)

B-2区に位置する。第11号土壙と重複するが、本土壙の方が新しい。プランは楕円形で、底面は皿状を呈する。長径0.71m×短径0.48m×深さ0.21mを測る。遺物は出土していない。

第21号土壙 (第53図)

B-C-3区にまたがって位置する。楕円形を呈し、土壙の底部付近のみが残存している。北側の土壙奥部の炉床面が一段低く、手前側が高くなっており、良く被熱している。長径0.59m、短径0.53m、深さ0.29mを測る。遺物は出土していない。

第22号土壙 (第53図)

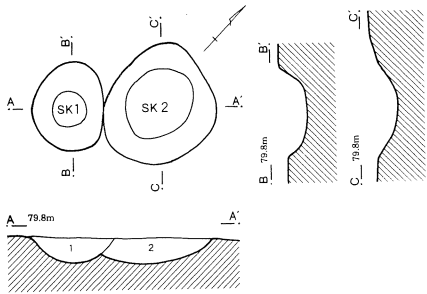
B-2区に位置する。楕円形を呈し、炉床部のみ残存している。長径0.41m、短径0.38m、深さ0.06mを測る。炉床部は良く被熱しているが、遺物は出土していない。

第23号土壙 (第53図)

C-3区に位置する。楕円形を呈し、炉床部のみ残存している。長径0.82m、短径0.71m、深さ0.09mを測る。遺物は出土していない。

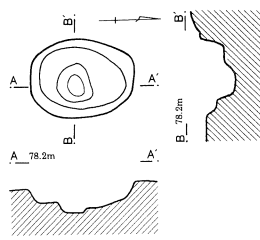
第52図 土壌(I)

SK 1・2



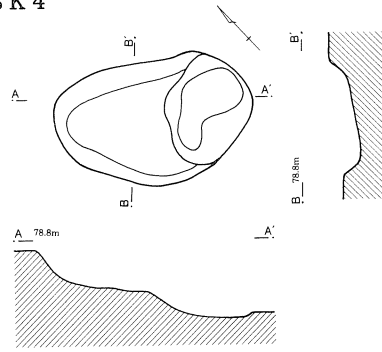
- 1 暗黄褐色土 炭化物を微量に、黄褐色粒子をまばらに含む。
- 2 黄褐色土 黄白色粒子を多量に含む。

SK 3

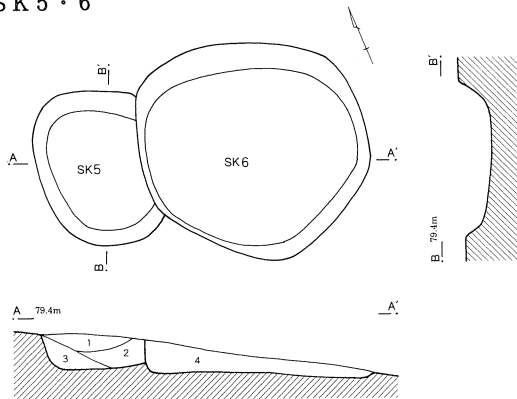


- 1 暗褐色土 炭化物、黄白色粒子を少量含む。

SK 4

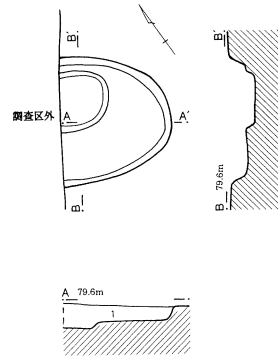


SK 5・6



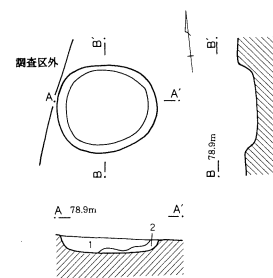
- 1 黄褐色土 焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。
- 2 茶褐色土 焼土粒子を微量に含む。
- 3 暗黄褐色土 炭化物を微量に含む。
- 4 茶褐色土 白色粒子を微量に含む。

SK 9



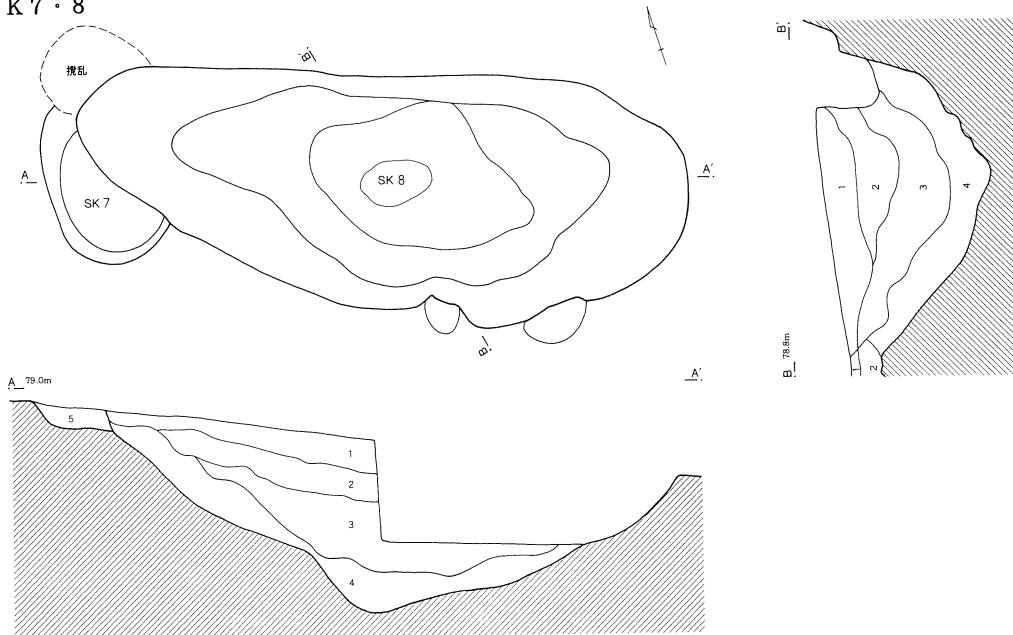
- 1 暗黄褐色土 白色粒子を多量に、焼土粒子を微量に含む。

SK 10

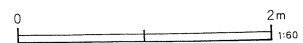


- 1 暗褐色土 ローム粒子を多量に含む。
- 2 暗黄褐色土 ロームブロックを含む。

SK 7・8

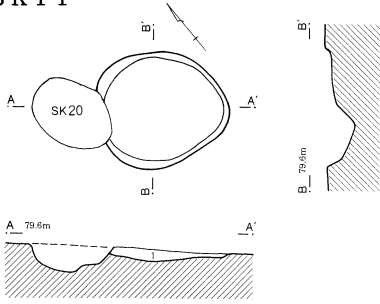


- 1 暗褐色土 白色砂粒子を多量に含む。
- 2 暗褐色土 白色砂粒子を微量に含む。
- 3 茶褐色土 下層の黒褐色ブロックを少量含む。粘性、しまり共に弱。
- 4 黒褐色土 黒褐色ブロック、暗褐色ブロックを多量に含む。
- 5 黄褐色土 暗褐色ブロックを多量に、炭化物を微量に含む。



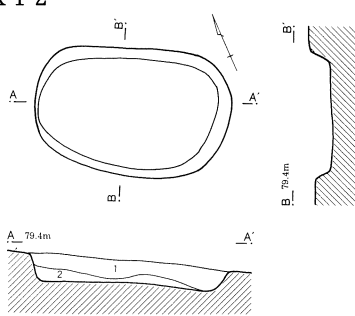
第53図 土壌(2)

SK 1 1



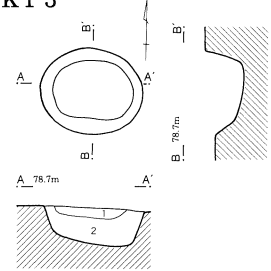
- 1 暗褐色土 ハードロームを基調とし、焼土粒子を少量含む。

SK 1 2



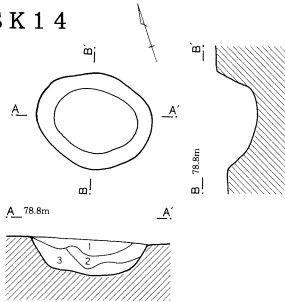
- 1 暗黄褐色土 白色粒子を少量含む。
2 暗黄褐色土 白色粒子を含まない。

SK 1 3



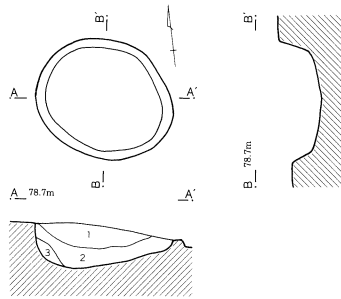
- 1 黒褐色土 炭化物を少量含む。
2 暗黄褐色土 ソフトロームブロックを多量に、炭化物を微量に含む。

SK 1 4



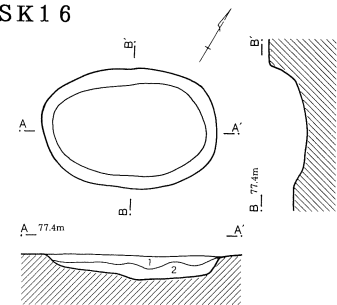
- 1 黒褐色土 白色粒子を多量、炭化物粒子を微量に含む。
2 暗褐色土 白色粒子を微量に含む。
3 暗黄褐色土 白色粒子、炭化物を少量含む。

SK 1 5



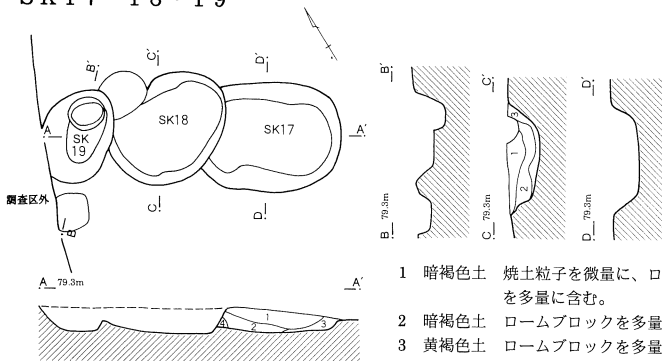
- 1 暗褐色土 炭化物を微量に含む。
2 暗褐色土 炭化物を少量含む。
3 暗黄褐色土 炭化物を微量に含む。

SK 1 6



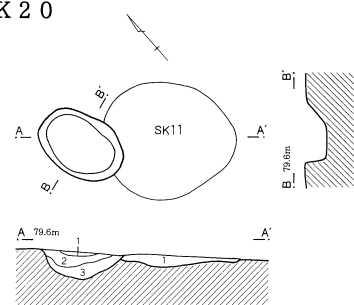
- 1 黄褐色土 暗褐色土ブロックを多量に、焼土粒子を少量含む。
2 黄褐色土 暗褐色土ブロックを少量含む。

SK 1 7・18・19



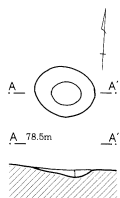
- 1 暗褐色土 焼土粒子、炭化物を少量含む。
2 暗褐色土 焼土、炭化物を含まない。
3 暗黄褐色土 白色粒子を多量に含む。
4 赤褐色土 ソフトロームブロック。

SK 2 0



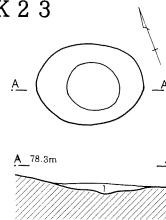
- 1 暗赤褐色土 焼土粒子を多量に、炭化物粒子を少量含む。
2 赤褐色土 火床底面から被熱赤化層。
3 暗褐色土 ハードローム被熱層。

SK 2 2



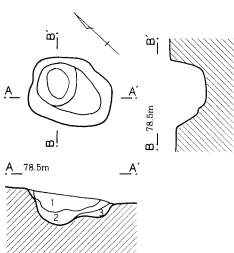
- 1 暗赤褐色土 被熱赤変した、ハードローム。

SK 2 3

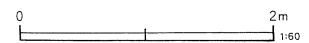


- 1 黄褐色土 被熱赤変がまばらな、ハードローム。

SK 2 1



- 1 暗黄褐色土 炭化物、焼土粒子を少量含む。
2 暗褐色土 焼土ブロックを少量、焼土粒子、炭化物をやや多く含む。
3 黄褐色土 被熱焼土化したソフトローム。



第54図 第5号土壙（炉穴）出土遺物



(3) 土壙

第1号土壙（第52図）

A-3区に位置する。第2号土壙と重複するが、本土壙の方が新しい。プランは楕円形で、底面は皿状を呈する。長径0.71m×短径0.56m×深さ0.18mを測る。遺物は出土していない。

第2号土壙（第52図）

A-3区に位置する。第1号土壙と重複するが、本土壙の方が古い。プランは楕円形で、底面は皿状を呈する。長径0.94m×短径0.82m×深さ0.21mを測る。遺物は出土していない。

第3号土壙（第52図）

C-2区に位置する。第3号住居跡内にあり、新旧関係は不明である。プランは楕円形で、底面は凹凸を持つ。長径0.79m×短径0.58m×深さ0.24mを測る。遺物は出土していない。

第4号土壙（第52図）

C-2区に位置する。第3号住居跡と一部重複するが、新旧関係は不明である。プランは不整形で、底面は凹凸が存在する。長径1.53m×短径0.94m×深さ0.56mを測る。遺物は出土していない。

第6号土壙（第52図、第55図1～3）

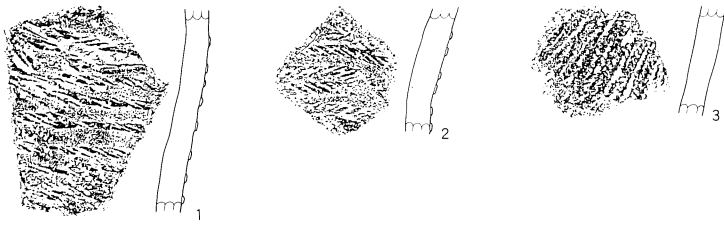
B-2区に位置する。第5号土壙と重複するが、本土壙の方が新しい。プランは楕円形で、底面は平坦である。長径1.78m×短径1.70m×深さ0.29mを測る。

遺物は前期諸磯b式土器の胴部破片が出土している。1、2は刻みを施す浮線を胴部に水平に巡らすもので、地文に縄文を施す。2は浮線毎に刻みの方向を変えている。3は地文縄文単節LRを横位施文する、胴部破片である。

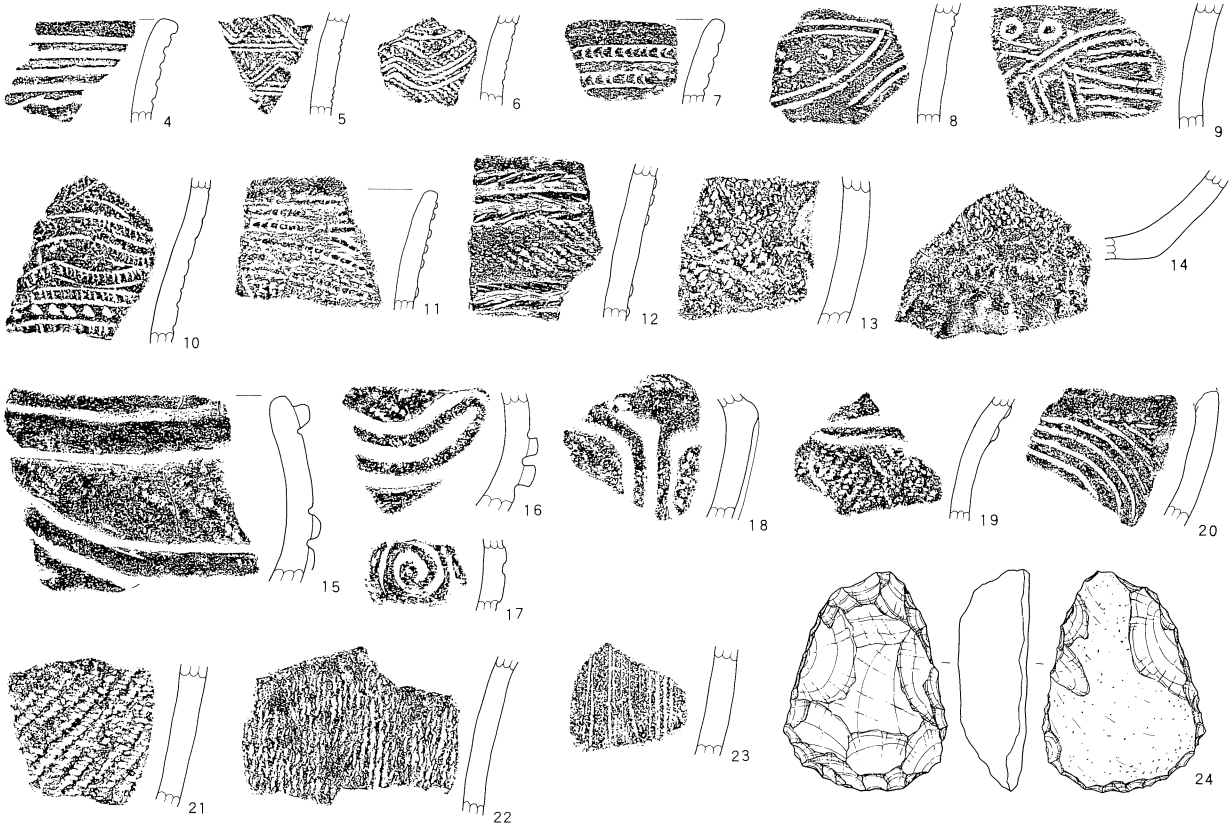
第7号土壙（第52図）

C-2区に位置する。第8号土壙と重複するが、本土壙の方が古い。プランは楕円形で、底面は皿状を呈する。長径1.32m×短径0.94m×深さ0.18mを測る。

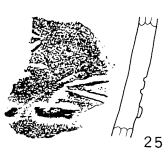
第55図 土壙出土遺物
SK 6



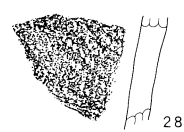
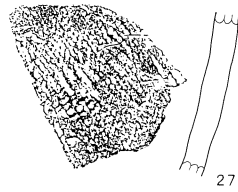
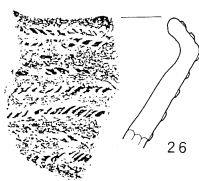
SK 8



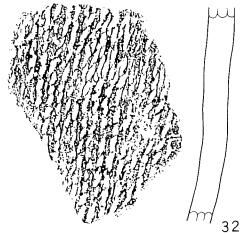
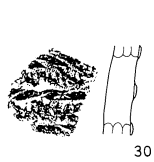
SK 10



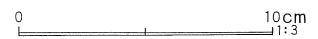
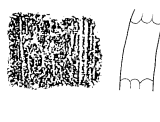
SK 15



C-1-P1



C-1-P4



遺物は出土していない。

第8号土壙（第52図、第55図4～24）

C-3区に位置する。第7号土壙と重複するが、本土壙の方が新しい。プランは長楕円形で、底面は凹凸が著しい。長径4.82m×短径1.79m×深さ1.65mを測る。

遺物は前期と中期の土器片、石器が出土している。4～10は朝顔形深鉢で、4～6は平行沈線文の波状文を施文する土器群である。4は口縁部破片で、半截竹管の平行沈線を横位に施文して口縁部を区画する。地文に縄文は施文しない。5は地文縄文RL上に平行沈線を等間隔に巡らせ、その間に平行沈線の鋸歯状文を施文する。6は地文縄文RL上に、平行沈線の波状文のみを施文する。8、9は平行沈線で変形木葉文を施文するもので、空白部に2個対の円形竹管文を施文する。地文縄文は施さない。

7、10は平行沈線間に爪形文を施文する爪形文系土器で、10は爪形文で横位連結する曲線文を描く。

11、12は浮線文系土器群である。11は口縁部が開く器形で、浮線文でモチーフを描くが、浮線文上に結節状の刻みを施文する。12は胴部破片で、3本対の刻みを施す浮線文を巡らす。地文は単節RLである。

13は単節RL縄文のみ施文する胴部破片である。14は底部破片で、単節RLを施文する。

以上、前期の土器群は諸磯系の土器群で、4～9は諸磯a式からb式への移行期の土器群である。10は諸磯b式古段階、12は中段階、11は新段階に位置付けられる。

15～23は、中期後葉の加曾利E式系土器群である。15はキャリパー形深鉢の口縁部破片で、太い隆帯で口縁部を区画し、渦巻文を連結するモチーフを描く。口縁部文様帯内の地文には、単節RLを横位施文する。16は口縁部破片で、2本隆帯が曲線文を描く。17は沈線の渦巻文を描くもので、18は口縁部から隆帯が垂下して口縁部文様帯内を区画する。19は隆帯で区画する頸部破片で、胴部の単節RL地文上に、結節回転の綾

線文を垂下する。

20は胴部と頸部が屈曲する浅鉢の胴部破片と思われる、重弧状の沈線文を施文する。

21～23は地文のみ施される破片で、21は0段多条縄文RLの縦位施文で、22は撚糸L、23は条線文を施文する。

24は背面に礫表を残す、典型的な早期段階の打製石斧である。頁岩製で長さ8.6cm、幅6.5cm、厚さ2.7cm、重さ195.7gを測る。

以上、中期の土器群は加曾利E I式終末に位置付けられるものと思われる。

本土壙は第3号住居跡に切られていることから、本土壙は諸磯b式期所産と思われる。

第9号土壙（第52図）

B-2区に位置する。西側半分が調査区外に当たる。プランは楕円形で、底面は凹凸を持つ。長径0.97m×短径0.88m×深さ0.18mを測る。遺物は出土していない。

第10号土壙（第52図、第55図25）

C-1区に位置する。プランはほぼ円形で、底面は平坦である。長径0.76m×短径0.68m×深さ0.12mを測る。

遺物は縄文土器の破片が出土している。25は諸磯式の浮線文系土器で、隆帯で胴部を区画し、沈線の木葉状文を施文する。諸磯a式からb式にかけての土器群である。

第11号土壙（第53図）

B-2区に位置する。第20号土壙と重複するが、本土壙の方が古い。プランは楕円形で、底面は皿状を呈する。長径1.06m×短径0.88m×深さ0.09mを測る。遺物は出土していない。炉穴の可能性あり。

第12号土壙（第53図）

B-2区に位置する。プランは楕円形で、低短であ

る。長径1.53m×短径1.01m×深さ0.21mを測る。遺物は出土していない。

第13号土壙 (第53図)

C-1区に位置する。プランは楕円形で、底面は皿状を呈する。長径0.79m×短径0.65m×深さ0.29mを測る。遺物は出土していない。

第14号土壙 (第53図)

C-1区に位置する。プランは楕円形で、底面は皿状を呈する。長径0.88m×短径0.74m×深さ0.26mを測る。遺物は出土していない。

第15号土壙 (第53図、第55図26~29)

C-1区に位置する。プランは楕円形で、底面は皿状を呈する。長径1.09m×短径0.89m×深さ0.35mを測る。

遺物は前期の土器片が出土している。26は諸磯b式浮線文系土器群の中でも新しい段階の土器で、短く内折する口縁部が大きく開き、浮線文を水平に巡らす。地文には縄文を施文し、浮線上には刻みを施す。27~29は縄文のみ施す胴部破片である。

(5) ピット状遺構

A-1区 (第56図)

P1の1個が存在する。周辺には第1・2号土壙が北側に隣接して存在するが、本ピットとの関係は窺われない。径0.41m、深さ0.36mを測る。遺物は出土していない。

C-1区 (第56図、第55図30~38)

5個のピットが存在する。周辺には第2号住居跡、第10・13・14・15・17・18・19号土壙が存在する。平安時代の第2号住居跡の調査終了後、これらのピットが検出されており、周辺の縄文時代の土壙と同様に、縄文時代のピットと考えられる。整然としたピットの

第16号土壙 (第56図)

B-4~5区にかけて位置する。プランは楕円形で、底面は凹凸を持つ。長径1.35m×短径0.94m×深さ0.18mを測る。遺物は出土していない。

第17号土壙 (第53図)

C-1区に位置する。第18号土壙と重複するが、本土壙の方が古い。プランは楕円形で、底面は平坦である。長径1.12m×短径0.85m×深さ0.21mを測る。遺物は出土していない。

第18号土壙 (第53図)

C-1区に位置する。第17・19号土壙と重複するが、第17号土壙より新しく、第19号土壙とは新旧関係が不明である。プランは不整形で、底面は平坦である。長径1.02m×短径0.86m×深さ0.19mを測る。遺物は出土していない。

第19号土壙 (第53図)

C-1区に位置する。第18号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。プランは楕円形で、底面は凹凸を持つ。長径0.74m×短径0.56m×深さ0.24mを測る。遺物は出土していない。

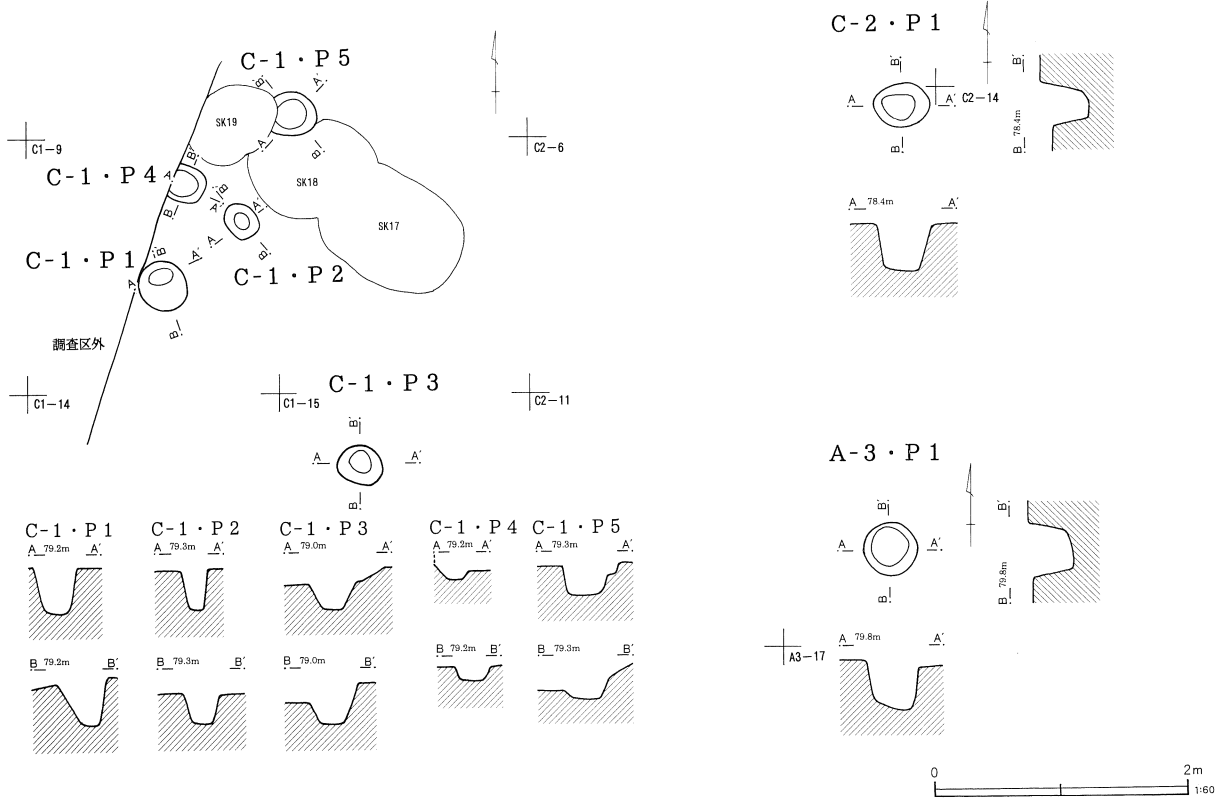
並びは把握されなかったが、住居跡状の遺構の存在も十分予想される。

P1は径0.38m、深さ0.35m、P2は径0.29m、深さ0.32m、P3は径0.36m、深さ0.31m、P4は径0.29m、深さ0.12m、P5は径0.34m、深さ0.26mを測る。遺物はP1とP4から出土している。

30~35はP1出土である。30、31は前期諸磯b式土器の胴部破片である。30は地文縄文RL上に、刻みを施す浮線文を横位に巡らす。浮線上の刻みは、交互の異方向に施文している。31は縄文のみ施文される土器で、単節LRを横位施文する。

32~35は中期加曾利E式土器で、33は2本隆帯で

第56図 ピット



頸部を区画する破片で、地文に単節 RL 縄文を縦位施文する。35は2本の隆帯懸垂文が垂下する底部破片で、地文に単節 RL 縄文を縦位施文する。32、34は撚糸文を施文する胴部破片で、32は撚糸Lを施文する。

36~38はP4出土である。諸磯a式系の土器で、36は朝顔形に口縁部が開く深鉢土器の口縁部破片で、半截竹管の平行沈線による小波状文を描く。37、38は縄文のみ施文される胴部破片で、単節 RL を横位施文す

(6) 溝跡

第1号溝 (第57図)

B-3区からA-5区にかけて位置する。調査区のほぼ中央部から、尾根線上を東方向へと下りながら、調査区外へと構築されており、土地区画溝、もしくは排水溝的な性格が推定される。

B-3区では溝幅約0.5m程であるが、A-5区に向けて徐々に溝幅と深さを増していく。A-5区では

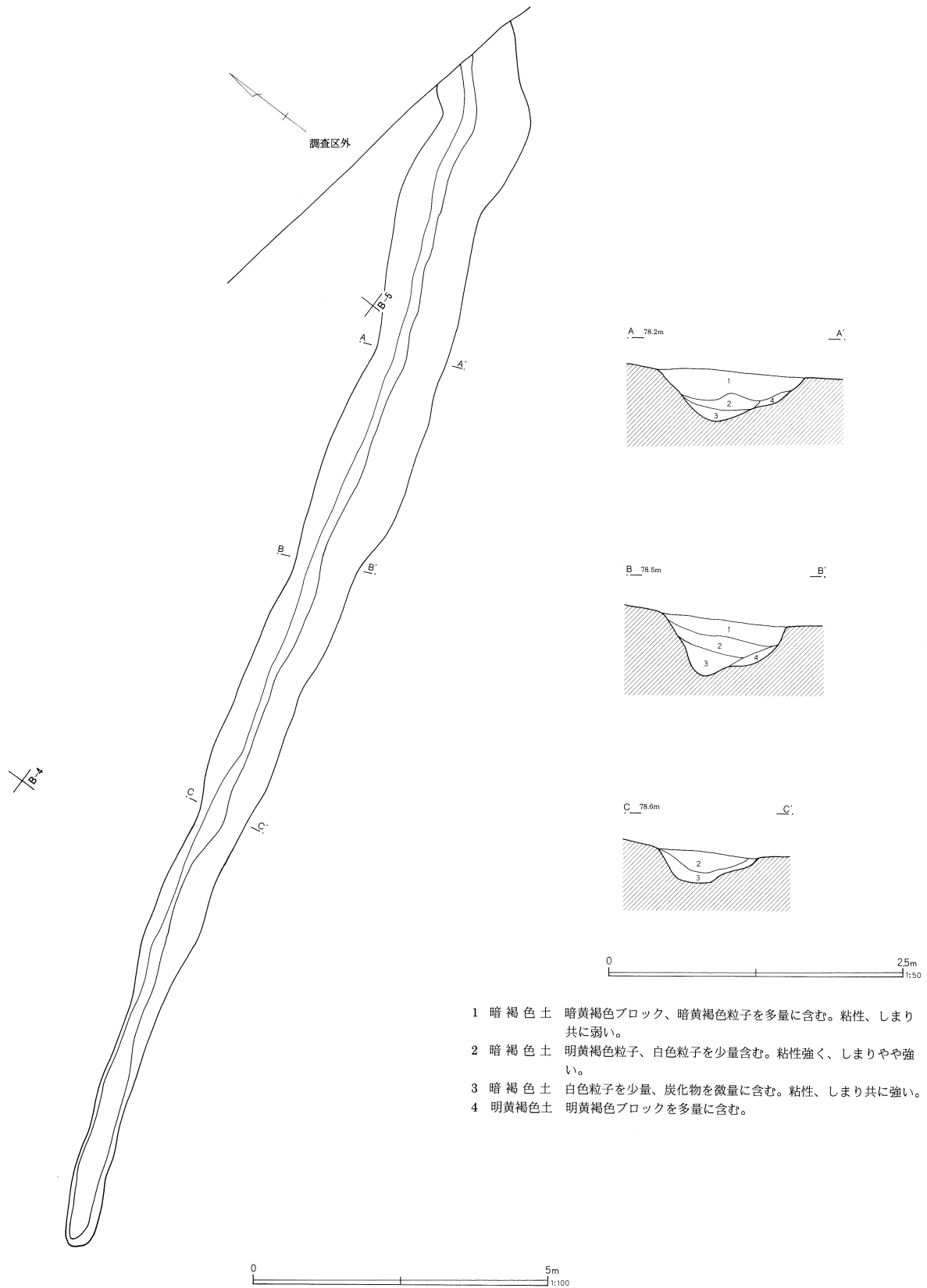
る。

C-2区 (第56図)

P1の1個が存在する。周辺に第3号住居跡、第3・4号土壇が存在するが、それ等との新旧関係は不明である。しかし、周辺に縄文時代の遺構が存在していることから、本ピットも縄文時代所産と思われる。径0.44m、深さ0.38mを測る。遺物は出土していない。

溝幅1.6m程で、深さも約0.45m程になる。土層断面の観察によれば、何度か掘り直されていることが判断されるが、少なくとも2度は掘り直している。遺物が出土していないので時期判断は困難であるが、覆土が比較的やわらかく、黒色化が進んでいないこと、ロームのブロックを多く含むことなどから、構築時期を近世以降と判断した。

第57図 溝跡
SD 1



(7) グリッド出土遺物

小栗北遺跡のグリッドからは、縄文時代の各時期の土器群や石器が多く出土している。時期別に分類して説明を加えることにする。

a) 土器

第I群土器 (第58図1～8)

縄文時代早期の土器群を一括する。

第1類 (1)

早期初頭の撚糸文系土器群で、1の1点のみ出土した。丸頭状に比高した口縁部がやや開く器形を呈し、口唇外端部に面取り状のやや強いなぞりを施している。非常に細い撚糸Lを口唇外端部直下から施文しており、施文はやや間隔を開けているようであるが、細片のため不明瞭である。胎土に石英・長石類を多く含むが、パミス状の白色粒子を多く含んでいる。

第2類 (2～7)

早期後葉の条痕文系土器群を一括する。口縁部破片が無いので時期決定は難しいが、初頭期の炉穴が存在することから、グリッド出土土器もそれに比定されるものと思われる。何れも内外面に条痕もしくは擦痕整形を施しており、繊維を少量含む。

第II群土器 (第58図9～51、第59図52～63)

縄文時代前期の土器群を一括する。

第1類 (8、12)

初頭の花積下層式土器を一括する。8は繊維を多く含む条痕文土器で、底部付近の破片である。花積下層式段階に見られる条痕文系土器群の特徴をもつ。12は0段多条縄文RLの施文方向をずらしながら、縦位の菱形状に施文する土器である。繊維を多く含む、裏面整形が粗い。

第2類 (9～11)

中葉の黒浜式土器を一括する。繊維を含み、9、10は原体を換えた羽状縄文を施文する。

第3類 (13～63)

後葉の諸磯式土器を一括する。a式からb式初頭にかけての土器群と、中段階から新段階にかけての土器群が存在する。

第1種 (13～31、37)

a式末からb式初頭にかけての土器群を一括する。24を除き、この段階では口縁部が朝顔形に開く深鉢が一般的で、13の様に口縁部を低隆帯で区画するものや、14の様に爪形文で区画するものがある。文様は大きく①変形木葉文をモチーフ化して描くものと、②平行多段構成のモチーフ、③爪形文と初期浮線文で描くものの3種類が存在する。

①は肋骨文系の縦位区画文と組み合わせるもの(18)と、「米」字文系のモチーフ(15～19)とがある。多くは平行沈線文で描くが、細かな爪形文を使用するもの(19)もある。区画交点や余白に円形竹管文を施文するもの(15、16、19)が多い。

②は平行多段区画内に波状文を施文するもの(23)と、幅広い文様帯内に波状文を施文するもの(14、20～22)があり、地文に縄文を施文するものと、無地文のもの(14)がある。

③は②の文様構成に類似し、爪形文を平行施文し、その間に刻みを施すもの(25～31)と、刻みの部分に浮線文を施すもの(37)とが存在する。31の様な爪形文を横位多段施文する構成は、北白川下層式に類似する構成である。

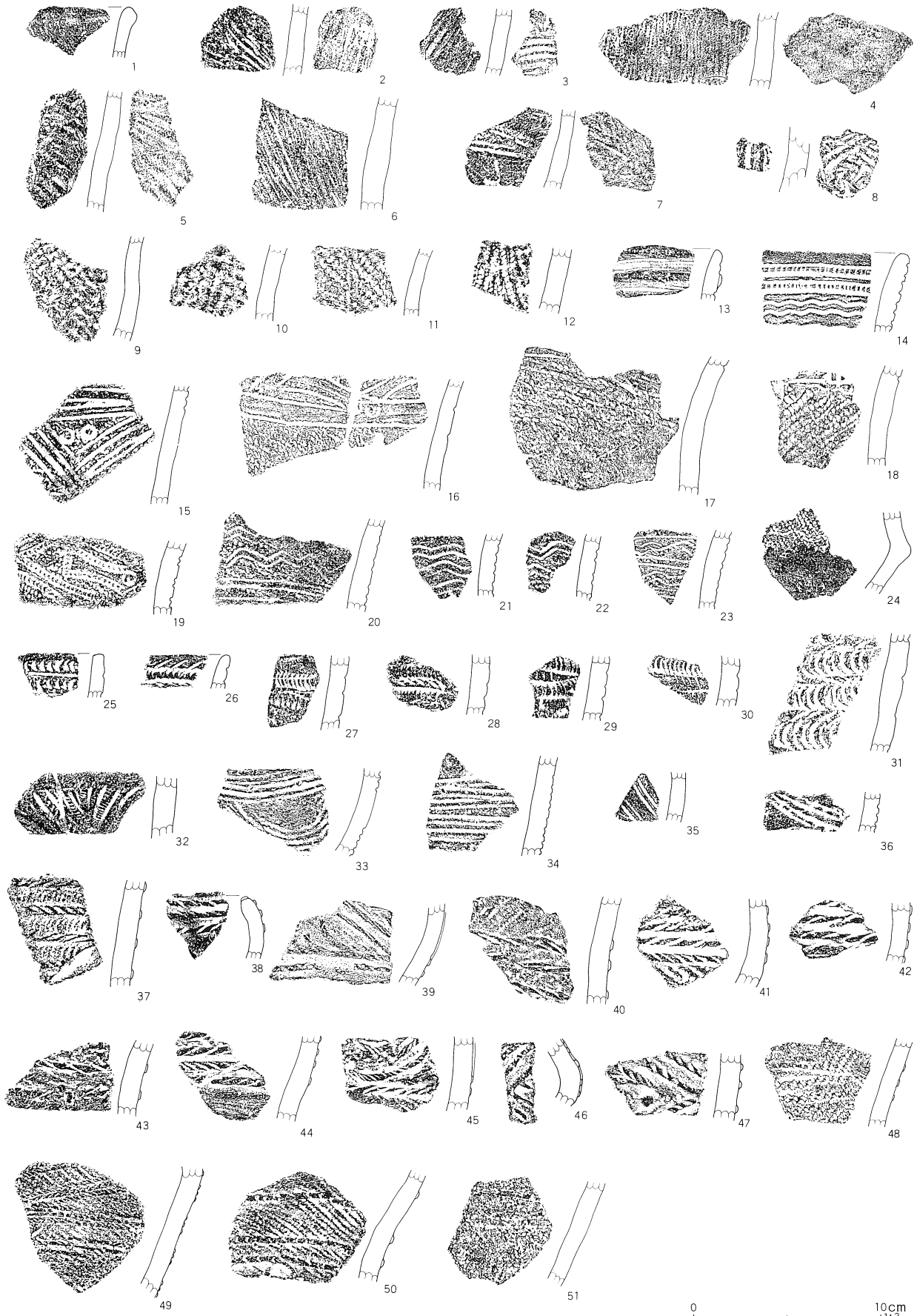
24はa式系の浅鉢の胴部破片である。

以上、①～③の土器群は、①・②から③へという細かい変遷が考えられているが、本遺跡では量は少ないとはいえ纏まって出土しており、一括的な様相を示すものとして、諸磯a式からb式初頭にかけての土器組成として捉えて置きたい。

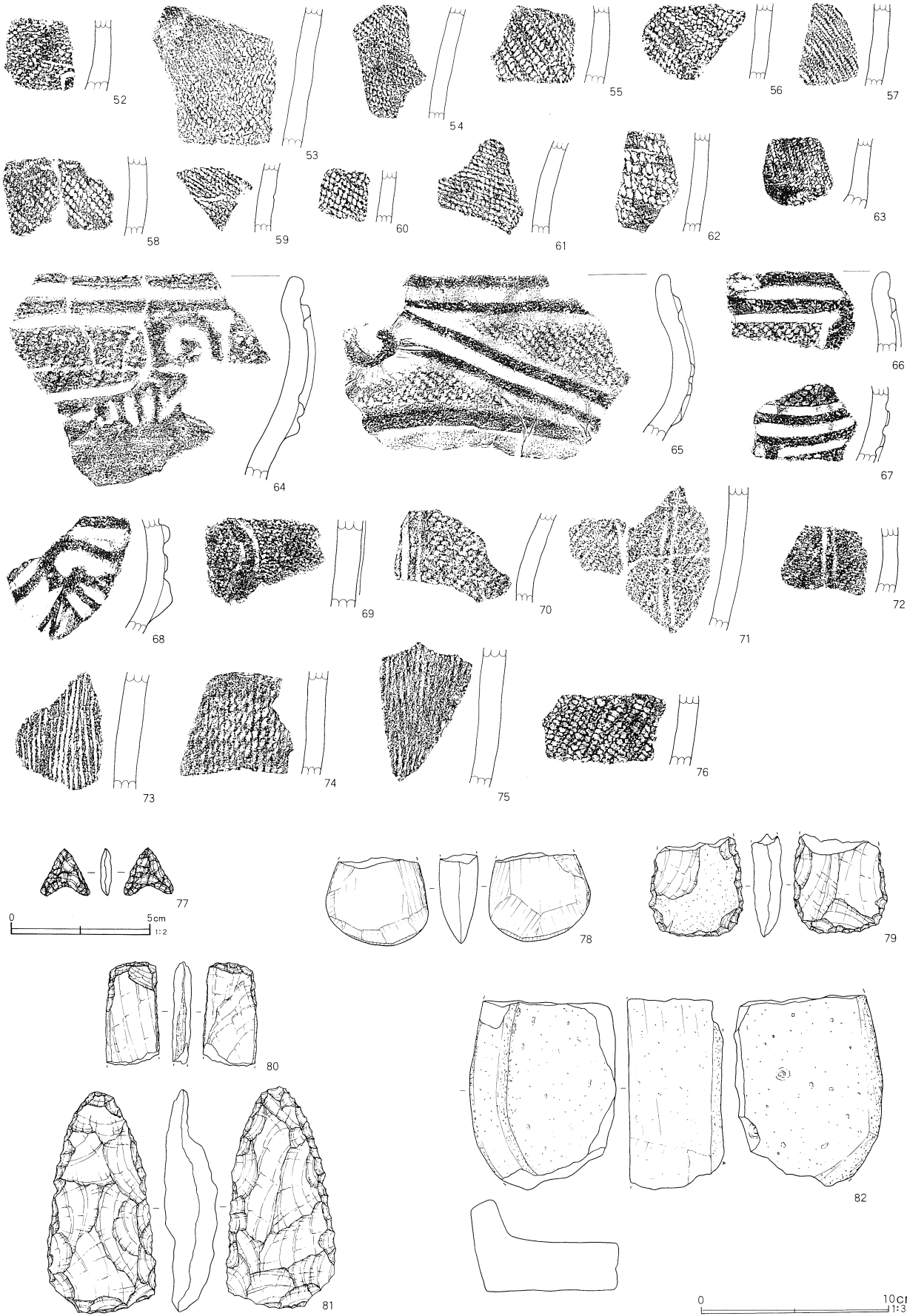
第2種 (32～35、38～51)

諸磯b式中段階から新段階の土器群を一括する。この段階の土器群には、①爪形文系(32)、②沈線文系(33～36)、③浮線文系(38～51)がある。②は浮線

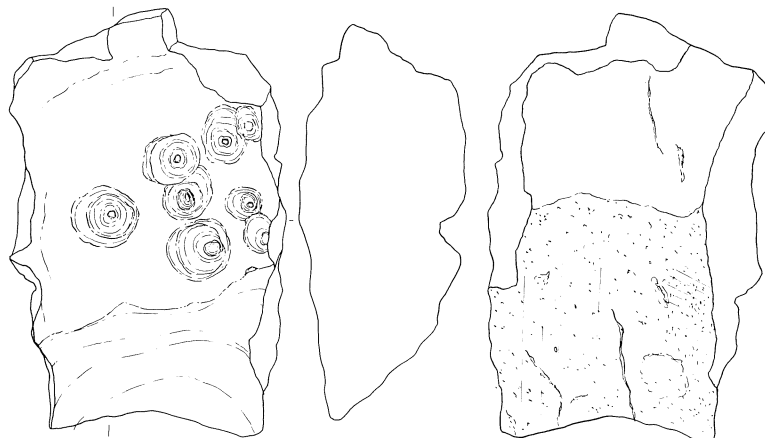
第58図 小栗北遺跡グリッド出土遺物(I)



第59図 小栗北遺跡グリッド出土遺物(2)



第60図 小栗北遺跡グリッド出土遺物(3)



83

0 10cm
1:3

文と同様なモチーフを描く(33)場合は中段階と思われるが、横位に集合して施文される(34)様になると新段階の様相が強くなる。③は浮線の上に刻みを施すものと、縄文を施すもの(46、48)があり、39は両方を施文する。浮線が細く密になるもの(49、51)や、浮線上の刻みが刺突状に変化するもの(50)は新段階の特徴となる。

52～63は縄文のみ施文する破片で、全て単節RLを施文しており、52はRLが縦位施文され、円形竹管の痕跡が見える。

第Ⅲ群土器(第59図64～76)

中期後葉の加曾利E式土器を一括する。64～68はキヤリパー形深鉢土器の口縁部文様帯破片で、64は渦巻文と楕円区画文の構成、65は渦巻文を連結する構成、68は小さな渦巻文を弧線で連結する「繋ぎ弧文」の構成を持ち、頸部に無文帯を持つ土器群である。加曾利E1最終末からII式にかけて位置付けられる。

69～72は懸垂文を持つ胴部破片である。69は蛇行隆帯懸垂文、70～72は2本沈線懸垂文が、何れも地文単節RL縄文上に垂下する。

73～76は地文のみ施文される胴部破片で、73～75は

撚糸L施文、76は単節RLの縦位施文である。

b) 石器

本遺跡から出土した縄文時代の石器は、第59図77～82、第60図83である。

77はチャート製の石鏃で、完形品である。長さ1.8cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ0.57gを測る。

78は刃部のみ現存する磨製石斧である。砂岩製で、長さ4.7cm、幅5.4cm、厚さ2.1cm、重さ69.9gを測る。79は刃部のみ現存する打製石斧で、背面に礫表を残す。ホルンフェルス製で、長さ5.1cm、幅5.0cm、厚さ1.6cm、重さ47.1gを測る。80は頭部のみ現存する緑泥片岩製の打製石斧で、長さ5.4cm、幅2.8cm、厚さ0.9cm、重さ21.7gを測る。81は凝灰岩製の打製石斧で、長さ11.7cm、幅5.1cm、厚さ2.3cm、重さ179.6gを測る。

82は安山岩製の石皿で、面取りが施されている。一部が現存し、長さ9.9cm、幅7.8cm、厚さ5.0cm、重さ326.4gを測る。

60は窪石で、裏面は使用されていない。凝灰岩製で、長さ15.8cm、幅10.6cm、厚さ6.3cm、重さ1202.1gを測る。

V 小栗遺跡の調査

1 遺跡の概要

小栗遺跡は比企郡嵐山町大字越畑383-1番地他に位置し、粕川とその支流によって開析された東西方向にのびる標高約77mの丘陵上に立地する。発掘調査は平成11年1月4日から平成11年3月31日まで行われた。調査面積は1800㎡である。

検出された遺構は奈良・平安時代の住居跡5軒、掘立柱建物跡6棟、溝跡1条、土壇17基、ピット137基である。遺構は調査区の中央部から東側にかけての丘陵頂部に集中する傾向があり、南側にも伸びそうである。遺物は遺構数の割には少なく、遺物が出土しなかった掘立柱建物跡、溝跡、土壇、ピットの年代については比定が難しい。

住居跡は5軒検出されたが、遺構が明瞭に検出されたのは3軒である。そのうち1軒は拡張されたものであり、調査区内における住居跡の密度は比較的薄い。住居跡の立地するのは1軒を除いて丘陵の平坦面に構築されている。住居跡の平面形態は方形または長方形であった。規模の平均は長径が約4m、短径が3m、深さ0.2mである。また、住居跡と掘立柱建物跡は重複しておらず、住居跡は西側、掘立柱建物跡は東側に位置する。共存する可能性もあるが、掘立柱建物跡が遺物を伴わないことや主軸があうものが少ないなど現時点では断定できない。カマドは北側と東側に付設されていたが、袖などの残存状況は不良であった。覆土の状況については自然堆積としては不自然な面もみられることから、人為的に埋められた可能性もある。

遺物が出土した住居跡は2軒であった。遺物は風化していたが、いずれも奈良時代中頃に比定できる遺物である。他の住居跡は遺物をともなっていなかったが、

丘陵上に小規模な集落が形成されていたことが明らかになった。

掘立柱建物跡は6棟検出された。住居跡と同様丘陵の頂部に立地し、住居跡とは距離を隔てた東側に位置している。建物の規模は2×1間が1棟、2×2間が2棟、3×2間以上が3棟である。6棟のうち第6号掘立柱建物跡は大型の東西棟で、他の5棟とは建物や掘形の規模、柱の建て方などで異なり、古代的な掘立柱建物跡の可能性が高い。他の5棟については小規模で、規格性が弱い。遺物が出土しておらず、構築年代については古代以降の可能性もある。

溝跡は遺構密度の薄い、西側斜面部で1条検出された。性格などは不明である。

土壇は17基検出され、他の遺構と同様に丘陵の頂部付近で集中していた。いずれも小規模であったが、形態は円形、楕円形、不整形、長方形など多様性があり、深さについても様々であった。土壇の一部については、住居跡や掘立柱建物跡と重複しており、後世であることが明らかになっている。

ピットは137基検出された。ピットは土壇などに比べると遺構に広がりが見られた。一部のピットには柱痕も確認でき、今回検出された掘立柱建物跡などの他にも構造物が存在した可能性がある。

これまで小栗遺跡の周辺では越畑城、杉山城などの中世城館跡が注目を集めてきたが、周辺では古代の瓦の散布も確認されており、今後、古代の集落の存在とともにどのような性格をもつ集落であるかについても注目される。

第61図 小栗遺跡全測図





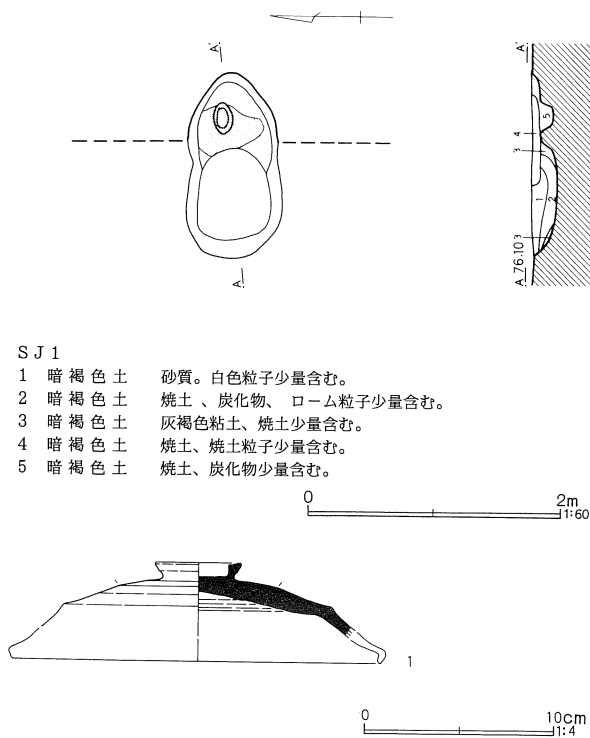
2 発見された遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡 (第62図)

調査区の東側、C-5グリッドに位置している。試掘調査の時点で住居跡の存在が確認されていたが、結果としてカマドだけが検出され、ピットなどは検出されなかった。カマドは検出状況から東側に煙道部が向いているものと考えられる。カマドは煙道部の一部、燃烧部、焚き口付近が確認されたが、残存状況が悪く、部分的に攪乱もみられた。燃烧部の覆土上層にはスクリーントーンで示したように焼土層がやや浮いた状態で確認された。また、焼土層の下には楕円形の小ピットが確認されたが、差し込んだ痕跡であることから、緑泥片岩などの石材を用いた支脚と考えられる。遺物はカマド覆土内から須恵器蓋が1点出土した。推定口径は20cm、器高5cm、鈕は環状で直径4.8cmである。胎土には砂粒、白色粒子、白色針状物を含む。部部上半は回転ヘラケズリされる。南比企産である。

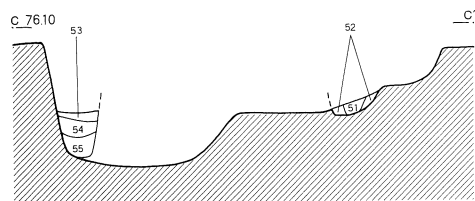
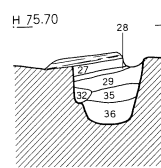
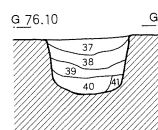
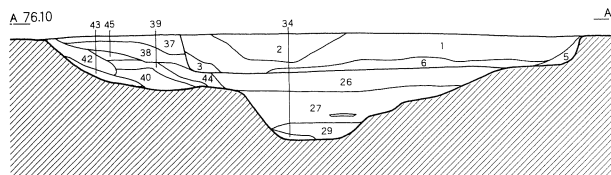
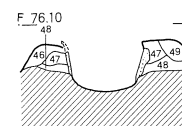
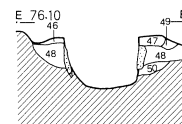
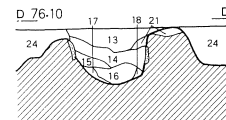
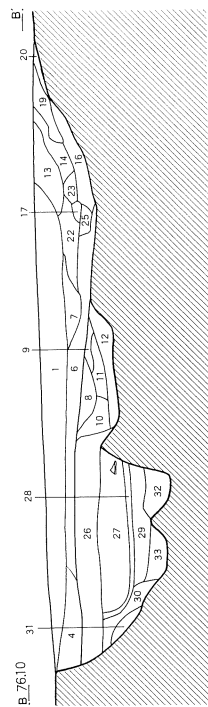
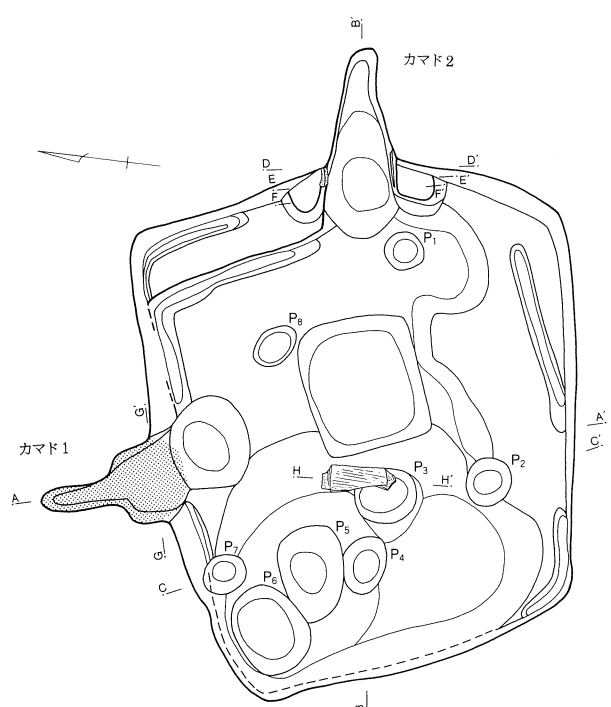
第62図 第1号住居跡・出土遺物



第2・3号住居跡 (第63図)

C-3・4、D-3・4グリッドに位置し、SJ4と隣接する。2軒の住居跡の重複であるが、カマドを東側にもち、袖が残存していた住居跡がSJ3、北側にカマドをもつのがSJ2である。先後の関係はカマド袖の残存状況からSJ2が古く、SJ3が新しいと考えられるが、断面の観察ではSJ2とSJ3は壁面を部分的に共通することが明らかになり、SJ2を拡張したものがSJ3であると判断した。覆土は黄褐色土で、ロームブロックを主体に焼土や炭化物などが含まれるが、人為的に埋められた可能性も考えられる。SJ2は北壁中央にカマドが付設され、内側に部分的にめぐる壁溝をもつ長方形の平面形態である。規模は長径3.8m、短径2.9m、床面までの深さ0.4mである。カマドは袖を除いて残存状況は良好で、燃烧部から煙道部にかけて焼土が一面に堆積していた。壁溝は西隅を除いて部分的に3箇所検出されたが、北隅はSJ3の壁溝との重複が不明瞭であった。床面は平坦であるが、東側に向かって緩やかに傾斜している。床面までの深さは、SJ3と殆ど掘り込みが同じであることから、そのまま拡張したものと推測される。貼床はSJ2の範囲内にみられ、西側に深い掘形が確認された。掘形からは緑泥片岩の板状の破片が出土した。ピットは7基検出され、大半は柱穴の可能性が高いが、何れの住居に帰属するかは明らかにできなかった。SJ3は不整形で、規模は長径4.5m、短径3.2m、深さ0.4mである。拡張に際しては北壁を東方向、東壁を南方向に延長し、カマドを東壁中央に付設している。SJ3の拡張部分では、貼床は確認できなかった。カマドはSJ2と同規模で、袖の内壁付近は緑泥片岩で補強されていた。燃烧部から煙道部にかけては、炭化物や焼土が多量に確認されたが、SJ2ほどに厚くはなかった。壁溝は北側隅で確認された。遺物は出土しなかった。

第63図 第2・3号住居跡



0 2m
1:60

SJ2・3

- 1 黄褐色土 炭化物、焼土ブロック少量、白色粒子多量含む。
- 2 黄褐色土 焼土、焼土ブロック多量含む。
- 3 黄褐色土 焼土ブロック少量含む。
- 4 黄褐色土 炭化物、焼土少量含む。(天井崩壊土)
- 5 灰黄褐色土 焼土少量含む。粘性あり。
- 6 黄褐色土 粘土、炭化物少量含む。
- 7 黄褐色土 炭化物粒子、焼土粒子少量含む。
- 8 灰黄褐色土 焼土少量含む。
- 9 黄褐色土 焼土、焼土粒子、焼土ブロック多量含む。
- 10 灰黄褐色土 炭化物、焼土少量含む。
- 11 黄褐色土 炭化物、焼土、焼土粒子、焼土ブロック、ローム、ローム粒子少量含む。
- 12 黄褐色土 焼土、炭化物少量、ローム、ロームブロック多量含む。
- 13 黄橙色土 焼土粒子、白色粒子少量含む。(天井崩壊土)
- 14 黄褐色土 炭化物、焼土少量含む。(天井崩壊土)
- 15 黄褐色土 炭化物、焼土、焼土ブロック少量含む。
- 16 黒褐色土 炭化物、焼土ブロック多量含む。
- 17 黄褐色土 炭化物少量、焼土、焼土粒子少量含む。
- 18 褐色土 (地山崩壊土)
- 19 黄橙色土 灰褐色粘土多量、焼土粒子少量含む。
- 20 黄褐色土 焼土、焼土粒子多量含む。
- 21 黄橙色土 ローム多量含む。(袖崩壊土)
- 22 黄褐色土 炭化物、焼土、焼土粒子少量、白色粒子多量含む。

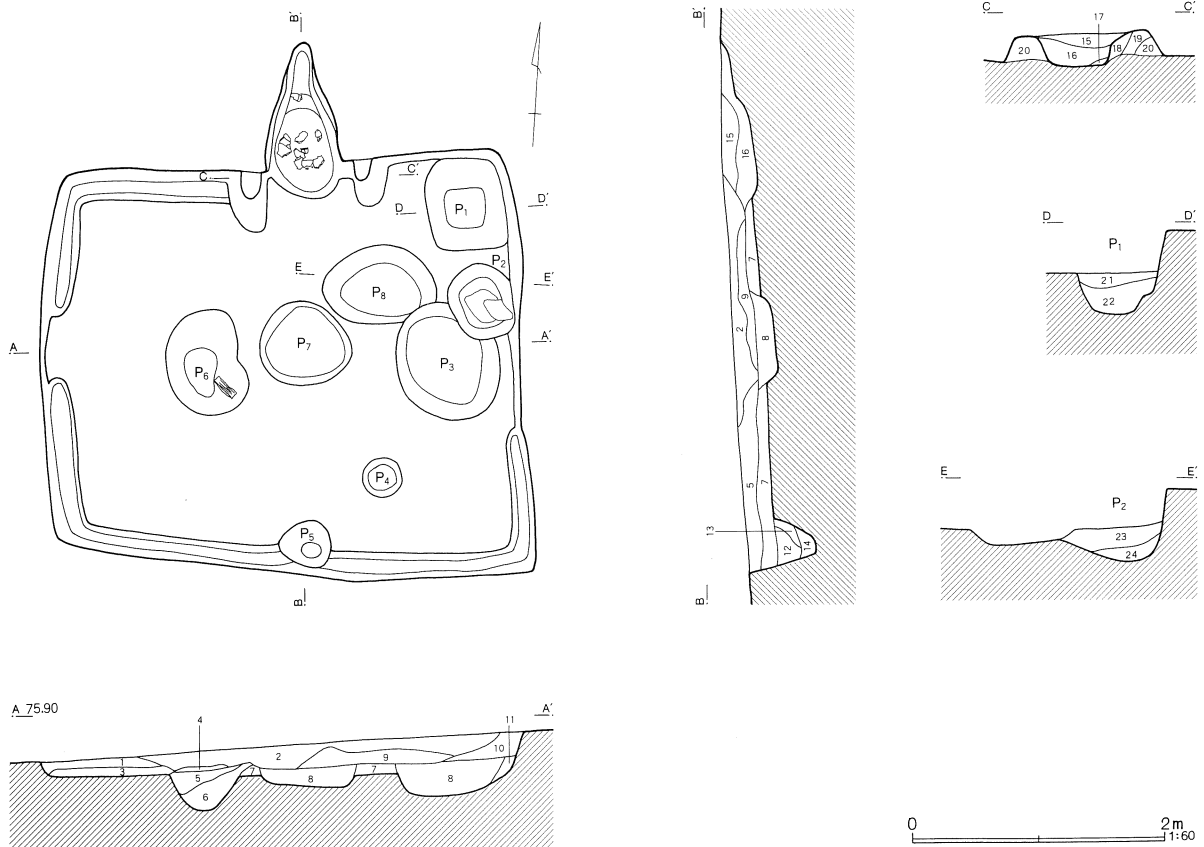
- 23 黄褐色土 焼土、焼土粒子多量、炭化物、焼土ブロック少量含む。
- 24 黄褐色土 炭化物多量、焼土少量含む。
- 25 黄褐色土 炭化物、焼土粒子少量、白色粒子多量含む。
- 26 黄褐色土 上層は貼り床状で硬い。炭化物、焼土、白色粒子少量含む。
- 27 黄褐色土 粘性強 炭化物、焼土少量含む。
- 28 灰黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 29 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 30 黄褐色土 炭化物、焼土少量含む。
- 31 灰黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 32 褐色土 炭化物、焼土少量含む。
- 33 灰黄褐色土 焼土少量、ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 34 褐色土 炭化物、焼土、ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 35 黄褐色土 ローム粒子少量含む。
- 36 灰黄褐色土 焼土、灰褐色粘土少量含む。
- 37 黄橙色土 炭化物、焼土粒子少量含む。
- 38 黄橙色土 炭化物、焼土粒子、焼土ブロック少量含む。
- 39 黄橙色土 炭化物粒子、焼土粒子、焼土ブロック多量含む。
- 40 黄褐色土 炭、灰層 炭化物、焼土、焼土粒子、焼土ブロック多量含む。
- 41 黄褐色土 炭、灰層 灰褐色粘土、焼土多量含む。
- 42 黄橙色土 ロームブロック含む。
- 43 黄橙色土 地山に近い。
- 44 黄橙色土 焼土粒子、焼土ブロック多量含む。
- 45 黄橙色土 焼土ブロック多量含む。
- 46 灰黄褐色土 焼土粒子少量含む。
- 47 灰黄褐色土 焼土ブロック少量、白色粒子多量含む。
- 48 黄褐色土 焼土少量、白色粒子多量含む。
- 49 黄橙色土 ローム粒子、ロームブロック少量、白色粒子多量含む。
- 50 灰黄褐色土 地山直上堆積土に近似 ローム粒子多量含む。
- 51 灰褐色土 焼土少量含む。
- 52 灰褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 53 黄褐色土 焼土、ローム粒子少量含む。
- 54 黄褐色土 灰褐色粘土、炭化物、焼土粒子少量含む。
- 55 黄褐色土 炭化物少量含む。

第4号住居跡（第64図）

C・D-3グリッドに位置し、S J 2・3の西側に隣接する。平面形態は長方形で、規模は長径4.05m、短径3.3m、床面までの深さ0.25mである。覆土はロームブロックを主体とする黄褐色土で、焼土や炭化物も含まれる。S J 2・3と同様人為的に埋められたものと考えられる。カマドは北壁中央付近に1基付設されている。袖は両袖とも残存していたが、内側の崩落が著しかった。袖は黄白色粘土を主体に積み上げて構築している。また、燃焼部から煙道部にかけての焼土や

炭化物の量は少なく、底面にも殆ど堆積は認められなかった。床面は平坦で、全域にわたって厚さ約5cmの貼床が確認できた。ピットは8基検出され、P1は貯蔵穴と考えられる。P3・6～8は土壙状の形態であるが、用途は不明である。壁溝は北東部とカマドを除いて確認できたが、西壁には約0.6mにわたって壁溝の途切れる部分があり、住居の出入り口であった可能性も考えられる。遺物（第65図）はカマドを中心に須恵器環、甕、土師器甕が出土した。遺物は風化が著しい。

第64図 第4号住居跡

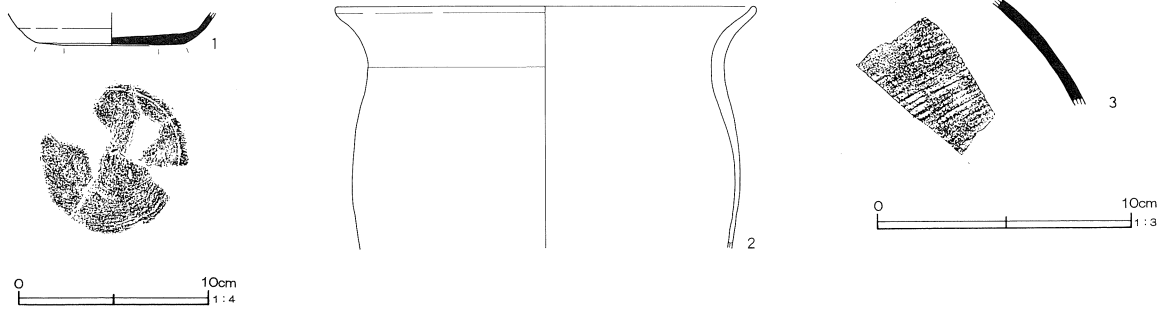


S J 4

- 1 黄褐色土 白色粒子多量含む。
- 2 黄褐色土 焼土ブロック、炭化物ブロック少量含む。
- 3 黄橙色土 黄白色ブロック多量含む。
- 4 黄褐色土 炭化物ブロック多量含む。
- 5 黄褐色土 白色粒子少量含む。
- 6 黄橙色土 焼土粒子、焼土ブロック多量含む。
- 7 黄橙色土 白色粒子多量含む。
- 8 黄褐色土 焼土ブロック少量含む。
- 9 黄褐色土 焼土粒子、白色粒子少量含む。
- 10 黄褐色土 黄白色ブロック少量含む。
- 11 黄褐色土 黄白色粒子多量含む。
- 12 黄褐色土 焼土、炭化物少量含む。

- 13 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- 14 黄褐色土 ローム粒子少量含む。
- 15 黄褐色土 焼土ブロック少量含む。
- 16 黄褐色土 焼土多量含む。
- 17 黄褐色土 黄白色ブロック多量含む。
- 18 黄橙色土 黄白色粒子、焼土粒子少量含む。
- 19 黄橙色土 焼土粒子少量含む。
- 20 黄橙色土 黄白色粒子少量含む。
- 21 灰褐色土 ローム粒子多量、焼土炭化物少量含む。
- 22 灰褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック、炭化物少量含む。
- 23 黄褐色土 黄白色ブロック多量含む。
- 24 黄橙色土 黄白色ブロック多量含む。

第65図 第4号住居跡出土遺物



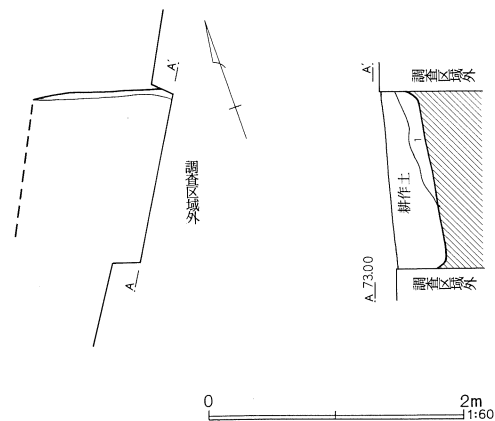
第4号住居跡出土遺物観察表 (第65図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	須恵器坏			(7.8)	A B C E F	不良	淡灰褐色	60	器面風化
2	土師器甕	(22.2)			A B C F	普通	橙褐色	20	
3	須恵器甕				A F	良好	乳灰色	10	

第5号住居跡 (第66図)

調査区の南西隅、F-3グリッドに位置し、台地斜面に立地している。遺構の大半が調査区域外にあり、西側の一部が検出された。覆土は黄褐色土で、焼土粒子、ロームブロックなどが含まれ、他の住居跡と類似するため、住居跡の西側部分であると判断した。検出されたのは北壁だけで、西壁や南壁は攪乱などで確認されなかった。遺物は出土しなかった。

第66図 第5住居跡



SJ5

1 黄褐色土 焼土、焼土粒子、ロームブロック、白色粒子少量含む。

(2) 掘立柱建物跡

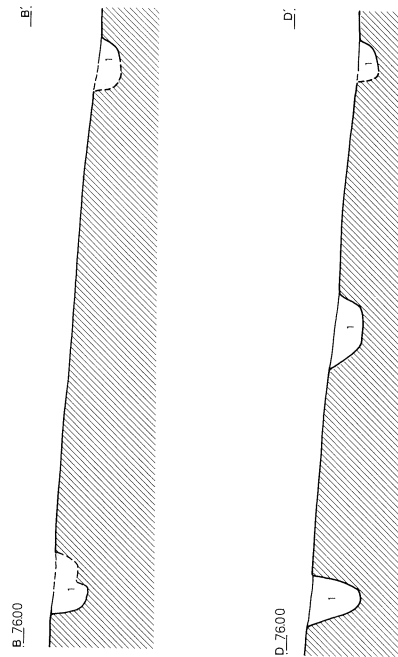
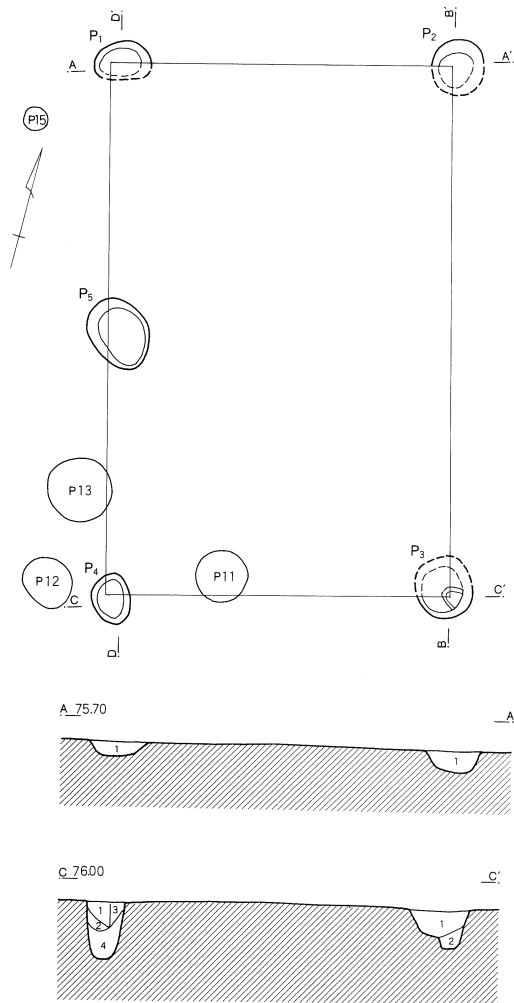
第1号掘立柱建物跡 (第67図)

調査区の北東、B-6グリッドに位置している。平面形態は長方形で、規模は桁行2間(4.2m)、梁行1間(2.4m)の側柱建物である。主軸はN-16°-Wである。柱穴は5基検出された。ピットの形態は円形または楕円形で、直径約40~50cm、深さ15~40cmである。北側のピットが浅いのは、地形が北側に傾斜しているためと考えられる。柱痕は5基のピットのいずれからも確認できなかった。遺物は出土しなかった。

第2号掘立柱建物跡 (第68図)

SB1の西側、B-5・6グリッドに位置している。平面形態は正方形で、規模は桁行2間(3.4m)、梁行2間(3.3m)の側柱建物である。主軸はN-19°-Wである。梁行の柱間は等間であるが、桁行は西側に比べて、東側はP4の柱位置をずらして置いていることから、東側が出入り口になっていたものと考えられる。ピットの形態は円形または楕円形で、規模は直径25~60cm、深さ10~15cmである。SB1と同様に北側のピットはやや浅い。柱痕は確認されず、遺物も出土しなかった。

第67図 第1号掘立柱建物跡



SB 1

- | | |
|--------|-------------------------|
| 1 褐色土 | ローム粒子、白色粒子多量含む。 |
| 2 暗褐色土 | ローム多量含む。 |
| 3 暗褐色土 | ローム粒子、白色粒子、焼土少量含む。 |
| 4 暗褐色土 | ローム粒子、ロームブロック、白色粒子多量含む。 |



第3号掘立柱建物跡 (第68図)

調査区の中央部、C-4・5グリッドに位置している。平面形態は正方形で、規模は桁行2間(4.4m)、梁行2間(4.4m)の側柱建物である。主軸はN-9°-Eである。柱間は桁行、梁行とも約7尺(2.2m)等間である。ピットの形態は円形または楕円形で、規模は直径25~35cm、深さは10~40cmである。掘立柱建物跡は平坦な面につくられているが、総じて西側のピットは東側のピットに比べて深くなっている。柱痕は確認されなかった。遺物も出土しなかった。

第4号掘立柱建物跡 (第69図)

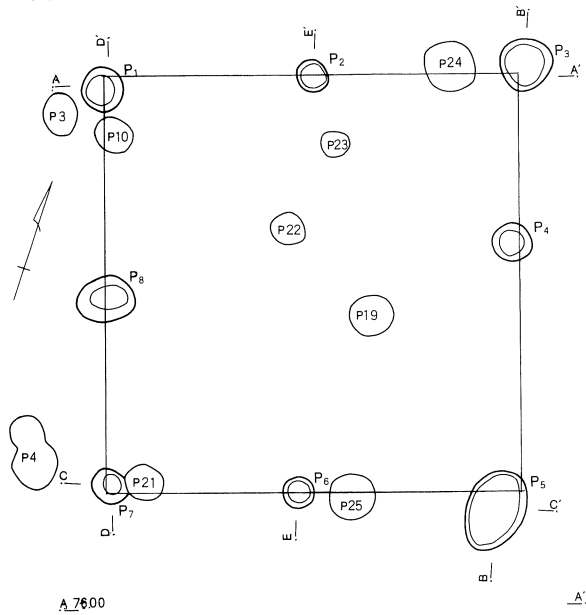
調査区の北東、B-6、C-6グリッドに位置している。南側及び東側の大部分は調査区域外である。SB 5とは1m以内に西側が隣接するため、同時存在は

考え難い。平面形態は正方形または正方形に近い長方形が考えられる。規模は桁行2間(4m)以上、梁行3間(4.3m)の側柱建物である。ピットの形態は円形または楕円形で、規模は直径25~35cm、深さは10~25cmである。柱間は不均等で、柱痕は確認されなかった。遺物も出土しなかった。

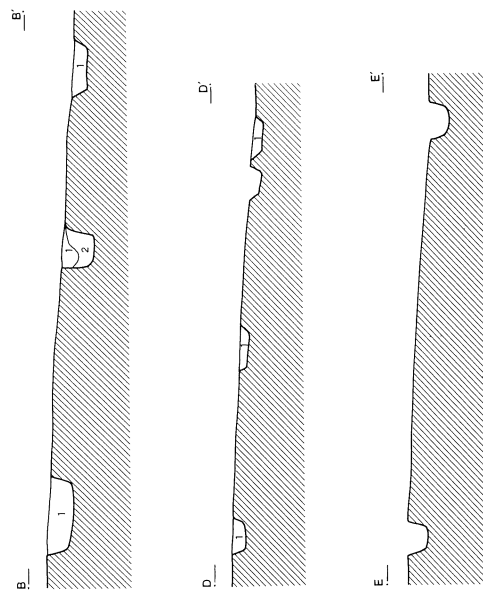
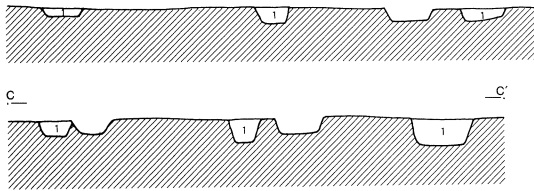
第5号掘立柱建物跡 (第69図)

調査区の北東、C-5・6グリッドに位置している。南側は調査区域外となるため、全体の規模は不明である。平面形態は長方形と推定され、規模は桁行2間(3.8m)以上、梁行2間(4m)の側柱建物である。主軸はN-20°-Wである。ピットの形態は円形または楕円形で、規模は直径30~50cm、深さ15~40cmと規格性がない。柱間は不均等であるが、西側のP3・P4では

第68図 第2(上)・3号(下)掘立柱建物跡

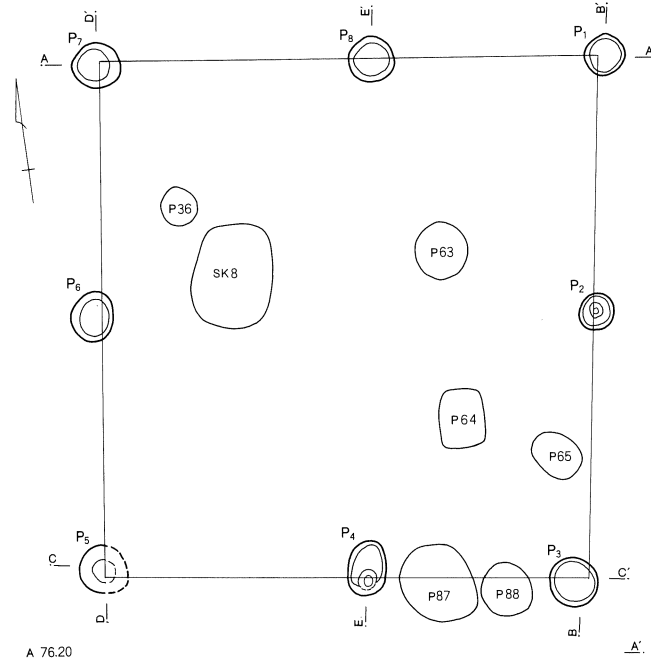


A.7600

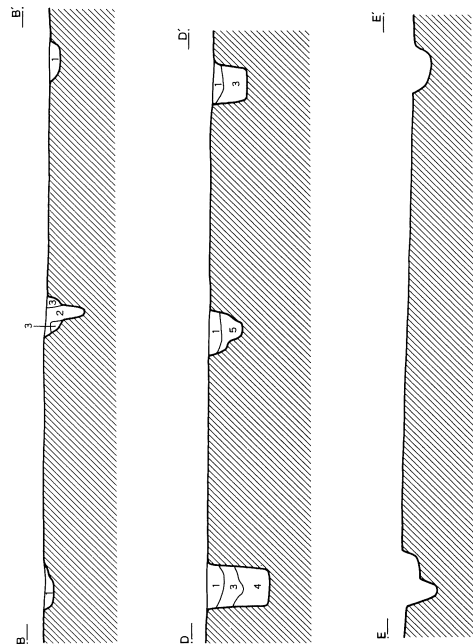
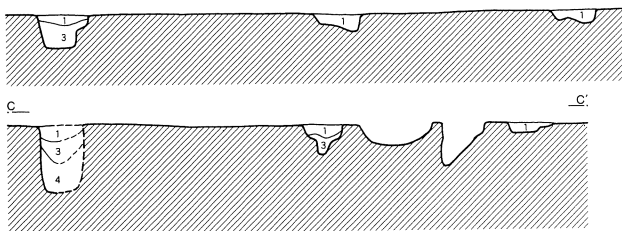


SB 2

- 1 暗褐色土 ローム粒子少量、白色粒子多量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒子、白色粒子少量含む。



A.76.20

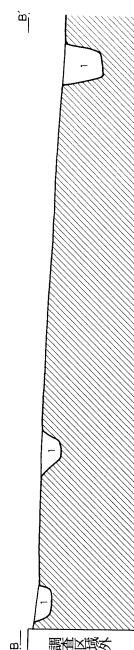
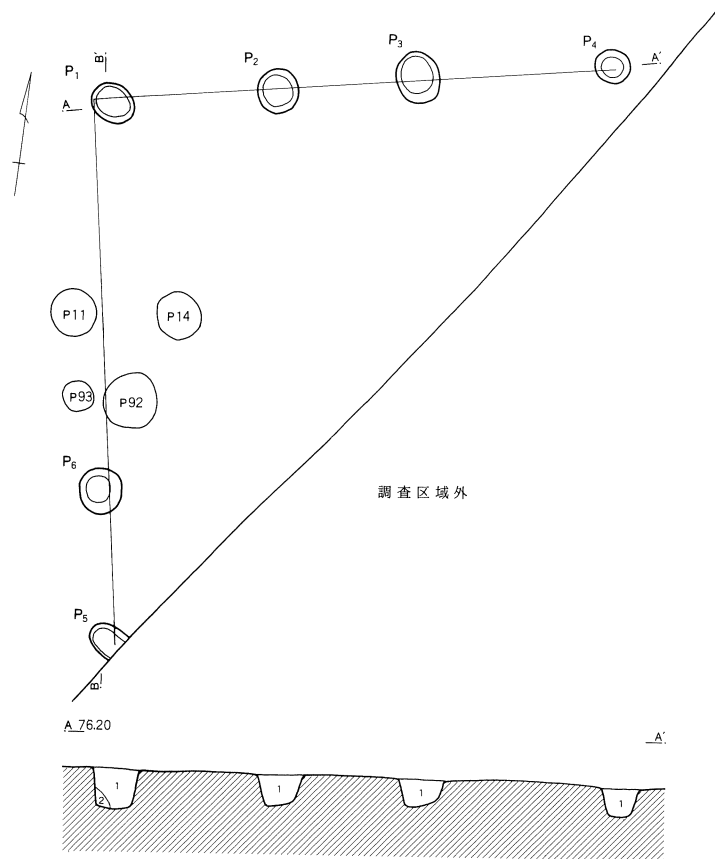


SB 3

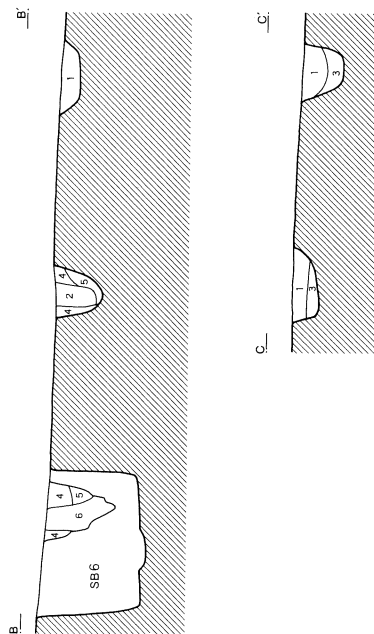
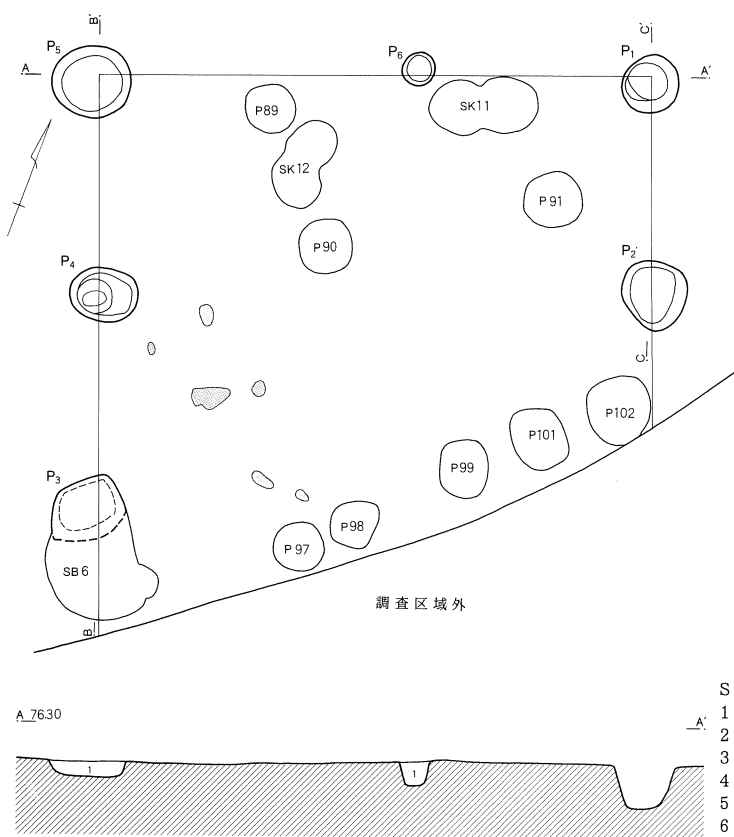
- 1 暗褐色土 ローム粒子、白色粒子多量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒子、白色粒子少量含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒子少量、白色粒子多量含む。
- 4 灰褐色土 ローム粒子多量含む。粘土質。
- 5 褐色土 ローム粒子、白色粒子多量含む。

0 2m 1:60

第69図 第4(上)・5号(下)掘立柱建物跡



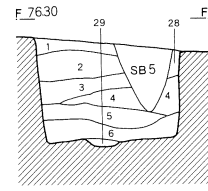
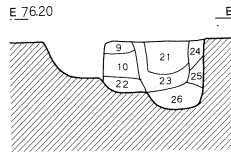
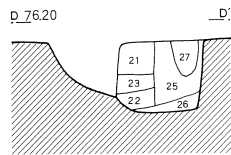
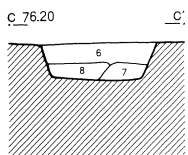
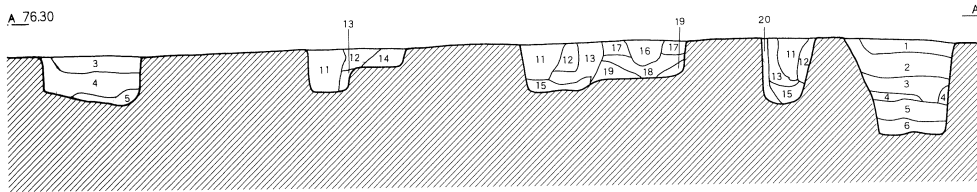
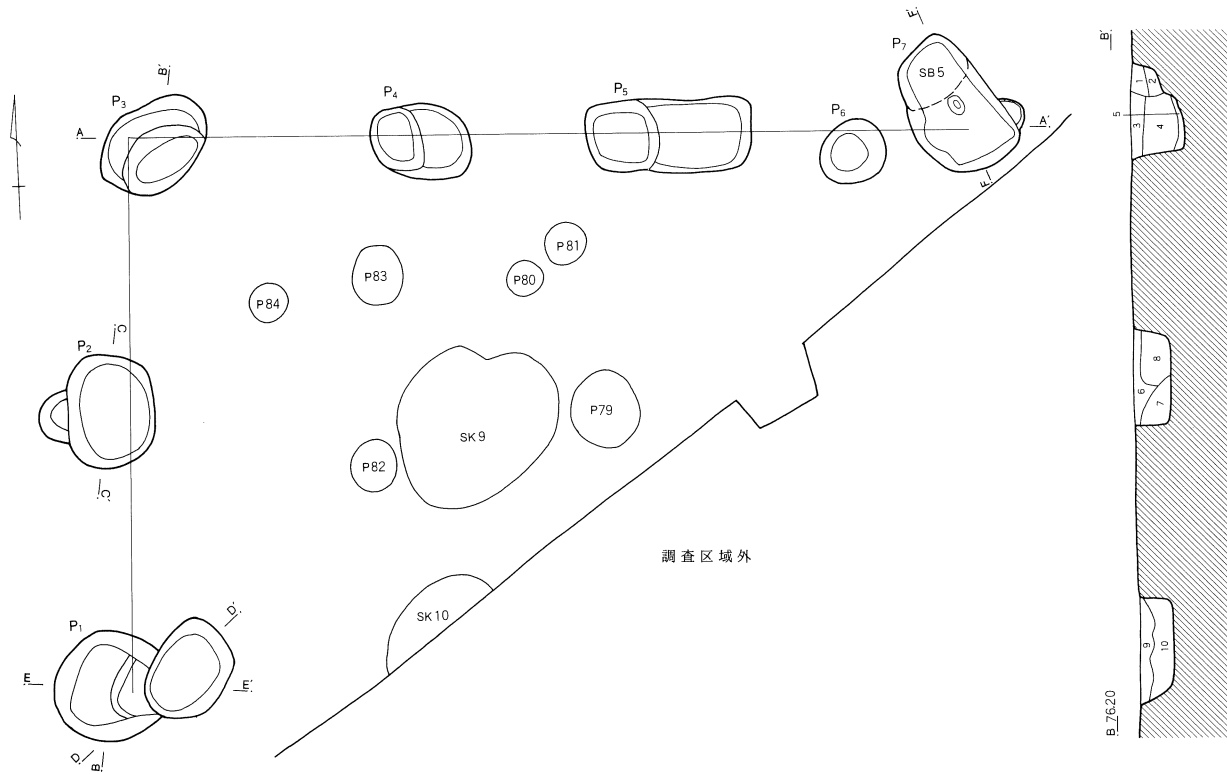
- SB 4
- 1 暗褐色土 白色粒子多量含む。
 - 2 暗褐色土 ロームブロック、白色粒子多量含む。



- SB 5
- 1 暗褐色土 ローム粒子少量、白色粒子多量含む。
 - 2 暗褐色土 柱痕 白色粒子、炭化物少量含む。
 - 3 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック、白色粒子多量含む。
 - 4 暗褐色土 ロームブロック多量、炭化物少量含む。
 - 5 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量、炭化物多量含む。
 - 6 暗褐色土 ロームブロック少量含む。

0 2m 1:60

第70図 第6号掘立柱建物跡



SB 6

- 1 黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- 2 褐色土 ローム粒子少量含む。
- 3 黄褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック微量含む。
- 4 褐色土 ロームブロック少量含む。
- 5 褐色土 ロームブロック多量含む。
- 6 褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック、白色粒子少量含む。
- 7 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 8 褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量、白色粒子少量含む。
- 9 褐色土 ローム粒子多量含む。
- 10 褐色土 ローム粒子多量、ロームブロック、炭化物少量含む。
- 11 黄褐色土 ローム粒子少量含む。
- 12 黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- 13 黄褐色土 ローム粒子、白色粒子微量含む。
- 14 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。

- 15 黄褐色土 黄白色ブロック多量含む。
- 16 褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 17 黄褐色土 ローム粒子多量含む。
- 18 黄褐色土 ローム粒子、黄白色粒子、黄白色ブロック多量含む。
- 19 褐色土 ローム粒子少量含む。
- 20 褐色土 白色粒子、ローム粒子少量含む。
- 21 黄褐色土 ローム粒子少量含む。
- 22 黄褐色土 ローム粒子少量含む。
- 23 黄褐色土 ロームブロック少量含む。
- 24 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
- 25 褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
- 26 黄褐色土 ローム粒子少量含む。
- 27 褐色土 ロームブロック、白色粒子少量含む。
- 28 暗褐色土 ローム、ローム粒子多量含む。
- 29 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。

柱痕が確認された。遺物は出土しなかった。

第6号掘立柱建物跡 (第70図)

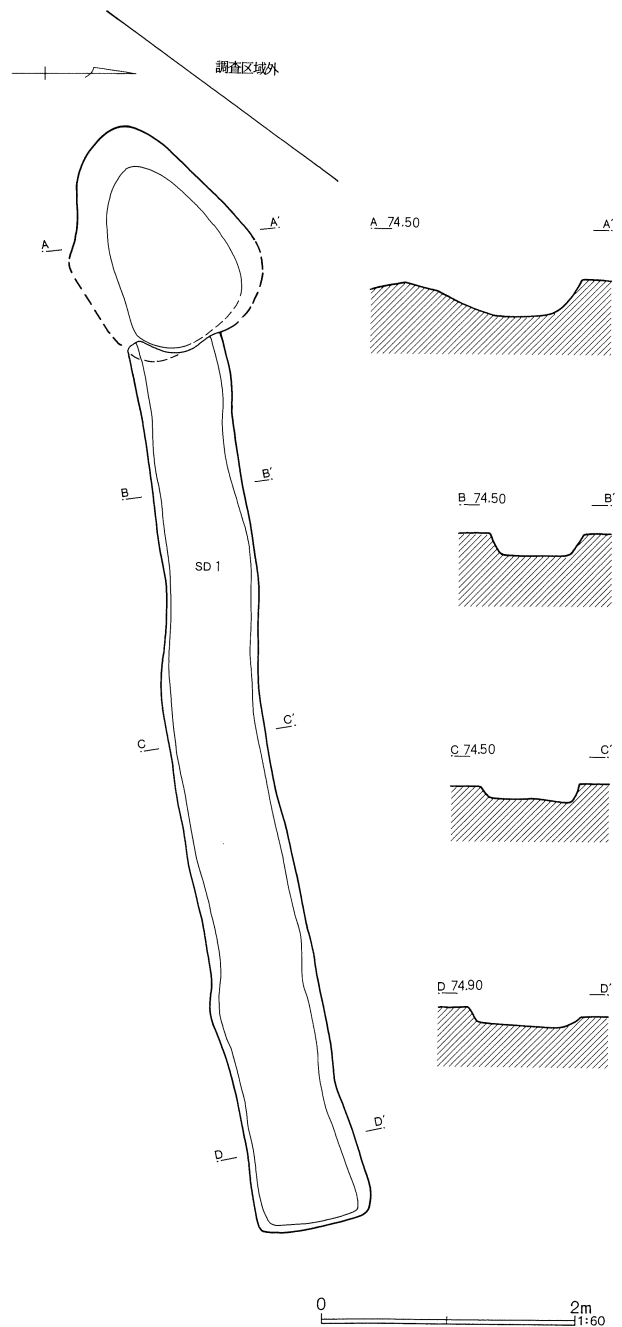
調査区の東側、C-5グリッドに位置している。南東部は調査区域外となっており、全体の規模は不明である。平面形態は長方形と推定され、規模は桁行3間(5.4m)以上、梁行2間(4m)以上の側柱建物である。ピットの形態は楕円形または方形で、SB1~5とは形態や規模なども大きく異なる。規模は長径0.6~1.2m、短径0.4~0.5m、深さ0.25~0.7mである。P1~5の掘形は段掘りされている。柱間は桁行、梁行とも6尺等間である。柱痕が確認されたピットは少なかったが、大型の掘形をもつものは版築が明瞭に確認された。また、ピットのうち、P1、3・6はこの建物跡の内側に軸線の入る柱掘形も確認された。このピット(P1の場合特にピット番号を付けていない)はSB6のピットを切り込んで構築されていることから、建物であればSB6の軸線にあわせて立て替えを行った可能性が考えられる。線をひいて図示しなかったが、寸法的には1尺ほど内側に入り、一回り小型の掘立柱建物跡と考えられる。遺物は出土しなかったため、構築年代も特定し得ないが、SB1~5とは構築年代も異なり、古代的な建物と考えられる。

(3) 溝跡

第1号溝跡 (第71図)

調査区の西側、C-1・2グリッドに位置している。地形は東側が高く、西側が低くなっている。検出された規模は長さ11.2m、幅0.9~1.4m、深さ0.1~0.2mである。溝跡の西側は土壌状になっており、断面の形態も西側の先端付近が緩いU字型であるのに対して大部分は箱型である。本来は箱型の断面をもつ溝であったものが低くなっている部分で雨水などが溜まり、広がってしまったものと推測される。遺跡の西側は遺構の分布も希薄であり、どのような用途で構築された溝であるかは確認できなかった。遺物は出土しなかった。

第71図 第1号溝跡



(4) 土壌

小栗遺跡では17基の土壌が検出された。土壌の分布域は、遺跡の中央部から東側にかけて集中する傾向がある。特に密集するのは中央部の南側である。調査区は道路の路線幅であるため、遺構の広がりを明確にすることはできないが、さらに南側にも広がっていることが予想される。

土壌の平面形態には円形、楕円形、不整形円形、不整形方形、長方形がある。最も多いのは楕円形で、不整形方形が続く。断面の形態も箱型、皿型、U字型などがある。

(5) ピット状遺構

ピットは137基検出された。ピットの分布域は南側を除いた全域であるが、特に他の遺構の密集する中央部南側から東側にかけてが多い。他の遺構との関連性も十分に考えられる。

平面形態は一覧表に示したように円形、楕円形、不整形、方形がある。最も多いのは円形で、次に楕円形が多い。規模については直径30～60cm、深さ20～40cmが主体である。覆土は褐色土または暗褐色土で、ローム粒子、ロームブロック、炭化物、白色粒子などが含まれる。白色粒子については、土壌の項目の中でも触

る。規模も様々であるが、長径は1m弱、短径は0.6～0.8m、深さ0.3～0.4mの土壌が主体で、全体的に小規模である。

覆土は褐色土または暗褐色土で、ローム粒子、ロームブロック、白色粒子を含むものが多くみられた。白色粒子については、住居跡や掘立柱建物跡などにもみられ、遺構の年代を探る上で重要な要素の一つになる可能性がある。遺物は出土しなかったため、これらの土壌の構築年代を明らかにできなかった。

れたようにこの遺跡の中では殆どの遺構に伴っており、大きな特徴である。

ピットの中には柱痕の確認されたものがあり、6棟検出された掘立柱建物跡の他にも建物や柵列などの構造物が存在した可能性がある。また、柱痕が確認されなかったピットについても、覆土が柱痕をもつピットに類似していたり、同規模をもつものがあるなど建物の可能性は高い。遺物については出土しなかった。

第6表 小栗遺跡土壌一覧表

番号	位置	主軸方向	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	A-6	N-1°-W	0.77	0.68	0.25
2	B-6	N-74°-E	0.83	0.82	0.26
3	C-3	N-14°-W	0.82	0.62	0.19
4	C-3	N-58°-W	1.23	1.01	0.24
5	C-4	N-55°-W	1.04	0.49	0.75
6	C-4	N-23°-W	0.75	0.73	0.32
7	C-4	N-41°-W	0.74	0.65	0.22
8	C-5	N-69°-W	0.83	0.62	0.30
9	C-5	N-88°-E	1.52	1.19	0.39

番号	位置	主軸方向	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
10	C-5	N-55°-W	1.02	(0.36)	0.28
11	C-6	N-68°-E	0.88	0.45	0.16
12	C-6	N-8°-E	0.74	0.33	0.16
13	D-4	N-47°-E	0.76	0.61	0.25
14	D-4	N-2°-W	0.82	0.76	0.31
15	D-4	N-23°-E	0.76	0.48	0.42
16	D-5	N-71°-W	0.99	0.88	0.36
17	D-4	N-34°-W	1.24	0.65	0.87

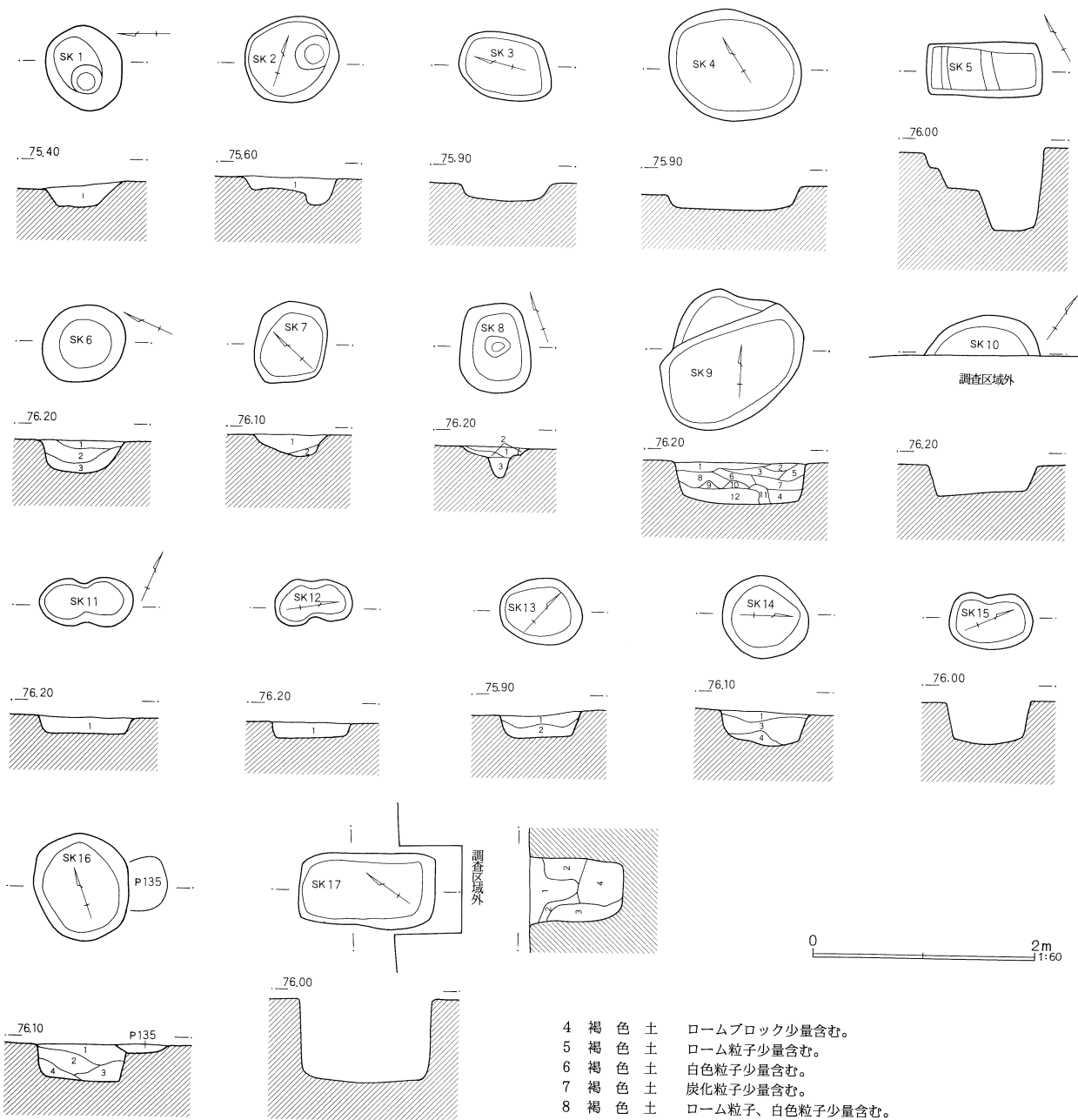
第7表 小栗遺跡土壌新旧対照表

新番号	旧番号	新番号	旧番号
SK1	A 6 G P 1	SK6	C 4 G P 29
SK2	B 6 G P 12	SK7	C 4 G P 30
SK3	C 3 G P ウ	SK8	C 5 G P 1
SK4	C 3 G P エ	SK9	C 5 G P 20
SK5	C 4 G SK1	SK10	C 5 G P 26

新番号	旧番号
SK11	C 6 G P 2
	C 6 G P 3
SK12	C 6 G P 4
	C 6 G P 5
SK13	D 4 G P 6

新番号	旧番号
SK14	D 4 G P 9
SK15	D 4 G P シ
SK16	D 5 G P 1
SK17	D 4 G P 33

第72図 第1~17号土壇



- SK 1
1 褐色土 ロームブロック少量、白色粒子多量含む。
- SK 2
1 暗褐色土 ローム粒子少量、白色粒子多量含む。
- SK 6
1 暗褐色土 ローム、ローム粒子多量含む。
2 暗褐色土 ローム、白色粒子多量含む。
3 暗褐色土 灰褐色粘土多量、白色粒子少量含む。
- SK 7
1 淡褐色土 炭化物、焼土少量含む。砂質。
2 暗褐色土 砂質。
- SK 8
1 暗褐色土 ローム粒子、白色粒子少量含む。
2 暗褐色土 ロームブロック少量含む。
3 暗褐色土 灰褐色土、白色粒子、ローム少量含む。
- SK 9
1 褐色土 ローム粒子、白色粒子少量含む。
2 褐色土 白色粒子少量含む。
3 褐色土 ローム粒子、白色粒子少量含む。

- 4 褐色土 ロームブロック少量含む。
5 褐色土 ローム粒子少量含む。
6 褐色土 白色粒子少量含む。
7 褐色土 炭化粒子少量含む。
8 褐色土 ローム粒子、白色粒子少量含む。
9 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
10 褐色土 白色粒子少量含む。
11 褐色土 ロームブロック少量、白色粒子微量含む。
12 黄褐色土 ロームブロック少量、白色粒子少量含む。
- SK 11・12
1 暗褐色土 白色粒子多量含む。
- SK 13・14
1 暗褐色土 褐色粘土ブロック多量、白色粒子少量含む。
2 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量、炭化物、焼土少量含む。
3 暗褐色土 ローム粒子多量、白色粒子少量含む。
4 暗褐色土 ローム、白色粒子少量含む。
- SK 16
1 暗褐色土 褐色粘土ブロック多量、白色粒子少量含む。
2 暗褐色土 褐色粘土ブロック、白色粒子多量含む。
3 暗褐色土 焼土少量含む。
4 暗褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。
- SK 17
1 黄褐色土 ローム粒子微量含む。
2 褐色土 ローム粒子少量含む。
3 黄褐色土 ローム粒子、ロームブロック多量含む。
4 褐色土 ローム粒子、ロームブロック少量含む。